松山市文化財調査報告書34

来住廃寺遺跡

第15次調査報告書

1993

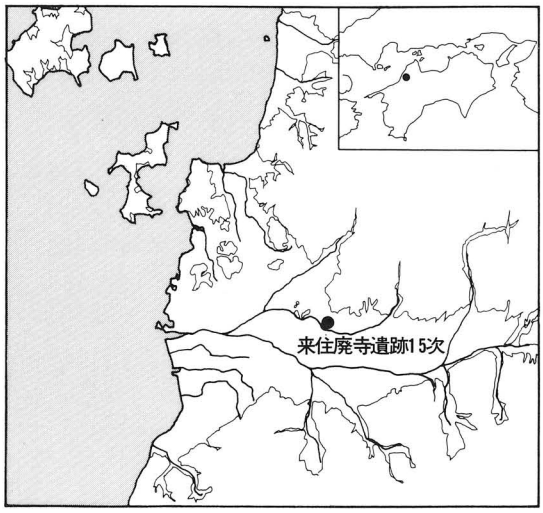
松山市教育委員会

（財）松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

来住廃寺遺跡

第15次調査報告書



1993

松山市教育委員会

（財）松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版１　来住廃寺遺跡上空から

序

この報告書は、平成３年度から平成４年度にかけて松山市教育委員会及び財団法人松山市生涯学習振興財団・埋蔵文化財センターが民間業者から委託を受け調査を実施し、その結果をまとめたものです。

本調査地の来住台地からは、国史跡・来住廃寺や近年確認されました方一町規模の回廊状遺構さらに久米官衙遺跡群など著名な遺跡の発見がされています。

今回の調査では、遺物包含層から来住廃寺の瓦類投棄をはじめ、古墳期の壺鐙、経巻き具、木簡状木製品、下駄などが出土し、今後の当地域での調査研究に役立つ好資料が見られます。

このような貴重な成果が得られますのも三菱自動車工業株式会社の埋蔵文化財に対するご理解とご協力の賜でありますと同時に協力いただきました関係各位に厚くお礼申し上げます。本書が広く文化財の保護、教育文化の向上、今後の調査研究の一助となれば幸いに存じます。

平成５年３月31日

財団法人　松山市生涯教育振興財団
理事長　　田　中　誠　一

例　　言

1　本書は、松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センター及び㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成３年８月～12月に実施した松山市来住町798-1（他７筆）三菱自動車工業株式会社販売店店舗新設に伴う発掘調査の報告書である。

2　遺構の実測は、西尾幸則の責任のもと、真木　潔が中心に行い、愛媛大学の学生他の援助を受けた。遺構の撮影は、西尾幸則、真木　潔、山本健一、大西朋子が行った。

3　遺構は、呼称を略号で記述した。掘立柱建物：ＳＢ．柵：ＳＡ．柱穴：ＳＰ．溝：ＳＤ．土壙：ＳＫ．土壙墓：ＳＴである。

4　遺物の実測・製図、遺構の製図は、真木　潔、山本健一、岡根なおみ、丸山美和を中心に、岡崎政信、猪森しげ子、白井あさ子、新出寿美子、松浦明美が行った。

5　写真図版は、調査担当者の指示のもと、遺物の撮影、図版作成を大西朋子が行った。

6　遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

7　本書に使用した方位は、Ⅱ遺跡の概要は磁北、Ⅲ調査の概要は真北である。

8　本書にかかわる遺物・記録は、松山市立埋蔵文化財センターで収蔵保管している。

9　自然科学分析は、杉山真二氏（古環境研究所）、桃崎祐輔氏（筑波大学歴史人類学研究科）に協力を頂き、また寄稿して頂いた。記して感謝申し上げます。

10　ご指導・ご協力をいただいた先生方は次の通りである。（敬称略）

工楽善通（奈良国立文化財研究所）／上原真人（同研究所）／下條信行（愛媛大学教授）／松原弘宣（同教授）／田崎博之（同助教授）

11　本書の執筆は、西尾幸則、山本健一、山之内志郎、岡根なおみが事実報告を行い、考察では、丸山美和に寄稿していただいた。

12　本書の編集は、西尾幸則が行い、校正に於いては、山本健一、岡根なおみ、丸山美和、新出寿美子の協力を得た。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経過

1　調査に至る経過……1

2　調査組織……2

Ⅱ　遺跡の概要

1　地理的環境……5

2　歴史的環境……6

Ⅲ　調査の概要

1　調査の経緯……10

2　層位……10

3　遺構と遺物……17

〔1〕柱穴

1）掘立柱建物……17

2）柵……20

3）その他の柱穴……21

〔2〕溝……23

〔3〕土壙

1）土壙墓……27

2）土壙……37

3）土器溜り……39

〔4〕3区下段地区……43

4　まとめ……90

Ⅳ　考　　察

来住廃寺出土瓦についての一考察……112

Ⅴ　自然科学分析

1　珪酸体分析……127

2　花粉分析結果……139

3　樹種同定……146

4　種子分析……148

挿　図　目　次

第１図　小野川扇状地及び周辺の地形図…… 5
第２図　遺跡分布図　（縮尺１／50,000）…… 9
第３図　調査区位置図　（縮尺１／ 2,000）…… 10
第４図　調査地区割図　（縮尺１／ 600）…… 11
第５図　調査区土層断面図　（縮尺１／50）…… 13
第６図　調査区遺構配置図　（縮尺１／ 300）…… 15
第７図　ＳＢ－１平断面図　（縮尺１／80）…… 17
第８図　ＳＢ－２平断面図・遺物実測図　（縮尺１／80・１／40）…… 18
第９図　ＳＢ－３平断面図　（縮尺１／80）…… 19
第10図　ＳＡ－２・３・４平断面図　（縮尺１／ 100）…… 20
第11図　その他の柱穴遺物実測図　（縮尺１／３・１／４）…… 22
第12図　ＳＤ－１平断面図・遺物実測図　（縮尺１／ 100・１／３・１／６）…… 23
第13図　ＳＤ－１遺物実測図　（縮尺１／３）…… 24
第14図　ＳＤ－10平断面図　（縮尺１／ 100）…… 24
第15図　ＳＤ－10遺物実測図　（縮尺１／３）…… 24
第16図　ＳＤ－35平断面図・遺物実測図　（縮尺１／ 100・１／３）…… 25
第17図　ＳＤ－37・38平断面図・遺物実測図　（縮尺１／ 100・１／３）…… 26
第18図　ＳＤ－12・40遺物実測図　（縮尺１／３）…… 27
第19図　ＳＴ配置図　（縮尺１／ 200）…… 27
第20図　ＳＴ－１・２平断面図・遺物実測図　（縮尺１／40・１／３）…… 28
第21図　ＳＴ－３・４・５平断面図・遺物実測図　（縮尺１／40・１／３）…… 29
第22図　ＳＴ－６平断面図　（縮尺１／40）…… 30
第23図　ＳＴ－７・８・９・10平断面図・遺物実測図　（縮尺１／40・１／３）…… 31
第24図　ＳＴ－11・12・13平断面図　（縮尺１／40）…… 32
第25図　ＳＴ－14平断面図・ＳＴ－12・13・14遺物実測図　（縮尺１／40・１／３）… 33
第26図　ＳＴ－15平断面図　（縮尺１／40）…… 34
第27図　ＳＴ－15遺物実測図　（縮尺１／３）…… 34
第28図　ＳＴ－16・17平断面図・遺物実測図　（縮尺１／40・１／３）…… 35
第29図　ＳＴ－18・19平断面図・遺物実測図　（縮尺１／40・１／３）…… 36
第30図　ＳＫ－６・８・９・16遺物実測図　（縮尺１／３・１／４）…… 37

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経過

1　調査に至る経過……1

2　調査組織……2

Ⅱ　遺跡の概要

1　地理的環境……5

2　歴史的環境……6

Ⅲ　調査の概要

1　調査の経緯……10

2　層位……10

3　遺構と遺物……17

〔1〕柱穴

1）掘立柱建物……17

2）柵……20

3）その他の柱穴……21

〔2〕溝……23

〔3〕土壙

1）土壙墓……27

2）土壙……37

3）土器溜り……39

〔4〕3区下段地区……43

4　まとめ……90

Ⅳ　考　　察

来住廃寺出土瓦についての一考察……112

Ⅴ　自然科学分析

1　珪酸体分析……127

2　花粉分析結果……139

3　樹種同定……146

4　種子分析……148

第31図　ＳＫ－16・19遺物実測図　（縮尺１／３）…… 38
第32図　ＳＫ－22遺物実測図　（縮尺１／４）…… 39
第33図　１区下段土器溜り平面図　（縮尺１／80）…… 40
第34図　土器溜り出土遺物実測図（１）　（縮尺１／４）…… 41
第35図　土器溜り出土遺物実測図（２）　（縮尺１／４）…… 42
第36図　３区下段完掘平面図　（縮尺１／ 100）…… 44
第37図　３区下段土層図　（縮尺１／50）…… 45
第38図　写真測量図　（縮尺１／50）株式会社パスコ制作…… 47
第39図　測量用写真…… 48
第40図　瓦出土状況図　（縮尺１／ 100）…… 49
第41図　３区出土軒瓦　（縮尺１／５）…… 50
第42図　土製品出土状況図　（縮尺１／ 100）…… 52
第43図　出土土器実測図（１）　（縮尺１／３）…… 53
第44図　出土土器実測図（２）　（縮尺１／３）…… 54
第45図　出土土器実測図（３）　（縮尺１／４）…… 58
第46図　出土土器実測図（４）　（縮尺１／４）…… 59
第47図　出土土器実測図（５）　（縮尺１／４）…… 60
第48図　出土土器実測図（６）　（縮尺１／４）…… 61
第49図　出土土器実測図（７）　（縮尺１／４）…… 62
第50図　出土土器実測図（８）　（縮尺１／４）…… 64
第51図　出土土器実測図（９）　（縮尺１／４）…… 65
第52図　出土土器実測図（10）　（縮尺１／４）…… 66
第53図　出土土器実測図（11）　（縮尺１／４）…… 67
第54図　出土土器実測図（12）　（縮尺１／４）…… 68
第55図　出土土器実測図（13）　（縮尺１／４）…… 69
第56図　出土土器実測図（14）　（縮尺１／４）…… 70
第57図　木製品出土状況図　（縮尺１／ 100）…… 71
第58図　出土木製品実測図（１）　（縮尺１／４）…… 73
第59図　出土木製品実測図（２）　（縮尺１／３・１／４）…… 75
第60図　出土木製品実測図（３）　（縮尺１／４）…… 77
第61図　出土木製品実測図（４）　（縮尺１／４）…… 78
第62図　出土木製品実測図（５）　（縮尺１／４）…… 79
第63図　出土木製品実測図（６）　（縮尺１／４）…… 81

第64図　出土木製品実測図（７）　（縮尺１／４）…… 82
第65図　出土木製品実測図（８）　（縮尺１／６）…… 83
第66図　出土木製品実測図（９）　（縮尺１／４）…… 84
第67図　出土木製品実測図（10）　（縮尺１／４）…… 86
第68図　出土木製品実測図（11）　（縮尺１／４）…… 88
第69図　出土石製品・その他実測図　（縮尺１／１・１／２・１／３）…… 89
第70図　来住廃寺出土軒丸瓦　（縮尺１／５）…… 113
第71図　軒丸瓦Ⅳ型式接合位置…… 115
第72図　丸瓦部接合法…… 115
第73図　軒平瓦Ⅰａ・Ⅰｂ分割法　（縮尺１／３）…… 117
第74図　来住廃寺出土軒平瓦　（縮尺１／５）…… 118
第75図　軒平瓦Ⅴ型式Ａ包み込み…… 119
第76図　平瓦凸面叩き目　（縮尺１／４）…… 120
第77図　隅木蓋瓦　（縮尺１／６）…… 121
第78図　中ノ子廃寺出土忍冬唐草文軒平瓦…… 122
第79図　複弁４弁連華文軒平瓦…… 123
第80図　来住廃寺軒瓦分布図　（縮尺１／600）…… 125
第81図　３区下段におけるおもな植物の推定生産量…… 129
第82図　３区下段における植物珪酸体（プラント・オパール）分析結果…… 131
第83図　プラント・オパールの顕微鏡写真（１）…… 132
第84図　プラント・オパールの顕微鏡写真（２）…… 133
第85図　プラント・オパールの顕微鏡写真（３）…… 134
第86図　プラント・オパールの顕微鏡写真（４）…… 135
第87図　プラント・オパールの顕微鏡写真（５）…… 136
第88図　プラント・オパールの顕微鏡写真（６）…… 137
第89図　プラント・オパールの顕微鏡写真（７）…… 138
第90図　主要花粉及び植生・農耕の変遷…… 141
第91図　来住廃寺遺跡15次調査の花粉組成図…… 143
第92図　花粉遺体の顕微鏡写真Ⅰ…… 144
第93図　花粉遺体の顕微鏡写真Ⅱ…… 145
第94図　来住廃寺遺構15次調査出土材の顕微鏡写真…… 147
第95図　３区下段出土種実　（縮尺１／１）…… 154

図　版　目　次

巻頭図版　　来住廃寺遺跡上空から
図版１　　来住台地航空写真
図版２　１．調査前近景
　　２．表土剝ぎ取り状況
図版３　１．西壁土層上段
　　２．西壁土層中段
図版４　　調査区全景
図版５　１．調査区西部
　　２．調査区東部
図版６　１．ＳＢ－１（北より）
　　２．ＳＢ－２（南より）
図版７　１．ＳＢ－３（南より）
　　２．ＳＢ－３（東より）
図版８　１．ＳＡ－２（北より）
　　２．ＳＢ－３・４遠景（南より）
図版９　１．ＳＤ－10（北東より）
　　２．ＳＤ－35遺物検出状況（南東より）
図版10　１．ＳＤ－40ベルト土層（西より）
　　２．ＳＤ－40遺物出土状況
図版11　１．ＳＴ－１遺物出土状況
　　２．ＳＴ－３遺物出土状況
図版12　１．ＳＴ－５人骨出土状況
　　２．ＳＴ－６桶材出土状況
図版13　１．ＳＴ－11漆器出土状況
　　２．ＳＴ－12遺物出土状況
図版14　１．ＳＴ－13遺物出土状況
　　２．ＳＴ－14遺物出土状況
図版15　１．ＳＴ－15遺物出土状況
　　２．ＳＴ－15人骨出土状況
図版16　１．ＳＴ－16遺物出土状況
　　２．ＳＴ－17遺物出土状況
図版17　１．ＳＴ－18遺物出土状況
　　２．ＳＴ－19遺物出土状況
図版18　１．ＳＫ－16出土軒丸瓦
　　２．ＳＫ－21出土軒平瓦
図版19　１．１区下段土器溜り遺物出土状況
　　２．１区下段土器溜り出土壺
図版20　１．１区下段土器溜り出土無頸壺
　　２．１区下段土器溜り出土壺
図版21　１．３区下段東壁土層（北より）
　　２．３区下段西壁土層
図版22　１．３区下段第Ⅳ層遺物出土状況
　　２．３区下段第Ⅳ層出土瓦（１）
図版23　１．３区下段第Ⅳ層出土瓦（２）
　　２．３区下段第Ⅳ層出土土師器
図版24　１．３区下段第Ⅴ層遺物出土状況
　　２．３区下段第Ⅴ層出土木製品（１）
図版25　１．３区下段第Ⅴ層出土木製品（２）
　　２．３区下段第Ⅴ層出土木製品（３）

図版26　１．３区下段第Ⅴ層出土須恵器（１）
　　２．３区下段第Ⅴ層出土須恵器（２）
図版27　１．３区下段第Ⅶ層出土弥生土器（１）
　　２．３区下段第Ⅶ層出土弥生土器（２）
図版28　　ＳＤ・ＳＰ出土遺物
図版29　　ＳＫ出土遺物
図版30　　土壙墓内出土遺物（１）
図版31　　土壙墓内出土遺物（２）
図版32　　土壙墓内出土遺物（３）
図版33　　１区下段土器溜り出土遺物（１）
図版34　　１区下段土器溜り出土遺物（２）
図版35　　３区下段第Ⅳ層出土土製品（１）
図版36　　３区下段第Ⅳ層出土土製品（２）
図版37　　３区下段第Ⅳ層出土土製品（３）
図版38　　３区下段第Ⅳ層出土土製品（４）
図版39　　３区下段第Ⅳ層出土土製品（１）
図版40　　３区下段第Ⅳ層出土土製品（２）
図版41　　３区下段第Ⅴ層出土土製品（１）
図版42　　３区下段第Ⅴ層出土土製品（２）
図版43　　３区下段第Ⅴ層出土土製品（３）
図版44　　３区下段第Ⅴ層出土土製品（４）
図版45　　３区下段第Ⅴ層出土土製品（５）
図版46　１．Ⅴ層出土須恵器ヘラ記号
　　２．Ⅴ層出土須恵器壺施文
　　３．トレンチ内出土　転用硯
図版47　　３区下段第Ⅶ層出土土製品（１）
図版48　　３区下段第Ⅶ層出土土製品（２）
図版49　　３区下段第Ⅶ層出土土製品（３）
図版50　　３区下段第Ⅶ層出土土製品（４）
図版51　　３区下段第Ⅶ層出土土製品（５）
図版52　　３区下段第Ⅶ層出土土製品（６）
図版53　　３区下段第Ⅳ層出土木製品
図版54　　３区下段第Ⅴ層出土木製品（１）
図版55　　３区下段第Ⅴ層出土木製品（２）
図版56　　３区下段第Ⅴ層出土木製品（３）
図版57　　３区下段第Ⅴ層出土木製品（４）
図版58　　３区下段第Ⅴ層出土木製品（５）
図版59　　３区下段第Ⅴ層出土木製品（６）
図版60　　３区下段第Ⅴ層出土石製品・獣骨
図版61　　来住廃寺出土軒丸瓦（１）
図版62　　来住廃寺出土軒丸瓦（２）
図版63　　来住廃寺出土軒平瓦（３）
図版64　　来住廃寺出土軒平瓦（４）
図版65　　来住廃寺出土丸瓦（５）
図版66　　来住廃寺出土軒丸瓦（６）
図版67　　来住廃寺出土平瓦（７）
図版68　　来住廃寺出土平瓦・熨斗瓦（８）
図版69　　来住廃寺出土隅切平瓦・隅木蓋瓦（９）

表　目　次

表１　出土遺物観察表　ＳＢ…… 91
表２　出土遺物観察表　ＳＰ(1)～(2)…… 91
表３　出土遺物観察表　ＳＤ(1)～(2)…… 92
表４　出土遺物観察表　ＳＴ(1)～(2)…… 93
表５　出土遺物観察表　ＳＫ…… 95
表６　出土遺物観察表　１区下段土器溜り…… 96
表７　出土遺物観察表　３区下段土製品(1)～(10)…… 97
表８　出土遺物観察表　３区下段木製品(1)～(7)…… 105
表９　出土遺物観察表　３区下段石製品・その他…… 110
表10　出土遺物観察表　出土瓦一覧表…… 111
表11　軒丸瓦計測表…… 124
表12　軒平瓦計測表…… 124
表13　３区下段における植物珪酸体…… 130
表14　３区下段におけるおもな植物の推定量…… 130
表15　来住廃寺遺跡15次調査の花粉遺体一覧…… 142
表16　来住廃寺15次調査出土種実一覧（モモ核を除く）…… 152
表17　来住廃寺15次調査出土桃核　尖度別一覧表…… 152
表18　来住廃寺15次調査出土桃核　膨張度別一覧表…… 152
表19　来住廃寺15次調査出土桃核　層別計測平均値一覧表…… 152
表20　来住廃寺15次調査出土桃核　層別保存状態・核長一覧…… 153

Ⅰ　調査に至る経過

1　調査に至る経過

1990（平成２）年、松山市来住町798-1外８筆（3,174㎡）の開発について三好鉄巳氏より埋蔵文化財の有無確認を松山市教育委員会、文化教育課に申請され埋蔵文化財センターが実施することとなった。

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地域のうち、「№127、来住廃寺」に該当する周知の包蔵地域に含まれる地域である。当地域からは７世紀代の官衙遺跡や来住廃寺を含め近年確認された大型回廊状遺構の南側隣接地にあたることから、これらの関連遺構の存在が予想されるところであった。

試掘（確認）調査は、同年８月１日～８月７日にかけて行った。

調査は、南西下がりの３段の段状地形になる水田地に７本のトレンチを設定した。

この結果、上段～中段にかけては削平が著しい状況であったが柱穴23基を検出し、下段の3.5m造成土下からは、黒色粘質土になる遺物包含層を検出しそれより、布目瓦、須恵器、土師器、弥生土器の他、木器片、植物遺体などが出土した。

埋文センターは、これらの結果内容を市教委に報告した。その後、県教委からの本格調査必要通知に基づき、市教委と埋文センターは三菱自動車株式会社と本格調査に向けて再三の協議を行った。この結果により、埋文センターは本格調査を平成３年８月１日～同年12月26日に実施し、屋内整理作業を平成４年１月６日～同年12月24日まで行った。

2　調査組織

調　査　地　　松山市来住町798-1他７筆

遺　跡　名　　来住廃寺遺跡　（第15次調査地）

調査期間　　野外調査　平成３年８月１日～平成３年12月26日

　　室内調査　平成４年１月６日～平成４年12月24日

調査面積　　対象面積　3,174㎡　　実施面積　1,751㎡

調査委託　　三菱自動車株式会社　代表取締役社長　中村　裕一

――――――「平成３年度調査組織」――――――

調査主体	松山市教育委員会	教育長	池田　尚郷	
		参　事	池田　秀雄	
		教育次長	西森　寛彦	
		教育次長	渡部　泰輔	
		教育次長	日野　正寛	
調査総括	松山市教育委員会	文化教育課	課　長	岩本　一夫
	市立埋蔵文化財センター		所　長	和田祐三郎
			次　長	田所　延行
			調査係長	西尾　幸則
			調査主任	田城　武志
			調査主事	栗田　正芳

――「平成３年度調査組織」（平成３年10月１日～）――

調査主体	財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	田中　誠一
		事務局長	池田　秀雄
		事務局長	渡辺　和彦（４月１日～）
		事務局次長	鶴井　茂忠
調査総括	埋蔵文化財センター	所　長	和田祐三郎
		次　長	田所　延行
		調査係長	西尾　幸則
		調査主任	田城　武志
		調査主事	栗田　正芳
調査担当		調査員	西尾　幸則

			梅木　謙一	
			池田　　学	
			宮内　慎一	
			山本　健一	
			調査員補　真木　　潔	
調査作業員	相原　忠重	石丸　善啓	上木　秀富	大久保英昭
	大地　俊彦	大富　　仁	越智　正法	小野　良延
	小山　隆治	岡崎　政信	門脇　高広	上岡　康俊
	亀山　健一	亀山　康昌	川井　　正	記内　貴吉
	木邑　義孝	窪田　克彦	栗林　和孝	黒田　正機
	是沢　壽昭	田所　学夫	田中　英樹	高橋　　恒
	徳田　信之	富山　寛之	中川　秀樹	中島　　宏
	中野　厚平	西　　大輔	西原　聖二	波多野禎彦
	林　　亨	松岡　欣弘	松本　　剛	松原　寛之
	松本　正義	三江　元則	富田　弘一	村上　賢樹
	森　　隆	森貞　浩二	八木　幸徳	矢野　正和
	山口　裕二	山口　吉一	山本　　圭	猪森しげ子
	大西アイ子	大西　元子	雲峰　智子	白井あさ子
	新出寿美子	田中　麗子	束村智恵子	富岡キシオ
	野口　美紀	野口美佐美	野本　益子	深井百合子
	福本　清香	三好イソ子	三好ハナ子	三好真智子
	三好ヤス子			
野外調査整理員	岡田　美紀	岡根なおみ	中矢　裕美	森田　禎美
室内調査整理員	岡根なおみ（作業補助）		岡崎　政信	猪森しげ子
	岡田　美紀	金子　みさ	白井あさ子	新出寿美子
	中矢　裕美	松浦　明美	丸山　美和	

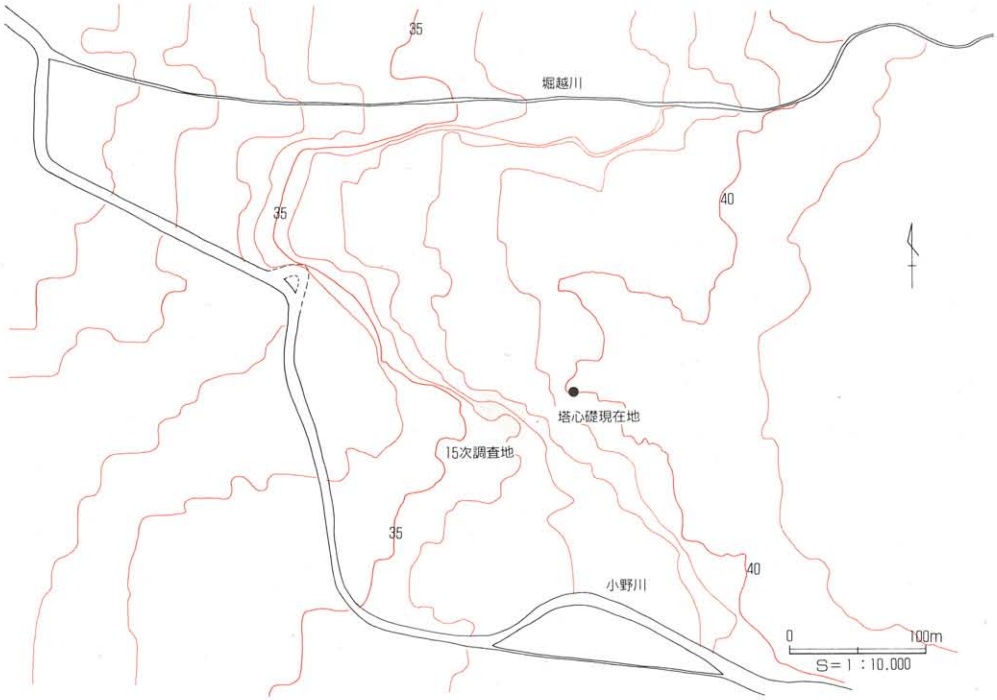
Ⅱ　遺跡の概要

1　地理的環境

松山平野は、伊予灘と燧灘とに挟まれた高縄半島の南西部に位置する。この半島の中央には、東三方ヶ森（1,237m）をはじめ、北三方ヶ森（977m）、高縄山（986m）などが連なる高縄山地が形成されている。この平野は、東西約20km、南北約17kmの広がりをもち、石手川と重信川という二大河川の開析活動によって、西方の伊予灘に向けて開けた沖積平野である。この二大河川は、高縄山地と石鎚山に各々水源を発し、開析谷を形成しながら平野部へ流れ出し、途中石手川が重信川に合流した後伊予灘へ流出する。

本遺跡が所在する松山市来住町周辺には、内川、小野川、前川、川付川などの大小河川が流れている。そのうち小野川は、平井谷に水源を発し、平井町付近で扇状地を形成し、途中星ノ岡、東山などの伊予三山を蛇行しながら流れ、やがて石手川に合流する。こうして形成された小野川扇状地と石手川扇状地との間には、過去の扇状地堆積物が一部段丘化した標高30～50mの洪積台地が広がっている。

この台地の北辺を、平井谷に水源を発した堀越川が東から西に向かって流れ、南辺を流れる小野川と合流する。この二河川に挟まれた地域が、舌状に形成されていることから来住舌状台地と呼ばれ、地味の肥沃な農耕地となっている。本遺跡は、この台地の南落ち際に立地している。



第１図　小野川扇状地及び周辺の地形図

2　歴史的環境

旧石器時代

当該地域における旧石器時代の遺物は、五郎兵衛谷古墳の封土中で出土したサヌカイト製角錐状石器（１点）のほか、久米山田池遺跡からサヌカイト製ナイフ形石器（１点）、久米窪田Ｖ遺跡からサヌカイト製ナイフ形石器（１点）、平井町今吉からサヌカイト製ナイフ形石器（２点）とサヌカイト製掻器（１点）、北久米からサヌカイト製ナイフ形石器（１点）などが採集されている。〔長井　1986〕

いずれも遺構に伴って出土したものではないが、平野内における同様の資料との比較研究材料として価値の高いものである。今後、同一地点での接合可能資料の出土が期待される。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、現在までのところ後・晩期に限られている。久米窪田森元遺跡の土壙ＳＫ１では、後期後葉の約40点の破片が出土しており、この時期における数少ない一括資料として貴重なものである。〔栗田　1989〕

また久米高畑遺跡21次調査では、貝殻条痕のある突帯文土器の小片が出土していることから、近隣地域における晩期の遺跡の存在が指摘されている。〔栗田他　1992〕

南久米片廻り遺跡２次調査ＳＫ－５からは、晩期後葉の一括資料が出土している。当該地域において、この段階の資料が出土したのは初めてであり、市内太山寺町所在の大渕遺跡に続く段階の資料としても注目される。弥生時代へ移行する段階の集落形成の構造を知る上でも重要な遺構である。〔松村他　1991〕

弥生時代

前期

来住台地においては、前期後半から中期初頭の遺物を出土する約１×２ｍの方形竪穴状遺構が数多く発見される。例えば久米高畑遺跡９次調査では12基、同遺跡13次調査では９基確認されている。この遺構の性格は現在のところ不明であるため、全国的な出土例から、この方形竪穴状遺構の性格を確認することが急務であるといえよう。また、それに対して、同時期の住居の確認が極めて少ないことも特徴の一つとしてあげられる。

また久米高畑遺跡９次調査の円形竪穴式住居ＳＢ－３では、前期末の土器を出土したほか、来住Ｖ遺跡では、環濠状遺構２条が検出され、前期後半を中心にした土器が多数出土している。〔吉本他　1981〕

中期

久米高畑遺跡21次調査地ＳＫ－３では、Ｌ字状口縁に刺突文と５条の沈線をめぐらせた中期初頭の甕とともに、多数のチャート剝片等が出土しており、石器製作場所との推定も可能である。〔栗田他　1992〕古屋敷遺跡Ｃ調査では、断面がゆるやかなＵ字状を呈する溝ＳＤ－４を検出している。この溝は、北から南東に向けてＬ字状に屈曲し幅3.6～5.7m、深さ0.8mを計る。この溝の一部分に中期後半から後期初頭の土器が集中して出土し、破損品を一括投棄したものではないかと推定されている。土器の残存状態や出土状態などから、この溝の時期も同時期に位置づけている。〔梅木他　1991〕久米窪田Ⅲ遺跡では、中期の竪穴式住居跡や土壙墓などが検出されている。〔吉本他　1981〕

後期

来住遺跡では、後期を中心とした竪穴式住居跡や土壙、土壙墓などが確認されている。〔小笠原他　1979〕また久米高畑遺跡13次調査ＳＢ－１は、隅丸方形を呈した竪穴式住居で、埋土中ではあるが後期の土器が少量出土している。

このように近年の調査によって、当該地域においては弥生時代を通して集落が継続的に営まれていたことが明らかにされつつある。

古墳時代

集落

久米高畑遺跡５次調査では、５世紀末の竪穴式住居ＳＢ－６が検出されており、また鷹子新畑遺跡では、竪穴式住居ＳＢ－１の床面で７世紀初頭の須恵器坏蓋が出土している。また、この地域では最も新しい時期である７世紀前半ごろの竪穴式住居を来住廃寺跡の西側の来住廃寺17次調査で確認しており、比較的新しい段階まで竪穴式住居での集落が存在していたことが明確になった。これらのことから、６世紀代の遺構がやや不明確である点以外は、古墳時代を通して集落が形成されていたことが明らかになった。〔西尾　1992〕

古墳

平井町今吉に所在する観音山古墳は、正式な調査が実施されていないため帆立貝式前方後円墳か円墳か、いまだ決着をみていない。〔西田　1986〕その後後期には、二ツ塚古墳（推定全長約48m）・波賀部神社古墳（全長約62m）・タンチ山古墳などの大規模な前方後円墳が、平野部において出現する。そのほか、一墳丘二石室を有する芝ヶ峠１号墳（円墳・径約12m）や、王冠や長鎖付耳飾一対が出土したと伝えられる桜塚古墳（方墳）などは特筆すべきものである。〔森　1986、西田・森　1980〕

近年丘陵部において、７世紀前半と推定されるかいなご３号墳や、６世紀末の築造と推定

される平井谷１号墳等の古墳が発掘され、集落と墓地との考える上での貴重な資料が揃いつつある。それらのほかには、来目部小楯の墓と伝えられる播磨塚古墳群や芝ヶ峠古墳群などが数多く存在する。〔森　1986、西田・森　1980〕

このように松山平野内部で、大規模な古墳が集中する地域は他にはなく、当地域を支配していた豪族の存在が考えられるが、その大集落を擁するだけの生活遺構がこの地域からは未だ発見されていない。

古代・中世

この地域から福音寺周辺にかけての地域には、歴史時代の遺跡が数多く存在する。特に、国道11号バイパス建設工事の際に、生活関連遺構及び官衙に関係すると思われる遺物が出土している。前川Ⅰ・Ⅱ遺跡は、堀越川を挟んで両河岸で発見された遺跡である。Ⅰ遺跡では掘立柱建物６棟、Ⅱ遺跡では掘立柱建物２棟が検出されている。また、干支の「甲」の文字を底部外面に墨書した土師器の皿や、人形が出土している。〔森　1981〕久米窪田Ⅱ遺跡では、２時期に大別される３間×２間の掘立柱建物７棟が検出され、おびただしい量の遺物が出土している。特に「上」「ノ」を墨書された須恵器や、人形代・削り掛け・木簡などは官衙の可能性をうかがわせるものである。また土器製作用の木製あて道具・叩き板等が出土している。〔吉本他　1981〕

前川Ⅰ・Ⅱ遺跡から西へ約300ｍの久米高畑遺跡第１，11次調査においては、久米評の評衙関連遺構の可能性が高い大規模な掘立柱建物が20棟以上検出されている。〔西尾　1991〕また同遺跡第７次調査において「久米評」線刻須恵器が発見され、この地域が久米評に関係した政治的中心地であったことを裏付ける資料となった。〔西尾　1989〕

来住廃寺は、昭和52年以降継続的に発掘調査を行った結果、現在のところ法隆寺式の伽藍配置を持つ７世紀後半の寺院であるという。〔小笠原他　1979〕昭和62年には、隣接して検出された東西の掘立柱列が、当初に来住廃寺に伴うものと考えられていた南北の掘立柱列とともに、方１町規模で回廊状に巡る遺構であることが明確になった。その後の調査の進展にともなって、７世紀中葉の瓦類が出土し、また回廊状遺構内において正殿的建物が検出されるなど、今後久米評・久米郡の謎解明に向けて貴重な遺跡であることは疑いのない事実であるといえよう。〔西尾　1989．1991〕今後は、この回廊状遺構内に存在する遺構の配置関係と、出土遺物等からこの施設の性格をとらえることが先決であろう。

なお、この回廊状遺構の性格については、斉明女帝が朝鮮出兵に際して立ち寄った行宮ではないかという説が有力である。〔松原　1991〕

（文献）

長井　数秋　1986「先土器時代　松山平野の遺跡」『愛媛県史　資料編　考古』愛媛県史編纂委員会

栗田　茂敏　1989「久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

栗田　正芳・河野　史知　1992「久米高畑遺跡21次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

松村　　淳・山本　健一　1991「南久米片廻り遺跡２次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

吉本　　拡・阪本　安光　1981「来住Ⅴ遺跡、久米窪田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』愛媛県教育委員会・愛媛県埋蔵文化財調査センター

梅木　謙一・宮内　慎一　1991「古屋敷遺跡Ｃ調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

西尾　幸則　1992「来住廃寺15・17次調査について」松山市考古館『平成４年度発掘調査報告会　むかし・昔のまつやまを語る』資料

西田　　栄　1986「観音山古墳」『愛媛県史　資料編　考古』愛媛県史編纂委員会

森　　光晴　1986「波賀部神社古墳」「二ツ塚古墳」「播磨塚古墳群」『愛媛県史　資料編　考古』愛媛県史編纂委員会

西田　　栄・森　　光晴　1980『松山市資料集　第１巻　考古編』松山市

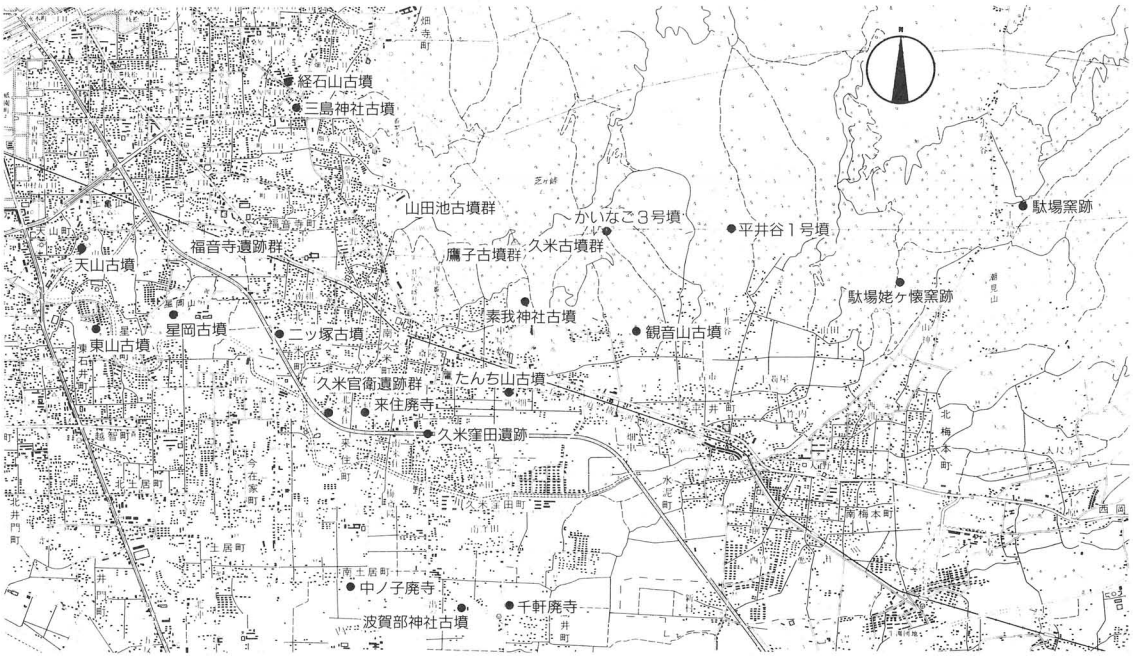
森　　光晴　1981「前川Ⅰ・Ⅱ遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』愛媛県教育委員会・㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

小笠原好彦・森　　光晴他　1979『来住廃寺』松山市教育委員会

西尾　幸則　1991「久米高畑第11次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

1989「久米高畑第７次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

松原　弘宣　1991「熟田津と古代伊予国～久米地域を中心に～」松山市考古館第１回講演会『熟田津と来住台地～７世紀における西瀬戸内海地域～』資料



第２図　遺　跡　分　布　図　　（縮尺1/50,000）

Ⅲ　調査の概要

1．調査の経緯

調査地は松山来住町798－1（他7筆）で、来住廃寺塔跡より南西100m地点にあたる。（第3図）調査対象面積は、3174㎡あり調査地は、約1600㎡を行った。調査地北半分は水田耕作地、南半分は、国道11号線建設による盛土整地工事がなされており、整地工事以前は約3段の段状耕作地であった。1991年8月1日より重機による表土剝ぎ作業を開始し、盛土は場外搬出した。南北に5本のベルトを設定し、その後試掘及び深掘りによる土層確認の結果、上中段に於いては地山面で遺構を確認し、下段に於いては、須恵器、木製品、弥生土器の遺存する包含層を確認し、西端上段より各層の堀り下げ、遺構検出を行った。便宜上調査区を1区上・中・下段～5区上・中・下段と地区割を行った。（第4図）またグリット杭の設定に於いては、来住廃寺確認調査に於ける区割りを用い6m四方で行っているものである。

2．層位

調査区3区ＡＢ間を境にして西部・東部で土色の違いが見受けられるものであり、西部はＴ－1土層図を、東部にＬ－3土層図を用いた。

西部基本層序〔Ｔ－1〕

第1層　灰色土（約25cm前後）　耕作土である。

第3図　調査位置図

52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25
6AKA-H
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
X
Y
6AKA-I
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
1区上段
2区上段
3区A
上段
1区中段
2区中段
3区A
中段
3区B上段
1区下段
2区下段
3区B
中段
4区上段
5区
上段
T-1
T-2
T-3
T-4
4区中段
5区
中段
L 3
T-5
T-6
3区下段
4区下段
5区下段
0
20m
S＝1：600

第４図　調査地区割図

第２層　茶褐色土（７～14cm）　床土と呼ばれるものである。

第３層　暗灰黄褐色（20～40cm）　１区上段のみで見られ、地山土である黄褐色土が攪乱を受けたもので、墓壙及び溝を切り、第３層までが上段の堆積土である。

第４層　遺構を切るものである。４層に細分が出来るもので４－１層暗褐色土（13～20cm）、４－２層明灰色土（約10cm前後）、４－３層灰黄褐色土（７～10cm）、４－４層暗灰褐色土（７～18cm）である。

第５層　第６層を切り第４層に切られるものである。２層に分けられるもので、５－１層灰黄褐色土（６～12cm）、５－２層暗灰褐色土である。

第６層　暗灰褐色礫混土（６～13cm）　遺構に切られるものである。第６層までが中段の堆積土で、遺物は須恵器片、陶器片、土師器片等の小片が出土している。

第７層　７－１層明橙灰色土（６～13cm）と７－２層明灰色土（小礫混じり・５～８cm）に分層される。

第８層　青灰色礫混土（５～13cm）　各期の摩滅を受けている遺物を多含する。

第９層　明灰褐色土（小礫が少量混じる）（７～30cm）土器小片を少量含むものである。

第10層　黒色土（５～40cm）　弥生土器片を包含している。

東部基本土層序〔Ｌ－３トレンチ〕

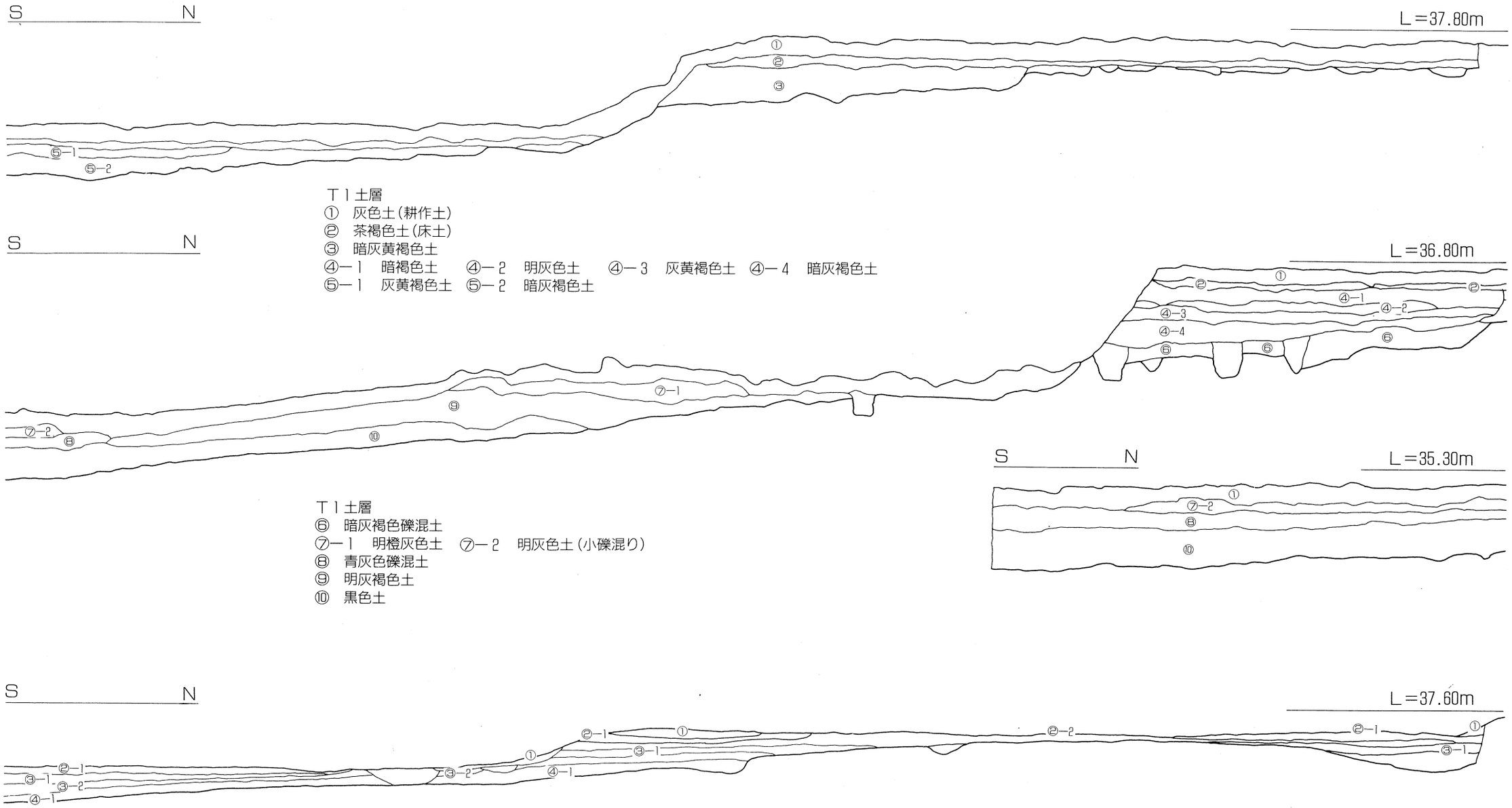
第１層　灰色土（約25cm前後の堆積）　耕作土である。

第２層　２－１層茶褐色土（５～８cm）と２－２層淡灰褐色土（５～８cm）の２層に分かれるが、２層とも、耕作土床土と呼ばれるものである。

第３層　３－１層灰褐色土（５～21cm）と３－２層灰黄褐色土（４～20cm）の２層に分かれるものである。第３層までが上段の堆積土で、遺物は須恵器片、土師器片、陶器片などの小片が出土している。

第４層　４－１層暗灰褐色土（５～25cm）　４－２層灰黄褐色土（５～40cm）小礫を含むものである。４－３層暗灰褐色土（15～30cm）５～15cm大の円礫を含む。４－４層暗灰茶褐色礫混土（20～35cm）、10～25cm大の円礫を多く含むもので、３区Ｂ上段に於いては、耕作土直下にて確認され、また、布目瓦、陶器などの遺物も多く含んでおり、中段検出の遺構出土遺物と接合されたものもある。

第５層　暗茶褐色土（最深部で60cm）３区Ｂ上段より４区東端下段への落ち際まで確認されたもので、遺物はあまり含んでおらず、数点の布目瓦片が出土している。３区Ｂ上中段に於いては、第５層を堀り下げ後溝（ＳＤ－37・38）を検出している。４区下段に於いては、深堀りを行い第５層下位層の確認を行い須恵器片、瓦器片、土師器片、植物遺体を含む砂層を確認したが、出水による壁面の崩壊の危険性がある為作業を中断した。砂層部は３区下段部第４層に相当すると思われる。



T１土層
① 灰色土（耕作土）
② 茶褐色土（床土）
③ 暗灰黄褐色土
④－１ 暗褐色土 ④－２ 明灰色土 ④－３ 灰黄褐色土 ④－４ 暗灰褐色土
⑤－１ 灰黄褐色土 ⑤－２ 暗灰褐色土

T１土層
⑥ 暗灰褐色礫混土
⑦－１ 明橙灰色土 ⑦－２ 明灰色土（小礫混り）
⑧ 青灰色礫混土
⑨ 明灰褐色土
⑩ 黒色土

L３土層
① 灰色土（耕作土）
②－１ 茶褐色土 ②－２ 淡灰褐色土（共に床土）
③－１ 灰褐色土 ③－２ 灰黄褐色土
④－１ 暗灰褐色土 ④－２ 灰黄褐色土 ④－３ 暗灰褐色土 ④－４ 暗灰茶褐色礫混土
⑤ 暗茶褐色土

0 1 2 3m
S＝1：50

第５図 調査区土層断面図（T－１・L－３）

第6図　調査区遺構配置図

3．遺構と遺物

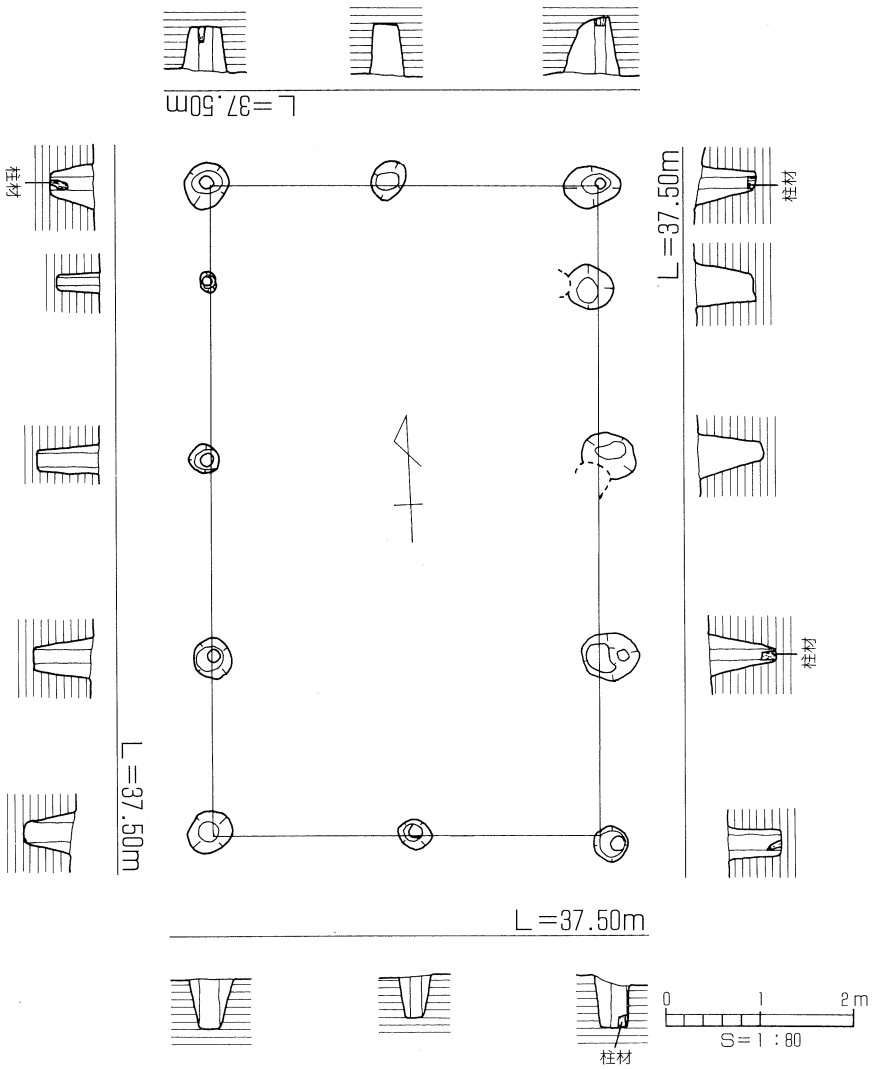
〔1〕柱穴

1）掘立柱建物

ＳＢ－１　第７図・図版６

４間×３間で桁行長7.4m、梁行長4.2mを地山面より検出している。桁間は１m～1.9m、梁間は1.9m～2.2mを測る。主軸方向N 2.5 ° E を取り、南北棟の建物である。

柱堀り方は、円形もしくは楕円形を呈し、規模は長軸25cm～60cm、短軸15cm～50cm、深さ45cm～75cm、柱痕径は確認されたもので10cm～15cmを測る。また、柱穴４基より柱材、２基より焼土、その他の柱穴内より土師器皿片、瓦片等の出土があった。

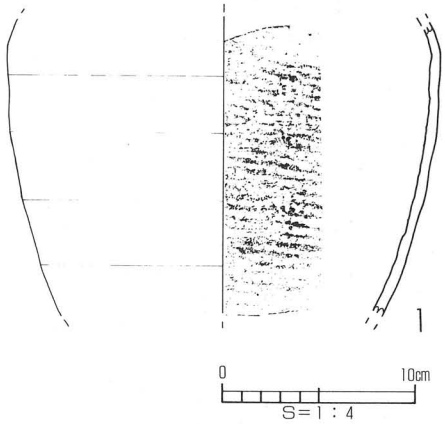


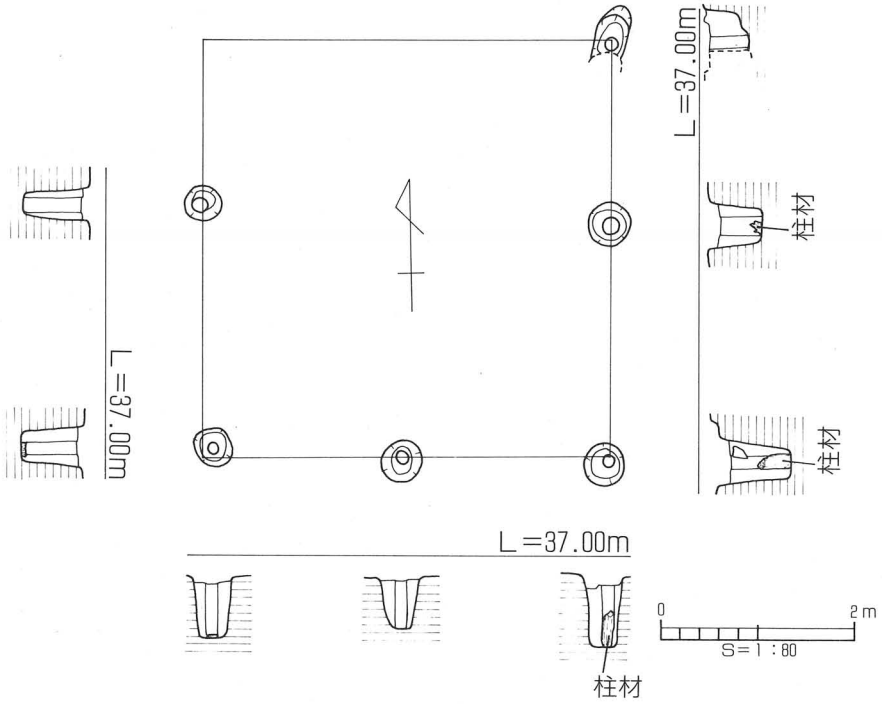
第７図　ＳＢ－１平断面図

ＳＢ－２　第８図・図版６

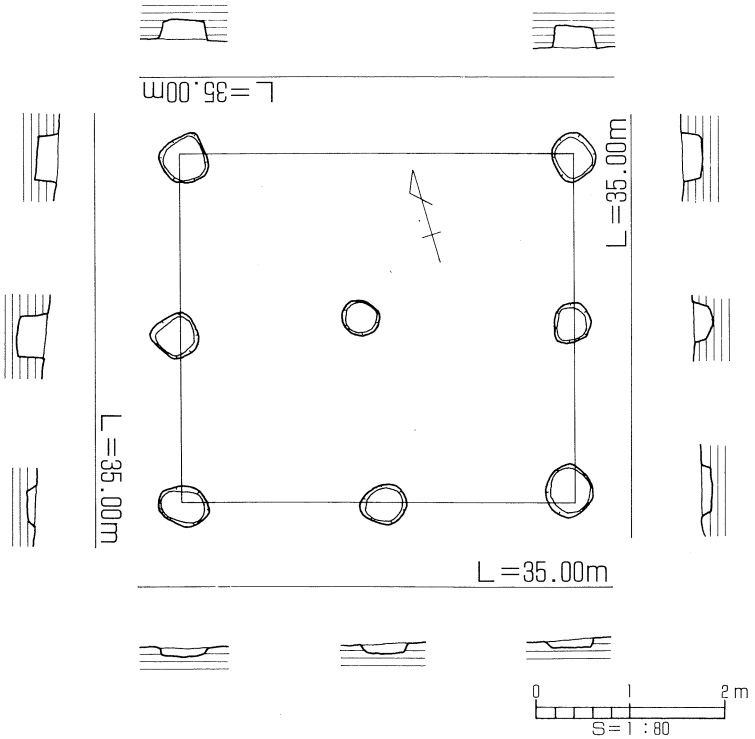
調査地東部４区中段地山面よりＳＢ－１を切るかたちで検出された。６基の柱穴を確認。建物北西隅とその東隣りにあろうと思われるピットは未確認である。２間×２間の建物と思われる。規模は、桁行4.3m梁行4.2mでほぼ正方形を呈す。桁間は柱痕間で1.9m～2.5m梁行柱間は柱痕間で1.9m～2.1mを測る。構成する各柱穴の平面プランは、ほとんどが円形で、北東隅のみ長円形を呈する。柱穴径40～45cm、深さは60cm～90cm、柱痕径13～17cmを測る。柱穴埋土は、灰黄色土、柱痕埋土は灰色微粘性土である。検出遺物は、柱穴より陶器甕体部片、柱痕内より柱材、焼土が出土した。

陶器　甕（１）最大胴部径は推定で22cmを測る。外面は撫でられ釉を施しており、内面は格子目タタキ痕がみられる。





第８図　ＳＢ－２平断面図・遺物実測図



第9図　SB－3平断面図

SB－3　第9図・図版7

調査区南西隅1区下段で弥生中期から後期の遺物を包含する黒色土を掘り下げた地山面で検出した。北側柱列中間の柱穴は検出されなかったが、2間×2間の建物と考えられる。梁行長さ3.7m、桁行長さ4.17mを測る東西棟ではあるが、北で17°東へ偏している。各柱穴は、円もしくは楕円形を呈し、長軸40cm～60cm、短軸40cm～50cm、深さ10cm～30cmを測る。いずれのピット共柱痕は確認出来なかった。柱穴埋土は、検出面上層の黒色土とあまり変わらないものであった。各柱穴より弥生土器が出土しているが、北側東柱穴からの出土が最も多かった。遺物はいずれも小片であった為図示していないが、沈線文と刺突列点文を施した甕の胴部片が見られた。

2）柵　第10図・図版８

ＳＡ－２

調査区東端５区地山面で６間を検出した。真北に対しN -2°-W軸方向を指し、全長13.9m柱間隔は、北より2.0m、2.5m、2.5m、2.1m、2.2m、2.3mを測り柱間隔は一定していない。各柱穴はほぼ円形の平面プランを呈し、長軸35cm～48cm、短軸31cm～40cm、深さ20cm～50cmを測る。確認出来た柱痕径は12cm～15cm。柱掘方には、根石を入れているもの、詰め石を入れているものがある。柱穴内より土師器小片が１点出土した。

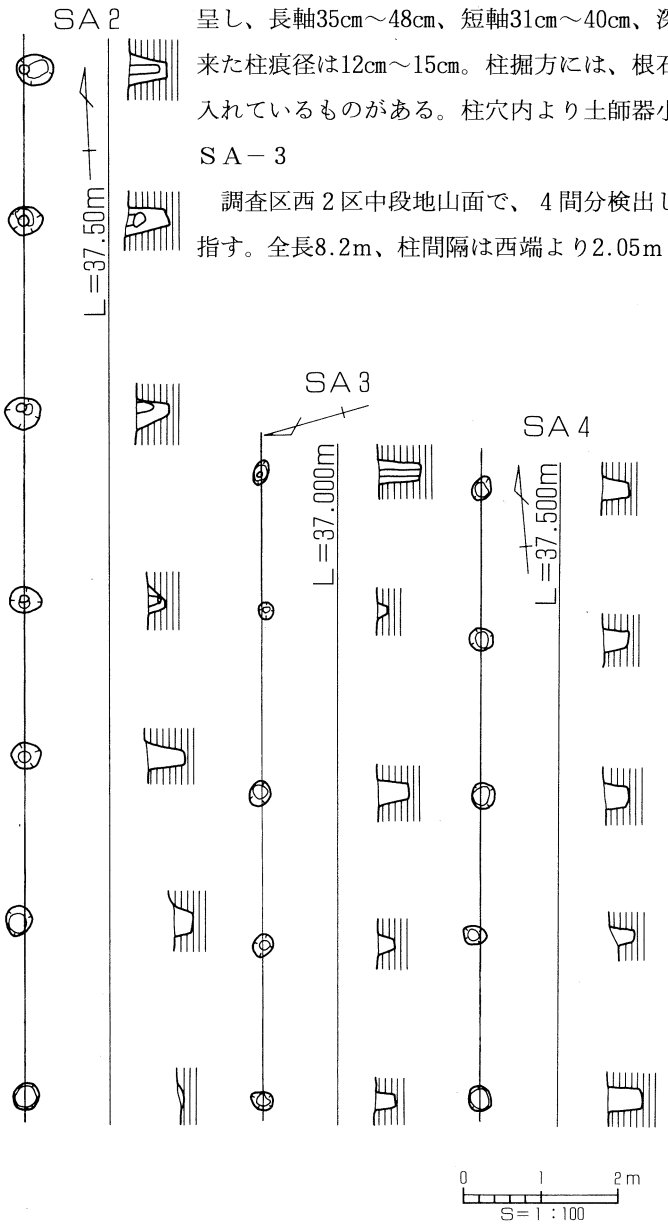
ＳＡ－３

調査区西２区中段地山面で、４間分検出した。この柱列は東西軸方向を指す。全長8.2m、柱間隔は西端より2.05m，2.05m，2.37m，1.75mを測る。

柱穴は、円形もしくは楕円形の平面プランを呈し、長軸25cm～35cm短軸21cm～30cm深さ15cm～55cm柱痕径８cmを測る。この柱列の柱穴内からは遺物の出土はなかった。

ＳＡ－４

調査区西部１区中段地山面にて４間分を検出した。真北方向に対しN -5°-Eの軸方向を指し、全長8.04m柱間隔は北より2.0m、2.0m、1.9m、2.25mを測る。各柱穴は、ほぼ円形の平面プランをなし、長軸31cm～35cm短軸25cm～30cm深さ35cm～45cmを測る。この柱列の柱穴からは柱痕や遺物の確認はされなかった。



第10図　ＳＡ－２・３・４平断面図

3）その他の柱穴　第11図・図版28

ＳＰ－74

調査区北西部２区上段地山面より検出。平面形は不整円形で、径37×27cm、深さ23cmを測る。柱穴埋土は灰褐色土。出土遺物は土師器の鍋の口縁片（２）。

ＳＰ－563

調査区西部２区中段地山面より検出。平面形は円形で、径20×20cm深さ30cmを測る。柱穴埋土は暗灰褐色土。出土遺物は染付椀（３）。釉調は乳白色。呉須による施文が見られる。

ＳＰ－175

調査区中央部３区Ａ中段地山面より検出。平面形は楕円形で、径70×33cm深さ約50cmを測り、他の柱穴よりはやや大きめである。柱穴埋土は灰褐色土である。出土遺物は、陶器小杯（４）釉調は淡緑色を呈する。口縁は外方に開く。

ＳＰ－173

調査区中央部３区Ａ中段地山面より検出。ＳＰ－175より東へ1.2ｍの地点である。平面形は楕円形。径58×48cm、深さ27cmを測る。出土遺物は、陶器皿口縁片（７）。釉調は淡緑色を呈する。溝縁の段皿で、口径は推定13.5cmを測る。

ＳＰ－181

調査区中央部３区Ａ中段地山面より検出。平面形は円形、径40×37cm深さ10cmを測る。柱穴埋土は、暗灰褐色土。出土遺物は陶器皿（８）。口径12.2cm、器高３cm、底径５cmを測る。釉調は緑灰色を呈する。溝縁の段皿。

ＳＰ－505

調査区東部４区上段地山面より検出。平面形は円形。径45×37cm深さ35cmを測る。柱穴埋土は灰褐色土。出土遺物は青磁器碗底部片（９）。底径は推定６cmを測る。

ＳＰ－273

調査区東部中央寄り４区中段地山面より検出。平面形は楕円形で径36×25cm深さ42cmを測る。柱穴埋土は、暗灰褐色土で径８cm灰褐色土の柱痕を確認した。柱痕内より須恵器坏身片が出土した。復元受部径は13.3cmを測る。器高は低く底部回転ヘラ削り調整を施す。

ＳＰ－443

調査区東部中央寄り４区上段地山面より検出。平面形は楕円形で径39×27cm深さ10cmを測る。柱穴埋土は灰褐色土。出土遺物は、ほぼ完形の土師皿２点である。（５）の口縁は内湾し、底部は回転糸切り離し。（６）の口径は推定で10cm、器高2.5cm、底部5.8cmを測る。口縁は外方に開き、端部はヨコナデによって薄く引き出される。摩滅し底部の調整は不明。

ＳＰ－467

調査区東部中央４区中段地山面より検出。平面形は楕円形で径55×37cm深さ18cmを測る。柱穴埋土は灰褐色土。出土遺物は根詰め石に転用された礎石（12）。石材は砂礫を多く含み、

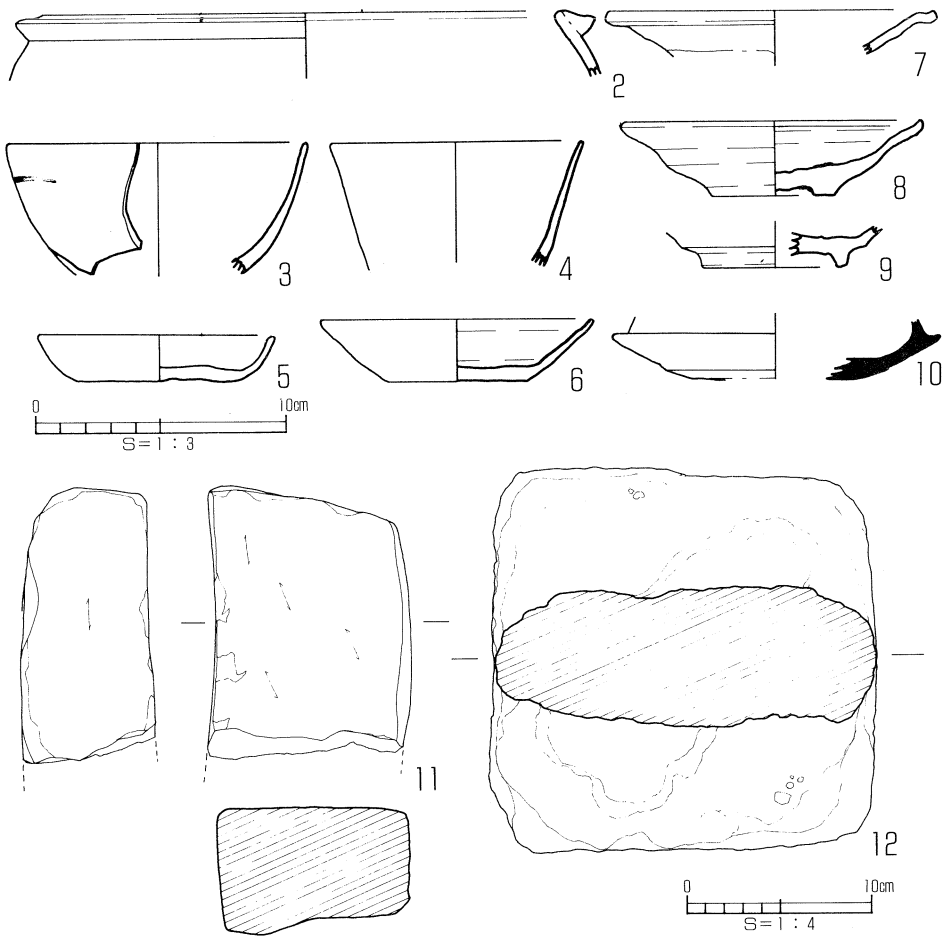
長辺21cm、厚さ7.5cmを測る。

ＳＰ－371

調査区東部中央４区中段地山面より検出。平面形は楕円形で径30×26cm、深さ22cmを測る。柱穴埋土は暗灰色土。出土遺物は根詰め石に転用された砥石（11）石材は不明で、長辺24.3cm、短辺10.5cm、厚さ５cmを測る。

ＳＰ－562

調査区東部中央４区上段地山面より検出。平面形は楕円形で径32×30cm、深さ50cmを測る。柱穴埋土は暗灰褐色土。径15cm、灰褐色土の埋土の下部より柱材が出土した。柱材の樹種はクリ材である。（Ｖ．自然科学分析　３．樹種同定より）



第11図　その他の柱穴出土遺物実測図

〔2〕溝

ＳＤ－１　第12・13図・図版28

調査区１・２区上段での検出で周囲の墓壙・柱穴を切り、調査地西端で南へ折れ曲がり現代耕地整備の段状カットを受ける。全長約21ｍ、幅70～90㎝、深さ20㎝を測る。断面形は皿状を呈し、基底面は東から西へ傾いている。埋土は暗灰褐色である。遺物は混入と思われる四重弧文軒平瓦を含む布目瓦片、須恵器片、土師器片、陶器片が５～10㎝大の川原石と混在して出土した。

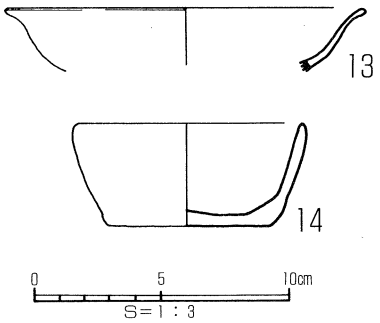
白磁（13）皿口縁片。胎土は精良で、釉調は乳白色を呈す。口縁は外反し丸くおさめる。

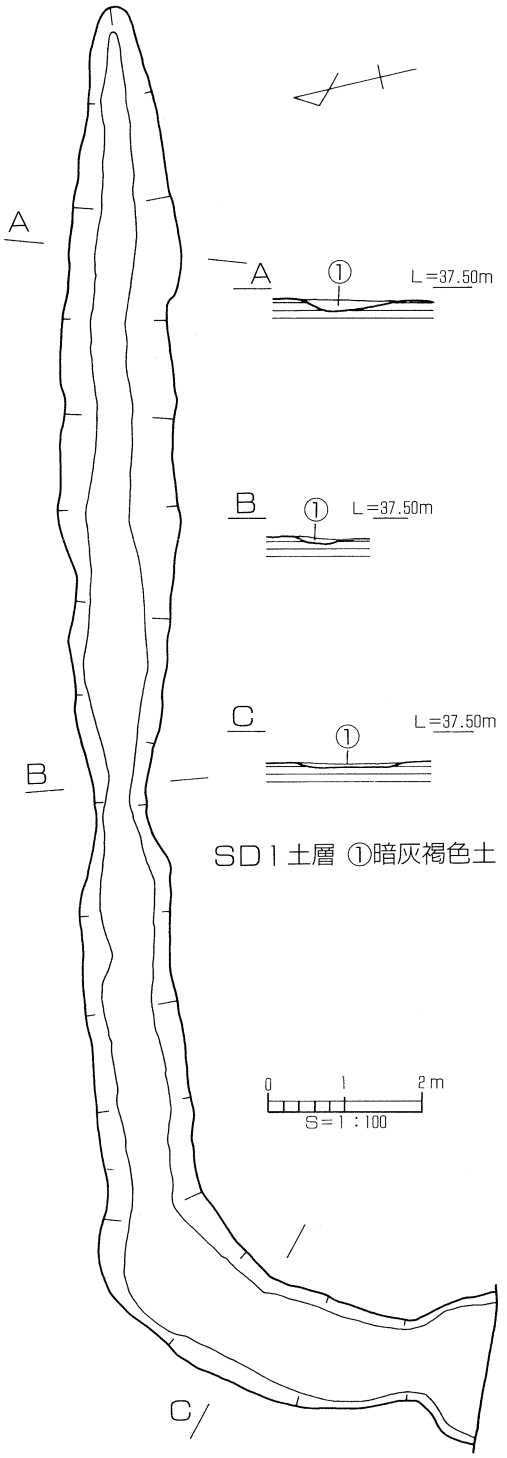
土師器（14）坏。口径推定で9.1㎝、器高４㎝、底径6.4㎝を測る。平底で口縁は内湾ぎみに伸びる。底部は摩滅しており調整は不明。

土師質土器（15）鍋。口縁部に断面三角形の凸帯を付したものである。

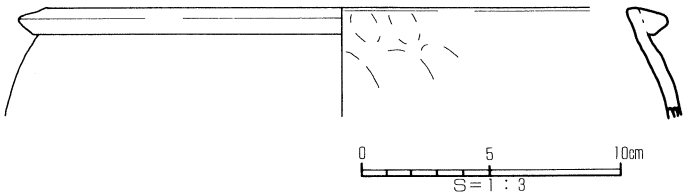
ＳＤ－10　第14・15図・図版９・28

調査区４区上中段での検出でＳＢ－





第12図　ＳＤ－１平断面図・遺物実測図

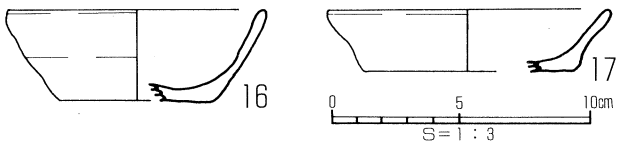


第13図　SD－1遺物実測図

1を構成する東側柱列から約1.2mの位置である。SK－9に切られ、SD－11をきり周囲の柱穴に於ては切るものと切られるものに分かれる。

検出長約15m、幅70～120cm、深さ25cmを測り、ほぼ南北の主軸方向でわずかに西方へ湾曲する。断面形は中央より北部に於いては皿状を呈し南部はレンズ状を成す。埋土は灰褐色土である。遺物は中央から南部にかけて掘方肩部に10～20cm大の河原石の列石が、また基底面より土師器片が出土した。

土師器（16・17）坏。16は平底の底部より口縁は内湾ぎみに立ち上がる。摩滅し調整は不明。17は底部平底。口縁



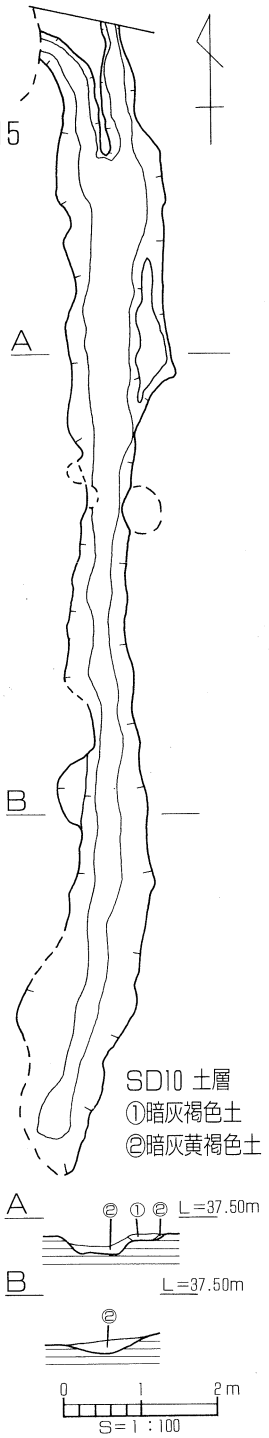
第15図　SD－10遺物実測図

は外反する。摩滅し調整は不明。

SD－12　第18図

調査区東部4区中段地山面で検出され東西に走る溝である。断面形は皿状を呈し、検出長9.8m、上幅で50～70cm、深さ14cmを測る。埋土は、灰色土である。出土遺物は、混入と思われる陶器碗底部片の他、須恵器小片、土師器小片、布目瓦小片である。

陶器（27）碗は胎土精良で灰色。釉調は暗緑色を呈する。底部は削り出し成形によるものである。



第14図　SD－10平断面図

ＳＤ－35　第16図・図版９・28

調査区５区中段南端での検出である。他の遺構との切り合い関係はない。西側を約1.5ｍ幅の試掘トレンチに切られ延長部は検出されなかった為西端部分はトレンチ内であろうと思われる。

検出長約3.6ｍ、幅約3.5ｍ、深さ約35㎝を測る東西溝で、断面形は２段の皿状を呈する。埋土は、暗灰褐色土である。遺物は、混入と思われる複弁四弁軒丸瓦片・重弧文軒平瓦片を含む瓦片・須恵器片、土師器片、陶器片が５～10㎝大の円礫と混在して出土した。

備前（19・20）甕口縁部。

土師質土器（18）鍋口縁部に断面丸みを帯びた三角形の凸帯を付す。

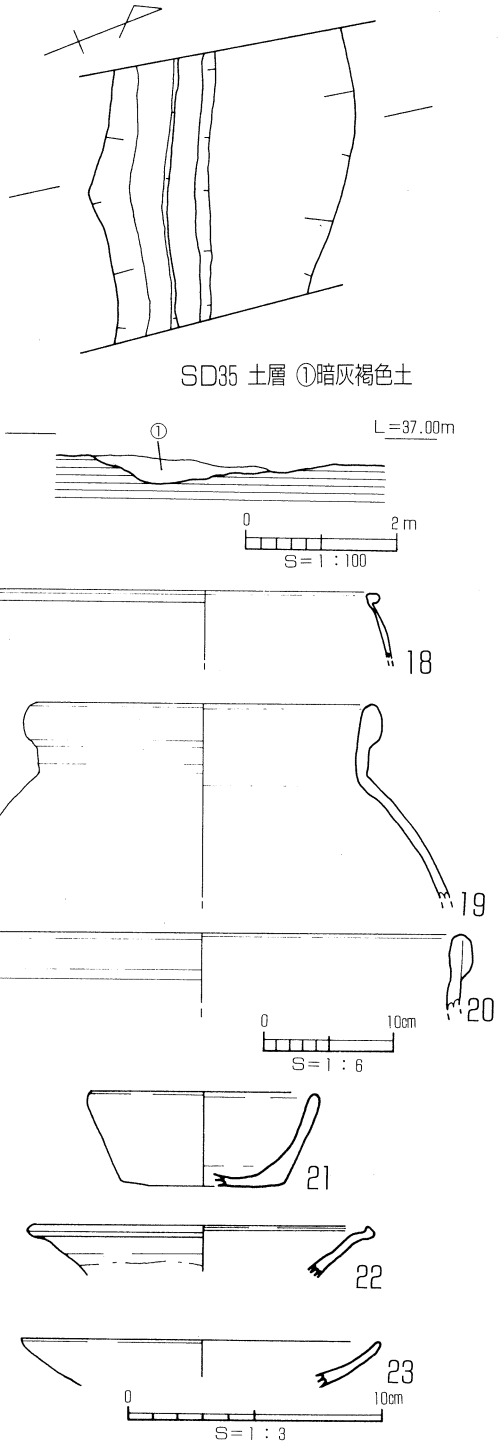
土師器（21）坏。平底の底部より口縁は内湾ぎみに伸びる。

陶器（22）釉調焼成不良のためか灰白色を呈す。溝縁皿口縁片。（23）釉調はオリーブ緑を呈す。鉄釉による文様が施される。

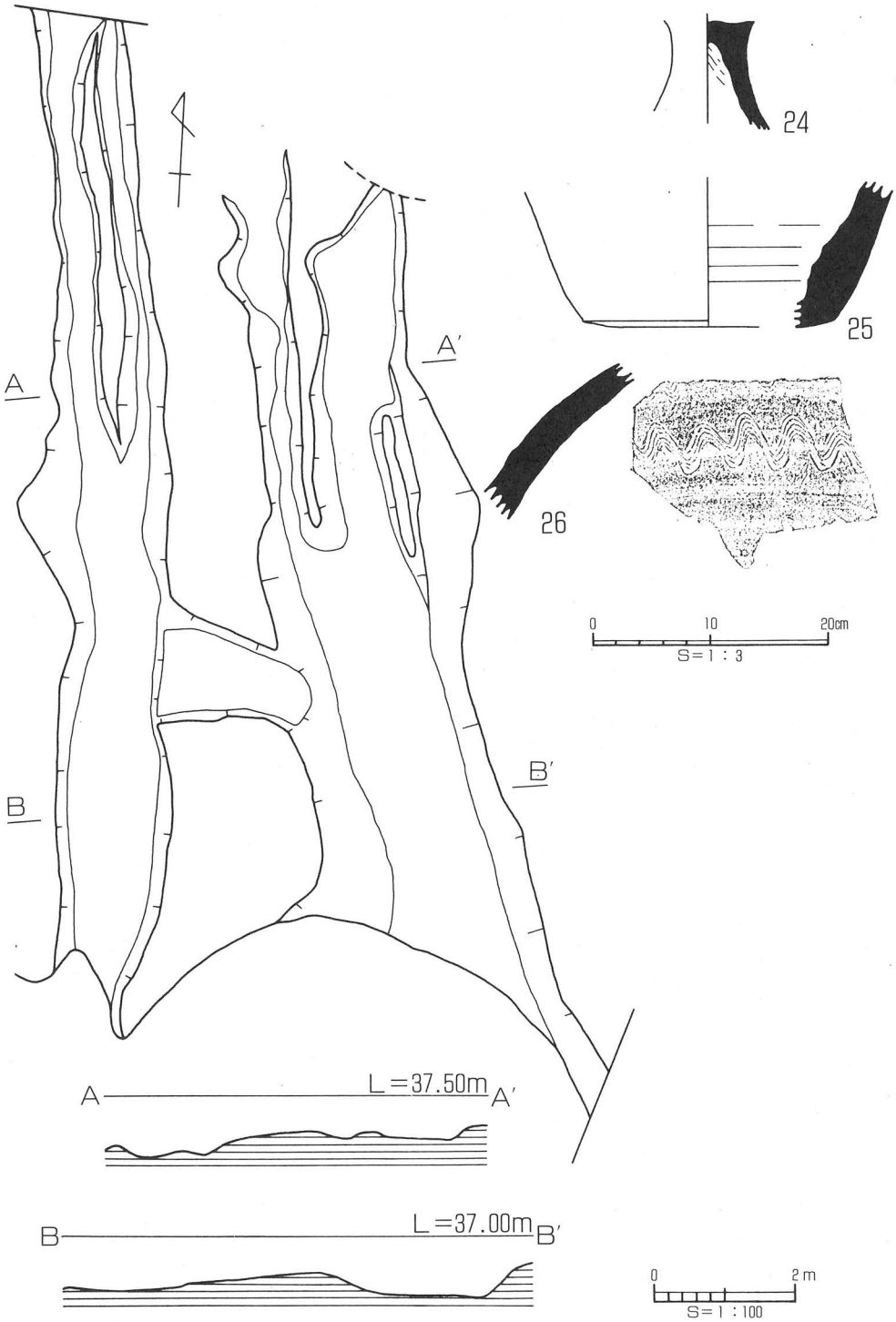
須恵器（25）壺と底部と思われる。外面はケズリのあとナデられる。（26）は大甕の口縁部と思われる。５条１単位の波状文を施す。

ＳＤ－37・38　第17図・図版28

調査区中央３区Ｂ上中段で検出された。ＳＤ－38はＳＫ－21を切る。基底面に北端から中央部にかけ中洲状の高まりが見られるが。断面形は皿状を呈する。北から南へ傾斜し、ほぼ南北に平行に並ぶもので中央部南寄りの東西溝との前後関係はなく両者が同時期に存在していたと思われる。



第16図　ＳＤ－35平断面図・遺物実測図

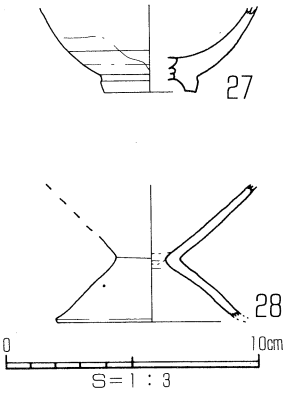


第17図　SD－37・38平断面図・遺物実測図

ＳＤ－37は、検出長約9.8m、幅1.7m、深さ20cmを計り、埋土は暗茶褐色土である。遺物は須恵器片、土師器片、布目瓦片が５～20cm大の川原石と混在して出土した。

須恵器（24）高坏脚柱部。短脚と思われる。全体に摩擦する。

ＳＤ－38は、検出長約11.7m、幅2.2～2.6m、深さ20～60cmを測り、埋土は暗茶褐色土である。遺物は、重弧文軒平瓦片を含む平・丸瓦片、須恵器片、土師器片がＳＤ－37同様５～20cm大の川原石と混在して出土した。瓦片は、土器収納箱に５箱分を数える。

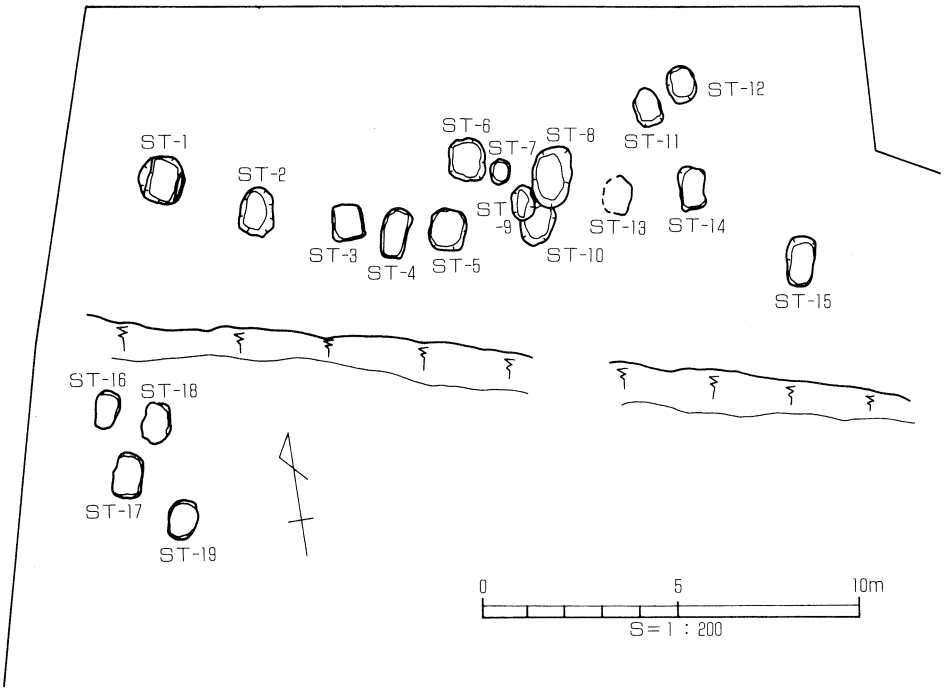


第18図　ＳＤ－12・40遺物実測図

〔３〕土壙

１）土壙墓

本調査において土壙墓を19基確認した。調査区西部１区上・中段２区上段の地山面での検出である。上段部はＳＤ－１に切られ、中段部はＳＤ－20に切られる。平面形はほぼ長方形を呈し、主軸方向を南北にとるものである。出土遺物は、陶器椀、皿、杯、漆器片、古銭等の副装品の他、歯、骨、木棺材が検出された。



第19図　ＳＴ配置図

ＳＴ－１　第20図・図版11・30

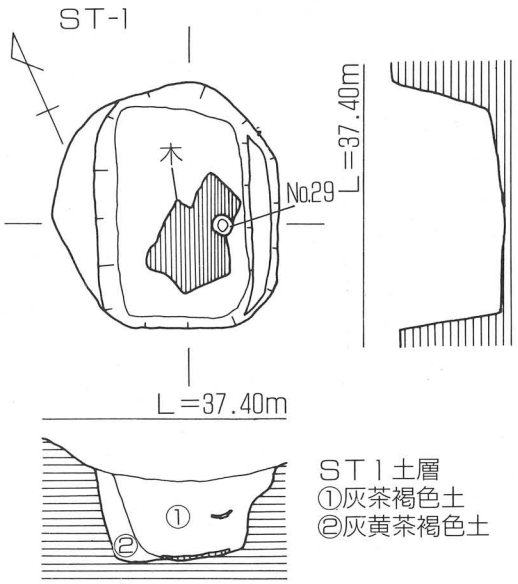
調査区１区上段西端での検出である。遺構上面第Ⅱ層中からは、上部施設に使用されたと思われる川原石（10～20cm大）が多数出土した。平面形は、上端に於ては、崩れており楕円形を呈しているが底面は長方形で、長さ1.2m、幅0.8m、深さ45cmを測る。埋土は灰茶褐色土である。

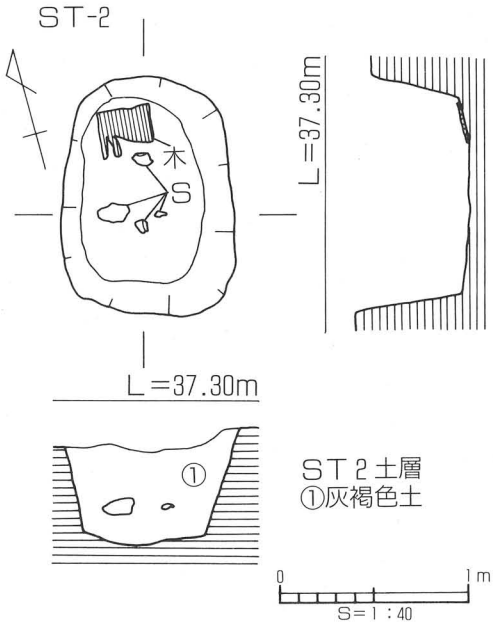
遺物は埋土中層位より副装品である陶器皿が、基底面より柾目木取りの桶材が出土した。桶棺を横転させての埋葬である。

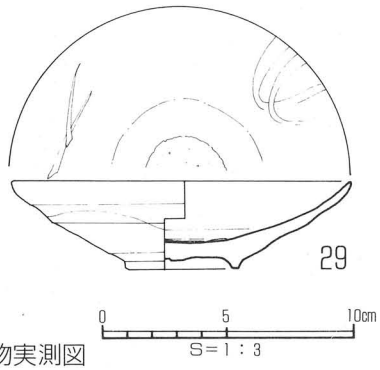
陶器　皿（29）口縁13.4cm、器高3.5cm、底径4.5cmを測る。胎土は精良で釉調は焼成不良のためか淡緑色を呈する。松葉文を施す。高台削り出しで、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。砂目積み。

ＳＴ－２　第20図

調査区１区上段での検出である。北部をＳＤ－１に切られる。遺構上層部第Ⅱ層からは川原石が多数出土した。平面形は隅丸の長方形で、長さ1.25m、幅0.9m、深さ50cmを測る。埋土は灰褐色土である。遺物は、柾目木取りの桶材が基底面北部で出土した。桶棺を横転させての埋葬である。







第20図　ＳＴ－１・２平断面図・遺物実測図

ＳＴ－３・４・５　第21図・図版11・12・30

調査区１区上段での検出である。埋葬主体を溝状堀り方より３基検出。堀り方は東西方向に全長3.8m、最大幅1.6mを測る。完掘には至らず深さは80cm＋α。封土には地山土の攪はんされた粘性土を用い、３基とも桶棺を横転させての埋葬である。

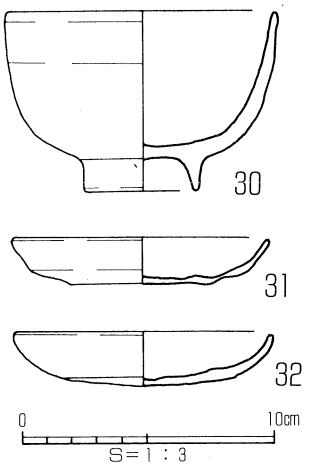
ＳＴ－３は、溝状堀り方の西より検出。平面形は長方形で、長さ95cm、幅75cm、深さ45cmを測る。３基の内では浅いもので、埋土は灰茶褐色土である。埋土中層位より副装品の陶器碗と漆器片が重なった状態で、また基底面より骨片が出土した。

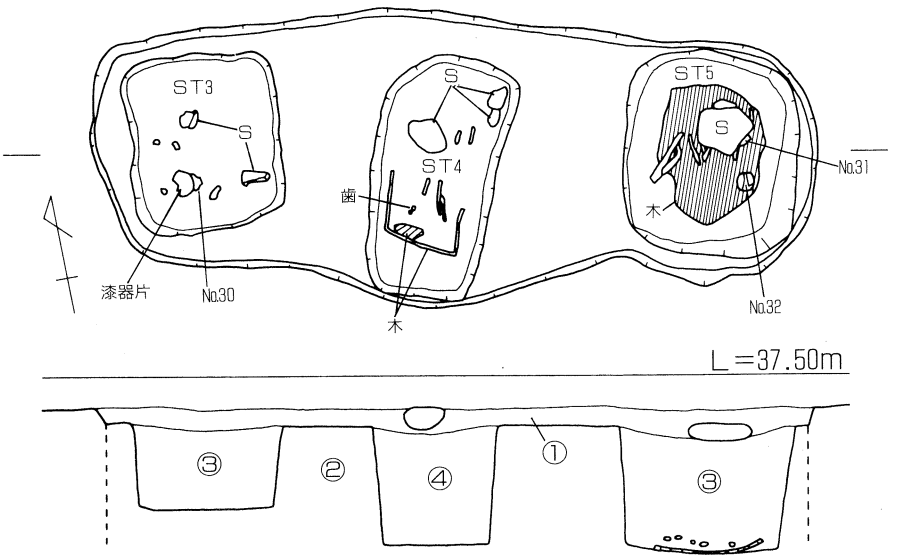
陶器　碗（30）　口径10.7cm、器高7.1cm、底径4.8cm。釉調は黄褐色を呈し、高台施釉。

ＳＴ－４は、溝状堀り方の中央部より検出。主体部上層封土中に墓標と思われる円礫を確認。平面形はほぼ長方形で、長さ1.3m、幅65cm、深さ60cmを測る。埋土は、灰茶褐色土（黄色混じり）である。遺物は、歯２点と桶棺材が基底面より出土したが、副装品は未確認である。

ＳＴ－５は、溝状堀り方の東より検出。封土中に墓標と思われる円礫を確認。平面形は長方形で、長さ1.1m、幅90cm、深さ70cmを測る。埋土は灰茶褐色土。遺物は、桶棺材と副装品である土師器皿が出土した。

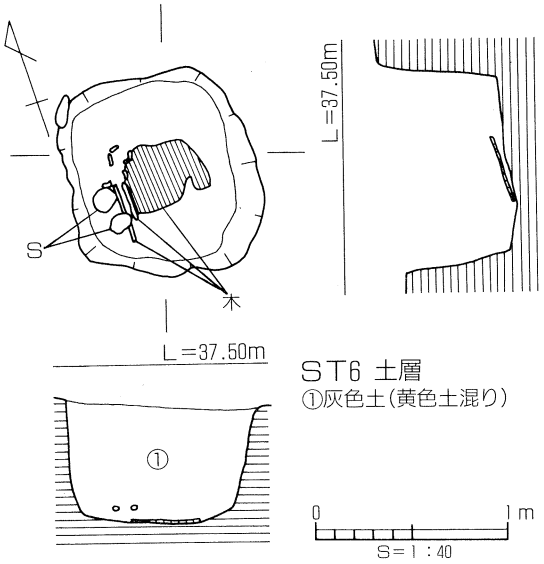
土師器　皿（31・32）　口径約10cm、器高約２cm、底径５～６cmを測る。31が底部との境に段が付くのに対し、32は丸みを帯びる。底部は回転糸切り離し調整。





ＳＴ3･4･5土層　①黄褐色粘性土　②黄褐色粘性土＋灰色土
③灰茶褐色土　④灰茶褐色土（黄色土粒まじり）　0　1m　S＝1：40

第21図　ＳＴ－３・４・５平断面図・遺物実測図



第22図　ＳＴ－６平断面図

ＳＴ－６　第22図・図版12

調査区１区上段での検出で、南部をＳＤ－１に切られる。平面形は方形で、長さ1.05ｍ、幅95cm、深さ60cmを測る。埋土は灰色土（黄色土粒状混じり）である。遺物は副装品の漆器片と柾目木取りの桶材が出土した。桶棺を横転させての埋葬である。

ＳＴ－７　第23図

調査区１区上段での検出で、ＳＤ－１に切られる。平面形は上端で楕円形を呈し、下端は方形で、長さ60cm、幅50cm、深さ15cmを測り、検出墓壙中では最小規模である。埋土は灰褐色土である。遺物は埋土中より桶棺材と思われる木片が数点検出された。

ＳＴ－８　第23図・図版30

調査区１区上段での検出で、ＳＤ－１に切られ、ＳＴ－９、10を切る。平面形は、楕円形で長さ1.6ｍ、幅1.0ｍ、深さ20cmを測る。埋土は暗茶褐色土である。遺物は副装品の陶磁器の皿と骨片が埋土中より出土したが桶材は検出されなかった。

白磁　皿（33）口径14.2cm、器高3.3cm、底径8.1cmを測る。胎土は精良で、釉調は乳白色を呈し高台は施釉する。

陶器　皿（34・35）34は口径14.2cm、器高3.2cm、底径4.5cmを測る。胎土は精良で淡橙色。釉調は焼成不良のためか、乳白色を呈す。溝縁の段皿。高台は削り出し、砂目積み焼成。35は口径13.5cm、器高３cm、底径５cmを測る。釉調は淡緑色を呈する。溝縁の段皿。

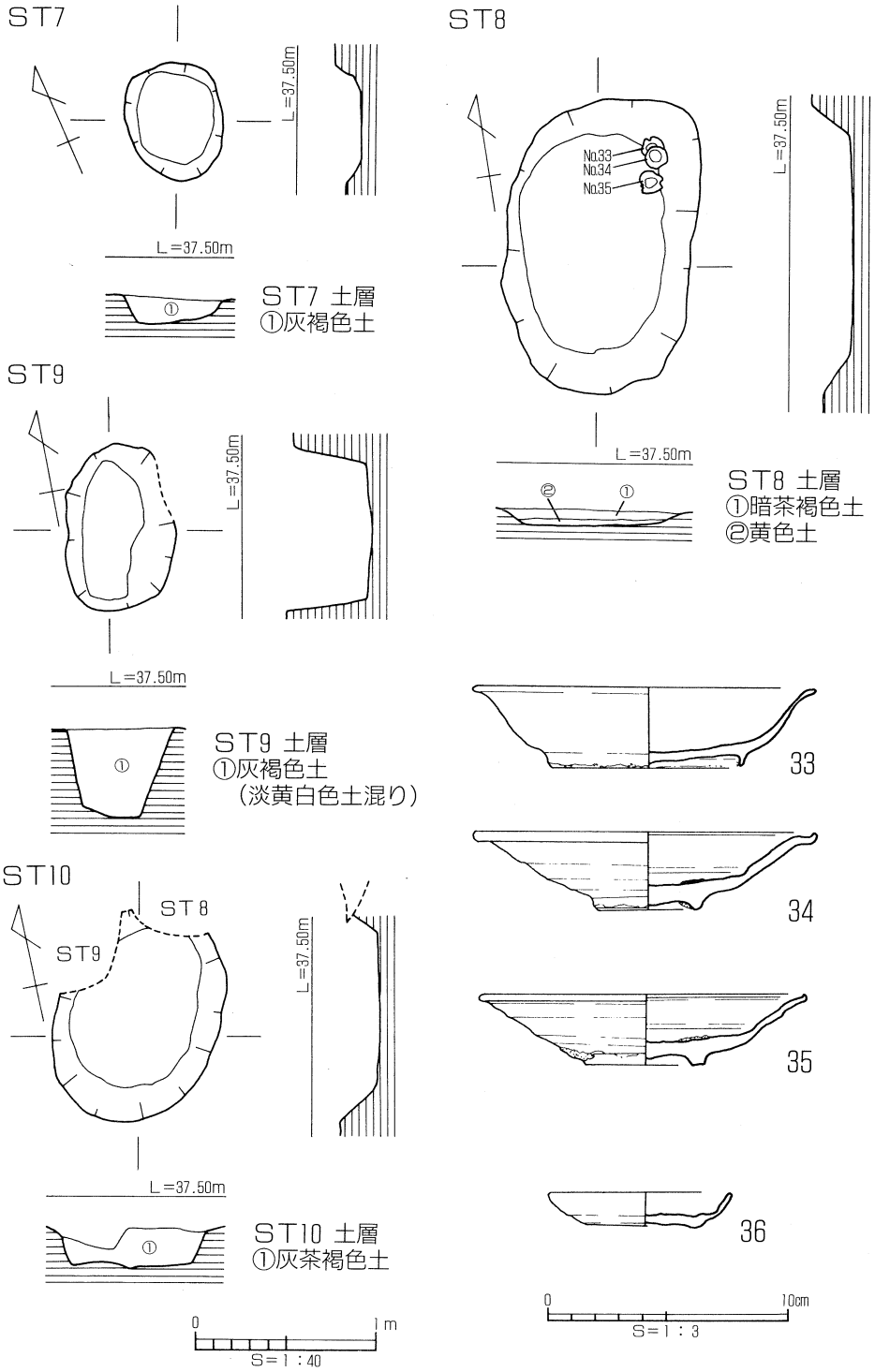
ＳＴ－９　第23図

調査区１区上段での検出でＳＤ－１及び、ＳＴ－８に切られる。平面形は不整長方形。長さ90cm、幅60cm、深さ50cmを測る。埋土は灰褐色土である。遺物は副装品の土師器皿と骨片が埋土中より出土したが、桶材は検出されなかった。

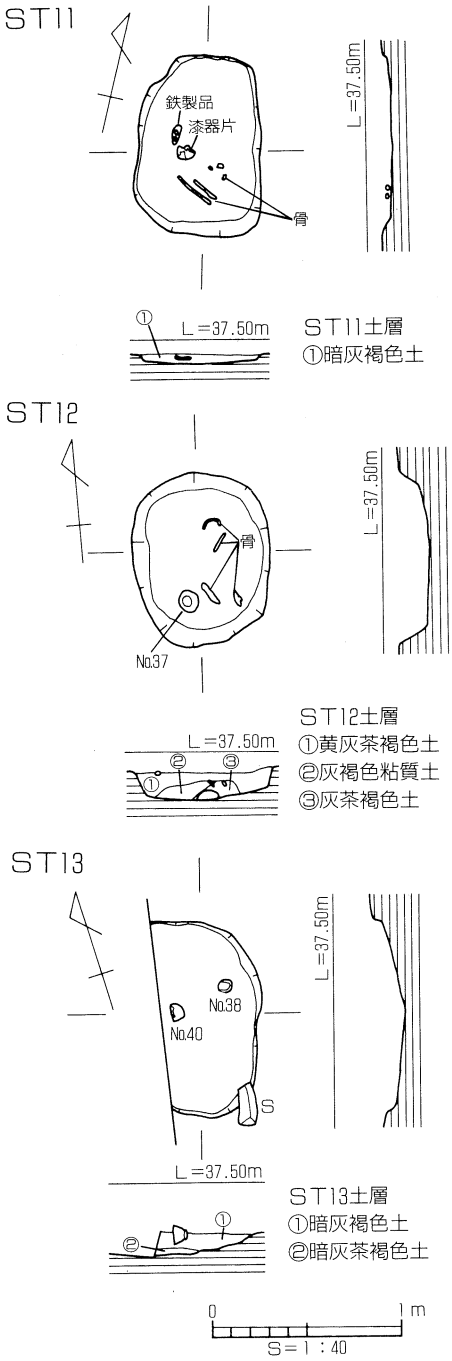
土師器　皿（36）口径7.5cm、器高1.4cm、底径５cmを測る。底部との境に段が付き口縁部は外方に開く。全体に摩滅しており調整などは不明。

ＳＴ－10　第23図

調査区１区上段での検出でＳＤ－１及びＳＴ－８、９に切られる。平面形は楕円形で、長さ1.1ｍ、幅90cm、深さ20cmを測る。灰褐色の埋土中より不明銅製品が検出された。



第23図　ST－7・8・9・10平断面図・遺物実測図



第24図　ST－11・12・13平断面図

ＳＴ－11　第24・25図・図13

調査区２区上段での検出である。遺構上部は、耕地整備等でかなり削平を受けている。平面形は不整長方形で長さ96cm、幅64cm、深さ６cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。副装品と思われる漆器片の他不明鉄製品、歯、骨片が出土した。

ＳＴ－12　第24・25図・図版13・31

調査区２区上段での検出である。平面形は円形を呈する。長さ0.9m、幅0.7m、深さ15cmを測る。埋土は黄灰茶褐色土である。遺物は副装品の土師皿、古銭（寛永通寶５枚）、漆器片、骨片が出土した。

土師器　皿（37）口径9.6cm、器高２cm、底径5.4cmを測る。平底の底部より口縁は外方に開く。摩滅しており底部の調整は不明。内面はヨコナデ調整を施す。

ＳＴ－13　第24・25図・図版14・30

調査区２区上段での検出で、ＳＤ－１に切られる。平面形は楕円形を呈する。長さ1.0m、幅0.7m、深さ13cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。遺物は副装品の陶器小杯、碗、鉄釘が出土した。

陶器　小杯（38・39）　口径8.4～8.7cm、器高３cm、底径３cmを測る。胎土は細砂粒を多く含む。釉調は灰オリーブを呈す。底部は回転糸切り離し調整。口縁は内湾気味に開く。

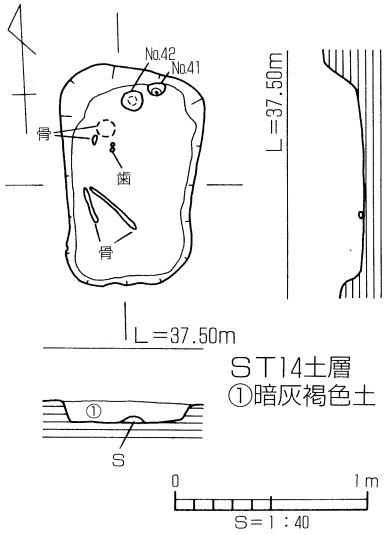
陶器　碗（40）　口径10.7cm、器高6.3cm、底径4.6cmを測る。胎土は精良で橙褐色を呈す。釉調は焼成不良のためか暗オリーブ色を呈す。高台は削り出し。

ＳＴ－14　第25図・図版14・30

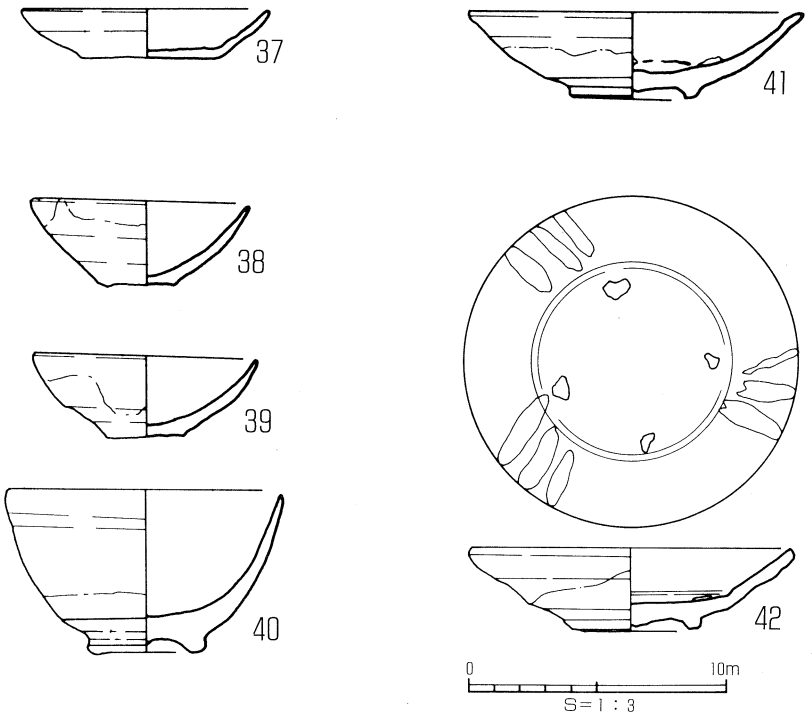
調査区２区上段での検出で、ＳＤ－１に切られる。平面形は長方形を呈する。長さ1.1m、

幅0.6m、深さ15cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。遺物は副装品の陶器皿、骨片、歯が出土した。

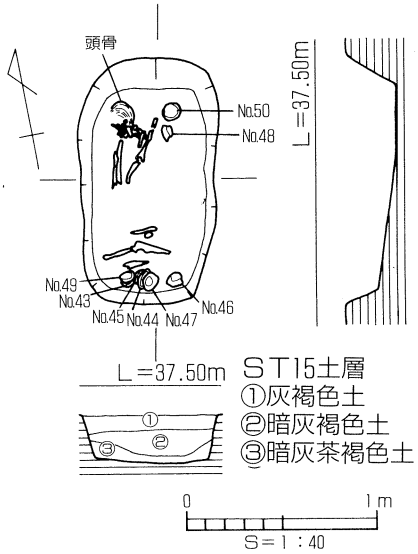
陶器　皿（41・42）口径12.5～13cm、器高3.6～3.8cm、底径5.6～6.2cmを測る。41は胎土精良で釉調は淡緑色を呈す。口縁は肥厚し外反する。高台は削り出し。胎土目積み焼成。42は胎土は精良で、釉調は淡黄色を呈す。段皿で内面に文様を施す。高台削り出し。胎土目積み焼成である。



ST14平断面図



第25図　ST－14平断面図・ST－12・13・14遺物実測図



第26図　ＳＴ－15平断面図

ＳＴ－15　第26・27図・図版15・32

調査区２区上段での検出である。平面形は長方形で、長さ1.3m、幅0.7m、深さ25cmを測る。埋土は暗灰色土（黄色少量混じる）である。遺物は骨片、歯、副装品の土師器杯、皿が出土した。

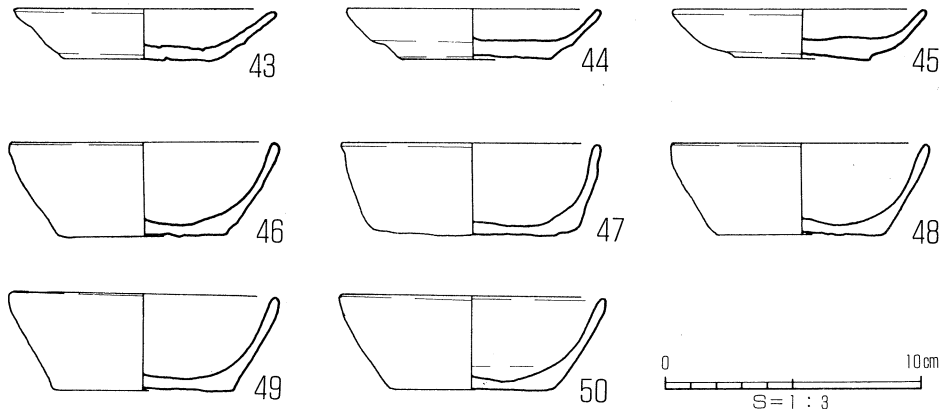
土師器　皿（43～45）　口径約10cm、器高約２cm、底径5.6～6.2cmを測る。43はヘラ切り調整の後に板目圧痕がみられる。口縁端は外反させ尖らせる。44は底部との境に段が付く。45は内湾気味。この２点は底部回転糸切り離し調整を行っている。

土師器　坏（46～50）　口径10～10.4cm器高3.6～3.8cm、底径6.5～8.0cmを測る。47は底部が広く口縁は直立気味に立ち上がる。46・48～50は口縁が内湾気味に開く。粘土紐巻き上げ成形で、底部ヘラ切り離し調整を行っている。

ＳＴ－16　第28図・図16・31

調査区１区中段での検出で、ＳＤ－20に切られる。平面形は長方形で、長さ1.0m、幅0.6m、深さ15cmを測る。埋土は暗灰茶褐色土である。遺物は副装品の陶器碗、小碗、小皿が出土した。

陶器　小皿（51・52・54）54は口縁10.9cm、器高３cm、底径3.6cmを測る。胎土精良。釉調は灰白色を呈す。底部削り出し調整。胎土目積み。51・52は口径10.2～10.6cm、器高3.7cm、底径４cmを測る。胎土は精良で褐色。釉調は灰オリーブ色を呈す。口縁は内湾気味に伸びる。



第27図　ＳＴ－15遺物実測図

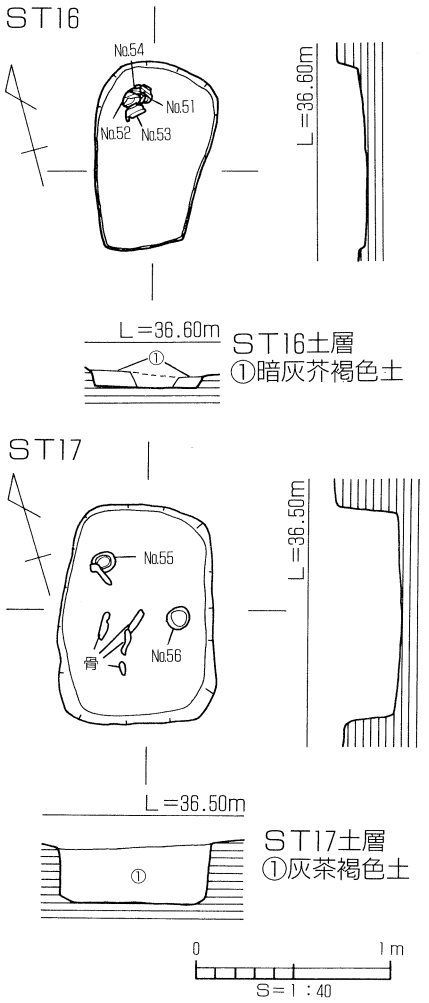
高台は削り出し。

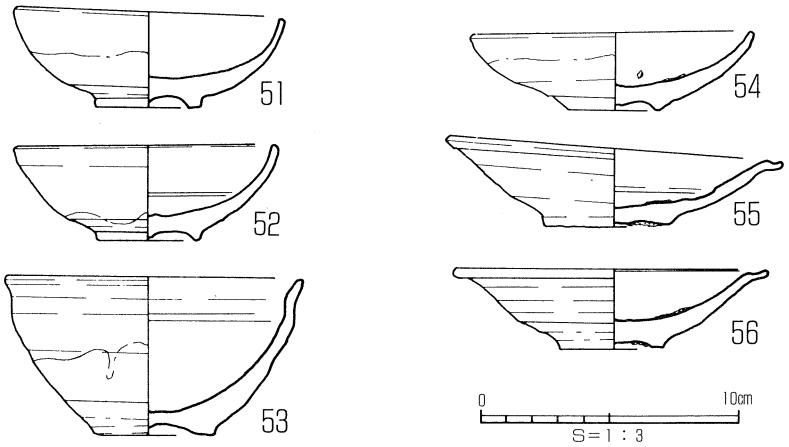
陶器　碗（53）口径11.5cm、器高6.1cm、底径4.7cmを測る。胎土精良。釉調は緑褐色を呈する天目茶碗で、露胎が見られる。やや丸みを帯びた体部から口縁部で段を付け外反させる。高台は削り出し。

ＳＴ－17　第28図・図版16・30

調査区１区中段での検出で、ＳＤ－20に切られる。平面形は長方形で、長さ1.0m、幅0.8m、深さ30cmを測る。埋土は灰茶褐色である。遺物は副装品の陶器皿、骨片が出土した。

陶器　皿（55・56）56は口径12.1cm、器高3.1cm、底径4.1cmを測る。胎土精良。釉調は焼成不良のためか灰緑色を呈す。溝縁皿。高台は削り出し。砂目積み。55は口径13cm、器高３cm、底径4.8cmを測る。胎土精良。釉調は焼成不良のためか灰緑色を呈す。溝縁の段皿。高台は回転糸切り離し調整を行った後、削り出すが簡略している。砂目積み。





第28図　ＳＴ－16・17平断面図・遺物実測図

ＳＴ－18　第29図・図版17

調査区１区中段での検出で、ＳＤ－20に切られる。平面形は長方形で、長さ1.0m、幅0.7m、深さ13cmを測る。埋土は黄灰茶褐色土である。遺物は副装品の陶器皿、骨片、歯が出土した。

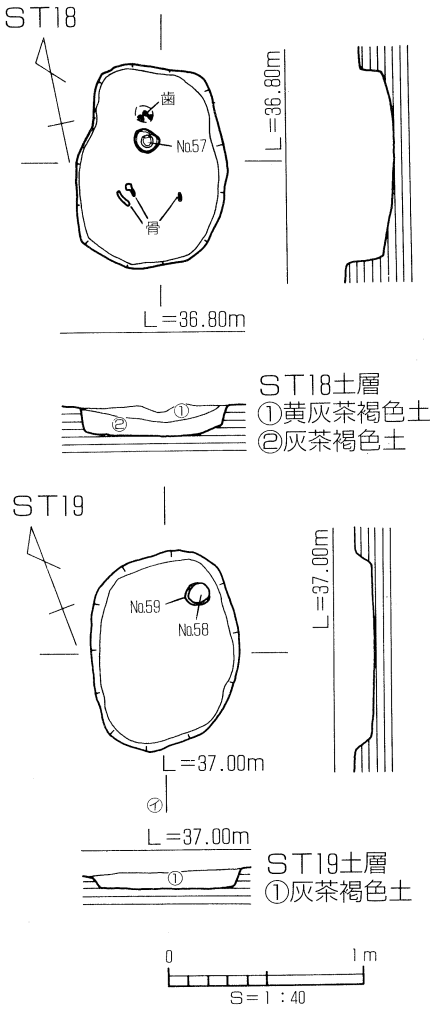
陶器　皿（57）　口径12.6cm、器高3.1cm、底径5.1cmを測る。釉調は焼成不良のためか灰白色を呈す。溝縁。高台は雑な削り出し。砂目積み。

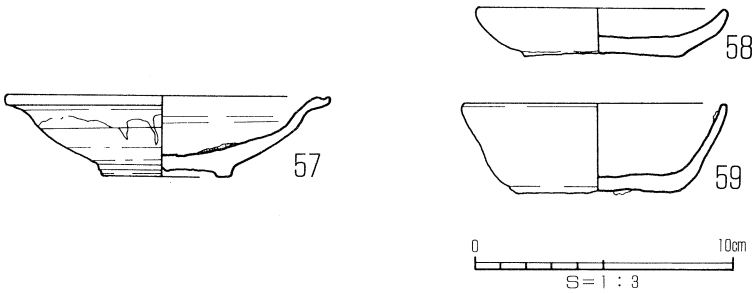
ＳＴ－19　第29図・図版17

調査区１区中段での検出で、ＳＤ－20に切られる。平面形は楕円形で、長さ1.0m、幅0.7m、深さ10cmを測る。埋土は灰茶褐色土である。遺物は副装品の土師椀、皿が出土した。

土師器　皿（58）口径9.6cm、器高1.8cm、底径６cmを測る。口縁は内湾気味に立ち上がり、底部は回転糸切り離し調整を行う。

土師器　坏（59）口径12cm、器高1.8cm、底径6.5cmを測る。口縁は外方に開く。底部は回転糸切り離し調整。





第29図　ＳＴ－18・19平断面図・遺物実測図

2）その他の土壙

ＳＫ－６　第30図・図版29

調査区東部４区上段地山面での検出である。周囲の溝、柱穴を切っている。北部が未調査の為全形は不明であるが、平面形は、不整形で長さ3.6m、幅1.5m、深さ７㎝を測る。埋土は灰色土である。

遺物は混入とみられる須恵器坏身片（60）、瓦質土器釜口縁片（61）、陶器片、近世瓦片が出土した。

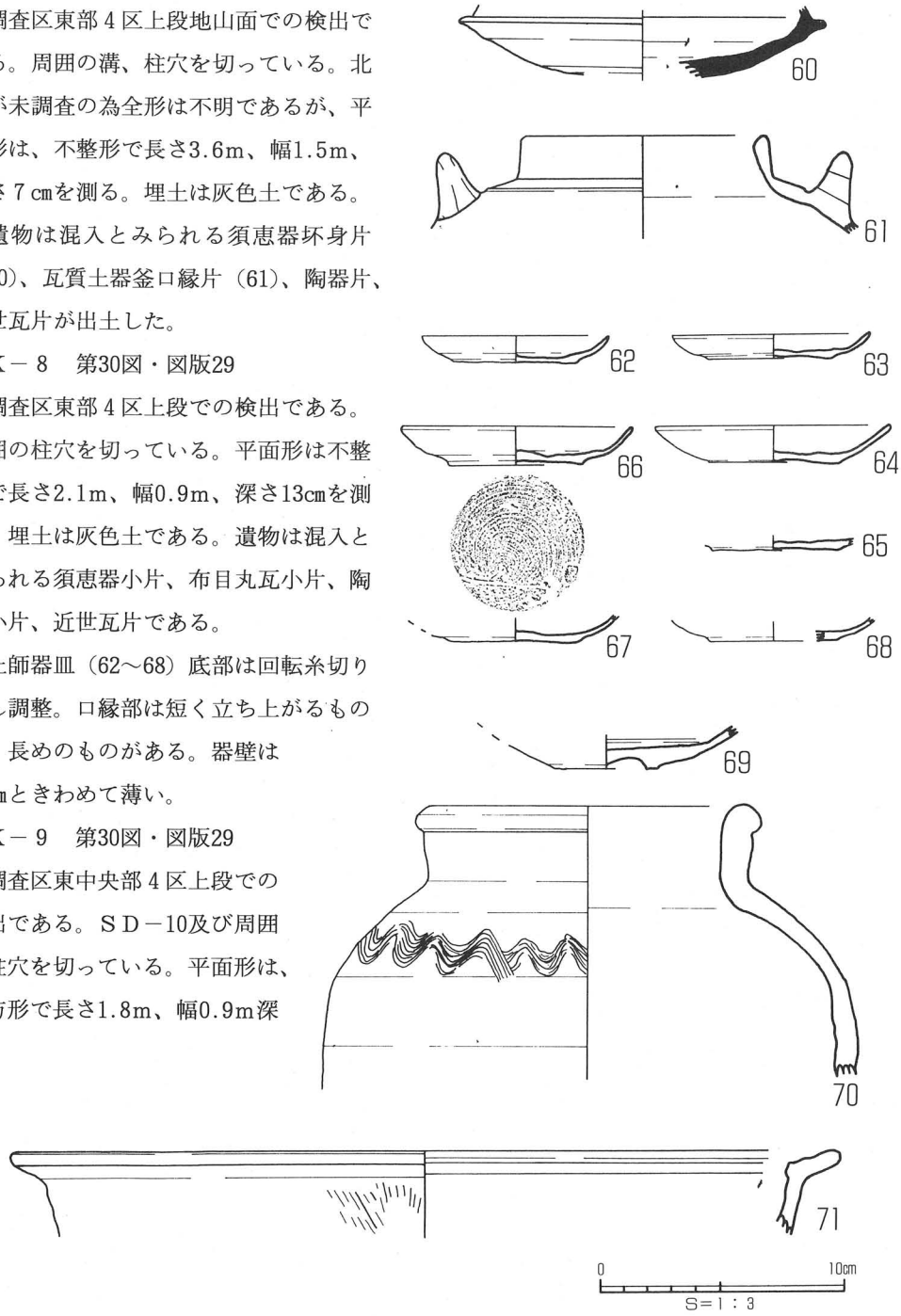
ＳＫ－８　第30図・図版29

調査区東部４区上段での検出である。周囲の柱穴を切っている。平面形は不整形で長さ2.1m、幅0.9m、深さ13㎝を測る。埋土は灰色土である。遺物は混入とみられる須恵器小片、布目丸瓦小片、陶器小片、近世瓦片である。

土師器皿（62～68）底部は回転糸切り離し調整。口縁部は短く立ち上がるものと、長めのものがある。器壁は２㎜ときわめて薄い。

ＳＫ－９　第30図・図版29

調査区東中央部４区上段での検出である。ＳＤ－10及び周囲の柱穴を切っている。平面形は、長方形で長さ1.8m、幅0.9m深



第30図　ＳＫ－６・８・９・16遺物実測図

さ14cmを測る。埋土は、暗灰褐色土で、陶器片が出土した。

陶器（69）皿底部は高台削り出し。釉調は淡黄緑色を呈す。段皿である。

ＳＫ－16　第30・31図・図版18・19

調査区東部４区中段での検出で、ＳＡ－２と周囲の柱穴を切る。平面形は、不整形な台形をなすものと思われる。長さ2.3m幅1.7m深さ29cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。

遺物は、混入とみられる軒丸瓦・土師器・陶器・石製品が礫石と混在して出土した。

備前焼（70）壺。直立する口縁は端部を玉縁状におさめる。肩部には６条１単位の波状文を施す。

土器師（71）鉢。口縁は貼り付けられ外方に開く。体部には刷毛目が若干みられる。

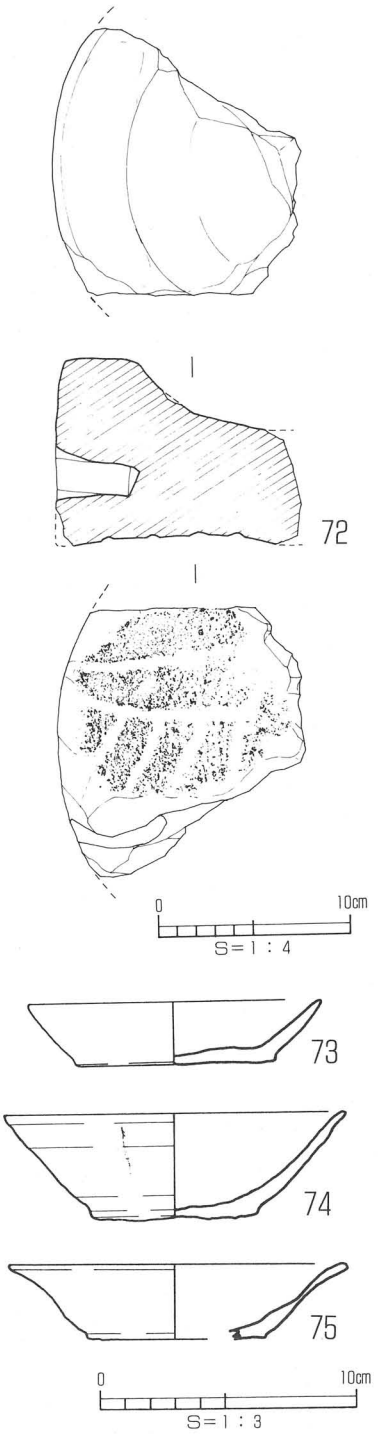
石臼片（72）上臼で挽木挿着孔はやや斜めに穿たれている。

ＳＫ－19　第31図・図版29

調査区４区中段での検出で、周囲の柱穴に切られる。平面形は円形で直径1.3m深さは最深部で30cmを測り、断面形はすり鉢状である。埋土は、暗灰褐色土に地山土の黄色粒が混ざるものである。出土遺物は土師器（73）坏。平底で口縁は外方に開く。マメツしており底部等の調整は不明。その他に布目丸瓦片が出土している。

ＳＫ－21　図版18・29

調査区３区中段でＳＤ－38に切られる。平面形は、残存部及び埋土の残存範囲から不整方形であると思われ、長さ４ｍ、幅２ｍ、深さ13cmを測る。埋土は、暗褐色土である。遺物は、埋土上層から出土している。須恵器坏（74）。底部は円盤高台状で回転ヘラ切り離し調整。口縁は外方に開き、端部はヨコナデにより外反する。火だすきがみられる。土師器（75）坏は底部平底。口縁は外反し開く。摩滅が著しく調

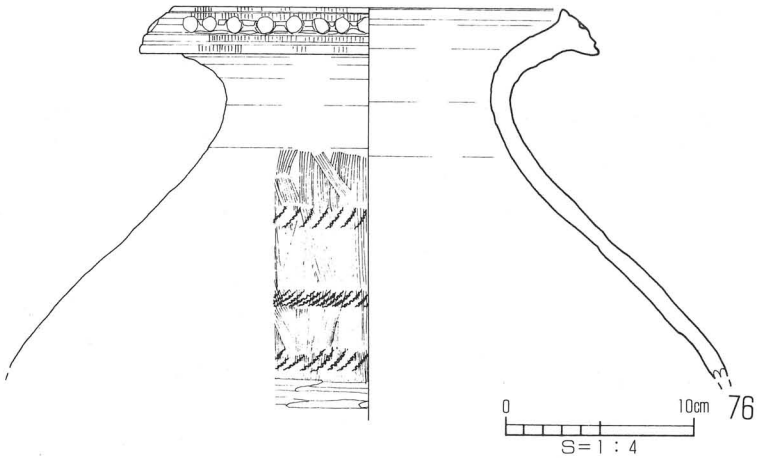


第31図　ＳＫ－16・19遺物実測図

整は不明。その他に軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦。埋土下層より布目瓦片が出土している。

ＳＫ－22　第32図・図版29

調査区南西部１区下段での検出である。東部を未調査ではあるが、平面形は方形と思われ南北2.2m東西0.9m分深さ４ｍを測る。埋土は黒色土である。遺物は弥生土器が出土した。弥生土器（76）壺は、口端部を上下方向に大きく拡張し、端面には４条の凹線を巡らせ、さらに凹線間の凸部を細かく刻み円形浮文を貼付けている。肩部は二枚貝の腹縁を用いて「ノ」の字状列点文を３条施している。調整は、外面胴上位は縦刷毛目、中位は横方向へのヘラ磨きを施している。



第32図　ＳＫ－22遺物実測図

３）土器溜り　第33図・図版19・20

調査区西南部１区下段での検出である。土器分布範囲は南北7.5m、東西６ｍ、深さ35cmを測る範囲に分布していた。埋土は黒色土である。基底面は凹凸が激しく、図示していないが北側肩部より南部方向へ浸食された何条かの浅い溝が見られるもので、旧地山面の窪地に土器が堆積したと考えられる。遺物は、ほぼ完型に近い１点を含む弥生土器と10～20cm大の川原石が出土した。

弥生土器　第34・35図・図版33・34

遺物取り上げ時に１～48までのNo.を与えた。洗浄作業後、自然石が10点含まれていることがわかった。甕と壺の出土量の割合は１対３になり、そのほかの器種はみられなかった。

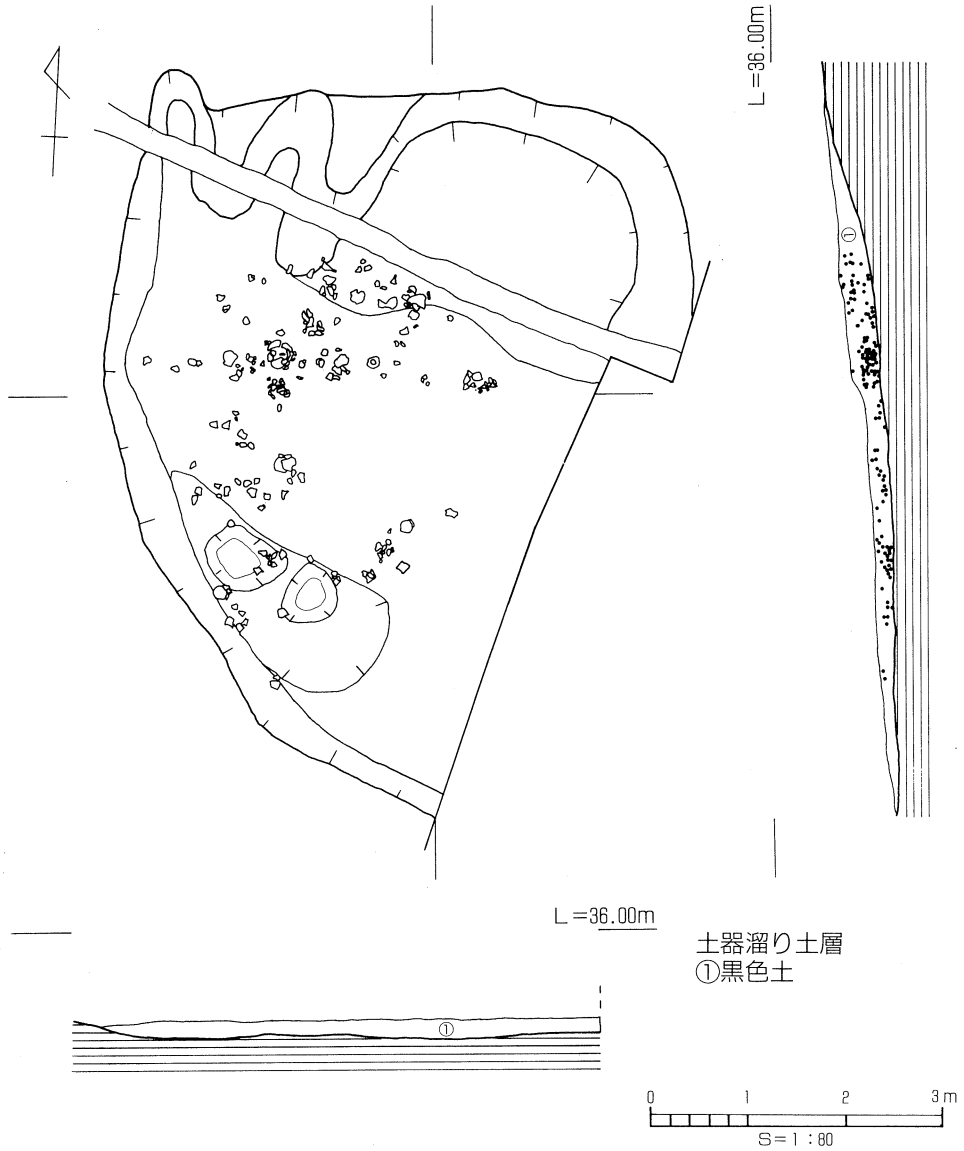
甕形土器（77～80）

77は口縁に断面三角形の凸帯を貼り付けたものである。体部はやや張り出す。口縁下には櫛状工具による沈線文10条と刺突文１条を巡らす。79は口縁端面を指で押圧させたもので、

口縁下には刷毛状工具による沈線文を施している。78は口縁を折り曲げており、体部は張り出さない、80は平底である。

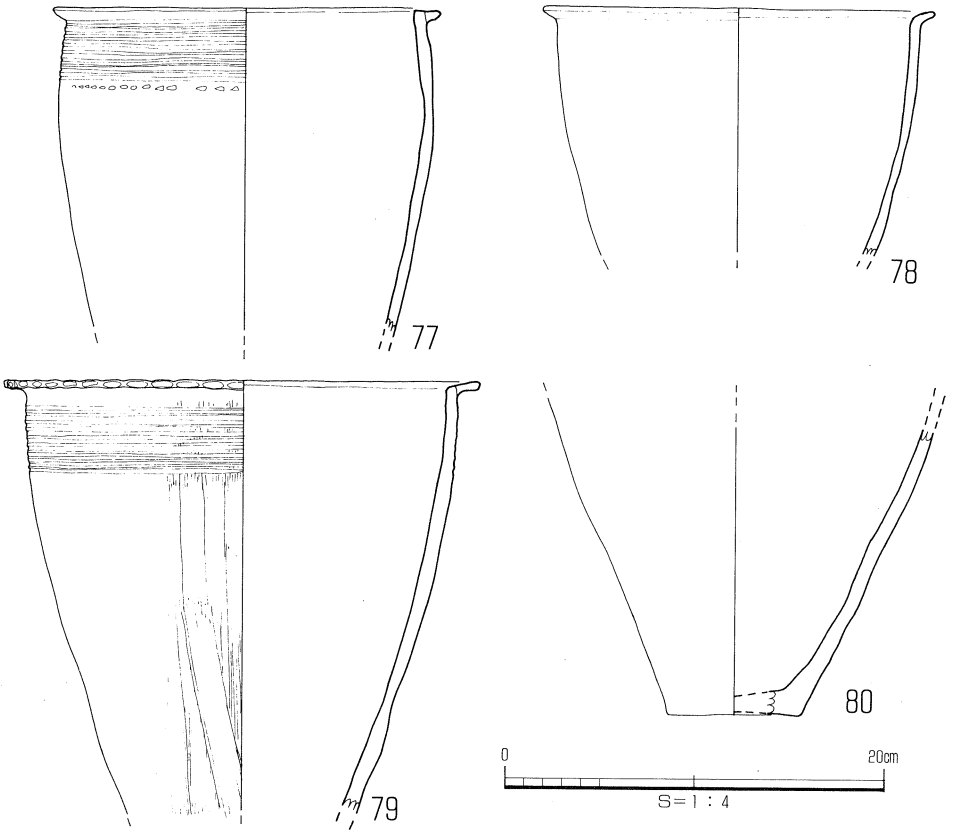
壺形土器（466～473）

81は頸部より直立気味に立ち上がり口縁は外方に開く。口縁端を強くヨコナデし平坦におさめる。頸部にはヘラ状工具による沈線文を２条巡らす。内面にはヘラ磨きを施している。82の口縁は若干丸みをもっており、頸部には５条の沈線文を巡らす。83の口縁は直立する頸

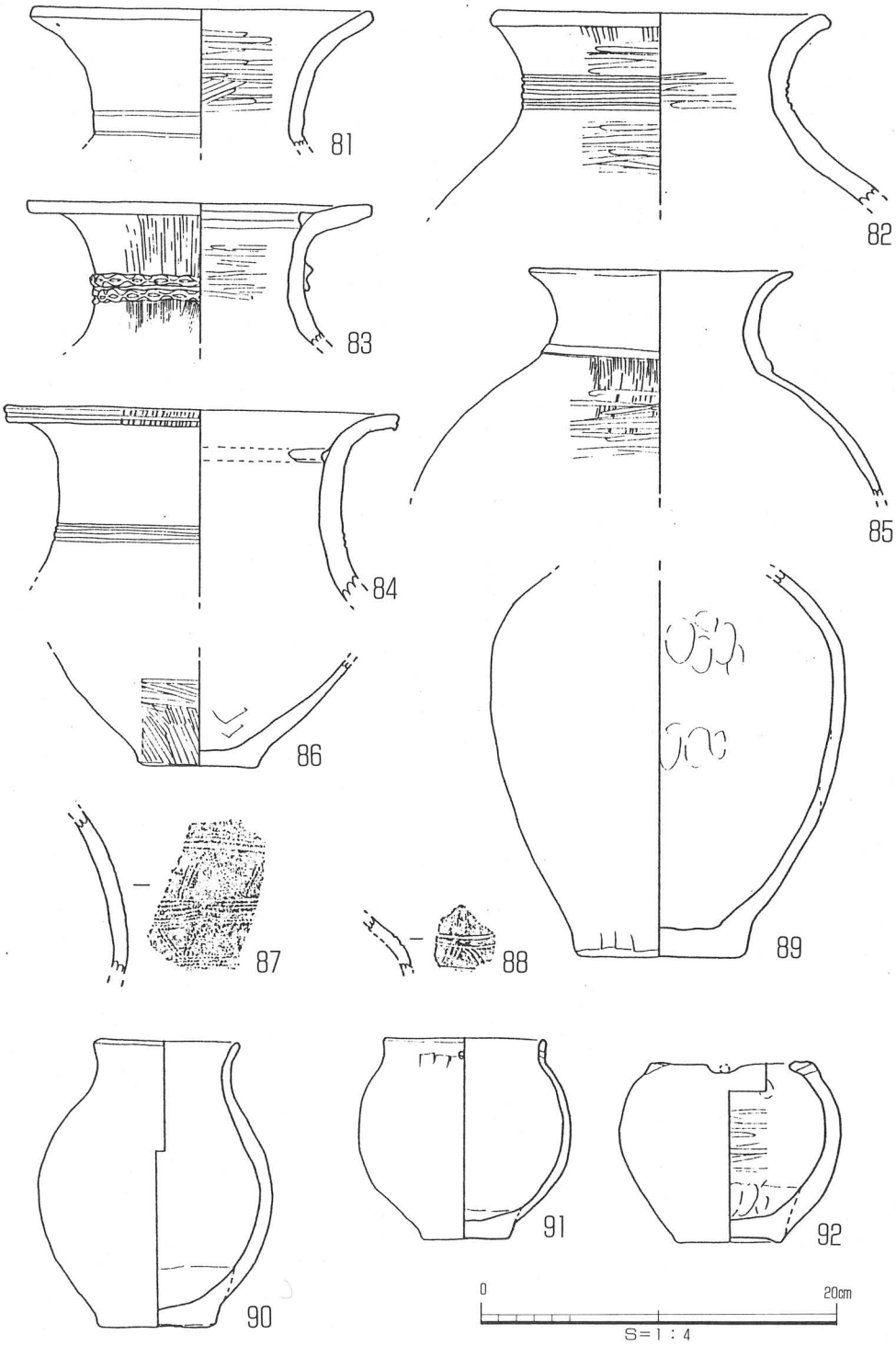


第33図　１区下段土器溜まり平面図

部より水平に伸びる。内面には断面三角形の凸帯を張り付ける。頸部には断面M字状の凸帯を指頭押圧した後、ヘラ状工具で刺突文を施す。85は頸部より内傾したのち口縁で外反する。口縁端は丸くおさめる。頸部は削り出し凸帯。84は直立ぎみに伸び口縁は外反する端面を平坦に仕上げヘラ状工具による斜線文を施した後沈線を１条巡らせる。頸部にも沈線を施しており凸帯を貼り付けた痕が観察できる。86は平底の底部より体部は外方に開きながら伸びる。外面調整は刷毛目後ヘラ磨きを施す。87は貝殻によって、88はヘラ状工具によって山形文を施している。89は円盤状の底部より体部は内湾しながら伸びる。胎土は灰白色を呈し粘土質で１～２㎜の角のとれた砂粒を含んでいる。90は短頸壺で口縁は外反する。91は口縁が短く直立し穿孔がみられる。胎土焼成などは89に似ている。92は無頸壺で口縁に２ヶ所穿孔がみられ、底部は若干上げ底になる。



第34図　土器溜まり出土遺物実測図(1)



第35図　土器溜まり出土遺物実測図(2)

〔4〕3区下段地区

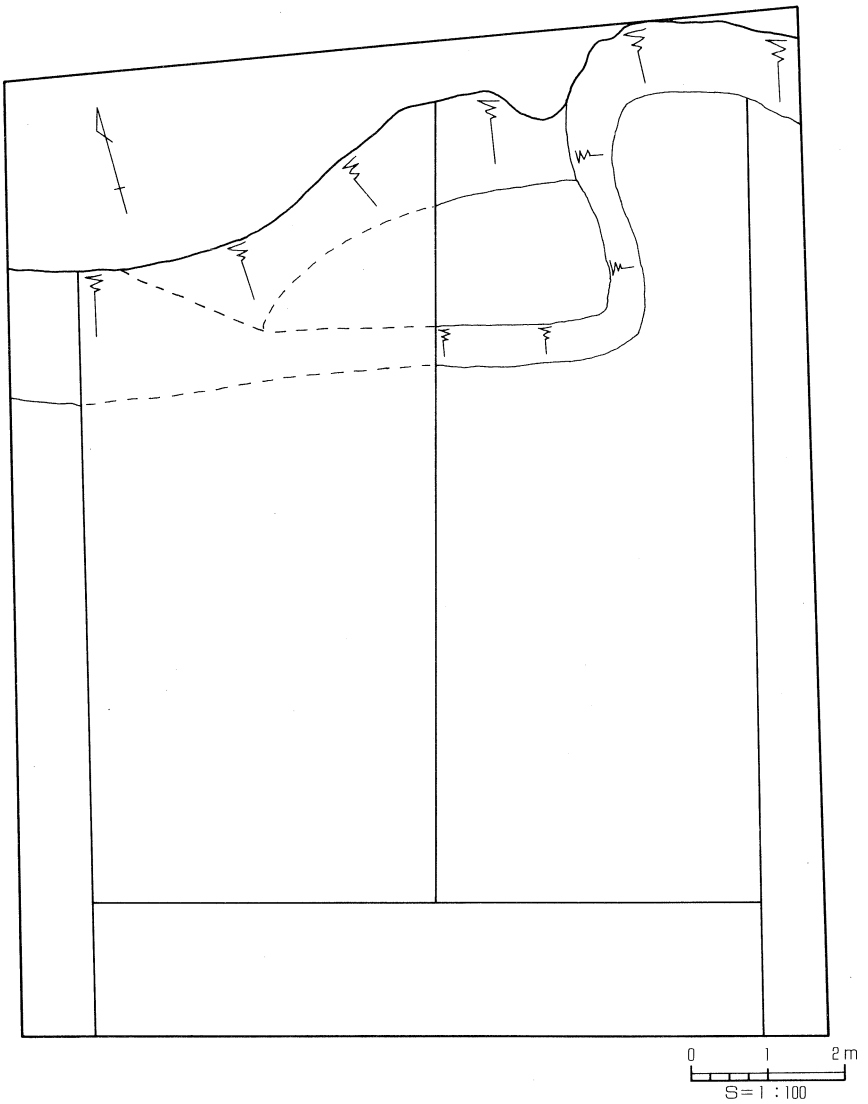
3区下段地区は、調査地南中央部に位置する。国道建設による盛土を除去した耕作土上面での標高は35m前後を測り、本調査地に於いては一番低い位置である。

南北約13m、東西約10mの調査区を設定し、東端（東トレンチ）及び西端（西トレンチ）にトレンチを入れた結果、第Ⅳ層より下層にかけて、砂層と粘性土が互相になって堆積しており、各層とも検出された北部より急激に落ち込むことから、旧河川の北岸であると思われる。容器・下駄等の木製品、軒丸、平瓦、須恵器等の遺物が検出された為、第Ⅲ層までは重機により掘削を行い、第Ⅳ層からは人為で掘り下げ、遺物の検出に重点をおいて行った。調査期日が迫っていた為、調査区中央より西部は第Ⅴ層まで、東部は一部地山検出と第Ⅴ層までを調査した。

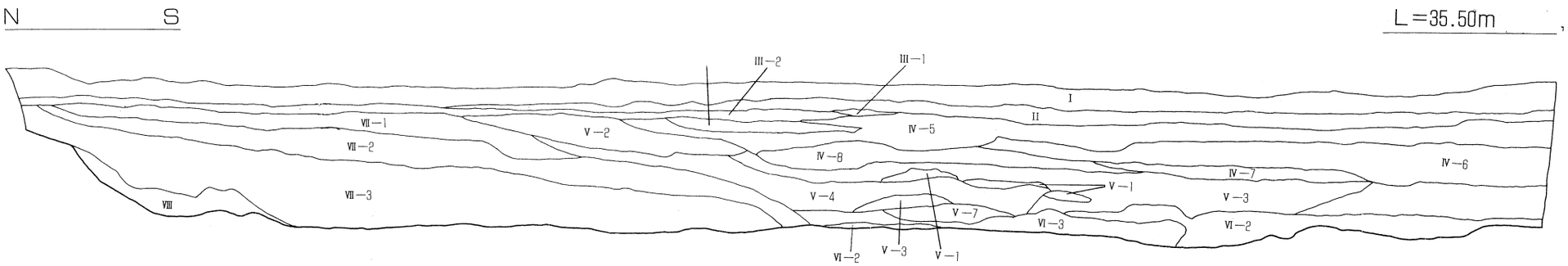
基本層位　基本層位は8層からの堆積である。第Ⅰ層灰色土、20～30cmの堆積が見られ整地前の耕作土である。第Ⅱ層暗灰色土、5～15cmの堆積が見られ耕作土床土である。第Ⅲ層は、Ⅲ－1層暗灰色土に砂が混るものと、Ⅲ－2層暗灰色土に礫が混るものとに分かれ、Ⅲ－1層は、東トレンチ中央一部で4cmの堆積、Ⅲ－2層は、調査区中央部迄で7～10cmの堆積である。第Ⅳ層は検出北部より急激に落ち込み、調査区中央部より南部では50～60cmの水平堆積である。Ⅳ－1層暗灰褐色粘質土、Ⅳ－2層黒灰色土、Ⅳ－3層灰黄色砂、Ⅳ－4層灰色砂、Ⅳ－5層暗灰色砂質土、Ⅳ－6層暗灰色粘質土、Ⅳ－7層暗灰色粘質土（砂混り）、Ⅳ－8層暗灰色砂質土、Ⅳ－9層黒色粘質土、Ⅳ－10層暗灰色微砂質土、Ⅳ－11層黒色粘質土（小礫混り）に細分される。第Ⅴ層は第Ⅳ層の基調色より黒味を増し、第Ⅳ層と同様な落ち込みを見るもので、調査区中央部が最深部となり南寄りへ少し上がるものの、32～55cmの水平堆積である。Ⅴ－1層明灰色微砂、Ⅴ－2層黒灰色土（砂混り）、Ⅴ－3層暗灰色粘質土、Ⅴ－4層黒色粘質土（砂少量混り）、Ⅴ－5層黒褐色粘質土、Ⅴ－6層黒灰色砂質土、Ⅴ－7層黒灰色微粘性土に細分される。第Ⅵ層は、調査中央北寄りから南部に20～25cmの堆積である。Ⅳ－1層黒灰色粘性土、Ⅳ－2暗灰色微粘性土、Ⅳ－3黒灰色微粘性土、Ⅳ－4層暗灰色微砂質土、Ⅳ－5層暗灰色粘質土（白色粘土塊混り）に細分される。第Ⅶ層は、調査区中央部までに見られ、1mの堆積を見る部分もある。Ⅶ－1層黒色粘質土（小礫混り）、Ⅶ－2層黒色粘質土、Ⅶ－3層黒色微粘性土に分層される。第Ⅷ層は、調査区北部落ち込み部で見られ12～20cmの堆積である。

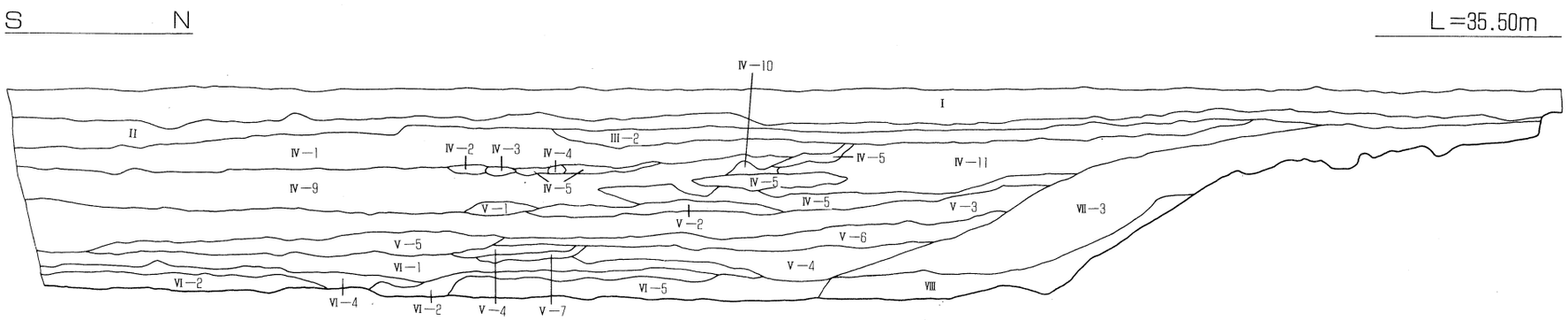
遺物出土状況　第Ⅰ層～第Ⅲ層は重機により掘削した為遺物の採集は殆どなされていないが、Ⅲ－2層中に、礫石に混り角が丸く摩滅した弥生、須恵器、布目瓦、土師器、陶器片が出土している。第Ⅳ層中には、須恵器、軒丸瓦（来住廃寺Ⅰ～Ⅴ型式・Ⅶ型式）及び平・丸瓦、黒色土器、土師器、瓦器（11～12世紀代）、種子（桃核等）が出土しており、落ち際での出土が多く見られた。第Ⅴ層中には、須恵器（6世紀後葉～7世紀前葉）、木製品（紡績具・建築部材等）、種子（桃核等）が混在して出土しており、収納箱に須恵器約22箱、木製品約9

箱分を数える。第Ⅵ層中はトレンチ内より弥生土器片（中期～後期）を検出した。第Ⅶ層中には、弥生土器（中期中葉～後葉）の壺・甕・高坏が一括出土した。完型の壺１点を含む32個体が復元されたもので出土状況から祭祇的な遺構の様相がうかがえるものであったが、遺構検出には至らなかった。第Ⅷ層中は西トレンチより弥生土器（中期）１点を検出した。

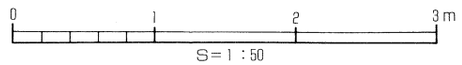


第36図　３区下段地区平面図





I	灰色土	Ⅳ−1	暗灰褐色粘質土	Ⅴ−1	明灰色微砂	Ⅵ−1	黒灰色粘性土	Ⅶ−1	黒色粘質土(小礫混じり)
II	暗灰色土	Ⅳ−2	黒灰色土	Ⅴ−2	黒灰色土(砂混じり)	Ⅵ−2	暗灰色微粘性土	Ⅶ−2	黒色粘質土
Ⅲ−1	暗灰色土(砂混じり)	Ⅳ−3	灰黄色砂	Ⅴ−3	暗灰色粘質土	Ⅵ−3	黒灰色微粘性土	Ⅶ−3	黒色微粘性土
Ⅲ−2	暗灰色土(小礫混じり)	Ⅳ−4	灰色砂	Ⅴ−4	黒色粘質土	Ⅵ−4	暗灰色微砂質土	Ⅷ	黒灰色微粘性土
		Ⅳ−5	暗灰色砂質土	Ⅴ−5	黒褐色粘質土	Ⅵ−5	暗灰色粘質土		
		Ⅳ−6	暗灰色粘質土	Ⅴ−6	黒灰色砂質土				
		Ⅳ−7	暗灰色粘質土(砂混じり)	Ⅴ−7	黒灰色微粘性土				
		Ⅳ−8	暗灰色砂質土(こぶし大礫混じり)						
		Ⅳ−9	黒灰色砂質土						
		Ⅳ−10	暗灰色微砂質土						
		Ⅳ−11	黒色粘質土						



第37図　3区下段東壁土層図(上)・西壁土層図(下)

第38図　写真測量実測図(株式会社パスコ製作)　S＝1：50

第39図　測量用写真

N S
H=35.50m
III
I
II
VII
IV
V
VIII
VI

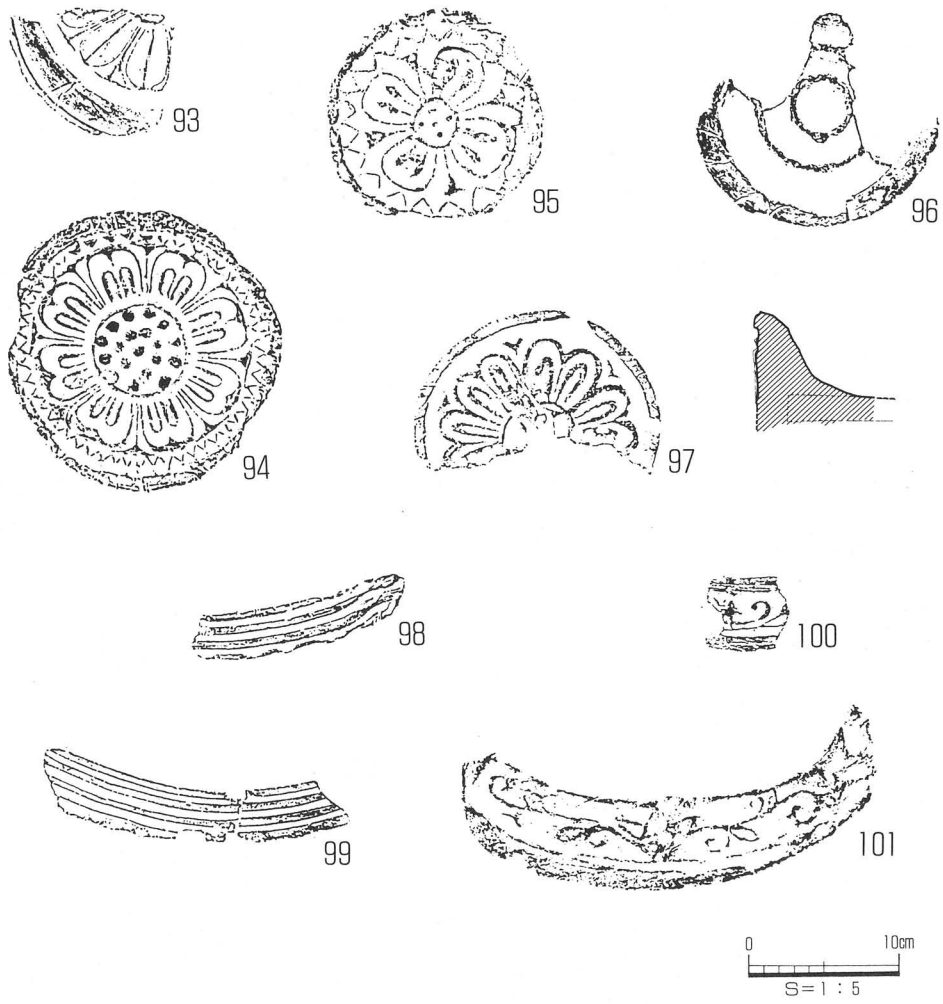
0
1
2m
S=1:100

第40図　瓦出土状況図

S N
H=35.50m
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII

出土瓦類

今回の調査区は旧堀越川河川敷にあたり、７世紀中～11世紀末にかけての瓦が出土した。これらは後世に投棄されたものと思われ、軒平瓦Ⅱｂ型１点を除き、過去の調査でも出土しているものである。その内訳は、軒丸瓦Ⅰ型式２点、Ⅱ型式４点、Ⅲ型式２点、Ⅳ型式１点、Ⅵ型式６点、軒平瓦Ⅱｂ型式１点、Ⅲ型式８点、Ⅳ型式５点、Ⅴ型式３点、Ⅵ型式３点、型式不明のもの２点、その他、多量の丸瓦、平瓦である。これらの55％は３区下段に集中している。瓦類の型式、及びその詳細についてはＰ．112を参照。



第41図　３区出土軒瓦

出土土製品

当地区ではⅣ層からⅧ層にわたって土製品が出土している。Ⅳ層では1～63までのNo.を付け取り上げを行った。その中には土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、弥生土器が含まれている。Ⅴ層とⅦ層で出土した遺物にはNo.64～168までを与え取り上げを行った。取り上げの時のNo.は観察表に記している。Ⅵ層は掘り下げを行っていない。Ⅶ層は土層観察用のサブトレンチ西壁より1点のみ取り上げている。以下、種類ごとに説明を記す。

土師器　第43・44図（102～130）・図版35～37・38

土師器はⅣ層からの出土である。ここでは30点を図化している。椀、杯、皿などの器種があり、中でも椀の点数が多く、その形態から2種類に分類することができた。各器種とも底部の調整は回転糸切り離しによるものであった。

椀（102～120）19点

椀には2種類ある。白色で高台は高く、内外面にヘラ磨きを施した精製品（102～112）と、橙褐色で高台が低く底部との境に指頭圧痕がみられる粗製品（113～119）である。

102は底部より外方に開き、口縁部は強いヨコナデにより外反する。高台はしっかりしたつくりで端部が屈曲する。内外面はヘラ磨きが粗雑に施されており内面底には放射状に工具の木口痕がつく。底部外面は回転糸切り離し（以下「糸切り」と言う。）である。104は102と同じタイプである。106は非常に器壁が薄く、内面のヘラ磨きは密に施されている。108の内面は刷毛状工具で調整した後、ヘラ磨きを施している。112は低い断面方形の高台を付す。外面は磨き、内面は丁寧に撫でている。

114は口縁が内椀ぎみに外方に開き、底部には断面方形の低い高台を張り付ける。磨きは施さない。120の高台は貼り付け時に粘土がはみ出したものとも考えられる。

杯（121～125）5点

121・122は糸切りの底部から立ち上がり、口縁が外方へ開くものである。121の口縁は丸くおさめ、122はやや尖らせる。123・124は底部糸切り、126は底部端を摘み出した様な形態である。125は須恵質の焼きで粘土紐巻き上げ成形されており、底部円盤状を呈する。

皿（127）1点

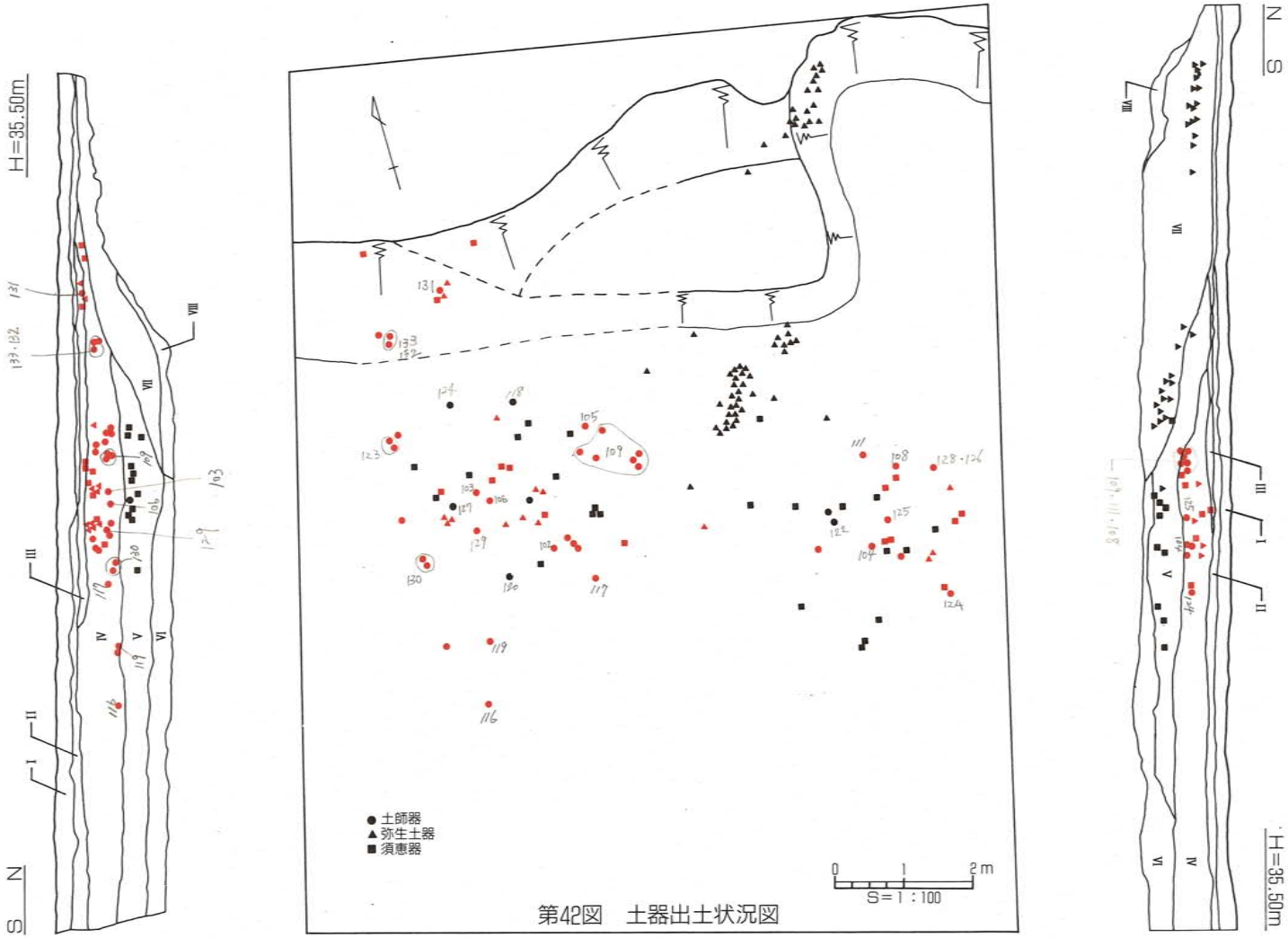
糸切りの底部より立ち上がり口縁は外方に開く。端部は肥厚させ丸くおさめる。

高足高台坏（128・129）2点

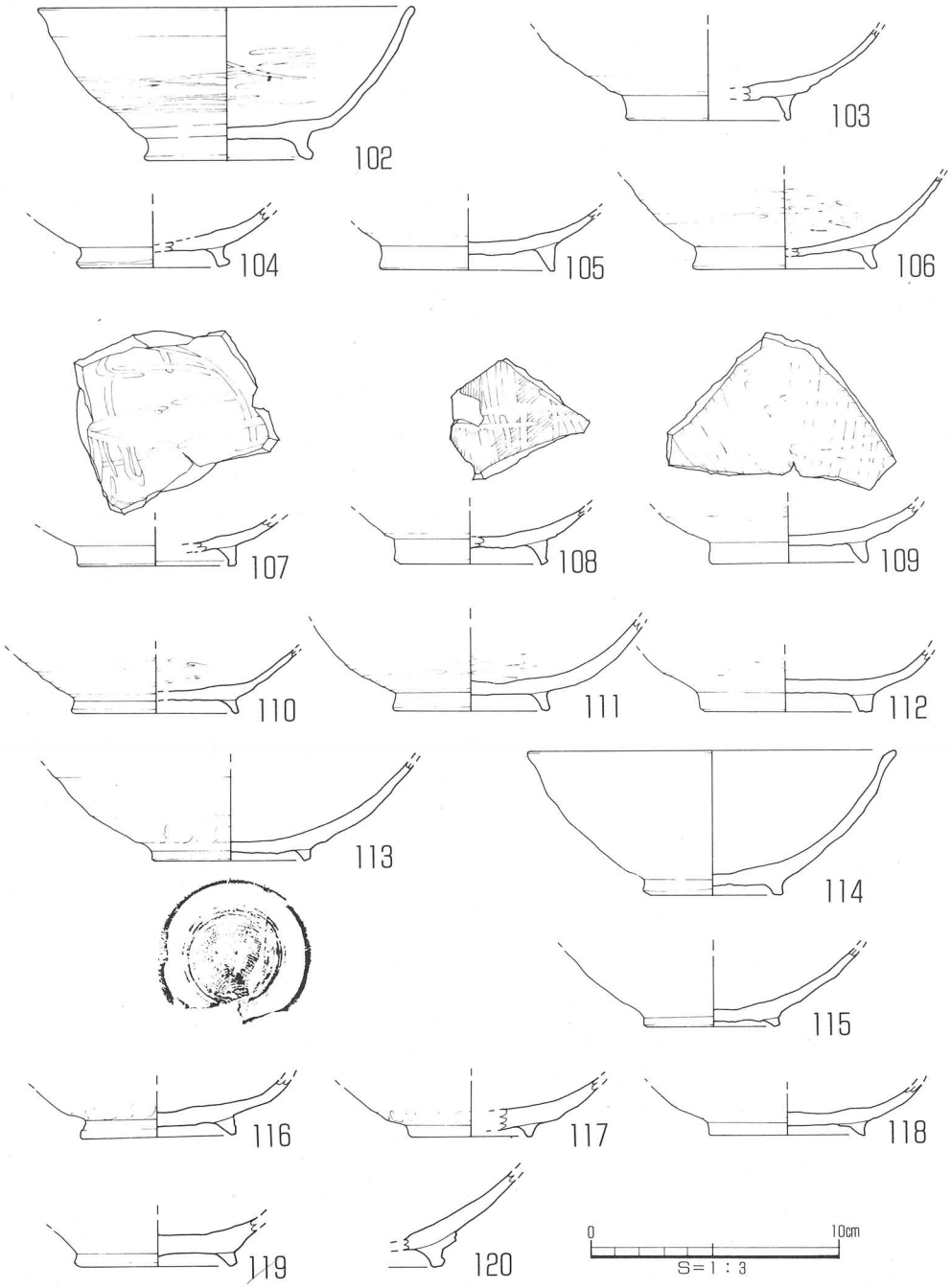
128・129は糸切りの底部から立ち上がり、一旦腰がくびれてから体部が大きく外方へ開くものである。

鉢（130）1点

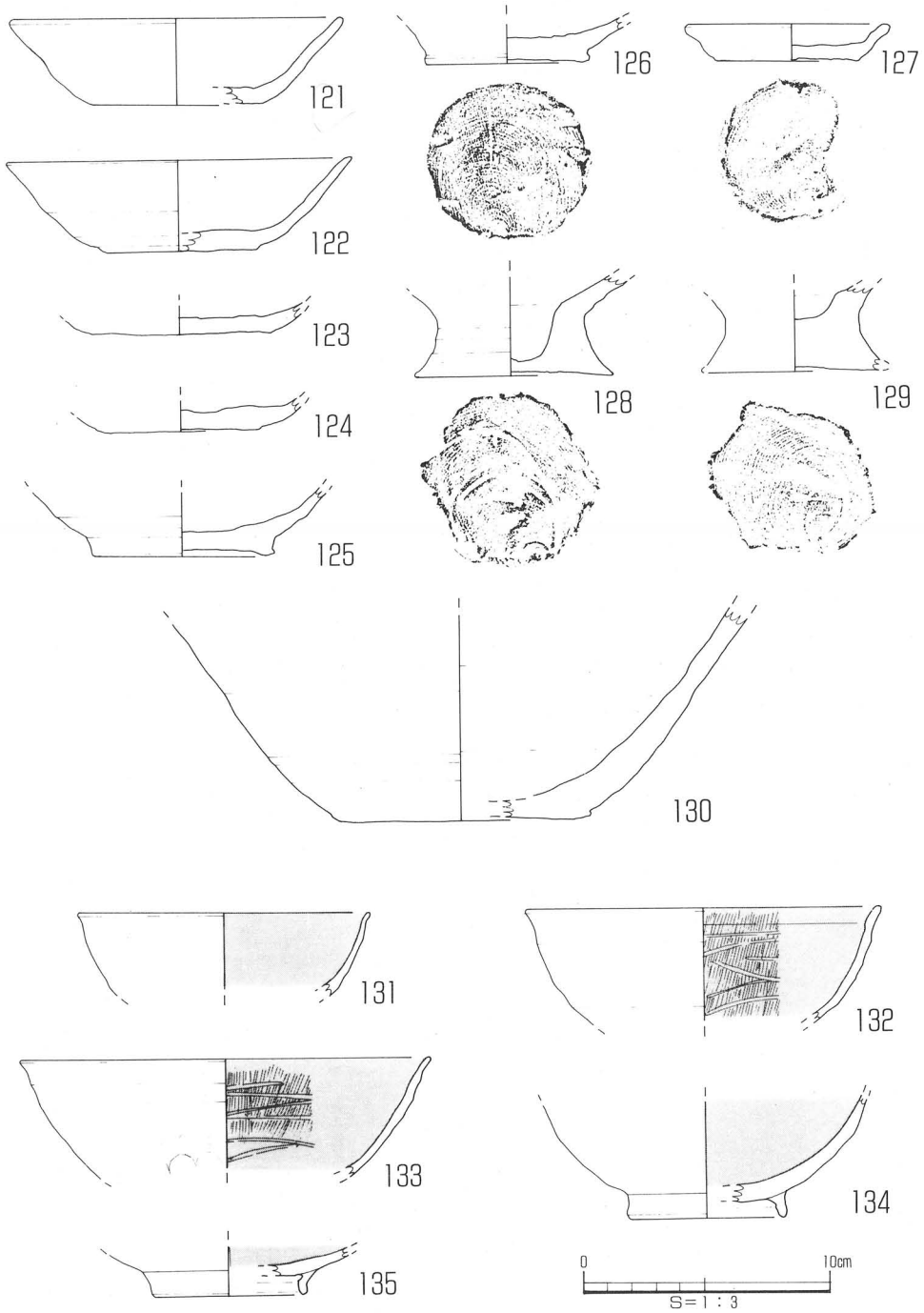
糸切りの底部より内湾ぎみに立ち上がり体部が外方に開く。土師質のこね鉢と思われる。



第42図　土器出土状況図



第43図　出土土器実測図(1)



第44図　出土土器実測図(2)

黒色土器　第44図（137～135）・図版38

黒色土器はⅣ層からの出土である。ここでは5点を図化している。内面を黒色に処理を施したA類で、量的に少なかった。

椀（131～135）

内湾しながら伸びた体部は口縁で外反する。132・133の内面は刷毛目調整を施したのち磨いている。134は「八」字に開く高台を付すもので、器面は荒れており調整は分かりにくい。135は内傾する高台を付している。内面はやはり刷毛目調整の後にヘラ磨きを施す。

瓦質土器

Ⅳ層から和泉型の椀が出土したが細片であるため、図化していない。

須恵器

須恵器はⅣ層とⅤ層で出土しているが、2層間には形式的な差がみられた。Ⅳ層では主に8世紀代の坏蓋や有高台坏身、高坏、甕など20点を図化している。Ⅴ層では6世紀後葉～7世紀初頭の坏、高坏、壺類、平瓶、甕など69点を図化した。坏は図化するにあたって、大まかな分類を行い全体量の約1/3ほどにしぼっている。遺物に記されたヘラ記号については器種別の説明の後で述べることとする。

Ⅳ層出土遺物　第45図（136～155）・図版39・40

坏蓋（136～138）3点

136はつまみ上面が山形。137は丸く収められ、139は上面を窪めている。

坏身（139～142）4点

139～141は低い高台がつき、端部は摘みだされている。142は体部が外方に立ち上がる。

壺（143～145）3点

144は丸底の底部に「八」字に開く長い脚を貼り付け、脚端部は下方に屈曲させている。145は低い高台が貼り付けられ、143はやや長めになっている。

高坏（146～147）2点

146は長脚高坏の脚部である。脚柱には2条の凹線を巡し、裾端部は丸く収めている。内面には絞り痕がみられる。143は坏部中位と底部との境に断面三角の陵を持っている。

摺鉢（148）1点

底部を欠いており、体部は外方に立ち上がり、中位には凹線を2条巡らす。これよりまっすぐ伸びた体部は口縁あたりより外反する。端部は強く撫でられ方形におさめている。

甕（150～155）

150は口縁が外方へ大きく開いており、端部には強いヨコナデを施し、面をもたせている。151・152・154の口縁は頸部より外反し端部を屈曲させ、玉縁風に丸くおさめる。155は断面三角形。151には口縁と頸部内部に凹線が入る。153は他のもに比べ器壁が厚く、叩き調整も荒く、内面は叩きを撫で消している。

Ⅴ層出土遺物　第46～49図（156～224）・図版41～46

坏蓋（156～161）10点

156～161は口径が13～14cm代にあり天井部の回転ヘラ削り調整の範囲が広いものである。天井部内面には仕上げナデ（横方向に１、２回短く撫でたものを以下、「仕上げナデ」と言うこととする。）を施している。156は口縁を強く撫で細く引き出したもの。157～161は器高中位あたりを強く撫でており、口縁部は把厚する。160は天井部にカキ目調整を施し、口縁部内端には段がつく。

162～165は口径が11～12cm代にあり、天井部は平坦でヘラ削り調整の範囲は比較的狭いものである。内面に仕上げナデは施さないものが多い。

坏身（166～185）20点

166～177は受部径が14cm代で、かえりのつくりも比較的しっかりとしている。内面に仕上げナデを施すものが多い。167はかえりが内傾外反し受部端に沈線が入る。168も受部に沈線が入り端には凹状の段がつく。底部の削りは雑。170は器高が低く、かえりは長く内傾する。172は受部に沈線が入る。底部ヘラ削りは雑。173は器高が低く底部は平坦で削りが雑。174は内面底部に当て具痕が見られる。受部を薄くつくる。175は全体的に器壁が薄く華奢なつくり。176は器高が低く底部が平坦。178は器高が高久ヘラ削りの範囲は狭い。179・180は器高が高く底部の削りは広範。かえりは華奢なつくりで受部に沈線が入る。

189～185は受部径が11～12cm代にあり、底部は比較的平坦なものである。181の底部は雑な回転ヘラ削り調整を施しており、中位に凹状の段がついている。182の底部は回転ヘラ切り未調整のもので焼け歪み偏平になった感がある。内面には仕上げナデを施している。183の底部は手持ちヘラ削りの調整を施している。184底部は回転ヘラ切り調整後若干撫でており、受部端は面を持ち、かえりは薄く短い。

高坏（186～191）６点

186は長脚で脚1/3位あたり凹線を１条巡らす。裾端はつまみ出され内端接地する。187は長脚で３方２段透かし有蓋高坏。坏部のかえりは貼り付け基部より直立ぎみに立ち上がる。188は長脚方に２段透かしが入った無蓋高坏である。坏部には稜を持ち口縁は外方に開いており、裾端は上下に拡張されている。中位に凹線２条、裾に１条巡らす。短脚のもの189は脚裾端をいくぶん把厚させている。190の脚裾端を撫でられ、上方に伸びる。191は裾は水平方向に伸びており、端は強く撫でられ下方に屈曲する。内面には絞り痕が観察できた。

壺（192～197）６点

短頸壺の出土がめだち基本的な施文のパターンは、凹線文で区割りした内に刺突斜線文を施したものである。体部はカキ目調整を施す。口縁は外反し、短部を丸くおさめる。193はやや面を持つ。194は同様だが側面は撫で調整。195は列点文を施しており、肩部にはヘラ記号が見られる。体部下位は叩き調整後、外面にカキ目を施すが、内面は未調整のままである。

口縁は内端部を屈曲させる。196は口縁部を欠くが、肩部にかけて文様を2段施している。197は長頸の広口壺と思われる。頸部には波状文を施し2条の凹線で区画すると思われる。体部は球形を呈し、平行叩きを施したのちカキ目調整で仕上げ、内面は同心円をナデ消している。

平瓶（198）1点

198は偏球形を呈しており下半は壺、上半は提瓶の手法でつくられる。肩部は凹線を2条巡らしカキ目調整を施す。底部は回転ヘラ削り調整。天井部は直径3㎝の円盤状粘土で塞ぐ。200～204は、瓶類の口縁と思われる。203には凹線、304には凹線とヘラ記号を刻んでいる。

横瓮（199・205～211）8点

199・205・206は頸部より短く立ち上がり、口縁端部を玉縁風につくるものである。207は口縁端部が内湾し断面方形におさめている。208・209体部側面を粘土円盤で塞いだものである。211は体部に格子叩きを施し、体側部にカキ目調整を施している。213は鉤状の提げ手を付したもので、体部外面カキ目調整、内面には同心円文がみられる。

提瓶（214）1点

鉤状の提げ手を付しており、体部外面カキ目調整を施している。後面は円盤状粘土で塞ぐ。

甕（125～224）10点

口縁は頸部からの立ち上がりが短くその端部は意識してつくられる。大きく分けて、断面が方形のもの（215）と玉縁風のもの（220）の2種があり、なお且つそれらの内端をつまみだし屈曲させたもの（217・216・219）がある。221は端部をヨコナデし丸くおさめたのみ。

転用硯　図版46

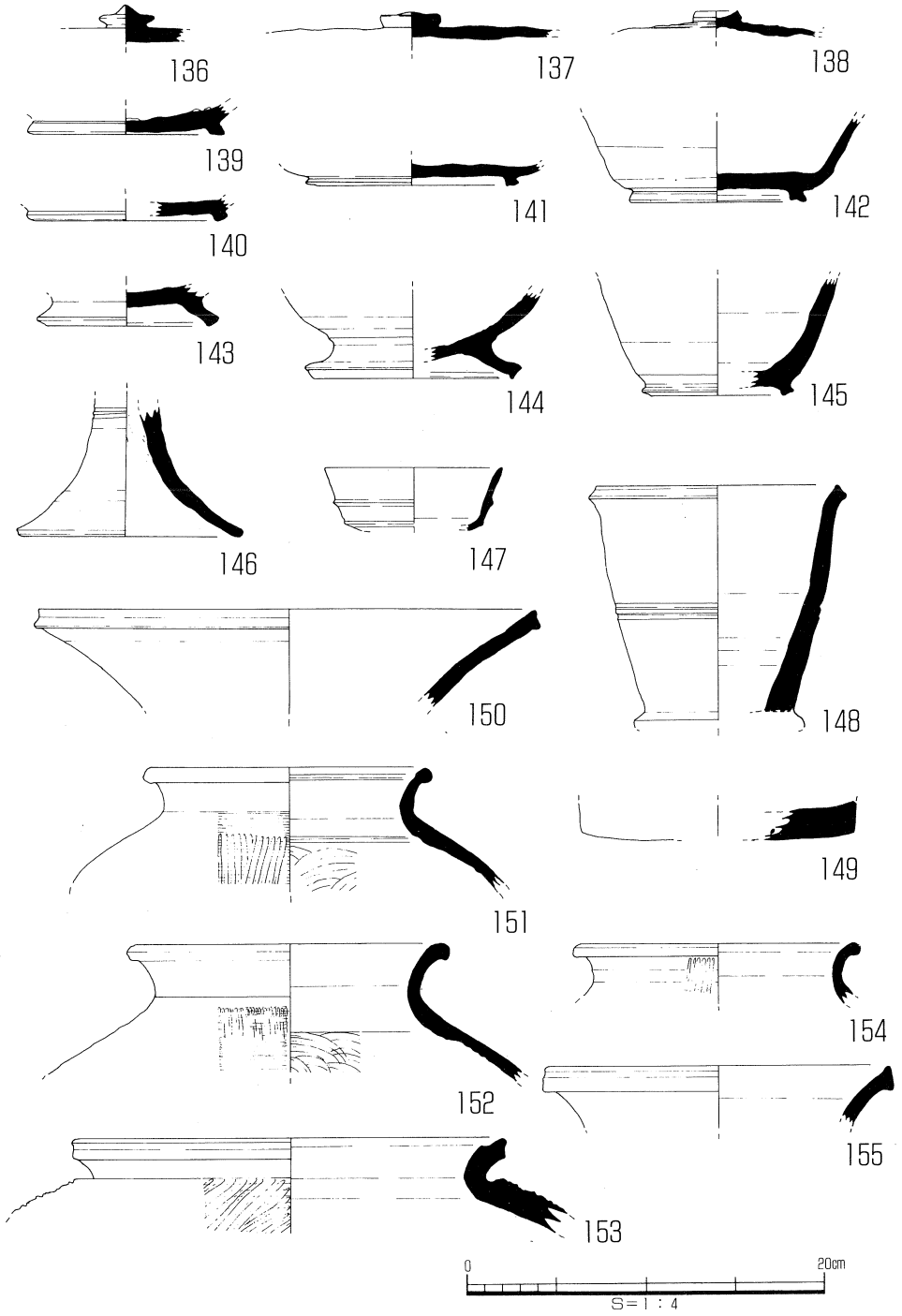
有高台壺の底部を利用したものでかなり焼け歪んでいる。池の部分には墨が付着している。土層観察用トレンチ内から出土しており、層位は不明である。

ヘラ記号　図版46

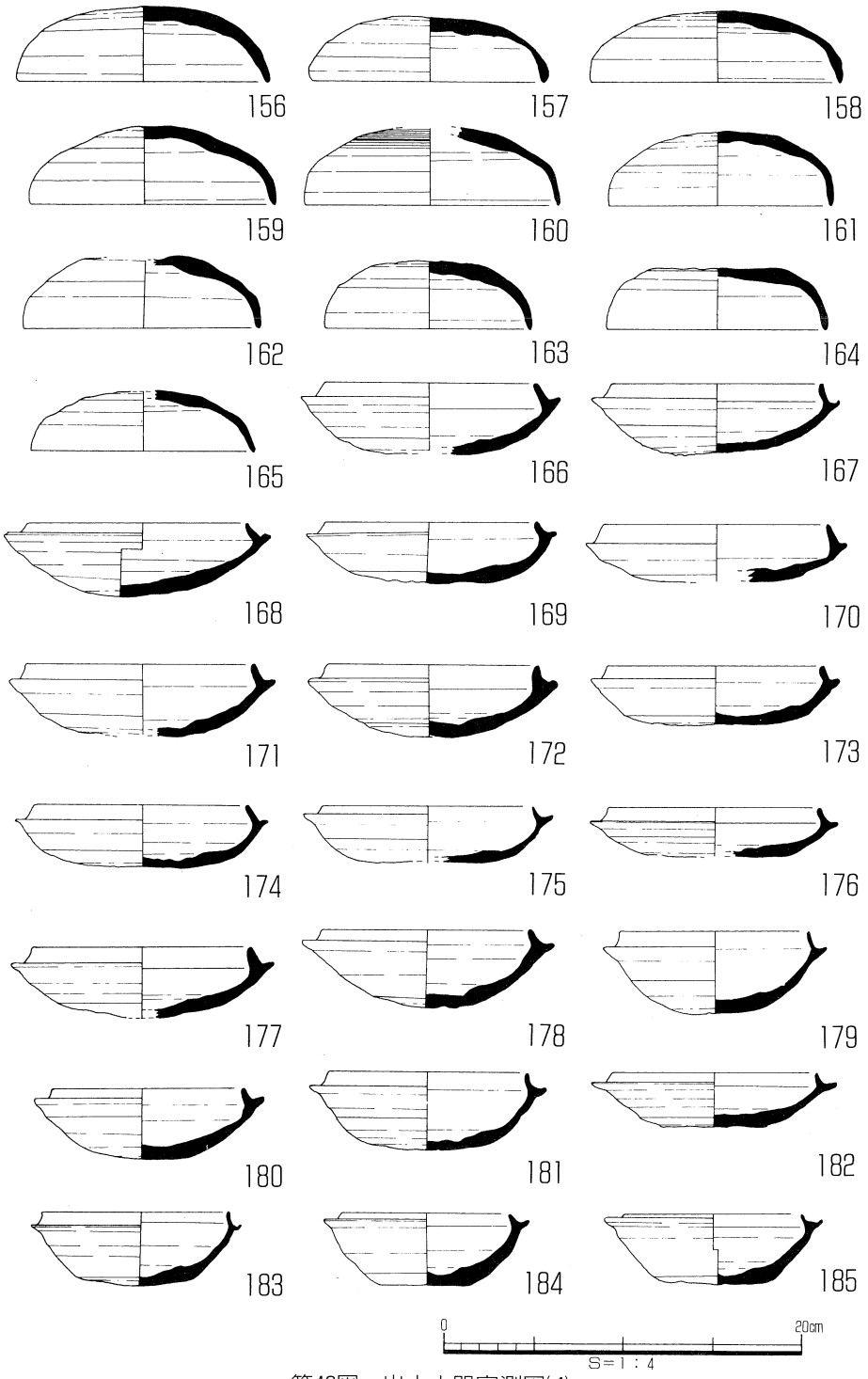
ヘラ記号は坏の底部、壺肩部、口縁外端部、瓶類頸部に施されている。いずれもヘラ状工具によって線書きされており、平行する斜線であったり、交差させた斜線である。

弥生土器

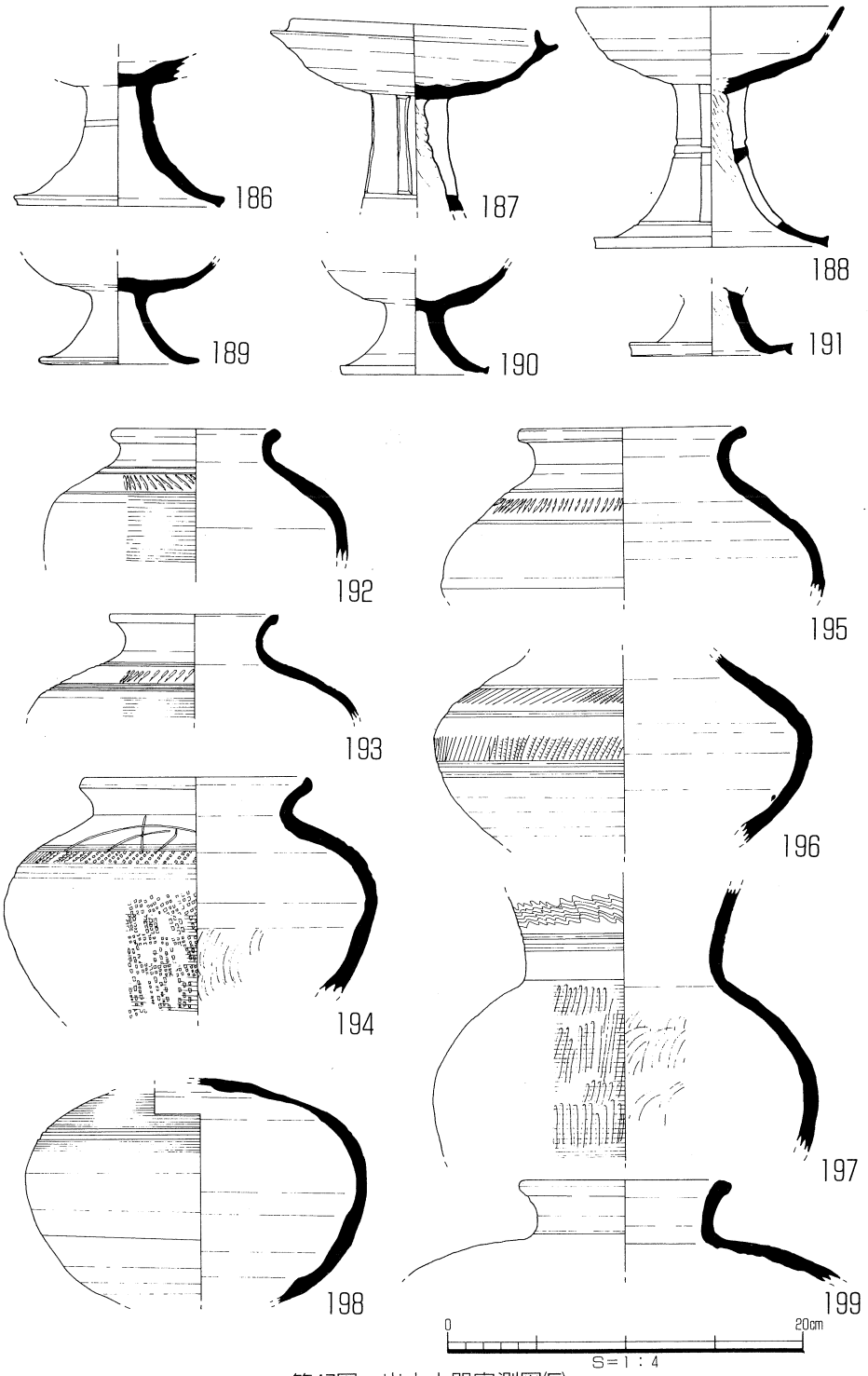
弥生土器は主にⅥ層から出土しており、弥生時代中期中葉から後葉にかけての凹線文を施した壺や甕がめだっていた。図化した31点の内の2点（234・235）はドット図の落ち際にかたまっており、その他の13点は調査区の中央あたりにまとまって出土している。今回図化できなかった遺物は破片が詰まったコンテナ（60×45×14cm）にして10数箱を数え、Ⅳ、Ⅴ層中に混入したかたちで堆積していた。これらの中には時期的に新しくなるものが含まれている。



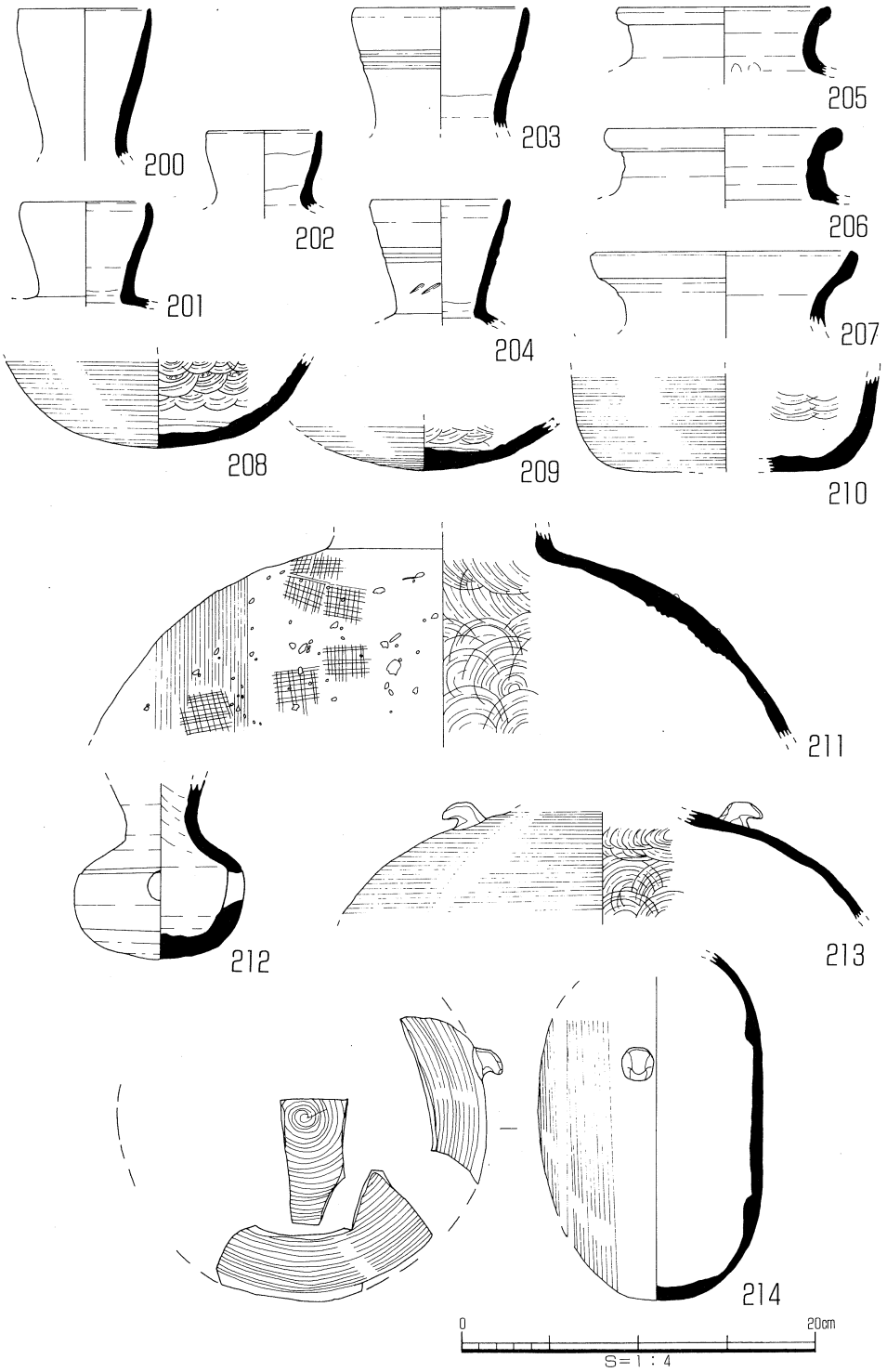
第45図　出土土器実測図(3)



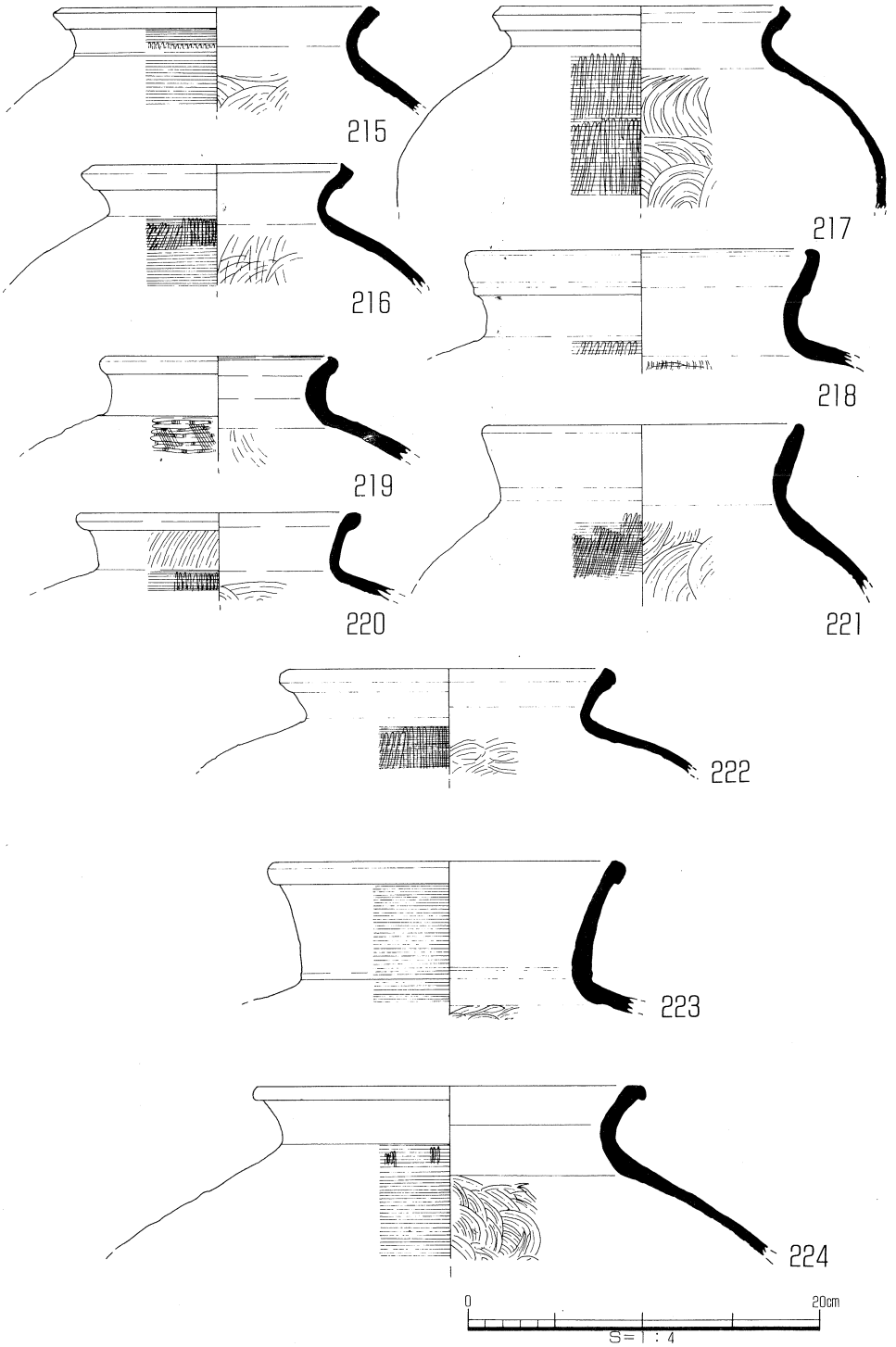
第46図　出土土器実測図(4)



第47図　出土土器実測図(5)



第48図　出土土器実測図(6)



第49図　出土土器実測図(7)

Ⅵ層出土遺物　第50～56図（225～255）・図版47～52

壺形土器（225～237）13点

口縁部に凹線文を施した壺は、器高32～35cmのものと25～28cmの２種があった。口縁部の形態は類似する。226・230には内面に凹線が１条見られる。胴部は中位で大きく張り、そして底部は平底である。しかし、230・231については中位より上1.5～3.5cmで最大胴径を測り、加えてそれらの底部は若干丸みを帯びている。施文は頸部よりに刷毛目調整具の木口による「ノ」字刺突文を巡らせている。その他に３重弧（229）と３条１単位の三日月形の文様（234）がみられた。胴部外面の調整は下位に縦ヘラ磨き。中位に横ヘラ磨き。上位に縦刷毛目と使い分けが認められた。胴部内面は下位にヘラ削りか縦もしくは横の刷毛目、中位を刷毛目、上位ナデ調整となっている。237は締まった頸部より口縁が外方へ開き、端部には２条の沈線を施している。

上記のものと異なり233は口縁端の凹線が不明瞭で、頸部に押圧凸帯文を付し、肩部近くに波条文を施している。充塡式の上げ底で、胴部は球形を呈しており、細く締まった頸部から口縁は外反する。口縁端面には５本１単位の刻み目を施し、頸部には押圧による凸帯を張り付けている。頸部から肩部にかけては櫛状工具による沈線文や山形文、ヘラ工具による刺突文がみられる。236は胴部が張っており、頸部には断面三角形の凸帯文を張り付ける。口縁を上下にやや拡張させ下端には刻み目を施す。内面もヘラ磨き調整を施している。

甕形土器（238～246）９点

凹線文を施した甕（238～243）は、器高31～33.5cmのものと、28cmの２種があった。口縁部の形態は内面に稜を持って強く屈曲し、口縁端部を上方に僅かにつまみ上げ、端面に１条の凹線を施している。胴部は上位で張り、底部は平底である。施文は胴部に「ノ」字状刺突文を巡らせる。胴部外面の調整は下位がヘラ磨き、上位縦方向の刷毛目。内面は下位に削り、上位に刷毛目を施している。

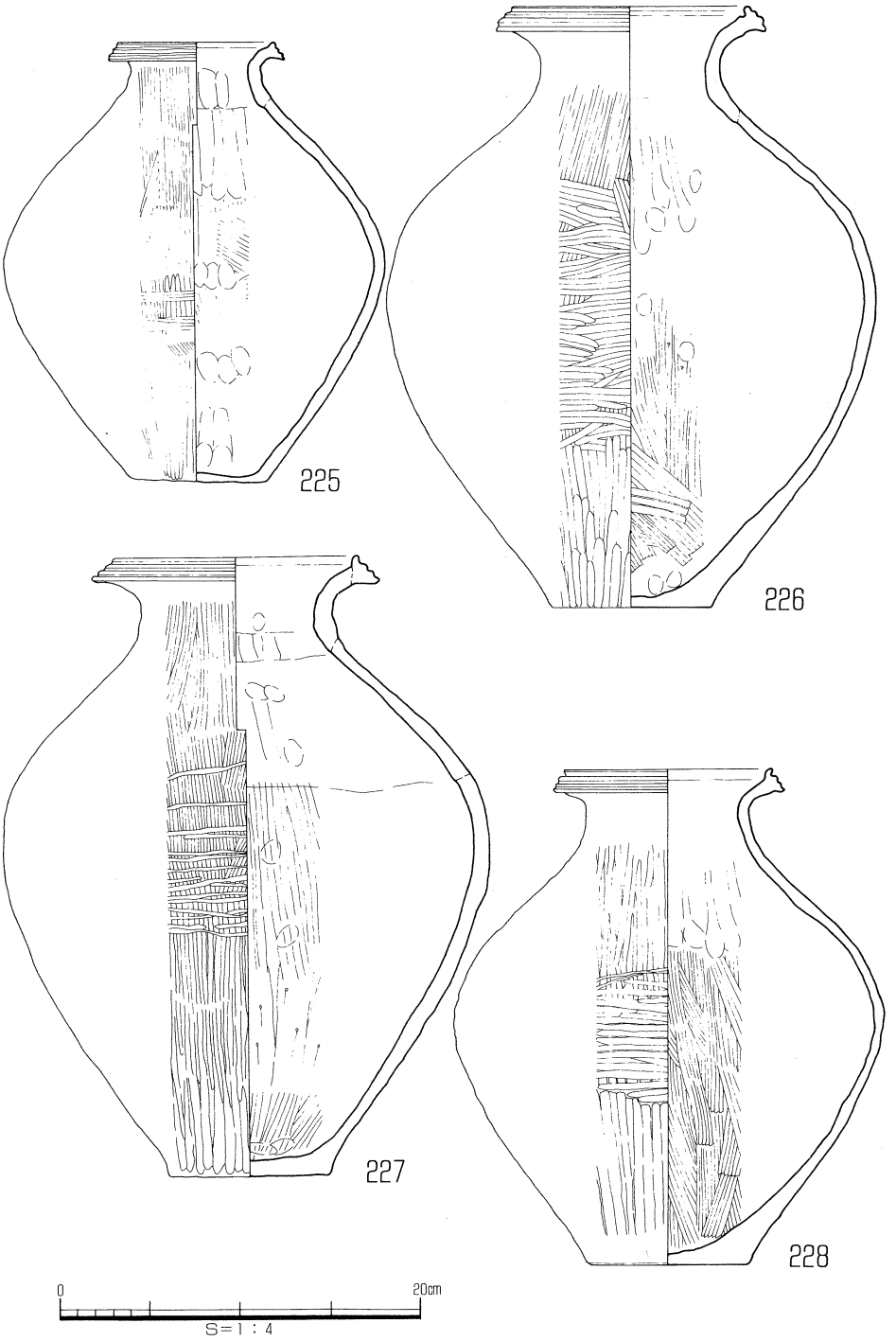
凹線文を持たないもの（245・246）は口端部がヨコナデにより平坦面をなし、頸部の屈曲の度合いが緩くなる。底部はくびれを持った上げ底で、胴部の調整は外面が刷毛面、内面が削り後ナデもしくは、上位刷毛目、下位磨きのものである。244は口縁部を欠くが、くびれた上げ底で、胴部には縦方向のヘラ磨きを施している。

高坏形土器（247・249・250）３点

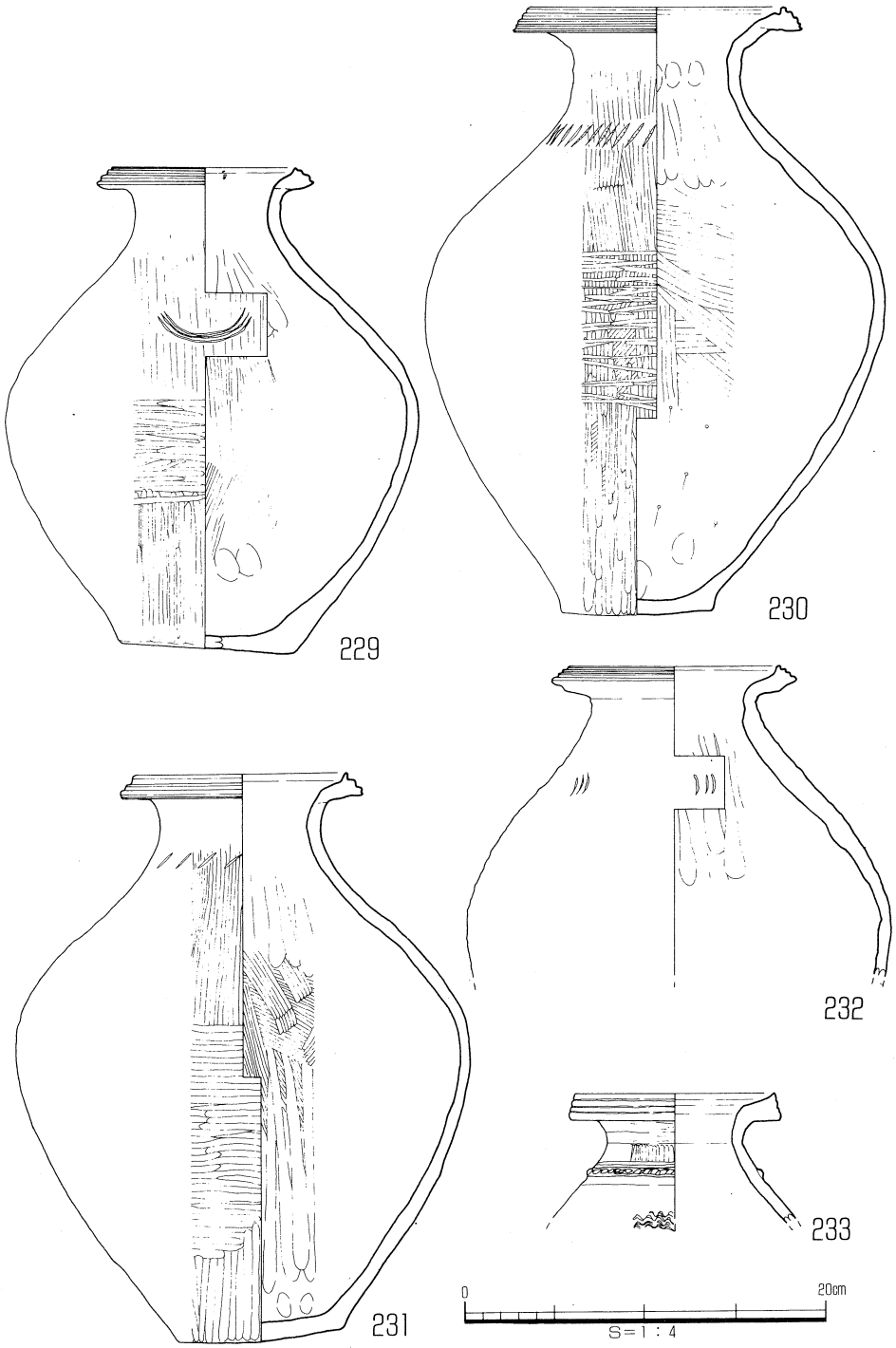
250は坏部小片である。口縁部は内傾し、外面に５条のヘラ描き沈線文を施している。247はほぼ完形である。坏部は外方に大きく開き、口縁部が内傾する。屈曲は稜をなしており、口縁部端面は平坦にナデられ、外面には凹線文を施している。249は矢羽透しを４方に入れ、脚裾端面に凹線を１条巡らす。

鉢形土器（251・252・254）３点　251は甕形土器の形態を持つもの。252は口縁部端を外傾させたもの。254は僅かに外傾する口縁より、張りだした胴部は底部で尖る。胴部外面はヘラ磨き調整を施している。253は鉢を模したミニチュア品と思われる。

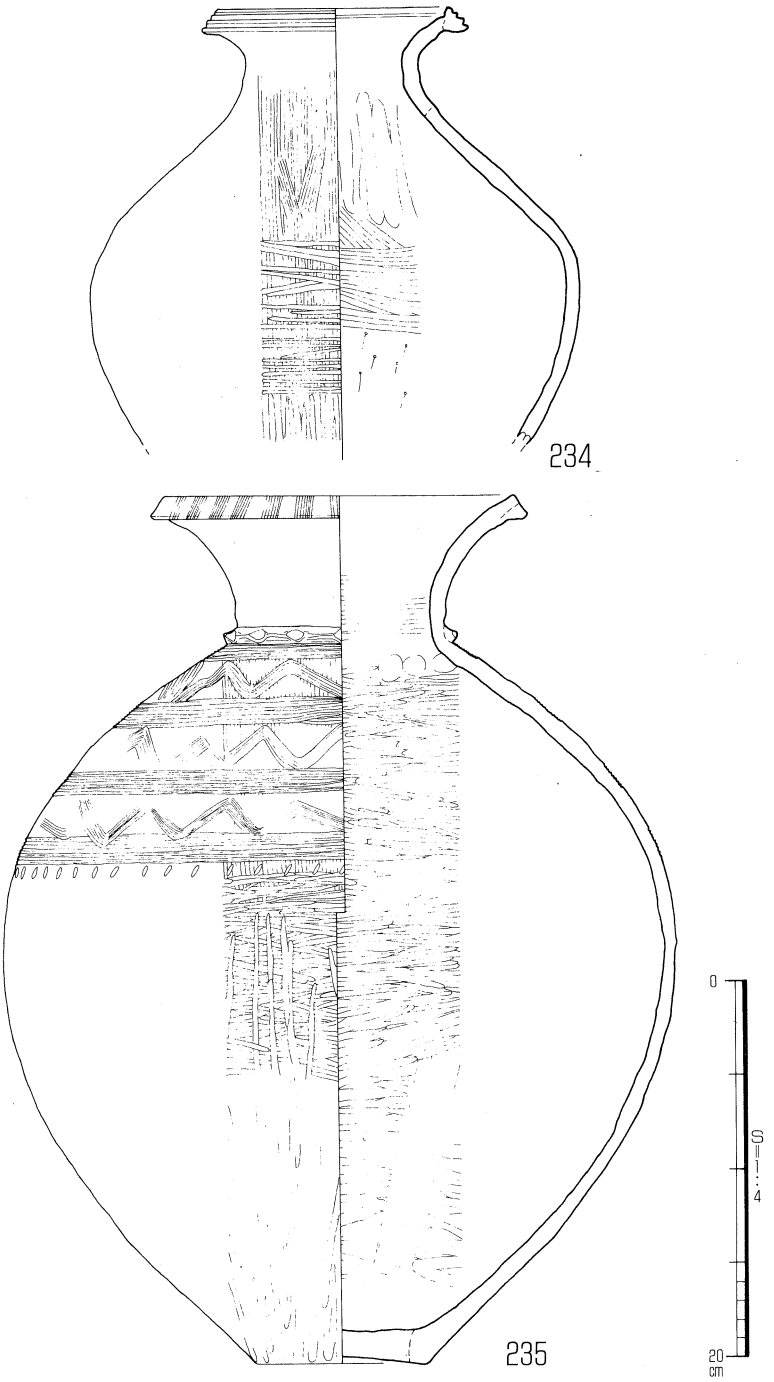
匙形土器（248）１点　浅い坏状で、平面形は楕円形を呈する。口縁部を内側に屈曲させ肩口状にしている。胴部内外面は刷毛目調整を施す。



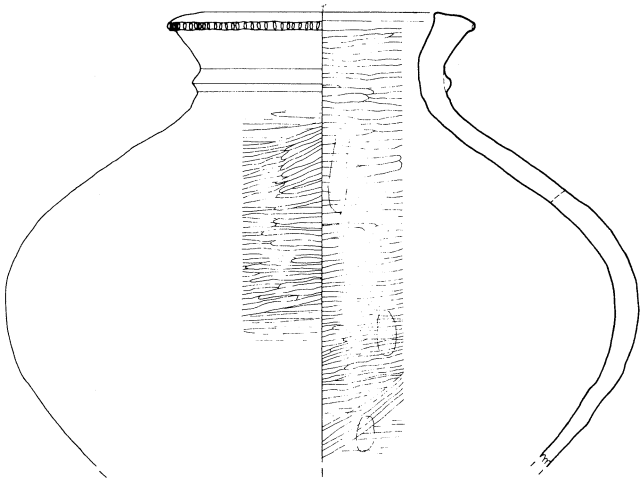
第50図　出土土器実測図(8)

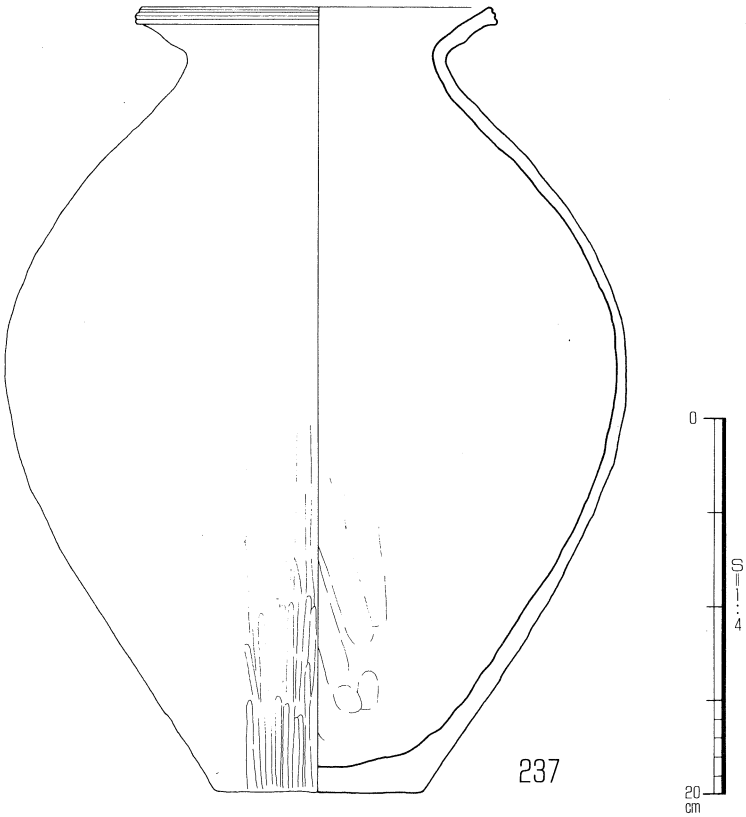


第51図　出土土器実測図(9)

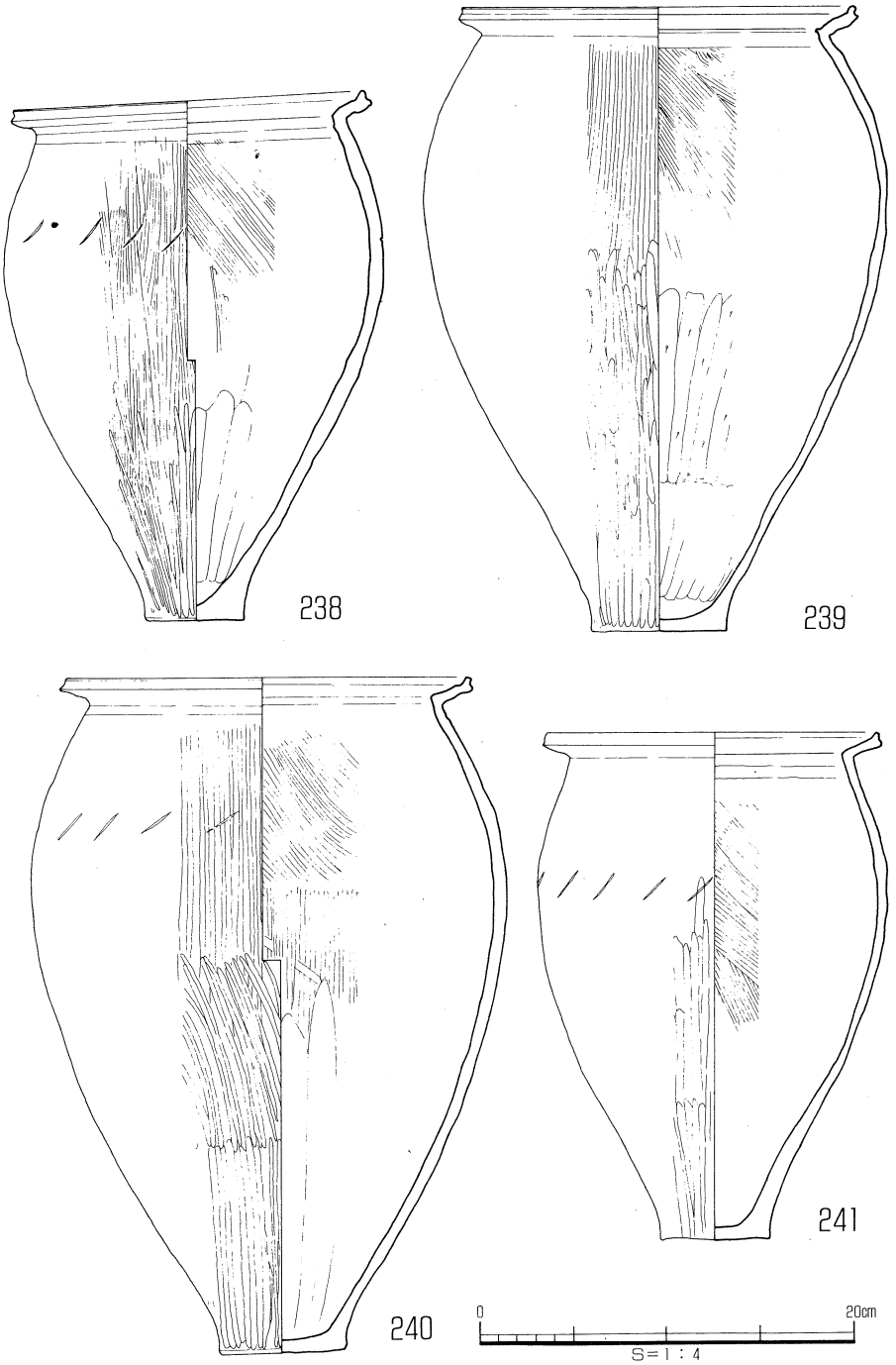


第52図　出土土器実測図(10)

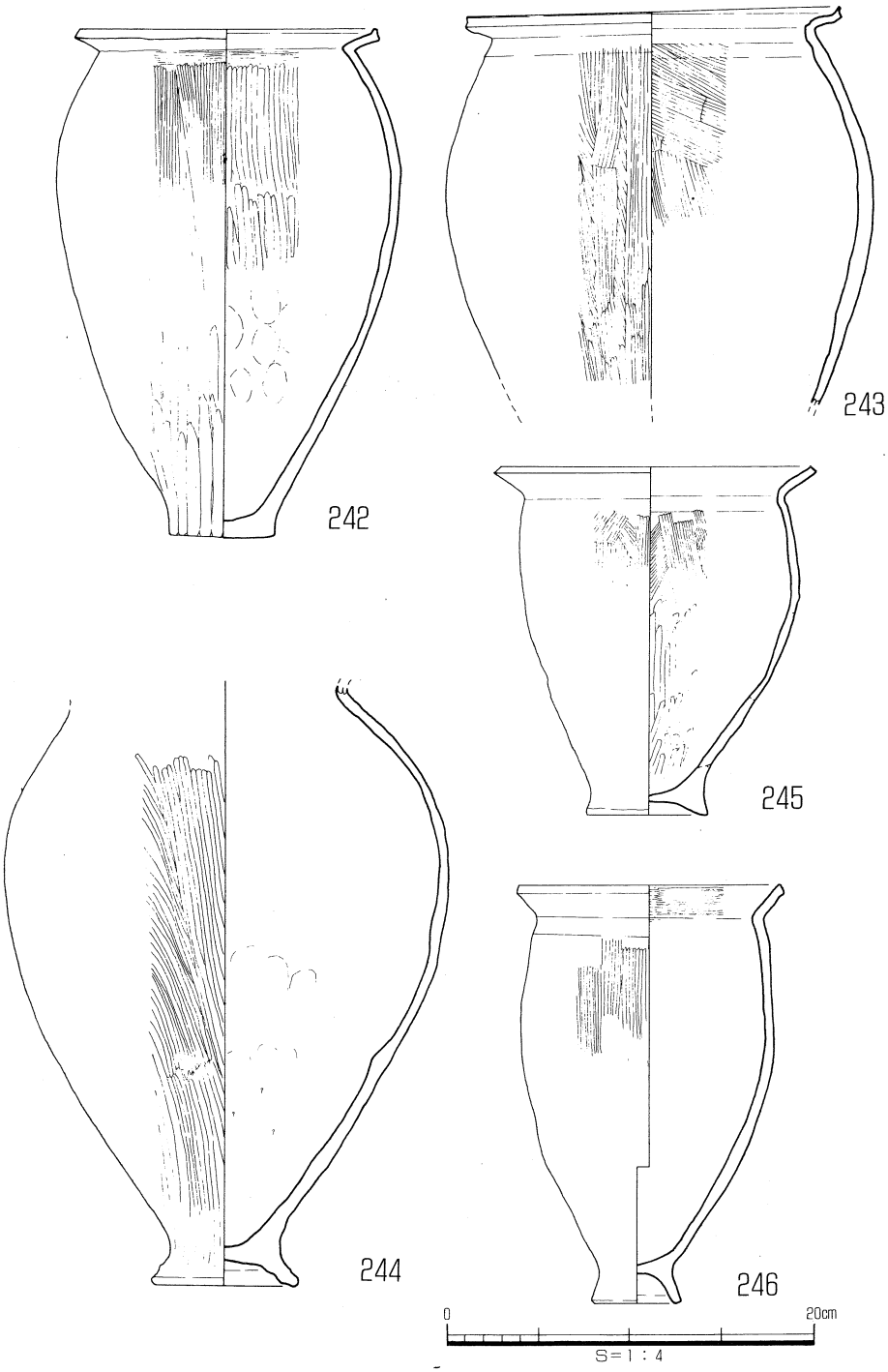




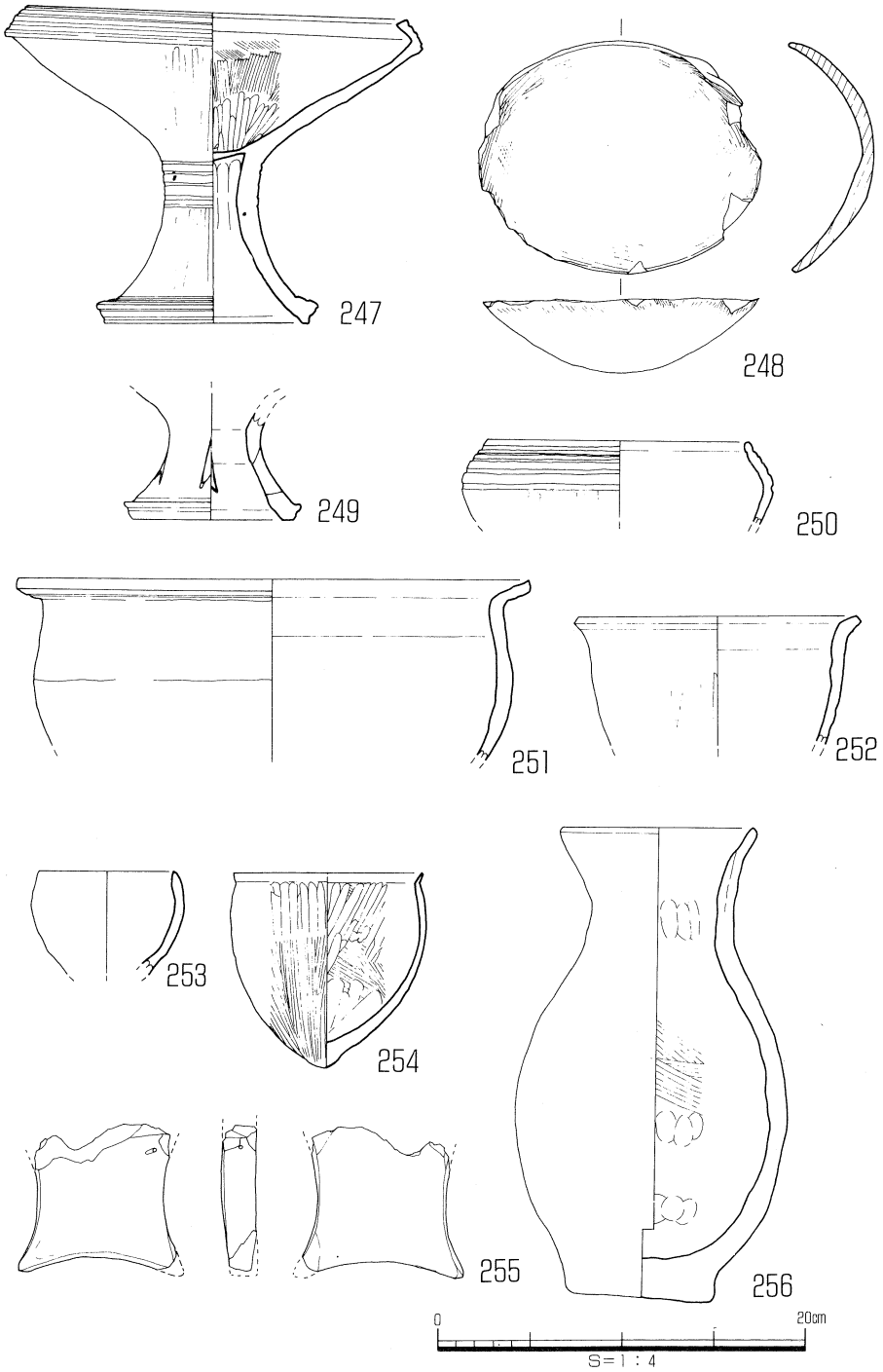
第53図　出土土器実測図(11)



第54図　出土土器実測図(12)



第55図　出土土器実測図(13)



第56図　出土土器実測図(14)

第57図　木器出土状況図

木製品

当地区ではⅣ層とⅤ層から木製品が出土している。Ⅳ層では№1～19までの番号を付け取り上げを行った。Ⅴ層では№20～138までの番号を与え取り上げた。グリット№は観察表に記している。土層観察用のサブトレンチを重機により掘削したときに出土した遺物はⅣ・Ⅴ層が混在する。

洗浄作業後の仕訳の段階で、№付で一括取り上げを行った138点中には桃核や自然木が混ざっており、人為的な加工が施された木片は100点前後を数える。

木製品には、農具、工具、紡績具、生活用品、馬具、祭祀用具など用途のわかるものと、用途不明の製品があった。用途不明製品については2つのパターンに分類した。1つは、完形、もしくはほぼ完形であると思われるが用途のわからないもの。これをA類とする。もう1つは、ある製品が破損し、その一部片であるために用途がわからなくなってしまったものである。これをB類とする。樹種同定は行っておらず、用途との関連については今後の作業を進める上で明らかにしたい。以下、各層ごとに用途のわかる製品から順に説明を記す。

Ⅳ層出土遺物　第58図（257～267）・図版53

用途が特定できるもの7点・用途不明のA類2点、B類2点の計11点を図化した。

木簡状木製品（257・258）2点

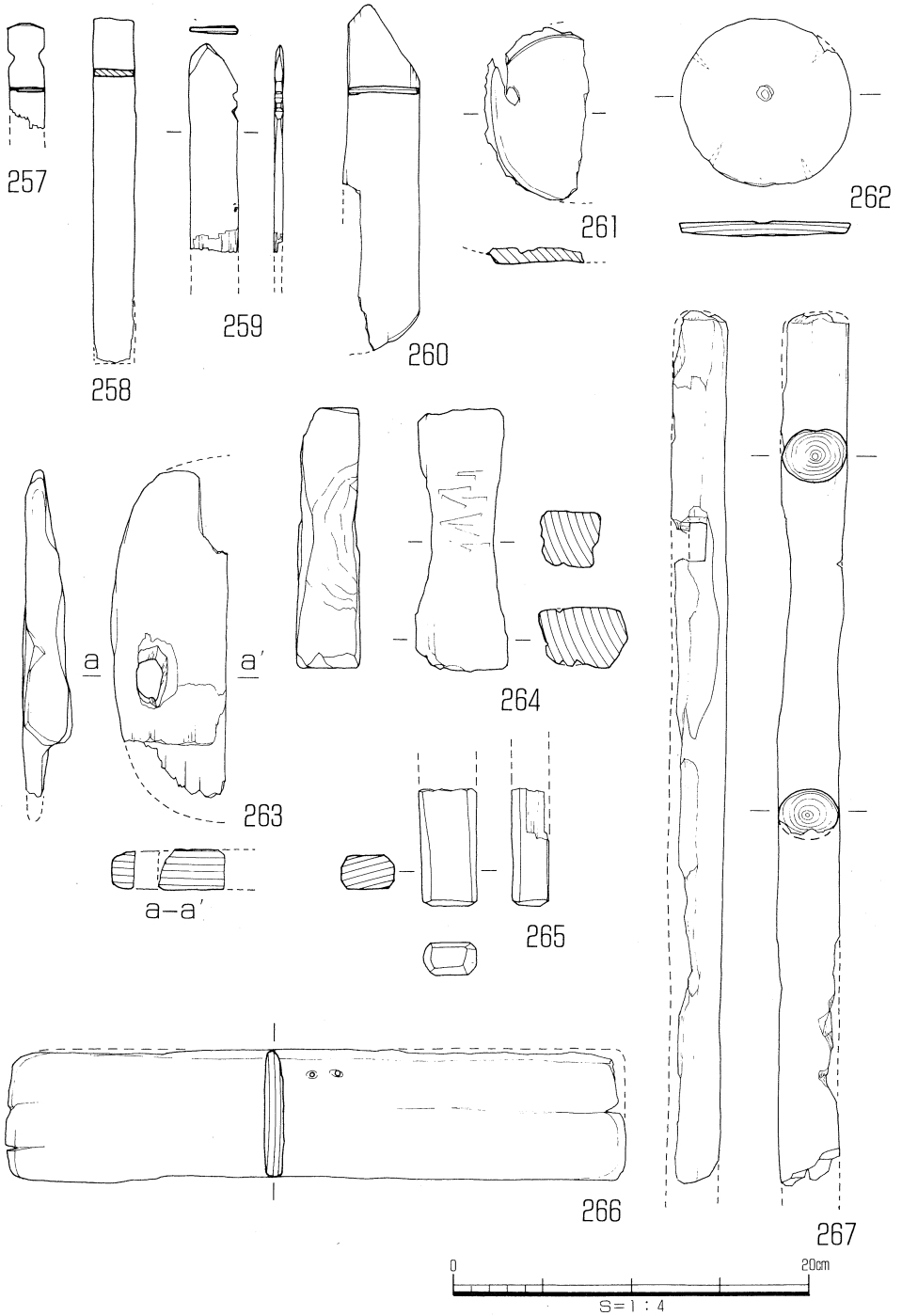
257は現存長5.9cm、幅2.0cm、厚さ0.2cmの柾目材を使用している。端部の角を切り落とし、1cm下には左右より切り込みを入れている。258は現存長11.3cm、厚さ0.4cmの斜めの材を使用している。以上2点は、赤外線フィルムを使用して写真撮影を行ったが、墨書は確認されなかった。

斎串（259・260）2点

259は現存長11.8cm、幅2.8cm、厚さ0.5cmの柾目材を使用しており、板の端を斜めに切り落とし、さらに尖った部分を表と裏から削り出している。斜辺側には2ヶ所切り欠きを施している。260は現存長19.5cm、幅4.1cm、厚さ0.4cmの板目材を使用しており上端は斜めに切り落としている。下端は欠損しておりその形態は不明である。

容器（261・262）2点

261は挽物の椀の底部1/2で、高台は円盤状を呈し、復元径は9.5cmを測る。内面は焼け焦げており、廃棄されたものと思われる。262は曲物の底板で直径9.5cm、厚さ0.8cmを測る。側板は木釘によって結合されていたようで4ヶ所に釘穴が残っている。底板の中央が焼け焦げ窪んでいるが、使用に際してのものか廃棄後についたものかはわからない。



第58図　出土木製品実測図(1)

下駄（263）１点

263は板目材を使用しており、現存長18.3cm、現存幅6.5cm、厚さ2.3cmを測る。一木造りで、連歯の下駄の1/2片である。後壺は後歯の前方に穿っており、平面形態は楕円形に近いものになると考えられる。腐食が進み歯、前壺、後端は欠損している。

用途不明品（264～267）４点

Ａ類

264は長さ14.6cm、幅5.0cm、厚さ3.2cmを測る。割裂材を使用しており、柱状に仕上げているが、側面は使用によって抉られたようにすり減っている。裏面には削痕がみられ、下端部は焼け焦げている。266は長さ34.5cm、幅7.2cm、厚さ1.0cmの板目材を使用している。平面形態は長方形を呈し、その辺側に２ヶ所穿孔している。紐通しの孔とも考えられるが、紐擦れ痕は観察できなかった。

Ｂ類

265は現存長6.5cm、幅3.0cm、厚さ2.0cmを測り、板目材を使用している。段面形は横長の八角形を呈しており、下端にも面取りを行っている。器表面はなめらかに仕上がっている。267は現存長49.0cm、直径3.0cmの芯持ち材に、縦2.5cm×横1.0cmのほぞを穿っている。ほぞの下約13cmの範囲は平坦になっている。

Ｖ層出土遺物　第59～68図・図版54～59

用途が特定できるもの36点、用途不明製品Ａ類９点、Ｂ類18点の計63点を図化している。

木簡状木製品（268～272）５点

これらはその形状による便宜的な名称として「木簡状」としたが、赤外線フィルムを使って写真撮影を行った結果、墨書は見られなかった。

270は角にやや丸みをもたせ斜めに切っている。側面は破断面のようでもあり、曲物の底板でないとは言い切れない。271の先端は山形を呈している。272の下端は剣先状に尖る。

斎串（273～275）３点

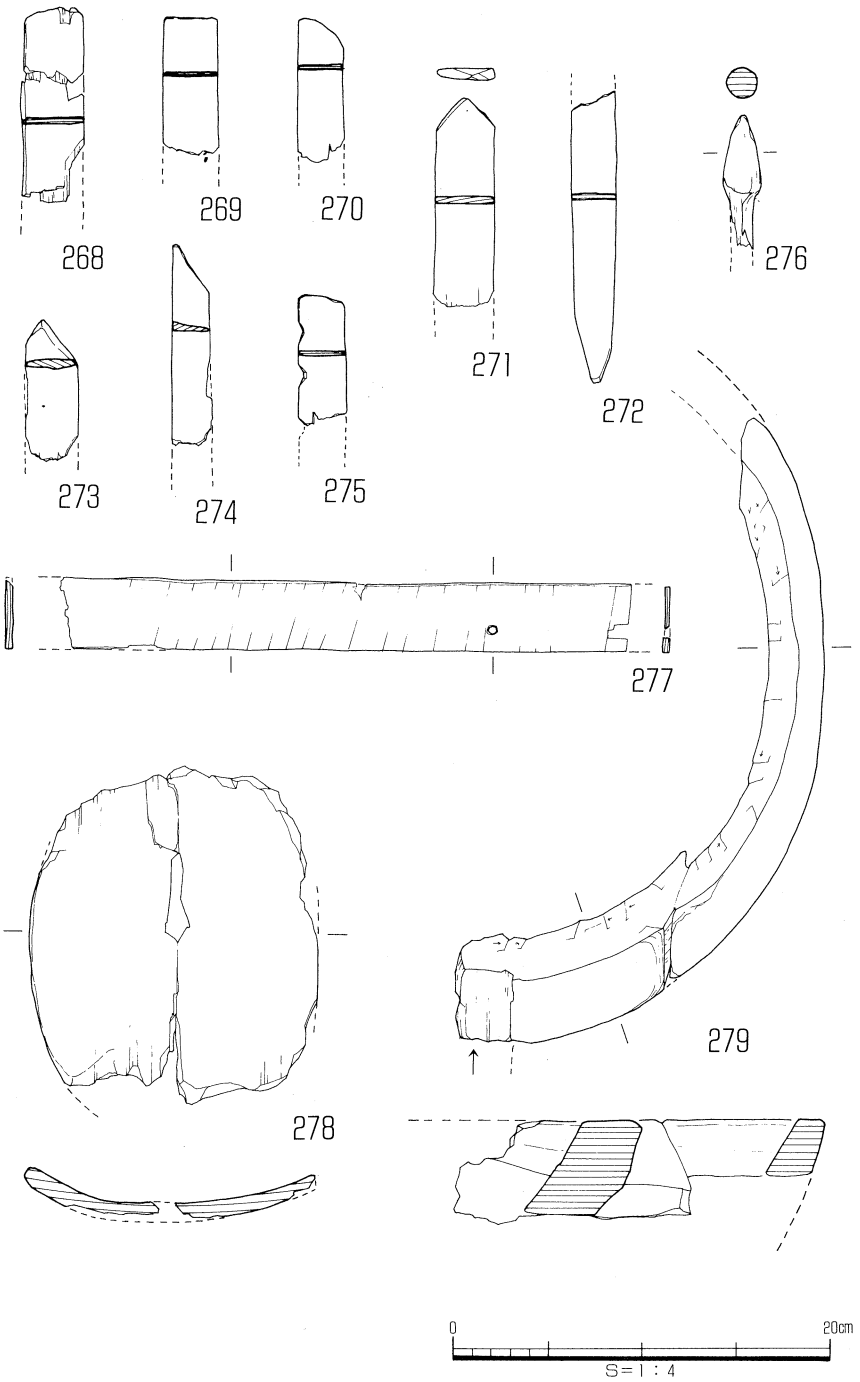
３点とも形態が異なるが、大きく言えば先端を尖するもの（273・274）と、そうでないもの（275）に分けられる。275は側辺を３ヶ所切り欠いている。

木鏃（276）１点

円錐形の鏃身は現存長7.0cm、最大幅2.0cmを計り、茎部は次第に細められている。

容器（277・278・279）３点

277は曲物の側板で、現存幅3.6cm、厚さ0.4cmの柾目材を使用している。穿孔が１ヶ所見られる。内面には斜方行のケビキを施している。278は現存長18.0cm、幅15.0cm、厚さ0.8cmを測る。柾目材を使用しており、平面形は欠損のためいびつな楕円形を呈している。浅い皿状の桍物と思われる。279は円もしくは楕円形の槽のような桍物の口縁部と考えている。柾目材を使用しており現存長は33cmを測る。矢印の部分には把手が付されていたらしい。内面には釿による加工痕が残る。



第59図　出土木製品実測図(2)

下駄（280～283）４点

一木造りの連歯下駄で、前壺は中心より左右いずれかに寄せ、後壺は後歯の前方に穿っている。これらの平面形態や歯のつくり出しはそれぞれ異なっている。

280は現存長で16cmを測り、柾目材を使用している。平面形態は隅丸方形で、歯は全長の約1/5幅、側面から見て外開きにつくり出している。矢印の位置には抉りが入るが、鼻緒以外の紐を渡したのか疑問が残る。後端は焼け焦げている。281は現存長で21.5cmを測り、柾目材を使用している。平面形態は、下端は山形、上端は斜めを呈している。歯は全長の約1/4幅とやや広めにつくり出している。282は長さ25cmを測る柾目材を使用したやや大ぶりのもので、長楕円形を呈している。歯は前後ともに欠けているものの、幅は全長の約1/5で、断面形は長方形である。

木錘（284・285）２点

復元形は鼓形を呈し、中央に縄掛け用の抉りを入れるものと考える。284は直径7.2cmの芯持ち材を使用している。285は割裂材を使用しており、断面形は横長で角の丸くなった八角形を呈している。長辺7.5cm、短辺5.6cmを測る。

横槌（286・267）２点

286は割裂材を使用しており、全長29.3cmを測る。敲打部と柄は一木からなる。柄の断面形は丸みのある横長の六角形を呈している。敲打部の断面形はややいびつな長方形を呈している。使用のため中位あたりは細っており、傷が残る。柄に近い部分はすり鉢状に窪んでいるが、これは使用によるものか、後天的なものか不明である。

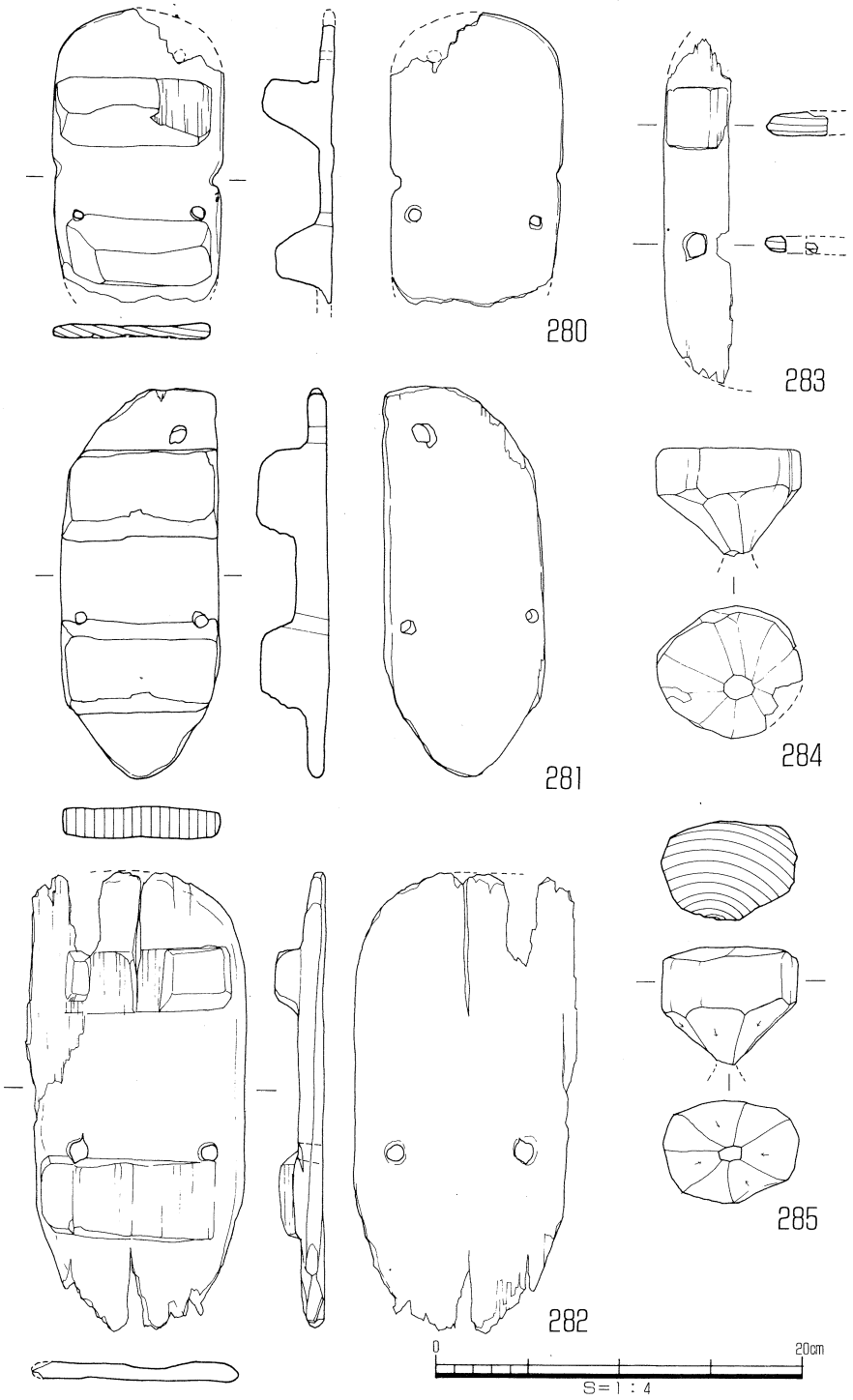
287は直径６cmの芯持ち材で、全長32.5cm、柄部径2.9cmを測る。敲打部より柄部にかけては段がつかず次第に細められている。敲打面はなめらかで、使用による傷は観察できなかった。この２点は形態的にも違いがあるが、使用痕のつきかたから286は工具として、287は柔らかいもの（布や藁）を対象としていたとも考えられる。

編台（288）１点

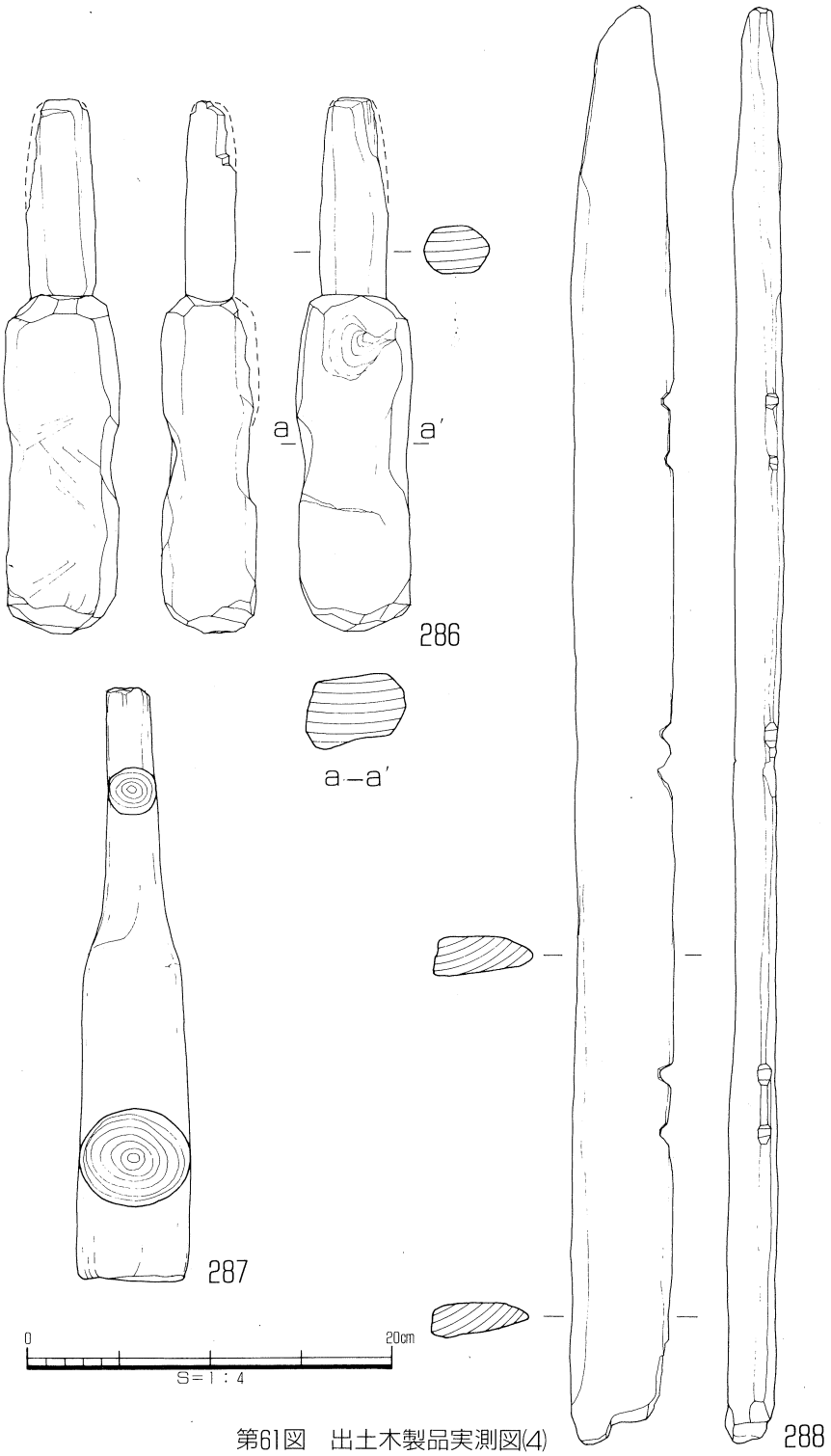
「もじり編」に使われる編み具の横板部で、長さ79.0cm、幅5.5cm、厚さ2.0cmを測る。板目材を使用している。目盛りを刻んだ側は山形に尖らせてあり、３cmの間隔をあけた２目盛りを約15cmごとに３ヶ所刻んでいる。板の端は一方が自然に先細るのに対し、もう一方は段をもたせている。

膝柄（289）１点

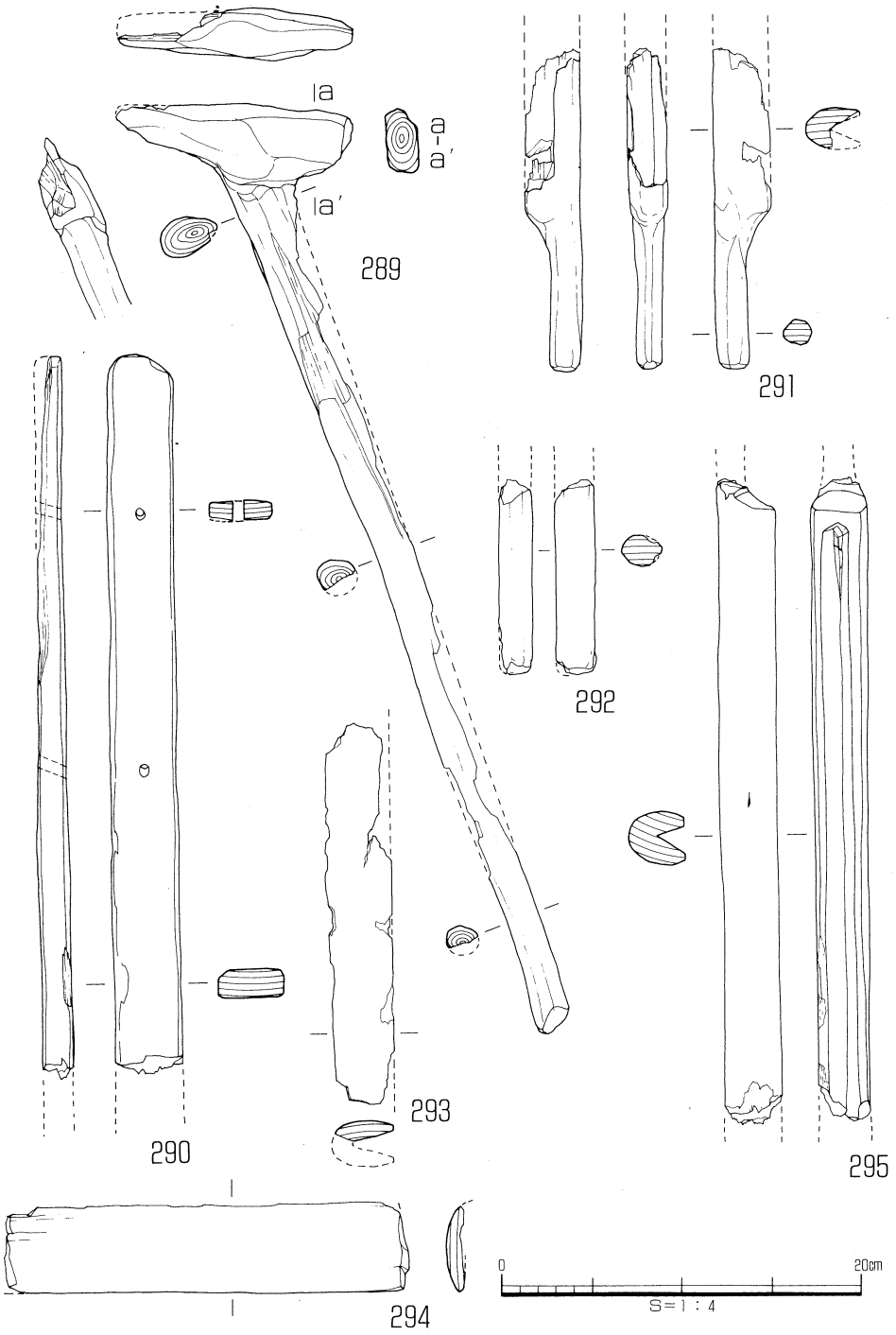
289自然木の枝を利用しており全長は57cmを測る。台座部は平坦に仕上げられておらず、未製品とも考えられる。斧の柄とするには少し華奢で、使用に耐えうるものか疑問が残る。



第60図　出土木製品実測図(3)



第61図　出土木製品実測図(4)



第62図　出土木製品実測図(5)

カセ置き（290）１点

カセ置きは小孔を穿った２本の板を十字に組み合わせて使用するため、中心を方形に切り込み、軸台に固定するための穴があけてあるものである。290は十字に組み合わせる板の1/2で、現存長40cm、幅3.7cm、厚さ1.6cmの板目材を使用しており、断面形は長方形を呈している。端部にむかって厚さを減じており、先端は丸味をもたせている。約15cmの間隔をあけて、斜め60度に孔を穿っている。

経巻具（291～295）４点

291・295は原始機に使用されるものである。幅3.0cm、厚さ２～３cmの細長い角材より紐掛け部ごと削り出している。身背部は丸味を帯び身腹部はＶ字型に溝を彫り込んでいる。35は現存長36.0cmを測り、板目材を使用している。経巻具の長さは腰幅と同じか少し長いくらいだと考えられている。293は身部の側辺と思われ、現存長21.3cm、幅3.5cmを測る。294も同様のものと考えているが疑問が残る。292は紐かけ部片で現存長11.0cm、幅2.2cm、厚さ1.7cmの板目材を使用している。断面形は円形を呈する。

壺鐙（296・297）２点

壺鐙の復元形は296の下に297のような踏み込み部が備わっているもので、正面からみるとちょうど琵琶のような形をしており、つま先を差し込む部分をアーチ型に彫り込んでいる。296と297は同一個体と考えているが破断面相互の接合が不自然になる為疑問が残る。

296は半裁材を使用しており現存長は20.0cm、最大幅10.8cmを測る。一木から彫り出されていたようだが、踏み込み部は抜け落ち、吊り手部は折れている。ａ－ａ’の断面をみると、左側のカーブがきついことがわかる。こちらが馬の腹にあたると考えるならば296は右足用であろう。297は半裁材を使用しており直径14cm、厚さ6.5cmを測る。後方よりみると半円形を呈しており大きく５方向から削り出している矢印の面は、部から抜けたときの砕面で、やや内傾ぎみに立ち上がるものと考えられる。

上記のような壺鐙を出土した香川県の下津川遺跡では、黒漆が塗られていたことが報告されているが、296・297には観察されなかった。

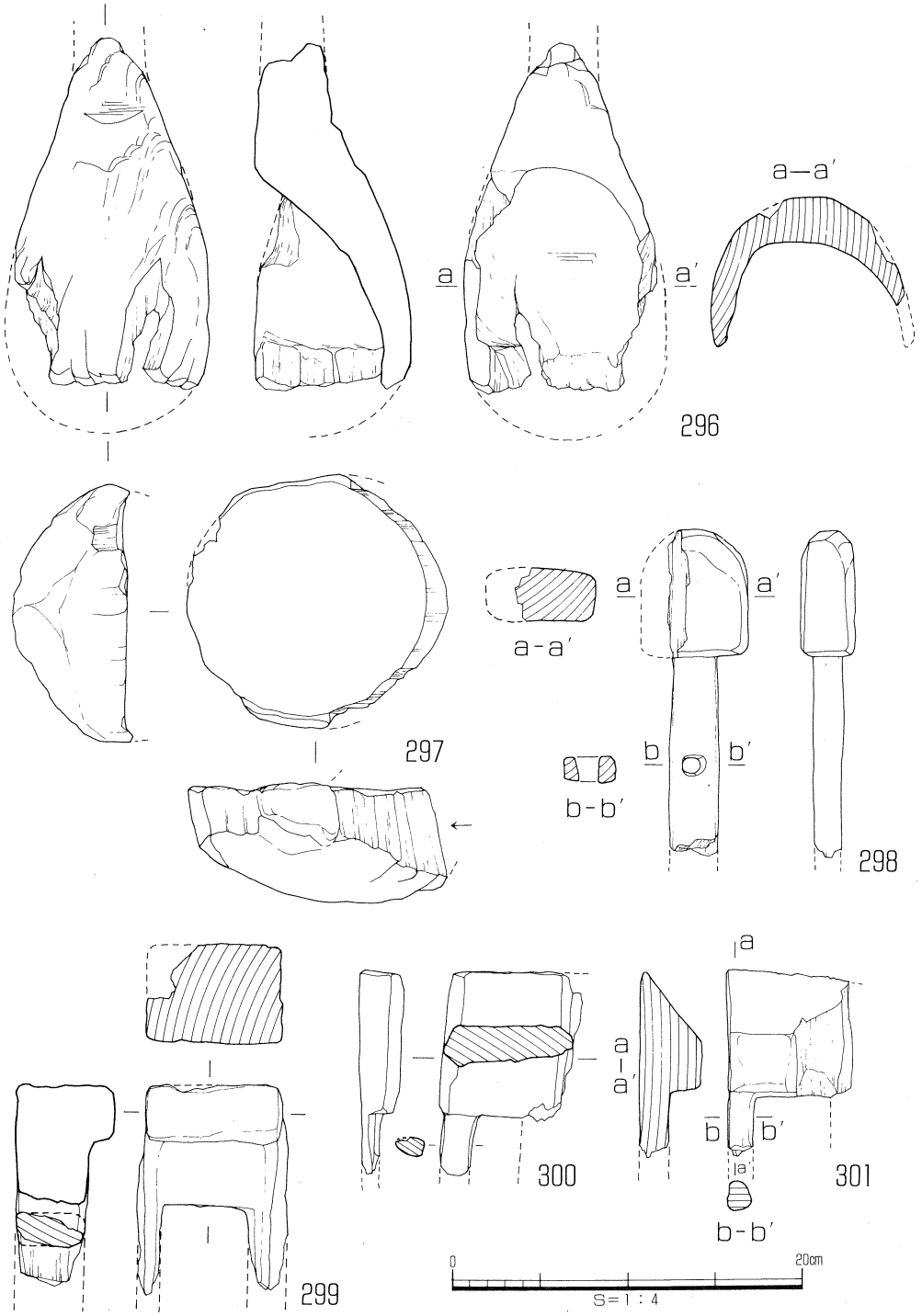
部材（298～304・310・311）６点

形態や大きさはまったく異なっているが、断面方形の溝が切り込まれたり、ほぞが穿ってあるものをここでは部材とした。

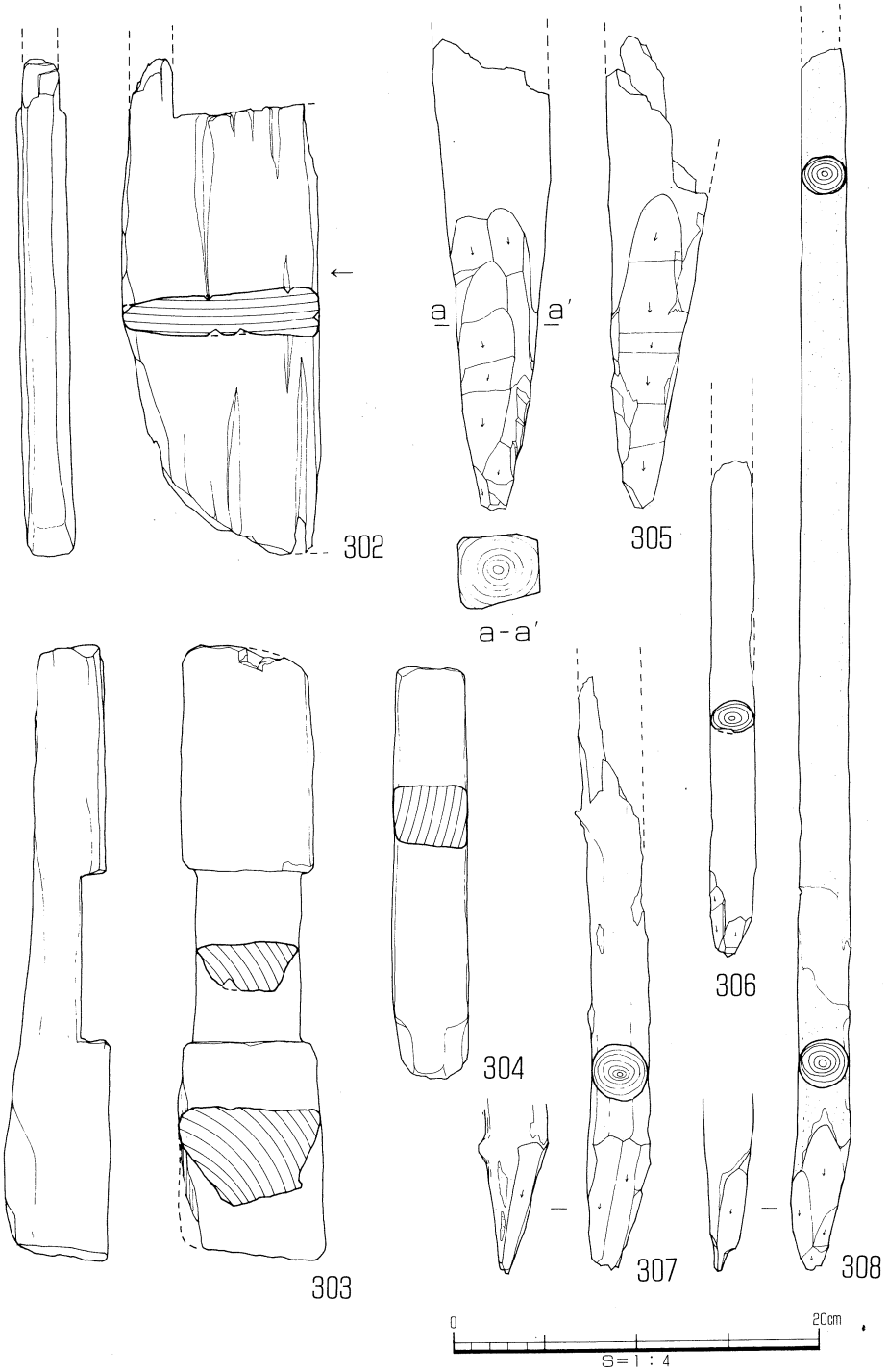
298はサブトレンチ内より出土している。割裂材を使用しており、現存長は18.8cmを測る。頭部は角を落として丸く削られ、身部の断面は長方形である。身部には直径１cmの孔を穿っている。300は割裂材を使用しており現存長11.7cm、現存幅7.6cm、厚さ2.4cmを測る。断面形が横長の六角形になる。板材に溝を切り込みほぞを穿ったものと考えるがよくわからない。

301は角材に溝を切り込み、そこにほぞを穿ったものと考えるがよくわからない。

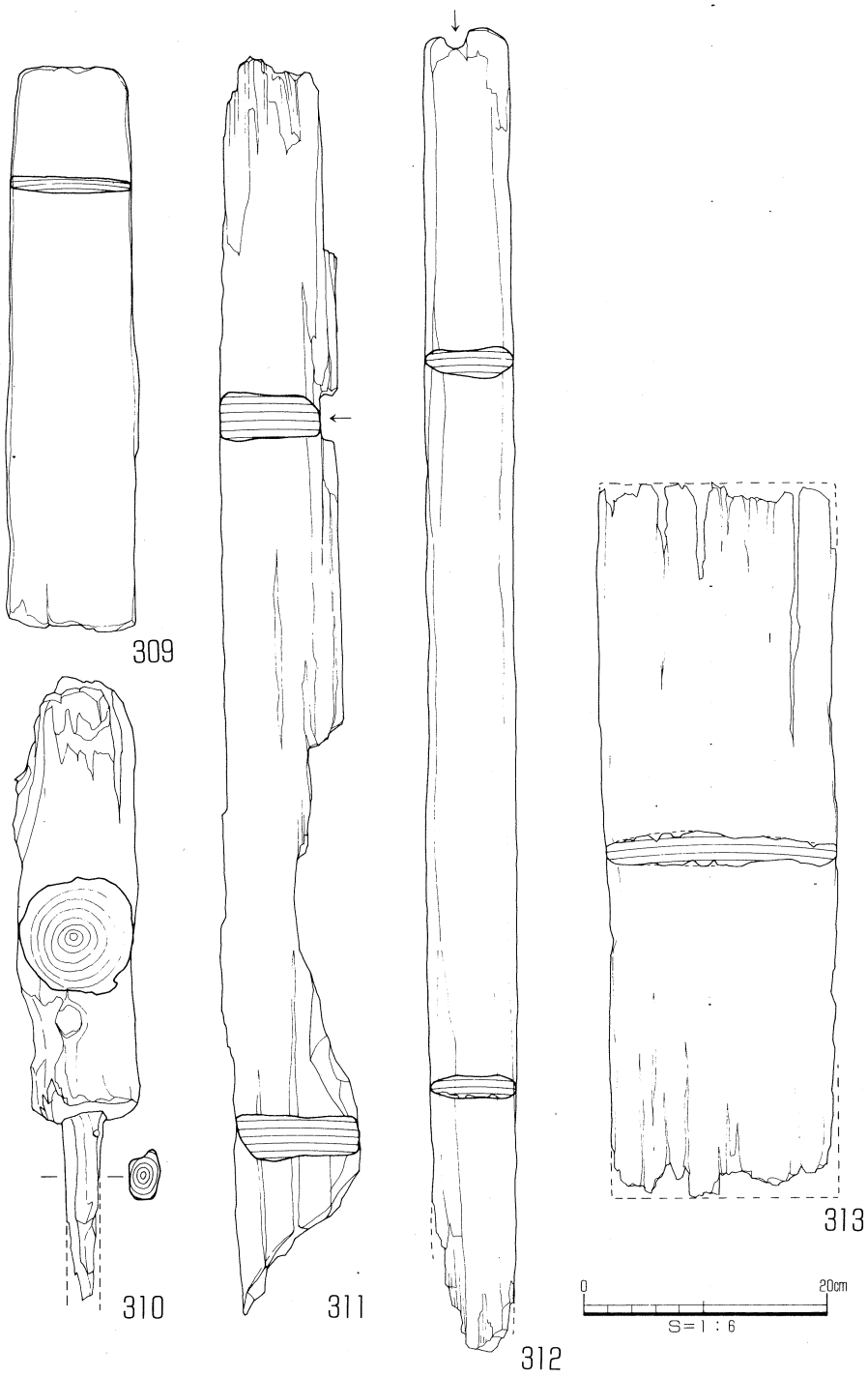
299は角材に溝を切り込み、そこにほぞを穿ったものである。



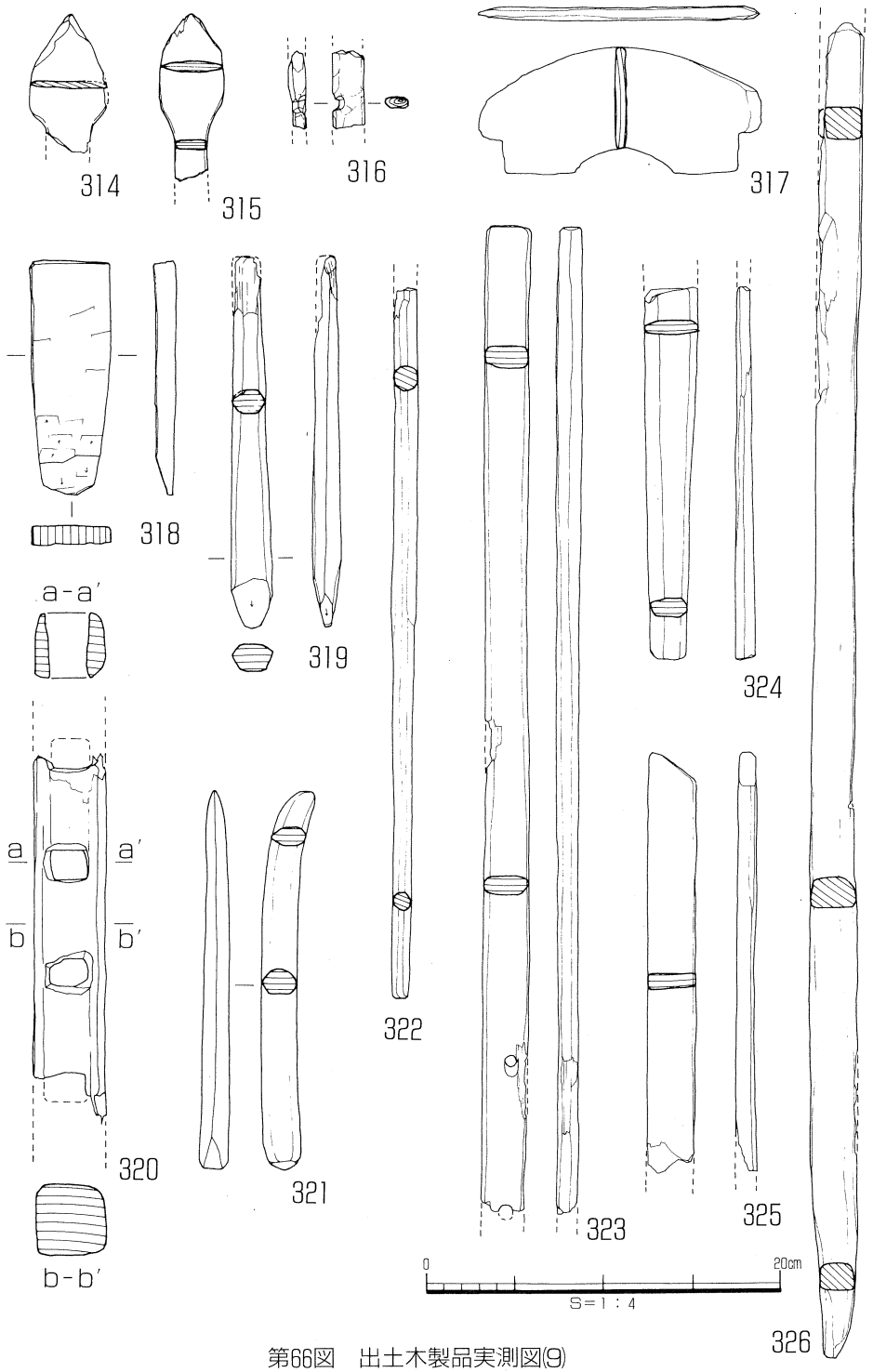
第63図　出土木製品実測図(6)



第64図　出土木製品実測図(7)



第65図　出土木製品実測図(8)



第66図　出土木製品実測図(9)

302は柾目材を使用しており、現存長27.6cm、現存幅10.6cm、厚さ2.5cmを測る。端部は丸味を帯びている。矢印の面が砕断面であるか疑問が残っており、楕円形の板材に方形のほぞをあけた形とも考えられる。

303は割裂材を使用しており長さ33.5cmを測る、断面形は台形を呈し、幅広の面に方形の溝を切り込んでいる。

304は3×4cmの角材の先端が使用のためか角がとれ丸くなったものである。

310はサブトレンチ内からの出土である。直径9cmの芯持ち材を使用しており現存長51.2cmを測る。他の部材のほそせに差し込む部分は断面方形に削り出している。

杭（305～308）4点

杭には直径6cmのものと3cmのものがあった。3cm以下の細い杭には芯持ち材を使用したものと、木の軸が中空のもの（空木（うつぎ））を使用した例がある。

305は直径6cmの芯持ち材の先端を4方向から削り出しており、断面形は方形になっている。307・308は直径3cmの樹皮を残した芯持ち材を利用しており、先端は片側から斜めに切り落としている。306は直径2cmの芯持ち材で断面形は楕円形をして呈しており、先端は3方向から削り出されている。

用途不明製品　A類

309・313の平面形態は長方形で、板目材を使用している。309は長さ47cm、幅10cm、厚さ1.5cmを測り、313は長さ58.9cm、幅19.3cm厚さ2.5cmを測る。用途としては、棚、蓋、しきり板などが考えられる他、建築材としての可能性も考えられる。加工痕はみられなかった。

312は板目材を使用しており、長さ108cm、幅7cm、厚さ2.5cmを測る。断面はいびつな楕円形を呈する。一方の端部は欠損しており、その原形はうかがえないが、もう一方は角を落とし丸味をもたせている。そして矢印で示した場所に抉りを入れている。

314・315は偏平な斜め材の先端を尖らせ人形の頭部のような形を呈する。

317は長さ16cm、幅5.7cm、厚さ0.7cmを測り、柾目材を使用している。平面形は半円形の両端を方形に、中心を半円形に切り落としたような形を呈している。類例はみつからなかった。

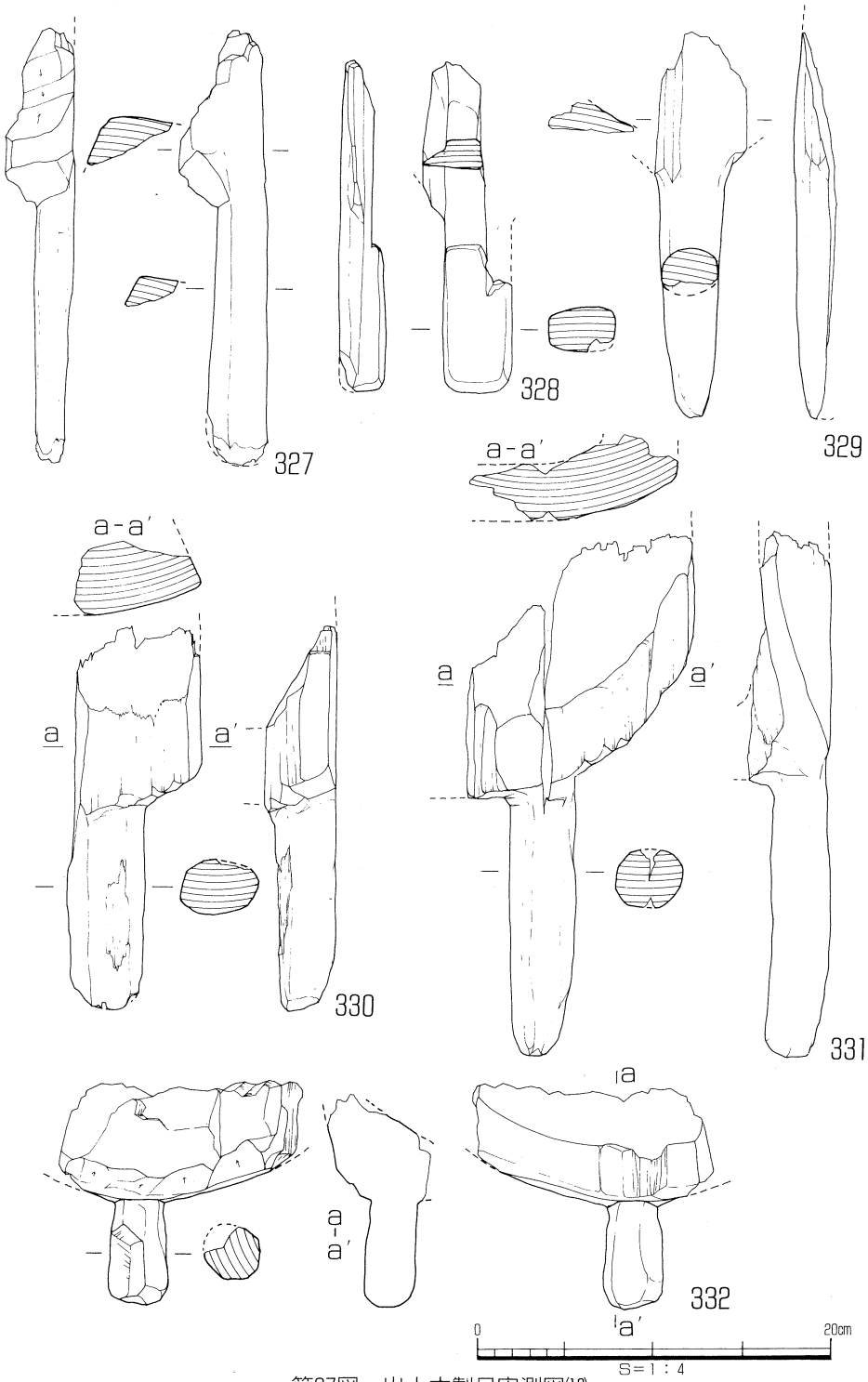
318は柾目材を使用しており、長さ13.4cm、幅4.4cm、厚さ1.1cmを測る。先端は片刀状。

319は板目材を使用しており、長さ21.3cm、幅2.3cm、厚さ1.5cmを測る。断面形は六角形で、やや幅広い部分を先端とし、両面から削り出している。ヘラのようなものと考える。

321は長さ21.6cm、幅2.0cm、厚さ1.5cmを測る。板目材を使用しており、先端が反り上がるが刀子のように柄の部分はなく丸くおさめられている。

322は現存長40.7cm、直径1.5を測る。面取りを施した棒状のものである。

326は割裂材を使用しており、現存長76.5cm、幅2.6cm、厚さ2.0cmを測る。断面は方形を呈しており、先端は尖らせている。



第67図　出土木製品実測図(10)

用途不明品Ｂ類

320は柾目材を使用しており現存長20.5cmを測る。断面形は正方形を呈しており、２cm×1.5cmのほぞを４cm間隔に４ヶ所穿っている。田下駄の側板の可能性を考えた場合、ほぞとほぞの間隔がやや狭いようである。

323は板目材を使用しており、現存長56.3cm、幅2.5cm、厚さ1.3cmを測る。断面形は角を落とした長方形になる。直径１cmの孔を斜めに60度に穿孔している。１孔目と２孔目の間隔は９cmほどあく。カセ巻きの板のような形態と考えるが、端部より第１孔目までの長さが43cmもひらく場合があるのか疑問が残る。

324は板目材を使用しており、現存長21.2cm、幅３～２cm、厚さ1.2～0.8cmを測る。下端は丸味をもち、上端はやや幅広く厚みを減じている。

325は板目材を使用しており現存長24cm、幅2.7cm、厚さ0.9～1.3cmを測る。断面形は長方形を呈している。324・325は材質が323と似ており、器表面はなめらかである。

327～332　６点は断面形が楕円形や、方形の柄がつくものである。用途としては桍物の槽、魚撈具のあかかき、農具のもみすくいなどの可能性を考えている。

327は板目材を使用しており現存長24.8、柄幅3.1cmを測る。柄部の1/3片と思われる。

328は板目材を使用しており、現存長19cm、柄部幅3.8cm、柄部厚2.5cmを測る。断面形は角のとれた長方形を呈している。柄の片面は、身部との境に段がついている。

329は板目材を使用しており現存長22cm、柄幅５cmを測る。柄部の断面形は円形をしており、端部は細まる。

330は板目材を使用しており、現存長21.7cm、柄4.5cm、柄厚さ11.1cmを測る。柄部の断面形はやや角のある楕円形を呈している。

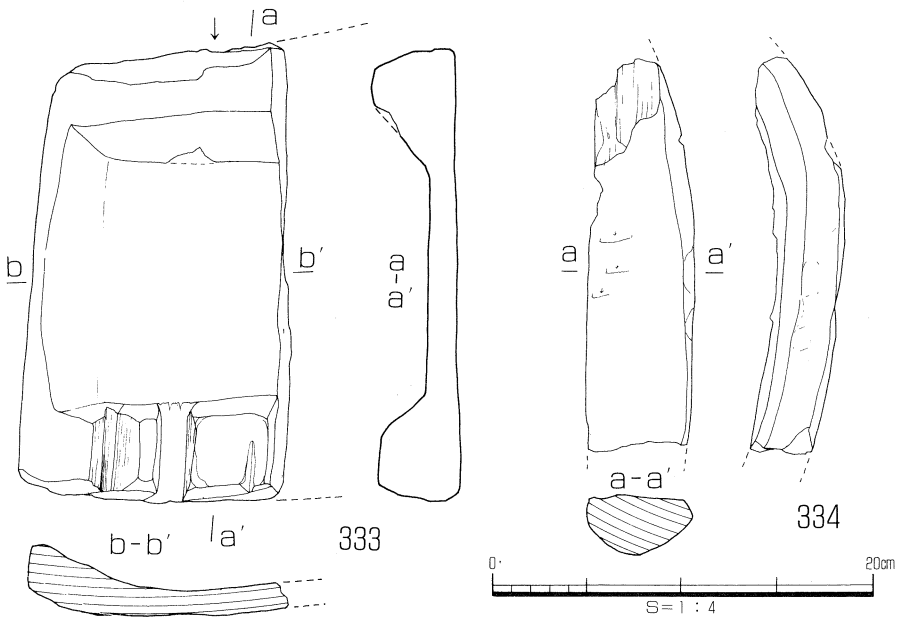
331は板目材を使用しており現存長29.5cm、柄長14.5cm、柄径４cmを測る。柄部の断面形は円形を呈している。身部の平面形態は隅丸方形、もしくは楕円形になると考えられている。

復元形態は２本の把手のつく槽を考えていたが、柄から身部の背面にかけては平坦になっており、別の形態であることがわかる。類例はみつけられなかった。

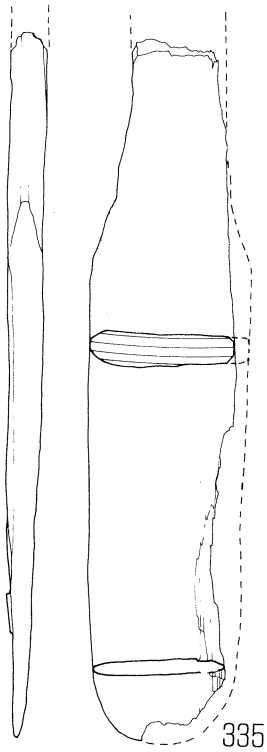
332は板目材を使用しており、現存長12cm、現在幅13cm、柄部長６cm、柄部径３cmを測る。柄部の断面形はやや角のある円形を呈しており、柄と身部との境には段がつくものである。

333は板目材を使用しており現存長24.5cm、幅13.5cm、厚さ1.5cmを測る。平面形をみると矢印の部分は斜めに広がっている。左側面は本来の面と考えられ、こちらには立ち上がりがない。方形の桍物の口縁部たち上がりが欠損していると考えていたが、類例はみつからなかった。

334は現存長20.5cm、幅5.7cmを測る。平面形が楕円もしくは円形を呈する桍物の口縁部片と考えているが、底部との砕断面が確認できず疑問が残る。



第68図　出土木製品実測図(11)



335は板目材を使用しており、現存長37.2cm、幅7.5cm、厚さは柄部で1.7cmを測る。鍬のようなものを考えている。柄部の断面形は長方形を呈しており、柄と身との境は次第に細められている。

石製品・その他　第69図・図版60図

石製品はⅤ層より出土したものである。

石包丁（339・340）

共に磨製。339は完形品で、長さ12.2cm、幅5.1cm、厚さ0.5cm、重さ64.5ｇを測る。外湾刃楕円形の片側を斜めにカットしており、刃部は両面から研ぎ出している。結晶偏岩製。340は現在長6.1cm、幅5.1cm、厚さ0.5cmを測る。直線刃半月形を呈する。刃部の研ぎ出しは片面から行われる。

石錘（341）

花崗岩製。現存長8.2cm、重量363ｇを測る。幅1.5～2.0cmの紐擦れ痕が残り、結び目は片面の中央に見られる。

用途不明製品（344）

二股で片面はくぼみ、腕の部分は面をもたせる。

磨石（345）

長辺10cm厚さ3.6cmを測る。広い面の片面のみ使用され平坦になる。

ガラス玉（336）

淡い青色を呈し、直径0.35cm、厚さ0.25cmを測る。穿孔は片方向から行われる。

石錐（338）

サヌカイト製で、重さ2.03gを測る。

石鏃(339)

サヌカイト製で、重さ0.62を測る。凹基式。

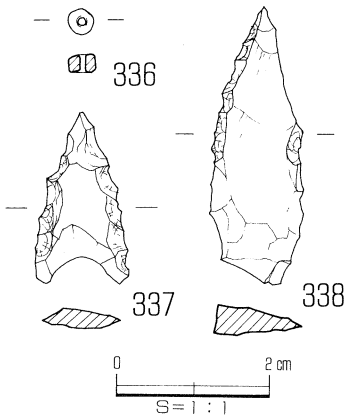
土製玉（343）

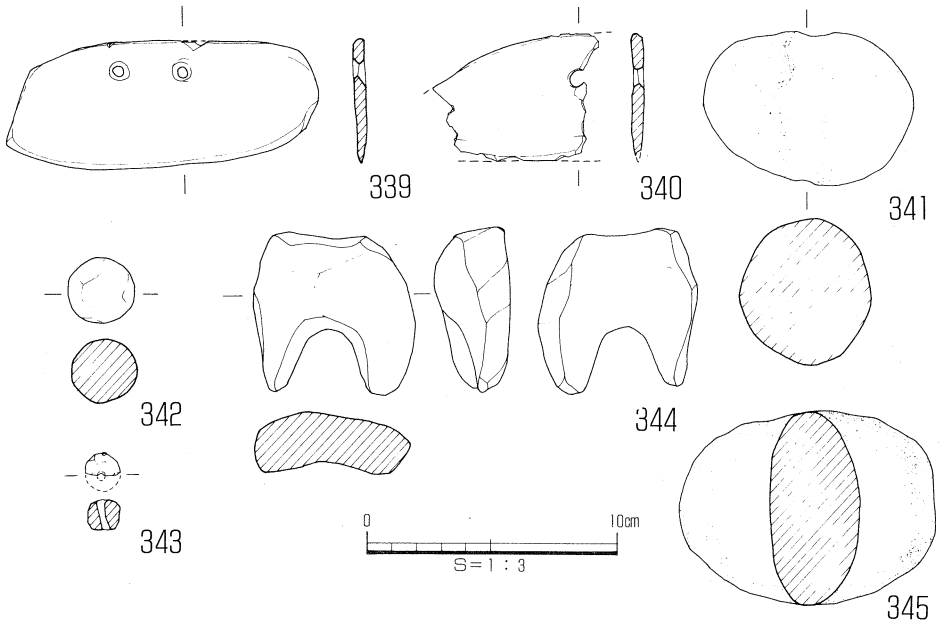
手づくねで成形されており上下をやや平坦につぶした様な形を呈する。直径は復元で1.5cm程度。

土製球（342）

掌の上で丸めて作られたと思われ凹凸があるが、丁寧になでられている。直径2.7cm、重さ19.3ｇを測る。

獣骨　図版60





第69図　出土石製品・その他実測図

ま と め

調査地は、来住舌状台地南西部の落ち際に当たる場所である。また同地は、昭和62年度に確認された方一町区画をなす回廊状遺構の南側地であり、来住廃寺の西方近接地である。

調査の結果、本調査地からは、回廊状遺構に付随する遺構は検出されなかった。しかし3区、最下段でこれらに関係すると思われる遺物が出土している。

まず、1・2区、上中段からは、土壙墓群19基を検出した。中から骨片を検出し人骨と認定された。副葬品としては寛永通宝をはじめ江戸初期の唐津焼きなどが出土した。この土壙墓群は隣接地に現在の墓地が存在しておりこれらとの関係も考えられる。

次に3・4区、上中段検出の溝（ＳＤ－37、38）は、いずれも瓦類の出土があり、同寺院の瓦類を投棄した可能性と合わせて、同寺院存続期の遺構として可能性があり、今後共伴する土器と合わせ周辺地の関係遺構との検討を要すものである。

3区、最下段では、堆積土の上位層から、来住廃寺の創建時から存続期にかけての各種瓦類を出土しており、同寺院の瓦類を本調査地に投棄したものと推定される。

同堆積土の下位層からは、前述の須恵器類と共に木簡状木製品、壺鐙、経巻具、下駄、目盛板、錘など各種の木器類や植物種子類が多量に出土した。このうち、須恵器類は、ＴＫ－209に平行する時期のものが大半を占めるがＴＫ－217に平行する時期のものが少量出土している。これらは今後周辺遺跡との関係を含め重要である。

最下位層からの弥生土器類出土は、一括性があることと合わせ愛媛大学構内遺跡（第3次調査）出土のものに対し、手法的に後出感があるが形態的に酷似するものがあり前者に続く時期のものとして注目される。

最後に調査にあたって指導、助言、分析等いただきました奈良国立文化財研究所・工楽善通室長、上原真人主任研究官、寺崎保広主任研究官、愛媛大学・下條信行教授、松原弘宣教授、また人骨については徳島大学名誉教授・山田正興氏、愛媛大学・四宮孝昭教授、植物種子類の分析については筑波大学歴史人類学院生・桃崎祐輔氏、来住台地出土瓦について丸山美和氏、また調査経費等について協力をいただきました三菱自動車工業株式会社等に感謝申し上げます。

西 尾 幸 則

出土遺物観察表

―― 凡　例 ――

(1)　遺物番号は本文中の通し番号である。

(2)　遺物観察表の各記載について。

種類　例）弥生→弥生土器、黒色Ａ→黒色土器（内黒）、須恵→須恵器、土師→土師器。

法量　単位；cm、（　）：復元推定値

手法　例）口→口縁部、天→天井部、つ→つまみ、底→底部、高→高台、胴→胴部、頸→頸部、脚→脚部、体→体部、他→特記した部位以外の部分、見→見込み、等。

色調　例）施→施釉部分、外→外面、内→内面

胎土　例）細砂粒→１～２㎜大の主に石英・長石などを示す。砂粒→２～３㎜と細砂粒より粒度が大きいもの。

焼成　例）◎→良好、○→良、△→やや甘い、×→不良。

(3)　登録番号は実測台帳に登録された番号である。

表１　出土遺物観察表　ＳＢ

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
1		SB-2	陶器	甕	体部	残高15.0 胴径(22.0)	体部は直っすぐ上方に伸びる。	ﾅﾃﾞ	格子ﾀﾀｷ	にぶい赤褐 細砂粒含 ◎	237

表２　出土遺物観察表　ＳＰ

（1）

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
2	28	SP-74	土師	鍋	口縁	口径(23.2)	口縁部に断面三角形の凸帯を付す。	口・ﾅﾃﾞ 体・煤付着	磨滅し不明	にぶい橙 細砂粒多含 ◎	229
3	28	SP-563	磁器	碗	口縁	口径(12.0) 残高(5.3)	体部丸味をもち口縁外方に開く。	施釉	施釉	乳白 精良 ◎	230
4		SP-175	陶器	坏	口縁	口径(10.0) 残高5.0	口縁外方に聞く。	施釉	施釉	灰白 細砂粒含 ◎	231
5	28	SP-443	土師	皿	口縁 1/2 欠	口径(9.3) 器高1.8 底径5.5	平底。 立ち上がりはやや丸味を帯びる。	体・磨滅 底・回転糸切り	ﾖｺﾅﾃﾞ	橙 細砂粒含 ○	239
6		SP-443	土師	皿	口縁 大幅欠	口径(10.0) 器高2.5 底径5.8	平底。 口縁は逆「八」字状に開く。	磨滅し不明	磨滅し不明	灰白 細砂粒含 ○	240
7	28	SP-173	陶器	皿	口縁	口径(13.5) 残高1.7	溝縁段皿。	施釉	施釉	淡緑 細砂粒含 ○	232
8	28	SP-181	陶器	皿	口縁 1/2 欠	口径(12.2) 器高3.0 底径5.0	溝縁段皿。 砂目積み。	高・回転糸切り→削り出し・体・施釉	施釉	緑灰 細砂粒含 ○	233

（2）

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
9	28	SP-505	青磁	碗(?)	底部 1/6 片	残高1.6 底径(6.0)	高台断面「コ」字状を呈す。内端接地する。	高・削り出し	施釉	ｵﾘｰﾌﾞ灰 細砂多粒含 ○	234
10	28	SP-273	須恵	坏身	1/8 片	口径(13.3)	器高低く、かえりはやや長い。	底・回転ﾍﾗ削り 口・ﾖｺﾅﾃﾞ	自然灰釉	灰白 細砂粒含 ○	235
11	28	SP-271	石製品	砥石		長辺24.3 短辺10.5 厚さ5.0	平面形はほぼ長方形。側面と表面を砥石として使用。			白 石材不明	238
12	28	SP-467	石製品	礎石	完形	長辺21.0 短辺19.5 厚さ7.5	平面形は正方形を呈す。			灰白 礫多含	236

表３　出土遺物観察表　ＳＤ

（1）

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
13	28	SD-1	白磁	皿	口縁 1/8	口径(14.0) 残高2.4	口縁部は外反する。	施釉	施釉	乳白 精良 ◎	212
14	28	SD-1	土師	坏	口縁 2/3 欠	口径(9.1) 器高4.0 底径6.4	平底。口縁は内湾気味に開く。	磨滅し不明	磨滅し不明	淡橙 細砂粒含 ○	211
15	28	SD-1	土師	鍋	口縁 1/8	口径(25.0) 残高4.0	口縁部に断面三角形の凸帯を付す。	磨滅し不明	磨滅し不明	にぶい橙 砂粒含 ○	210
16	28	SD-10	土師	坏	1/3	口径(10.0) 残高3.5 底径(6.0)	平底。口縁は内湾気味に開く。	磨滅し不明	磨滅し不明	浅黄橙 細砂粒含 ○	219
17	28	SD-10	土師	皿	1/6	口径(10.9) 残高2.4 底径8.0	平底。口縁は中位より外反する。	口・ﾖｺﾅﾃﾞ 底・磨滅し不明	口・ﾖｺﾅﾃﾞ	灰白 細砂粒含 ○	218
18	28	SD-35	土師	鍋	口縁部細片	口径(29.0) 残高5.0	口縁部に丸味を帯びた断面三角形の凸帯を付す。	口・ﾖｺﾅﾃﾞ 体・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 細砂粒多含 ◎	221
19	28	SD-35	備前	甕	口縁 1/6	口径(26.8) 残高15.0	口縁部折り返し玉縁状を呈す。	口・ﾖｺﾅﾃﾞ	口・ﾖｺﾅﾃﾞ 体・ﾊｹ状工具によるﾅﾃﾞ	灰 細砂粒多含 ○	225
20		SD-35	備前	甕	口縁 1/4	口径(39.0) 残高5.3	口縁部折り返し玉縁状を呈す。	口・ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	暗赤褐 砂粒多含 ○	226
21	28	SD-35	土師	坏	1/2	口径(9.0) 器高3.6 底径(6.2)	平底。口縁は内湾気味に開く。	口・磨滅し不明 底・ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	淡橙 細砂粒含 ◎	222
22	28	SD-35	陶器	皿	口縁部細片	口径(13.5) 残高2.0	溝縁。	口・施釉	口・施釉 体・ﾖｺﾅﾃﾞ	灰白 細砂粒含 ○	224
23	28	SD-35	陶器	皿	口縁部細片	口径(14.0) 残高1.8	口縁は内湾気味に開く。鉄釉による施文。	施釉	施釉	ｵﾘｰﾌﾞ緑 細砂粒含 ○	223
24	28	SD-37	須恵	高坏	脚	残高4.5	短脚。脚部は緩やかに開く。	磨滅し不明	磨滅し不明	灰白 細砂粒含 △	214
25	28	SD-38	須恵	甕	底部	底径(5.3)	やや丸味を帯びた平底。	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	灰白 細砂粒含 ○	216

（2）

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
26	28	SD-38	須恵	甕	口縁	不明	口縁は外方に大きく開き波状文を施す。5条1単位。	ヨコナデ→波状文	ヨコナデ	灰白 細砂粒含 ○	217
27	28	SD-12	陶器	碗	1/2	底径(4.8) 残高(4.5)	高台削り出し、断面台形を呈す。	高・削り出し 体・施釉	施釉	釉 オリーブ黒 細砂粒含 ○	220
28	28	SD-40	弥生	器台	口縁欠損	底径(10.0) 残高(7.0)	鼓形を呈する。	磨滅し不明	ナデ	浅黄橙 細砂粒含 ○	228

表4　出土遺物観察表　ST

（1）

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
29	30	ST-1	陶器	皿	完形	口径13.4 器高3.5 底径4.5	見込蛇目釉ハギ。松葉文様を施す。	口・施釉 体・ヨコナデ 底・削り出し	口・施釉 見・釉ハギ 砂目	釉 淡緑 精良 △	1
30	30	ST-2	陶器	碗	完形	口径10.7 器高7.1 底径4.8	口縁直っすぐに伸びる。	施釉	口・施釉 体・施釉 高・施釉	黄褐 精良 ○	2
31	31	ST-5	土師	皿	1/2	口径(10.2) 器高1.8 底径(5.6)	平底。口縁内湾気味に伸びる。	体・磨滅し不明 底・回転糸切り	ヨコナデ	淡橙 細砂粒含 ○	3
32	31	ST-5	土師	皿	ほぼ完形	口径10.3 器高2.1 底径6.6	底部丸味を帯びる。口縁内湾気味に伸びる。	体・磨滅し不明 底・回転糸切り	ヨコナデ	浅黄橙 細砂粒含 ○	4
33	30	ST-8	白磁	皿	ほぼ完形	口径14.2 器高3.3 底径8.1	底部中央が突出。高台内傾。口縁外反する。	施釉	施釉	乳白 精良 ○	5
34	30	ST-8	陶器	皿	口縁部	口径14.2 器高3.2 底径4.5	溝縁段皿。	口・施釉 底・削り出し	施釉 見・砂目	釉 乳白 精良 △	6
35	30	ST-8	陶器	皿	口縁部一部欠	口径13.5 器高3.0 底径5.0	溝縁段皿。	口・施釉 体・ヨコナデ 底・削り出し	施釉 見・砂目	釉 淡緑 砂粒含 ○	7
36	31	ST-9	土師	小皿	口縁部1/3欠	口径(7.5) 器高1.4 底径5.0	底部やや反る。底部との境に段がつく。	磨滅し不明	磨滅し不明	橙 細砂粒含 ○	8
37	31	ST-12	土師	皿	完形	口径9.6 器高2.0 底径5.4	平底。口縁は外方に開く。	磨滅し不明	ヨコナデ	淡橙 細砂粒含 ○	9
38	31	ST-13	磁器	小坏	完形	口径8.4 器高3.3 底径3.0	平底。口縁内湾気味に開く。	口・施釉 体・ヨコナデ 底・回転糸切り	施釉	釉 灰オリーブ 細砂粒多含 ○	10
39	31	ST-13	陶器	小坏	ほぼ完形	口径8.7 器高3.1 底径3.1	平底。口縁内湾気味に開く。	口・施釉 体・ヨコナデ 底・回転糸切り	施釉	灰オリーブ 細砂粒多含 ○	11
40	31	ST-13	陶器	碗	ほぼ完形	口径10.7 器高6.3 底径4.6	口縁内湾気味に開く。	口・施釉 体・ヨコナデ 底・削り出し	施釉	釉 暗オリーブ 精良 △	12
41	30	ST-14	陶器	皿	完形	口径13.0 器高3.4 底径5.1	口縁内湾気味に伸び端部が肥厚する。	口・施釉 体・ヨコナデ 底・削り出し	施釉 見・胎土目	釉 淡緑 精良 ○	13
42	30	ST-14	陶器	皿	完形	口径12.5 器高3.3 底径5.1	段皿。3本線の文様を3ヶ所に施す。	口・施釉 体・ヨコナデ 底・削り出し	施釉 見・胎土目	釉 灰白 細砂粒含 ○	14

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
43	32	ST-15	土師	皿	完形	口径10.1 器高2.0 底径6.2	平底。 口縁外方に開く。	口・ヨコナデ 底・ヘラ切り？	ヨコナデ	浅黄橙 細砂粒含 ○	17
44	32	ST-15	土師	皿	完形	口径10.0 器高2.0 底径5.9	平底。 底部との境に段がつく。	磨滅し不明	磨滅し不明	浅黄橙 細砂粒含 ○	18
45	32	ST-15	土師	皿	完形	口径10.0 器高1.8 底径5.6	平底。 口縁内湾気味に開く。	口・磨滅し不明 底・回転糸切り	磨滅し不明	灰白 細砂粒多含 ○	22
46		ST-15	土師	坏	完形	口径10.4 器高3.7 底径6.5	平底。 口縁内湾気味に開く。	口・磨滅し不明 底・回転ヘラ切り	磨滅し不明	淡赤橙 細砂粒多含 ○	15
47	32	ST-15	土師	坏	完形	口径10.1 器高3.6 底径8.0	平底。 口縁直立気味に立ち上がり端部で外反する。	磨滅し不明	磨滅し不明	浅黄橙 細砂粒多含 ○	16
48	32	ST-15	土師	坏	完形	口径10.0 器高3.6 底径6.6	平底。 口縁内湾気味に開く。	口・磨滅し不明 底・糸切り？	磨滅し不明	灰白 細砂粒含 ○	19
49	32	ST-15	土師	坏	完形	口径10.4 器高3.8 底径7.0	平底。 口縁内湾気味に開く。	口・ヨコナデ 底・ヘラ切り？	ヨコナデ	灰白 細砂粒含 ○	20
50	32	ST-15	土師	坏	完形	口径10.4 器高3.7 底径6.8	平底。 口縁内湾気味に開く。	口・磨滅し不明 底・糸切り？	磨滅し不明	灰白 細砂粒含 ○	21
51	31	ST-16	陶器	小皿	ほぼ完形	口径10.6 器高3.7 底径4.0	口縁内湾気味に伸びる。	口・施釉 体・ヨコナデ 底・削り出し	施釉	釉　灰オリーブ 細砂粒含 ○	26
52	31	ST-16	陶器	小皿	ほぼ完形	口径10.2 器高3.6 底径4.0	口縁内湾気味に伸びる。	口・施釉 体・ヨコナデ 底・削り出し	施釉	釉　灰オリーブ 細砂粒含 ○	28
53	31	ST-16	陶器	碗	ほぼ完形	口径11.5 器高6.1 底径4.7	天目茶碗。 丸味を帯びた体部。 口縁外反する。	口・施釉 体・ヨコナデ 底・削り出し	施釉	釉　緑褐色 精良 △	24
54	31	ST-16	陶器	小皿	ほぼ完形	口径10.9 器高3.0 底径3.6	口縁内湾気味に伸びる。	口・施釉 体・ヨコナデ 底・削り出し	施釉 見・胎土目	釉　灰白 精良 ○	27
55	30	ST-17	陶器	皿	完形	口径13.0 器高3.0 底径4.8	溝縁段皿。	体・ヨコナデ 底・回転糸切り→削り出し	施釉 見・砂目	釉　灰緑 精良 ○	23
56	30	ST-17	陶器	皿	ほぼ完形	口径12.1 器高3.1 底径4.1	溝縁段皿。	口・施釉 体・ヨコナデ 底・削り出し	施釉 見・砂目	釉　灰緑 精良 ○	25
57	30	ST-18	陶器	皿	完形	口径12.6 器高3.1 底径5.1	溝縁段皿。	口・施釉 底・削り出し	施釉 見・砂目	釉　灰白 砂粒含 △	29
58	32	ST-19	土師	皿	完形	口径9.6 器高1.8 底径6.0	底部やや反る。 口縁内湾気味に立ち上がる。	口・磨滅し不明 底・回転糸切り	磨滅し不明	淡橙 砂粒多含 ○	30
59	32	ST-19	土師	坏	ほぼ完形	口径12.0 器高3.4 底径6.5	平底。 口縁中位より外方に開く。	磨滅し不明	磨滅し不明	浅黄橙 細砂粒多含 ○	31

表５　出土遺物観察表　ＳＫ

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
60	29	SK-6	須恵	坏身	1/6	口径(13.0) 残高(3.2)	器高が低く、底部はなだらか。	口・ヨコナデ 底・回転ヘラケズリ	ヨコナデ	灰白 細砂粒含 ○	203
61	29	SK-6	瓦器	釜	口縁 1/6	口径10.0 残高(4.0)	口縁は短く直立する。 肩部に環付を貼り付ける。	ヨコナデ	口・ヨコナデ 体・ナデ	銀灰 細砂粒含 ○	202
62	29	SK-8	土師	皿	口縁 1/3 欠	口径7.7 器高(1.1) 底径5.2	平底。 口縁は短く内湾気味に伸びる。	口・ヨコナデ 底・回転糸切切り	ヨコナデ	橙 精良 ○	198
63	29	SK-8	土師	皿	口縁 大幅欠	口径(8.0) 器高(1.1) 底径5.0	平底。 口縁は短く内湾気味に伸びる。	口・ヨコナデ 底・回転糸切り	ヨコナデ	橙 精良 ○	199
64	29	SK-8	土師	皿	口縁 大幅欠	口径9.5 器高(1.5) 底径5.2	平底。 口縁は短く内湾気味に伸びる。	口・ヨコナデ 底・回転糸切り	ヨコナデ	橙 精良 ○	200
65		SK-8	土師	皿	底部	底径5.3	平底。	底・回転糸切り	ヨコナデ	橙 精良 ○	196
66	29	SK-8	土師	皿	ほぼ完形	口径9.6 器高(1.6) 底径5.6	平底。 口縁内湾気味に伸びる。	口・ヨコナデ 底・回転糸切り	ヨコナデ	橙 精良 ○	194
67		SK-8	土師	皿	口縁 欠損	残高(1.1) 底径5.5	平底。	底・回転糸切り	ヨコナデ	橙 精良 ○	195
68		SK-8	土師	皿	底部	底径(5.0)	平底。	底・回転糸切り	ヨコナデ	橙 精良 ○	197
69	29	SK-9	陶器	皿	底部 1/2	残高(1.5) 底径4.4	段皿。	底・削り出し	施釉	釉　淡緑 細砂粒含 ○	205
70	29	SK-16	備前	壺	1/3	口径14.2 残高(11.0)	口縁は短く直立し、端部は玉縁。 肩部に４本１条の波状文。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰 細砂粒含 ○	209
71	29	SK-16	土師	鍋	口縁 1/10	口径(34.0)	口縁貼り付ける。	口・磨滅し不明 体・刷毛目	口・磨滅し不明	にぶい橙 石粒多含 ○	208
72	29	SK-16	石製品	石臼	上臼 1/4 片	直径(23.0)	上臼片。 溝４条。			淡桃色 花崗岩	3011
73		SK-19	土師	坏	1/6	口径(11.4) 残高(2.5) 底径(7.8)	平底。 口縁は外方に開き、端部は細る。	磨滅し不明	磨滅し不明	にぶい橙 細砂粒含 ○	207
74	29	SK-21	須恵	坏	1/3	口径(13.4) 残高(4.2) 底径6.6	底部円盤状。 口縁は外方に開き、端部は外反する。	体・ヨコナデ 底・回転ヘラ切り→若ナデ	ヨコナデ	淡灰 細砂粒含 ○	192
75	29	SK-21	土師	坏	1/6	口径(13.3) 残高(3.0) 底径(7.0)	平底。 口縁は中位より外反する。 端は肥厚する。	磨滅し不明	磨滅し不明	橙 細砂粒含 ○	193
76	29	SK-22	弥生	壺形	口縁～肩部 1/4	口径20.4 残高(20.0)	口縁端上下に拡張→凹線４条→刻み目→円形浮文を施す。頸から肩にかけて貝殻による「ノ」字文。	口・施文 胴上半・ハケ目 下半・ヘラ磨き	口・ヨコナデ	紅褐 精良 ○	475

表6　出土遺物観察表　1区下段土器溜り

遺物番号	図版番号	取り上げNo.	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
77	33	No.14	弥生	甕	1/3	口径20.4 頸径19.1	断面三角形貼り付け口縁。口縁下に櫛描沈線文10条。 刺突文1条巡らす。	ナデ	ナデ	淡褐色 細砂粒含 ○	460
78	33	No.14	弥生	甕	1/4	口径20.2 頸径19.3	口縁短く屈曲させる。 胴部の張りは弱い。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	淡褐色 細砂粒含 ○	461
79	33	No.45	弥生	甕	1/3	口縁(25.2) 残高17.8	口縁部水平に伸び、口縁部下沈線文11条巡る。	刷毛目 →沈線11条	ナデ	淡黄橙 細砂粒含 ○	477
80	33	No.5	弥生	甕	1/3	底径7.0	平底。 体部外方に伸びる。	ミガキ	ミガキ →ナデ	淡明褐 精良ち密 ○	459
81	34	No.4	弥生	壺	口縁～頸部	口径19.0 頸径11.9	口縁外反する， 端部は面をもつ。 頸部沈線2条巡る。	ナデ →沈線2条	ヘラミガキ	淡黄 細砂粒含 ○	466
82	34	No.26	弥生	壺	口縁～頸部	口径18.5 頸径15.6	口縁外反。 端部丸味のある面。 頸部沈線5条巡る。	刷毛目→ ヘラミガキ →沈線	口・ヘラミガキ	淡褐 かなり粗 ○	469
83	34	No.30	弥生	壺	口縁～頸部	口径19.4 頸径11.8	口縁外反し水平に伸びる。内面に断面三角凸帯。頸部断面M字状の猫目凸帯貼り付け。	口・ナデ 刷毛目→ 凸帯	口・ナデ ヘラミガキ →凸帯	淡黄褐 砂多含 △	471
84		No.42	弥生	壺	口縁 1/10	口径(22.4) 残高10.8	口縁外反し水平に伸びる。端部刻目を施した後凹線文。頸部沈線文、内面に凸帯貼り付け。	ヨコナデ →施文	ヨコナデ→ 凸帯文押圧	橙 砂粒多含 ○	494
85	34	No.17	弥生	壺	口縁～肩部	口径14.7 頸径11.5	口縁外反。端部細る。 頸部凸帯風に削り出す。	刷毛目→ ヘラミガキ →凸帯	磨滅する。	淡黄 砂粒含 ○	467
86	34	No.11	弥生	壺	底部	底径6.8	平底。 体部外方に開きながら立ち上がる。	刷毛目→ ヘラミガキ	ナデ	淡紅褐 精良ち密 ◎	470
87		No.2 No.3	弥生	壺	胴部片	不明	貝殻により山形文、木葉文、弧文を施す。	ミガキ →施文	ナデ	橙褐色 精良ち密 ○	492
88			弥生	壺	胴部片	不明	ヘラ状工具により山形文を施す。	ミガキ →施文	ミガキ(?)	黄褐色 細砂粒含 ○	493
89		No.37	弥生	壺	口縁欠	胴径19.8 底径9.7	平底で円盤状。 胴部丸味を帯び立ち上がる。	ミガキ	ナデ	灰白 精良 ○	472
90	34	No.24	弥生	壺	ほぼ完形	口径9.3 器高16.1 底径6.6	平底で円盤状。 胴部丸味を帯びる。 口縁外反し端部は面をもつ。	磨滅し不明	磨滅し不明	茶褐 細砂粒含 ○	468
91	34	No.44	弥生	壺	1/2	口径9.0 器高11.3 底径4.9	平底で円盤状。 胴部丸味を帯びる。 口縁短く直立し、穿孔する。	ミガキ	ナデ	灰白 砂粒含 ○	474
92	34	No.40	弥生	壺	ほぼ完形	口径7.1 器高10.1 底径6.1	やや上げ底。 胴部丸味を帯びる。無頸。口縁部に2ヶ所穿孔する。	磨滅し不明	ヘラミガキ	褐色 砂粒多含 ○	473

表７　出土遺物観察表　３区下段土製品

（1）

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 焼成	登録番号
102	35	Ⅳ層№20	土師	椀	口縁 1/2 欠	口径15.0 器高6.2 底径6.8	高台高くしっかりしたつくり。口縁外反。内面底に木口痕。	体・ヨコナデ →ヘラミガキ 底・回転糸切り	体・ヨコナデ →ヘラミガキ 底・回転糸切り	灰白 精良 ◎	246
103	36	Ⅳ層№39	土師	椀	1/2	残高3.6 底径(6.6)	高台高く細い。	体・ヨコナデ 底・ヨコナデ	磨滅し不明	淡黄 細砂粒含 ○	258
104	36	Ⅳ層№54	土師	椀	底部 1/3	底径(6.8)	高台高くしっかりしたつくり。	底・ヨコナデ	底・ナデ →ヘラミガキ	淡桃黄 細砂粒含 ○	268
105	36	Ⅳ層№35	土師	椀	底部 1/2	底径(7.4)	高台高く細い。器壁薄い。	体・ヨコナデ→ヘラミガキ 底・回転糸切り	ヘラミガキ	浅黄 精良 ◎	253
106	36	Ⅳ層№40	土師	椀	底部	残高2.1 底径7.1	高台高く先細る。	体・ヨコナデ 底・回転糸切り	磨滅し不明	淡桃 細砂粒多含 ○	259
107	35	Ⅳ層	土師	椀	底部	底径6.4	高台高く先細る。	底・回転糸切り	底・ヘラミガキ	淡黄 精良 ◎	275
108	35	Ⅳ層№45	土師	椀	底部 1/4	底径(3.2)	高台高く先細る。	底・回転糸切り	底・刷毛目 →ヘラミガキ	白灰 精良 ◎	263
109	35	Ⅳ層№41	土師	椀	1/2	残高2.1 底径(6.4)	高台高く先細る。	体・ヘラミガキ	底・ヘラミガキ	浅黄 精良 ◎	261
110	36	Ⅳ層№34	土師	椀	1/2	底径(6.8)	高台低く細い。底部に板状の圧痕を看取。器壁は極薄い。	体・ヨコナデ→ヘラミガキ 底・回転糸切り	ナデ →ヘラミガキ	浅黄 精良 ◎	252
111	36	Ⅳ層№44	土師	椀	底部 1/3	残高3.3 底径(6.3)	高台高く先細る。	体・ヨコナデ→ミガキ 底・回転糸切り	ミガキ	淡黄 細砂粒含 ○	262
112	36	Ⅳ層№33	土師	椀	底部	底径7.0	高台高く断面方形。	体・ヘラミガキ 底・回転糸切り	ヨコナデ→ミガキ	灰黄 細砂粒含 ○	251
113	36	Ⅳ層№61	土師	椀	底部 1/3	残高3.8 底径6.4	高台低く断面方形。	体・ナデミ →ヨコナデ 底・回転糸切り	ヨコナデ→ミガキ	白灰 精良 ◎	272
114	35	Ⅳ層	土師	椀	口縁 大幅欠	口径(14.8) 器高5.8 底径5.6	高台低く断面方形。口縁やや外反。	体・ヨコナデ 底・回転糸切り	ヨコナデ	灰白 細砂粒多含 ○	276
115	36	Ⅳ層№30	土師	椀	底部	底径5.7	高台低く断面方形。	体・ヨコナデ 底・回転糸切り	ミガキ	灰白 精良 ○	248
116	36	Ⅳ層№64	土師	椀	底部	底径6.3	高台低く「ハ」字に開く。高台貼り付け部に刻み入れる。	体・ナデ 底・不明	工具による ナデ	灰褐 細砂粒含 ○	274
117	36	Ⅳ層№58	土師	椀	底部 1/5	底径(5.0)	高台低い。	体・指圧痕	ナデ	灰白 砂粒含 ○	270
118	36	Ⅳ層№37	土師	椀	底部 1/2	底径(6.3)	高台低い。	磨滅し不明	ナデ	淡橙 細砂粒含 △	256
119	36	Ⅳ層№62	土師	椀	底部	底径6.6	高台低く断面方形。	体・ヨコナデ 底・回転糸切り	ナデ	灰白 細砂粒含 ○	273

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
120	36	Ⅳ層No.60	土師	椀	底部	残高3.5	貼り付け高台。粘土外方にはみ出す。	ヨコナデ	ミガキ	灰白 細砂粒含 ○	271
121	37	Ⅳ層	土師	杯	1/3	口径13.8 器高3.5 底径(7.0)	口縁外方に大きく開く。	体・ヨコナデ 底・回転糸切り	ヨコナデ	灰白 細砂粒含 ○	281
122	37	Ⅳ層No.55	土師	杯	1/2	口径(14.0) 器高2.7 底径(6.2)	口縁外方に大きく開く。 口縁端部細る。	体・ヨコナデ 底・回転糸切り	ヨコナデ	灰白 精良 ○	269
123	37	Ⅳ層No.31	土師	杯	底部	底径7.2	平底。	底・回転糸切り	磨滅し不明	淡黄橙 細砂粒多含 ○	249
124	37	Ⅳ層No.32	土師	杯	底部	底径6.8	平底。	底・回転糸切り	底・ヨコナデ	灰白 細砂粒含 ○	250
125	37	Ⅳ層No.50	須恵（？）	椀	底部	残高2.6 底径7.4	底部円盤状。 体部外方に立ち上がる。	体・ヨコナデ 底・回転ヘラ切り未	ヨコナデ	白灰 細砂粒多含 ○	266
126		Ⅳ層No.48	土師	椀	底部	底径6.6	平底。	底・回転糸切り	底・ヨコナデ	灰白 細砂粒含 ○	264
127	37	Ⅳ層No.12	土師	皿	口縁 1/3 欠	口径8.2 器高1.5 底径6.0	口縁中位より外反する。	体・ヨコナデ 底・回転糸切り	ヨコナデ	淡黄橙 細砂粒含 ○	243
128	37	Ⅳ層No.36	土師	杯	底部	残高4.0 底径(8.0)	円盤高台で体部は外反。	体・ヨコナデ 底・回転糸切り	ヨコナデ	灰白 細砂粒含 ○	255
129	37	Ⅳ層No.38	土師	杯	底部	残高3.4 底径(7.0)	円盤高台で体部は外反	体・ヨコナデ 底・回転糸切り	体・ヨコナデ 底・ヨコナデ	灰白 細砂粒含 ○	257
130	38	Ⅳ層No.37	土師	こね鉢(?)	底部 1/2	残高8.0 底径10.4	平底。 体部丸味を帯び外方にのびる。	体・ヨコナデ 底・回転糸切り	体・ヨコナデ 底・ヨコナデ	褐灰 細砂粒含 ○	286
131	38	Ⅳ層No.4	黒色A	椀	口縁 1/8	口径(11.8) 残高3.4	体部は丸味を帯びる。 口縁若干外反する。	磨滅し不明	磨滅し不明	内・灰 外・灰白 細砂粒含 ○	241
132	38	Ⅳ層No.15	黒色A	椀	口縁 1/8	口径(14.4) 器高4.8	体部は丸味を帯びる。 口縁部肥厚し外反する。	ヨコナデ	刷毛目→ヘラミガキ	内・黒 外・灰白 細砂粒含 ○	244
133	38	Ⅳ層No.15	黒色A	椀	口縁 1/4	口径(16.6) 器高4.8	体部外方へ開く。 口縁細り外反する。	ヨコナデ	刷毛目→ヘラミガキ	内・黒 外・灰白 細砂粒含 ○	245
134	38	Ⅳ層	黒色A	椀	底部 1/3	残高5.0 底径(6.5)	高台高く内傾外反する。	ヨコナデ	刷毛目→ヘラミガキ	内・黒 外・灰白 細砂粒多含 ○	284
135	38	Ⅳ層	黒色A	椀	底部 1/3	残高1.9 底径(3.2)	体部は丸味を帯びる。 高台高く内面に沈線1条。	磨滅し不明	ミガキ	内・黒 外・灰白 細砂粒多含 ○	283
136	39	Ⅳ層	須恵	坏蓋	天井部細片	ツマミ 径(3.1) ツマミ 高1.3	つまみ上面山形。	ヨコナデ	ナデ	白灰 細砂粒含 △	1-10

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
137	39	Ⅳ層	須恵	坏蓋	天井部 1/3	ツマミ 径3.4 ツマミ 高0.6	つまみ上面はナデられ、低く突出する。	天・回転ヘラ切り(?) 他・ヨコナデ	ヨコナデ	灰 細砂粒含 ○	113
138	39	Ⅳ層№13	須恵	坏蓋	天井部 1/2	ツマミ 径2.7 ツマミ 高0.5	つまみ上面は窪む。	天・回転ヘラ切り未 他・ヨコナデ	ヨコナデ	オリーブ灰 細砂粒含 ◎	97
139	39	Ⅳ層	須恵	坏	底部 1/6	底径(11.0)	高台低く「ハ」字に開く。	底・回転ヘラ切り未 高・ヨコナデ	ナデ	灰白 細砂粒含 ○	114
140	39	Ⅳ層	須恵	坏	底部 1/8	底径(11.0)	高台低く断面方形。	底・回転ヘラ切り未 高・ヨコナデ	ヨコナデ	灰 細砂粒含 ○	109
141	39	Ⅳ層	須恵	坏	底部 1/3	底径(12.0)	高台低く内端を強くナデる。	底・回転ヘラ切り未 高・ヨコナデ	ヨコナデ→ナデ	灰 細砂粒含 ○	107
142	39	Ⅳ層	須恵	坏	口縁欠損	残高5.0 底径10.0	高台低く内端を強くナデる。 体部外方に開く。	底・回転ヘラ切り未 他・ヨコナデ	体・ヨコナデ 底・ヨコナデ→ナデ	褐灰 精良緻密 ◎	108
143	39	Ⅳ層	須恵	壺(?)	底部 1/3	底径(10.0)	脚は「ハ」字に開く。 内端を若干屈曲させ接地。	底・回転ヘラ切り(?)→ナデ 脚→ヨコナデ	底・ヨコナデ	灰白 細砂粒含 ○	111
144	39	Ⅳ層	須恵	壺(?)	底部 1/8	残高4.6 底径(12.1)	体部は丸味を帯びる。 脚は「ハ」字に開き内端を屈曲させ接地。	体・カキ目 脚・ヨコナデ 底・回転ヘラ切り未	体・ヨコナデ 底・指頭圧痕	褐灰 細砂粒含 ○	106
145	39	Ⅳ層	須恵	壺(?)	底部 1/8	残高6.5 底径(8.5)	体部は外反に伸びる。 脚は低く端部を強くナデる内端接地。	体Ⓛ・ヨコナデ Ⓡ・ヘラケズリ 脚・ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 細砂粒含 ○	105
146	39	Ⅳ層№29	須恵	高坏	脚部	残高7.7 底径(12.5)	脚裾は緩やかに開く。 端部丸くおさめる。 中位あたりに凹線２条。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰 細砂粒含 ○	99
147	40	Ⅳ層	須恵	高坏	坏部	口径(10.0) 残高3.5	坏中位と腰部に断面三角形の稜をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 細砂粒含 ○	103
148	40	Ⅳ層	須恵	擂鉢(?)	1/2	口径(14.2) 残高(14.0) 底径（9.4）	体部は中位で屈曲し、口縁は外反する。 端は平坦にナデられる。 凹線２条。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰 細砂粒含 ○	112
149	40	Ⅳ層	須恵	擂鉢(?)	底部	底径(15.3)	円盤状。	ナデ	ナデ	灰白 細砂粒含 △	104
150	40	Ⅳ層№59	須恵	甕(?)	口縁部 1/8	口径(28.2)	口縁外方に大きく開く。 口縁端は強くナデられ尖る。	ヨコナデ	ヨコナデ	白灰 細砂粒含 △	101
151	40	Ⅳ層№10	須恵	甕	口縁部 1/4	口径(15.4) 残高5.3	口縁外反し、端部を丸くおさめる。 内面に凹線２条。	口・ヨコナデ 体・平行タタキ→カキ目	口・ヨコナデ 体・同心円文タタキ	暗青灰 細砂粒含 ○	117
152	38	Ⅳ層№１	須恵	甕	口縁部 1/2	口径(17.0) 残高7.2	口縁外反し、端部を丸くおさめる。	口・ヨコナデ 体・平行タタキ→カキ目	口・ヨコナデ 体・同心円文タタキ	灰白 精良 ○	88
153	40	Ⅳ層	須恵	甕	口縁部 1/10	口径(23.8) 残高5.4	口縁は短く外反する。 端部はヨコナデによりやや尖る。	口・ヨコナデ 体・平行タタキ→カキ目	ヨコナデ	黄灰 細砂粒含 ○	141
154	40	Ⅳ層	須恵	短頸壺(?)	口縁部 1/3	口径(16.0) 残高2.9	口縁外反し、端部はヨコナデにより平坦におさめる。	口・平行タタキ→ヨコナデ	口・ヨコナデ	暗青灰 細砂粒含 ◎	119

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
155	39	Ⅳ層No.47	須恵	甕(?)	口縁部 1/10	口径(19.5) 残高3.5	口縁外反。端部は断面三角形を呈す。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰 砂粒含 ○	100
156	41	Ⅴ層No.132	須恵	坏蓋	ほぼ完形	口径14.1 器高4.3	天井部は丸味を帯び、なだらか。口縁は細く外方に伸びる。	天・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ 天・仕上げナデ	淡灰 細砂粒多含 △	32
157	41	Ⅴ層No.142	須恵	坏蓋	口縁大幅欠	口径(13.2) 器高3.6	天井部は丸味を帯び、なだらか。口縁は肥厚する。	天・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ 天・仕上げナデ	灰 砂粒多含 ○	48
158		Ⅴ層No.167	須恵	坏蓋	1/3	口径(14.2) 器高4.0	天井部は丸味を帯び、なだらか。口縁は肥厚する。	天・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ 天・仕上げナデ	暗灰 細砂粒含 ○	33
159	41	Ⅴ層	須恵	坏蓋	1/3	口径(13.6) 器高4.4	天井部は突出ぎみ。口縁は垂直に伸びる。	天・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ 天・仕上げナデ	黒灰 精良 ◎	35
160		Ⅴ層	須恵	坏蓋	1/4	口径(14.2) 器高4.4	口縁は細く垂直に伸びる。口縁内端はにぶい段がつく。	天・カキ目 口・ヨコナデ	ヨコナデ	灰 精良緻密 ◎	43
161	41	Ⅴ層	須恵	坏蓋	口縁 1/2 欠	口径13.2 器高4.3	天井部は丸味を帯び、なだらか。口縁は細く垂直に伸びる。	天・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ 天・仕上げナデ	外・灰 内・灰白 細砂粒含 ○	54
162		Ⅴ層	須恵	坏蓋	1/3	口径(13.0) 器高4.5	天井部ケズリ範囲狭く平坦。口縁垂直に伸びる。	口・回転切り(?)→ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ	灰 砂粒含 ○	52
163		Ⅴ層	須恵	坏蓋	1/8	口径(11.6) 器高3.8	天井部平坦。	口・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ	灰 精良 ◎	53
164		Ⅴ層	須恵	坏蓋	1/4	口径(12.4) 器高3.4	天井部平坦。	天・回転ヘラケズリ 天・ヨコナデ	ヨコナデ	黒灰 精良 ◎	41
165		Ⅴ層	須恵	坏蓋	1/3 上部欠	口径(12.4) 器高3.4	天井部若干突出する。口縁部細く外方に開く。	口・回転切り(?)→ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ	灰 砂粒多含 ○	36
166	41	Ⅴ層	須恵	坏身	1/2	口径(11.6) 器高4.1 受部径(14.4)	底部丸味を帯び、なだらか。かえりは長く内傾する。	口・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ	灰 細砂粒含 ○	74
167	41	Ⅴ層No.134	須恵	坏身	完形	口径11.7 器高4.0 受部径13.9	底部丸味を帯び、なだらか。かえりは長く内傾外反。受部内端に沈線が入る。	底・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	底・仕上げナデ	暗灰砂 細砂粒含 ○	62
168	41	Ⅴ層No.166	須恵	坏身	口縁 1/4 欠	口径12.4 器高4.1 受部径14.8	底部丸味を帯び、なだらか。かえりは長く内傾外反。受部内端に沈線が入る。	底・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	底・仕上げナデ	灰 砂粒多含 ○	65
169	41	Ⅴ層	須恵	坏身	3/4	口径11.8 器高3.5 受部径13.9	底部平坦。かえりは短く内傾外反。	底・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ 底・仕上げナデ	暗緑灰 細砂粒含 ○	73
170		Ⅴ層No.46	須恵	坏身	1/6	口径(12.5) 器高3.3 受部径(14.6)	底部平坦。かえりは長く内傾する。	底・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ	外・暗青 内・灰 細砂粒含 ○	57
171	41	Ⅴ層	須恵	坏身	2/3	口径12.6 器高4.1 受部径14.8	底部丸味を帯び、なだらか。かえりは長く内傾する。	底・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ	暗緑灰 細砂粒含 ○	77
172		Ⅴ層	須恵	坏身	1/2	口径11.6 器高5.1 受部径14.0	底部丸味を帯び、なだらか。受部の器壁厚く内端に沈線が入る。	底・雑な回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ	外・灰白 内・灰 精良 ○	69

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
173	41	Ⅳ層№118	須恵	坏身	1/2	口径(12.2) 器高3.3 受部径 (14.0)	底部平坦。 かえりは短く内傾外反。	底・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	底・仕上げナデ	暗灰 細砂粒多含 ○	61
174		Ⅴ層	須恵	坏身	1/3	口径(11.8) 器高3.5 受部径 (14.0)	底部丸味を帯び、なだらか。かえりは長く内傾する。受部は短く器壁が薄い。	底・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ	灰 細砂粒含 ○	75
175		Ⅴ層	須恵	坏身	1/2	口径(11.8) 器高3.2 受部径 (14.0)	底部丸味を帯び、なだらか。受部のつくりは華奢でかえりは短く内傾する。	天・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ	明青灰 細砂粒含 ○	72
176		Ⅴ層№112	須恵	坏身	1/2	口径(11.8) 器高2.8 受部径 (14.8)	底部平坦。 かえりは短く内傾外反。	天・回転ヘラケズリ(?) 口・ヨコナデ	ヨコナデ	青灰 精良 ○	60
177		Ⅴ層№142	須恵	坏身		口径(12.0) 器高4.8 受部径 (14.6)	底部丸味を帯び、なだらか。かえりは長く内傾する。	天・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ	灰 砂粒含 ○	63
178		Ⅴ層	須恵	坏身	口縁 2/3 欠	口径11.7 器高4.3 受部径14.0	底部丸味を帯び、突出する。　かえりは短く内傾する。	天・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ	明紫灰 細砂粒含 ○	67
179	41	Ⅴ層	須恵	坏身	口縁 3/4 欠	口径(10.6) 器高4.6 受部径 (12.6)	底部丸味を帯び、突出する。　かえりは長く華奢なつくり。	天・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	底・仕上げ ヨコナデ	明青灰 細砂粒含 ◎	70
180		Ⅴ層№88	須恵	坏身	口縁 大幅欠	口径(10.6) 器高3.9 受部径 (12.7)	底部丸味を帯び、突出する。かえりは短く内傾する。	天・回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ	暗青灰 細砂粒含 ○	58
181		Ⅴ層№109	須恵	坏身	1/4	口径(11.0) 器高4.4 受部径 (13.2)	底部丸味を帯び、突出する。かえりは短く内傾する。	底・雑な回転ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ	緑灰 細砂粒含 ○	59
182		Ⅴ層	須恵	坏身	1/3	口径(11.5) 器高3.1 受部径 (13.8)	底部平坦。 かえりは短く内傾外反する。	底・回転ヘラ切り未 口・ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 砂粒含 ○	78
183		Ⅴ層	須恵	坏身	口縁 7/8 欠	口径(10.2) 器高4.3 受部径 (11.2)	底部平坦。 受部のつくりは華奢。 端部は面をもたせる。	底・ヘラケズリ 口・ヨコナデ	ヨコナデ	明青灰 精良 ○	71
184	41	Ⅴ層	須恵	坏身	1/4	口径(9.4) 器高4.0 受部径 (11.5)	底部平坦。 かえりは短く内傾する。	底・回転ヘラ切り未 口・ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 砂粒含 ○	76
185	41	Ⅴ層	須恵	坏身	口縁 1/5 欠	口径10.0 器高4.0 受部径12.2	底部平坦。 かえりは短く内傾外反。 受部は面をもつ。	底・回転ヘラ切り未 口・ヨコナデ	ヨコナデ	青灰 砂粒含 ○	68
186	42	Ⅴ層№90	須恵	高坏	脚部	残高8.5 底径(11.7)	長脚で凹線を1条巡らす。裾は緩やかに広がる。内端部は下垂し端面に沈線を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰 細砂粒多含 ○	81
187	42	Ⅴ層№121	須恵	高坏	裾部 欠損	口径(14.0) 残高10.5 受部径 (16.0)	有蓋長脚3方2段透かし。脚柱に凹線を2条巡らす。	坏底・回転ヘラケズリ →ナデ 脚・ヨコナデ	ヨコナデ→仕上げナデ 脚・ナデ	灰 細砂粒多含 ○	82
188	42	Ⅴ層	須恵	高坏	坏部 大幅欠	口径(15.0) 器高13.6 受部径 (13.0)	無蓋長脚2方2段透かし。凹線を3条施す。裾端部は、ナデられ上下方向に尖る。	ヨコナデ	ヨコナデ	青灰 精良 ◎	79
189	42	Ⅴ層	須恵	高坏	裾部 欠損	残高5.6 底径(8.9)	短脚。 裾端部はナデられ面をもつ。	坏底・回転ヘラケズリ 他・ヨコナデ	ヨコナデ	灰 細砂粒含 ○	84
190	42	Ⅴ層№140	須恵	高坏	裾部 欠損	残高6.0 底径8.3	短脚。 裾端部はナデられ面をもつ。上端がつまみ出される。	坏底・回転ヘラケズリ 他・ヨコナデ	ヨコナデ	暗青灰 細砂粒含 ◎	83

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
191	42	Ⅳ層No.66	須恵	高坏	脚部	残高3.3 底径9.2	短脚。 裾部は水平方向に伸びる。端部は強くナデられ上下に拡張。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗青灰 精良 ○	80
192	42	Ⅴ層	須恵	短頸壺	1/3	口径(9.5) 残高7.6 頸径(8.9)	口縁は外反し端部は丸くおさめる。肩部に凹線と刺突斜線文を施す。	口・ヨコナデ 体・カキ目	ヨコナデ	灰 細砂粒含 ○	135
193	42	Ⅴ層No.110	須恵	短頸壺	口縁 2/3 欠	口径(9.4) 器高5.8 頸径(7.8)	口縁は外反し端部はナデて面をつける。肩部に凹線と刺突斜線文を施す。	口・ヨコナデ 体・カキ目	ヨコナデ	灰 細砂粒含 ○	138
194	42	Ⅴ層	須恵	短頸壺	口縁 1/3 欠	口径(13.0) 残高10.6 頸径(10.9)	口縁は外反し端部は丸くおさめる。肩部に凹線と刺突斜線文を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰 精良 ○	136
195	42	Ⅴ層No.149 No.157	須恵	短頸壺	底部 欠損	口径13.0 残高13.7 胴径20.9 頸径11.1	口縁は外反し、内端が屈曲する。　肩部張り、凹線と刺突櫛描文を巡らす。	口・ヨコナデ 体・格子タタキ →カキ目	上半・ヨコナデ 下半・同心円タタキ	紫灰 精良 ◎	143
196	42	Ⅴ層	須恵	壺	体部 1/2	残高11.0 胴径21.0	肩部張り、凹線と刺突斜線文を2条巡らす。	ヨコナデ	ヨコナデ	赤灰 精良 ◎	144
197	42	Ⅴ層	須恵		1/4	残高13.7 胴径(21.5) 頸径(11.2)	体部球形を呈す。 頸部は直立ぎみに立ち上がり凹線と波状文を巡らす。	頸・ヨコナデ 体・平行タタキ →カキ目	頸・ヨコナデ 体・同心円タタキ →ヨコナデ	灰赤 精良 ◎	146
198	42	Ⅴ層No.115 No.156	須恵	平瓶	体部	残高13.0 胴径19.0	体部偏球形を呈す。 天井部円盤状粘土で塞ぐ。肩部に凹線を2条巡らす。	上半・カキ目 中位・ナデ 下半・回転ヘラケズリ	ヨコナデ	明青灰 細砂粒含 ○	142
199	42	Ⅴ層	須恵	横瓮	口縁 1/2	口径(12.0) 残高5.5 頸径(10.0)	口縁は直立ぎみに立ち上がる。口縁端は丸くおさめる。	口・ヨコナデ 体・格子タタキ	口・ヨコナデ 体・同心円タタキ	暗青灰 砂粒含 ○	174
200	44	Ⅴ層	須恵	瓶類	口縁 1/2	口径(7.5) 残高8.2 頸径(4.7)	口縁端は細く内湾ぎみ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰 細砂粒含 ○	179
201	44	Ⅴ層	須恵	瓶類	口縁 1/4	口径(7.0) 残高5.5 頸径(5.5)	口縁部内湾する。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 細砂粒含 ○	181
202	44	Ⅴ層	須恵	瓶類	口縁 1/6	口径(6.6) 残高4.2 頸径(5.5)	口縁内湾ぎみに開く。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 細砂粒多含 ○	182
203	44	Ⅴ層	須恵	瓶類 (?)	口縁 1/3	口径(10.2) 残高6.9 頸径(7.5)	口縁内湾ぎみに開く。 凹線2条巡らす。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 細砂粒含 ○	180
204	44	Ⅴ層	須恵	瓶類	口縁 1/4	口径(8.0) 残高6.8 頸径(5.1)	口縁部外方に開く。 ヘラ記号。 凹線2条巡らす。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 細砂粒多含 ○	183
205	44	Ⅴ層	須恵	横瓮 (?)	口縁 1/5	口径(12.1) 残高3.4 頸径(10.5)	口縁外反。 端部玉縁状。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒灰 砂粒含むが精良 ○	129
206	44	Ⅴ層	須恵	横瓮	口縁 1/3	口径(13.4) 残高3.8 頸径(11.7)	口縁外反。 端部玉縁状。	ヨコナデ	口・ヨコナデ 体・同心円タタキ	灰 精良 ○	130
207	44	Ⅴ層	須恵	横瓮 (?)	口縁 1/3	口径(15.2) 残高4.3 頸径(11.2)	口縁内湾ぎみ。	ヨコナデ	施釉し不明	オリーブ灰 砂粒含 ○	131
208	44	Ⅴ層No.108	須恵	横瓮	側部 1/2	残高4.8	体側部を円盤状粘土で塞ぐ。	カキ目	体・同心円タタキ	灰白 細砂粒含 ○	152

（7）

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
209	44	Ⅳ層No.111	須恵	横瓮	体側部	残高2.4	体側部を円盤状粘土で塞ぐ。	カキ目	体・同心円タタキ	灰白 細砂粒含 ○	153
210	44	Ⅴ層	須恵	横瓮	側部 1/4	胴径(17.2)	体部平坦。	カキ目	体・同心円タタキ 側・ナデ	灰白 細砂粒含 ○	154
211		Ⅴ層	須恵	横瓮 (?)	約 1/2	残高11.0 頸径(12.8)	体部丸味帯びなだらか。	体・格子タタキ 側・カキ目	口・ヨコナデ 体・同心円タタキ	オリーブ黒 細砂粒含 ○	151
212	44	Ⅴ層No.117 No.159	須恵	瓶	口縁部 欠損	残高10.2 胴径9.2 頸径4.4	体部球形を呈す。 肩部に凹線1条巡る。	底・回転ヘラケズリ 他・ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 細砂粒多含 ○	184
213	44	Ⅴ層	須恵	甕(?)	体部	残高6.0	体部丸味を帯びなだらか。鉤状の把手が付く。	体・カキ目 他・ナデ	同心円タタキ	灰白 細砂粒含 ○	176
214	43	Ⅴ層No.141	須恵	提瓶	頸部 欠損	体部径20.8 体部厚12.5	鉤状の把手が付く。 円盤状粘土で塞ぐ。	カキ目	ヨコナデ	青灰 細砂粒含 ○	150
215	45	Ⅴ層	須恵	甕	口縁 1/4	口径(17.2) 残高6.0 頸径(16.0)	口縁外反、断面方形。	口・ヨコナデ 体・平行タタキ→カキ目	口・ヨコナデ 体・同心円タタキ	灰オリーブ 細砂粒含 ○	123
216	45	Ⅴ層	須恵	甕	口縁 1/6	口径(14.0) 残高7.0 頸径(12.4)	口縁外反、断面方形。 内端は屈曲し尖る。	口・ヨコナデ 体・平行タタキ→カキ目	口・ヨコナデ 体・同心円タタキ→ヨコナデ	灰白 細砂粒含 ○	120
217	45	Ⅴ層No.151	須恵	甕	口縁 1/12	口径(15.8) 残高11.7 頸径(14.7)	口縁外反、断面方形。 内端は屈曲し尖る。 肩部が張る。	口・ヨコナデ 体・平行タタキ→カキ目	口・ヨコナデ 体・同心円タタキ	暗青灰 細砂粒含 ○	118
218	45	Ⅴ層	須恵	甕	口縁 1/10	口径(19.0) 残高6.8 頸径(18.0)	口縁直立気味に立ち上がる。 口縁端を屈曲させる。	口・ヨコナデ 体・平行タタキ→カキ目	口・ヨコナデ 体・同心円タタキ	褐灰 精良 ○	89
219	45	Ⅴ層No.101	須恵	横瓮 (?)	口縁 1/8	口径(13.4) 残高5.4 頸径(12.7)	口縁外反。 端は丸くおさめ内端を屈曲させる。	口・ヨコナデ 体・平行タタキ→カキ目	口・ヨコナデ 体・同心円タタキ→ナデ	灰白 細粒含 ○	125
220	45	Ⅴ層	須恵	甕	口縁 1/4	口径(15.2) 残高5.0 頸径(13.8)	口縁直立ぎみに立ち上がる。口縁端丸くおさめる。	口・ヨコナデ 他・平行タタキ→カキ目	口・ヨコナデ 体・同心円タタキ	黄白 細砂粒含 ○	122
221	45	Ⅴ層	須恵	甕	口縁 1/6	口径(17.4) 残高8.9 頸径(16.1)	口縁直立ぎみに立ち上がる。口縁端丸くおさめる。	口・ヨコナデ 体・平行タタキ→カキ目	口・ヨコナデ 体・同心円タタキ	暗青灰 細砂粒多含 ○	91
222	45	Ⅴ層	須恵	甕	口縁 1/3	口径(18.0) 残高6.0 頸径(16.1)	口縁外方に開く。 端部肥厚させ丸くおさめる。	口・ヨコナデ 体・平行タタキ→カキ目	口・ヨコナデ 体・同心円タタキ	灰白 細砂粒含 ○	90
223	45	Ⅴ層	須恵	甕	口縁 1/4	口径(19.8) 残高9.6 頸径(16.6)	口縁直立ぎみに立ち上がる。端部肥厚させ丸くおさめる。	口・ヨコナデ 頸・カキ目	口・ヨコナデ 体・同心円タタキ	灰白 精良 ○	92
224	45	Ⅴ層No.83	須恵	甕	口縁 1/3	口径(22.0) 残高9.6 頸径(19.0)	口縁外反。 端部肥厚させ丸くおさめる。	口・ヨコナデ 体・平行タタキ→カキ目	口・ヨコナデ 体・同心円タタキ	灰 精良 ○	96

（8）

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
225	47	Ⅶ層No.3	弥生	壺	ほぼ 完形	口径8.6 器高24.7 底径7.6	底部平底。胴部中位で張る。口縁外反。 端部を拡張し、凹線を施す。頸部やや短い。	上位・刷毛目 下位・ヘラ磨き	上位・ナデ 中位・刷毛目 下位・ナデ	淡黄褐 砂粒含 ◎	436

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
226	47	Ⅶ層No.71	弥生	壺		口径13.0 器高33.7 底径8.9	平底。 胴部中位で張る。 口縁内端沈線１条。	上位・刷毛目 中位・ヨコヘラ磨き 下位・タテヘラ磨き	上位・ナデ 中位・刷毛目	淡黄褐 砂粒含 ◎	439
227	47	Ⅶ層No.72	弥生	壺	胴部上～口縁 1/2 欠	口径13.4 器高34.8 底径9.0	平底。胴部やや上位で張る。口縁端部拡張させ凹線３条巡らせる。	上位・刷毛目 中位・ヨコヘラ磨き 下位・タテヘラ磨き	上位・ナデ 中位・刷毛目 下位・ヘラ削り	淡茶褐色 細砂粒含 ◎	441
228	47	Ⅶ層No.102	弥生	壺	1/2	口径11.4 器高27.8 底径8.8	平底。胴部中位で張る。口縁端部拡張させ凹線３条巡らせる。	上位・刷毛目 中位・ヨコヘラ磨き 下位・タテヘラ磨き	上位・ナデ 中位・刷毛目	茶褐 精良ち密 ◎	447
229	48	Ⅶ層No.102	弥生	壺	2/3	口径10.2 器高27.1 底径9.5	平底。 胴部中位で張る。 肩部に３重弧文を施す。	上位・刷毛目 中位・ヨコヘラ磨き 下位・タテヘラ磨き	上位・ナデ 中位・刷毛目	赤褐色 細砂粒含 ◎	446
230	48	Ⅶ層No.71	弥生	壺		口径13.9 器高34.0 底径8.3	底部やや丸味を帯びる頸部やや長く、斜線文を施す。口縁内端に凹線１条巡る。	上位・刷毛目 中位・ヨコヘラ磨き 下位・タテヘラ磨き	上位・ナデ 中位・刷毛目 下位・ヘラ削り	淡褐 砂粒含 ◎	440
231	48	Ⅶ層No.77	弥生	壺	完形	口径11.7 器高31.9 底径9.2	底部やや丸味を帯びる。頸部に斜線文を施す。胴部やや上位で張る。	上位・刷毛目 中位・ヨコヘラ磨き 下位・タテヘラ磨き	上位・ナデ 中位・刷毛目 下位・ヘラ削り	乳黄灰褐 砂粒含 ◎	444
232	48	Ⅶ層No.74	弥生	壺		口径13.5	口縁端上方に屈曲し、凹線文を施す。肩部にタテの３重弧文４ヶ所に施す。	磨滅する。	ナデ	暗褐 砂粒多含 ◎	443
233	49	Ⅶ層No.8	弥生	壺	口縁～肩部	口径10.3	口縁端にぶい沈線。 頸部に凸帯文押圧、刻み施す。肩部に波状文を施す。	頸・刷毛目 他・ナデ（？）	ナデ	淡褐色 細砂粒金雲 ◎	435
234	49	Ⅶ層No.8	弥生	壺	1/2	口径12.0 器高(23.3)	口縁部拡張し凹線文を施す。 胴部中位で張る。	上位・刷毛目 中位・ヨコヘラ磨き 下位・タテヘラ磨き	上位・ナデ 中位・刷毛目 下位・ヘラ削り	黄褐 砂粒含 ◎	437
235	49	Ⅶ層No.8	弥生	壺	1/3	口径18.2 器高46.2 底径9.1	底部充塡した上底。 口縁外反する。 頸部凸帯を付す。肩部山形文、刺突文を施す。	上位・刷毛目 中位・ヨコヘラ磨き 下位・タテヘラ磨き	頸・ヨコヘラ磨き 上位・ヨコヘラ磨き 下位・刷毛目	茶褐 砂粒含 ◎	438
236	49	Ⅶ層No.73	弥生	壺		口径16.0 残高24.3	胴部大きく張る。口縁部肥厚し、外端に刻みを施す。頸部断面三角の凸帯を付す。	口・ヨコナデ 体・ヨコヘラ磨き	口・ヨコナデ 胴・ヨコヘラ磨き	灰褐色 砂粒含 ◎	442
237	49	Ⅶ層No.79	弥生	壺	1/2	口径18.2 器高42.6 底径11.1	口縁「く」字に屈曲させ端部に凹線施す。 平底。	上位・磨滅する 下位・タテヘラ磨き	上位・磨滅する 下位・ナデ	乳褐 細砂粒含 ○	445
238	50	Ⅶ層No.78	弥生	甕	ほぼ完形	口径18.4 器高28.5 底径5.2	平底。胴部やや上位で張る。口縁部端に凹線を巡らす。肩部に「ノ」字文を施す。	上位・刷毛目 下位・タテヘラ磨き	下位・ヘラ削り	橙 細砂粒含 ◎	432
239	50	Ⅶ層No.71	弥生	甕	ほぼ完形	口径20.8 器高31.5 底径7.2	平底。 口縁部端に凹線施す。	上位・刷毛目 下位・タテヘラ磨き	上位・刷毛目 下位・ヘラ削り	橙 砂粒多含 ◎	430
240	50	Ⅶ層	弥生	甕	ほぼ完形	口径21.3 器高36.3 底径6.8	平底。胴部やや上位で張る。口縁部端に凹線を１条巡る。肩部に「ノ」字文を施す。	上位・刷毛目 下位・タテヘラ磨き	上位・刷毛目 下位・ヘラ削り	橙 細砂粒多含 ◎	425
241	50	Ⅶ層	弥生	甕	1/2 欠	口径17.4 器高27.1 底径5.9	平底。 口縁部端面ににぶい凹線文。	上位・刷毛目 下位・タテヘラ磨き	上位・刷毛目	橙～黒褐 細砂粒多含 ○	429
242		Ⅶ層No.72	弥生	甕	ほぼ完形	口径18.4 器高28.5 底径5.2	平底。 口縁部端面ににぶい凹線文。	上位・刷毛目 下位・タテヘラ磨き	上位・タテヘラ磨き 下位・ナデ	橙 細砂粒含 ◎	431
243		Ⅶ層No.73	弥生	甕	3/4	口径20.0 器高21.8	口縁端面凹線文を１条巡らす。	上位・刷毛目 下位・タテヘラ磨き	上位・刷毛目 下位・ヘラ削り	橙 細砂粒含 ◎	442

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量（cm）	形態	手法 外面	手法 内面	色調、胎土 燃成	登録番号
244	51	Ⅶ層	弥生	甕	口縁欠	器高(33.2) 底径8.0	底部上げ底。 上位で胴部張る。	タテヘラ磨き	上位・ナデ 下位・ヘラ削り →ナデ	褐色 砂粒含 ○	422
245	51	Ⅶ層	弥生	甕	ほぼ完形	口径16.8 器高19.1 底径6.6	底部高い上げ底。 口縁「く」字状。	上位・刷毛目 下位・摩滅する	口・ナデ 上位・刷毛目 下位・ヘラ削り	褐～黒褐 砂粒含 ○	420
246	51	Ⅶ層	弥生	甕	ほぼ完形	口径14.1 器高22.9 底径4.9	底部高い上げ底。 口縁「く」字状。	上位・刷毛目 下位・刷毛→ナデ	上位・刷毛目 下位・ヘラ削り →ナデ	褐～黒褐 細砂粒多含 ○	423
247	51	Ⅶ層№6	弥生	高坏	ほぼ完形	口径20.2 器高16.7 底径11.0	坏部口縁内傾し、外面に凹線文。脚柱沈線5条、脚裾凹線2条、端部凹線2条。	ヘラ磨き	坏上位・刷毛目 中位・ヘラ磨き 脚柱・ナデ	橙褐 やや粗 △	451
248	52	Ⅶ層№114	弥生	匙	完形	長径15.2 短径12.6 器高 4.0	平面形は楕円形を呈す。長辺側を折り、片口状につくりだす。	刷毛目	刷毛目	褐 細砂粒多含 ◎	457
249	51	Ⅶ層№48	弥生	高坏	脚部	底径8.7	脚柱4方に矢羽透しを施す。端部上方にはね上げ、にぶい凹線を文を施す。	ナデ	ナデ	淡黄褐 やや粗 △	451
250	52	Ⅶ層	弥生	高坏	口縁部1/5	口径13.3	口縁内傾し、外面ににぶい凹線文を施す。	刷毛状工具によるナデ	ナデ	淡褐 細砂粒含 ○	449
251	52	Ⅶ層№9	弥生	鉢	口縁部	口径27.4	口縁「く」字状に屈曲する。	口・ナデ 体・摩滅し不明	口・ヨコナデ 体・摩滅し不明	紅褐 細砂粒含 ○	455
252	52	Ⅶ層№103	弥生	鉢	2/3	口径14.9	口縁短く外反する。	ヘラ磨き	ナデ？	暗灰 細砂粒含 ×	453
253	52	Ⅶ層	弥生	ミニチュア鉢(?)	底部欠	口径7.1	口縁内湾する。	指押え	指押え	淡灰褐 細砂粒含 ○	454
254	52	Ⅶ層№10	弥生	鉢	完形	口径10.0 器高10.6	底部尖り、口縁は細く短く外方に屈曲させる。	上位・ヘラ磨き 下位・刷毛目	上位・ヘラ磨き 下位・刷毛目 →ナデ	淡黄褐色 精良ち密 ◎	458
255	52	Ⅶ層	弥生		1/2	現存幅 8.3 現存長 7.9 厚さ 1.9	長方形の粘土板の隅をつまみ出し、穿孔する。	指押えやナデ		暗褐色 細砂粒多含 ○	456
256	52	Ⅷ層	弥生	壺	1/2	口径10.3 器高25.9 底径7.5	底部円盤状。胴部中位で張る。頸部直立気味に伸び口縁外反する。	ミガキ（？）	中位・刷毛目	黄灰 精良ち密 ○	448

表8　出土遺物観察表　3区下段木製品

(1)

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	品目	部位	法量(cm) 全長	幅	厚さ	その他	木取り	備考	登録番号
257	53	Ⅳ層	木器	木簡状製品		(5.9)	2.0	0.2		板目材(?)		2053
258	53	Ⅳ層	木器	木簡状製品		11.3	2.4	0.4		不明		2055
259	53	Ⅳ層	木器	斎串		(11.8)	2.8	0.5		板目材		2054

（2）

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	品目	部位	法量(cm) 全長	幅	厚さ	その他	木取り	備考	登録番号
260	53	Ⅳ層No.17	木器	斎串（？）		19.5	4.1	0.4		板目材		2006
261	53	Ⅳ層No.6	木器	椀	底部1/2	底径(9.5)		(0.8)		不明		2002
262	53	Ⅳ層No.19	木器	曲物	底部	底径9.5		0.8		板目材	一部焼け焦げ	2007
263	53	Ⅳ層No.9	木器	下駄	ほぼ完形	(18.3)	(6.5)	2.3		板目材	腐食が進む	2003
264	53	Ⅳ層	木器	用途不明A	ほぼ完形	14.6	5.0	3.2		割裂材	焼け焦げ	2052
265	53	Ⅳ層	木器	用途不明B		(6.5)	3.0	2.0		不明		2051
266	53	Ⅳ層No.1	木器	用途不明A		(34.5)	7.2	1.0		板目材	穿孔２穴	2001
267	53	Ⅳ層No.16	木器	用途不明A		(49.0)	(3.6)	径(3.0)		芯持ち材	ほぞ穴	2005

（3）

268	54	Ⅴ層No.31	木器	木簡状製品		(10.4)	3.3	0.4		板目材		2011
269	54	Ⅴ層No.80	木器	木簡状製品		(7.3)	2.9	0.3		板目材		2027
270	54	Ⅴ層No.112	木器	木簡状製品（？）		(7.5)	(2.3)	0.3		板目材		2032
271	54	Ⅴ層No.103	木器	木簡状製品（？）		(11.0)	3.1	0.4		板目材？		2031
272	54	Ⅴ層No.35	木器	木簡状製品		(15.5)	(2.2)	(0.3)		板目材		2013
273	54	Ⅴ層No.113	木器	斎串		(7.4)	2.6	0.5		板目材(?)		2033
274	54	Ⅴ層	木器	斎串（？）		(10.5)	2.1	0.4		板目材(?)		2057
275	54	Ⅴ層	木器	斎串		(6.8)	2.6	0.3		板目材		2056
276	54	Ⅴ層	木器	木鏃	鏃身	(7.0)	2.0	径1.6		不明		2050

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	品目	部位	法量(cm) 全長	幅	厚さ	その他	木取り	備考	登録番号
277	58	V層No.43 No.44	木器	曲物	側板	(14.6)	(3.6)	0.3		板目材		2016
278	58	V層No.22	木器	桍物（？）		(18.0)	(15.0)	0.8		板目材	腐食が進む	2009
279	55	V層No.50 No.55	木器	把手付容器	口縁	(33.0)				板目材		2019
280	55	V層No.23	木器	下駄(右足)	前壺部欠損	(16.0)	9.3	前歯3.8	後歯3.0	板目材(?)	後端焼け焦げ	2010
281	55	V層No.135	木器	下駄(右足)		21.5	8.6	1.7		柾目材		2041
282	55	ﾄﾚﾝﾁ内	木器	下駄(左足)		25.0	前12.0	1.4		不明		2065
283	55	V層No.36	木器	下駄	1/3	(18.5)	(3.6)	歯1.3		板目材	腐食が進む	2072
284	58	V層No.137	木器	木錘	1/2	6.0		径7.2		芯持ち材		2044
285	58	V層No.69	木器	木錘	1/2	(6.4)	7.5	径5.6		割裂材		2024
286	56	V層No.70	木器	横槌	ほぼ完形	29.3	6.0	5.2	身6.0	板目材	腐食が進む	2025
287	56	V層No.126	木器	横槌	完形	32.5		身径6.0	柄径2.9	芯持ち材		2036
288	56	V層	木器	目盛板		79.0	5.5	2.0		板目材		2048
289	57	V層No.86	木器	膝柄（？）	ほぼ完形	57.0	台座部2.7	柄径2.0	台座部長13.0	芯持ち材	腐食が進む	2028
290	56	V層No.56	木器	カセ置き		(40.0)	3.7	1.6		板目材		2021
291	56	V層	木器	経巻具		(18.0)	5.0	0.9	柄長8.0	柾目材(?)		2061
292	56	V層	木器	経巻具	紐掛部	(11.0)	(2.2)	1.7		柾目材(?)		2060
293	56	V層No.133	木器	経巻具		(21.3)	(3.5)	1.0		柾目材(?)		2039
294	56	V層	木器	経巻具（？）		(22.5)	5.0	0.9		柾目材(?)		2062

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	品目	部位	法量(cm) 全長	幅	厚さ	その他	木取り	備考	登録番号
295	56	V層No.124	木器	経巻具	紐掛部欠損	(36.0)	3.2	径3.0		柾目材		2035
296	54	V層No.37	木器	壺鐙		(22.0)	(10.8)	9.0		半裁材		2014
297	54	V層No.21	木器	壺鐙	踏込部	直径14.5		6.5		半裁材		2008
298	57	トレンチ内	木器	部材		18.8	頭部(6.0)	頭部3.0 柄部1.5		割裂材	ほぞ穴	2063
299	59	V層No.86	木器	部材		(11.7)	8.3	5.6		柾目材(?)		2029
300	59	V層	木器	部材		(11.7)	(7.6)	2.4		板目材(?)		2046
301	59	V層	木器	部材		(10.5)	(7.1)	3.6		板目材(?)		2049
302	59	V層No.73	木器	部材		(27.6)	(10.6)	(2.5)		板目材		2073
303	59	V層	木器	部材	ほぼ完形	33.5	7.5～5.5	5.5～2.6		割裂材		2058
304	59	トレンチ内	木器	部材		(22.5)	4.0	3.5		柾目材(?)		2068
305	59	トレンチ内	木器	杭		(26.3)	径6.0			芯持ち材		2080
306	59	V層No.98	木器	杭		(27.3)	2.5	径2.0		芯持ち材		2076
307	59	V層	木器	杭		(33.0)	径3.0			芯持ち材		2083
308	59	V層No.127	木器	杭		(68.0)	径2.8～2.5			芯持ち材		2085
309	59	V層No.28	木器	部材		(47.0)	(10.0)	1.5		板目材		2074
310	59	V層No.111	木器	部材		(51.2)	径9.0			芯持ち材		2090
311	59	トレンチ内	木器	部材		104.5	9.5	3.7		板目材	一部焼焦げる。	2089
312	59	V層No.51	木器	用途不明B		(108.0)	7.0	2.5		板目材		2086

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	品目	部位	法量(cm) 全長	幅	厚さ	その他	木取り	備考	登録番号
313	59	V層No.20	木器	用途不明A		(58.9)	19.3	2.5		板目材		2087
314	54	V層No.33	木器	用途不明B		(7.8)	4.2	0.4		不明		2012
315	54	V層No.113	木器	用途不明B		(9.5)	上部12.0 下部0.8			板目材		2034
316	54	V層No.67	木器	用途不明B		(4.4)	1.8	1.0		芯持ち材		2023
317	58	V層No.132	木器	用途不明A	完形	16.0	5.7	0.7		板目材		2038
318	59	V層	木器	用途不明A		13.4	4.4	1.1		柾目材		2047
319	59	V層No.98	木器	用途不明A	ほぼ完形	21.3	2.3	1.5		板目材		2077
320	59	V層No.136	木器	用途不明B		(20.5)	4.0	4.0		板目材	ほぞ穴	2042
321	58	V層No.136	木器	用途不明A	完形	21.6	2.0	1.5		板目材		2043
322	58	V層No.127	木器	用途不明A		(40.7)	径1.5			板目材(?)	穿孔2穴	2079
323	58	V層	木器	用途不明B		56.3	2.5	1.3		板目材		2084
324	58	V層	木器	用途不明B		(21.2)	3.0～2.0	1.2～1.8		板目材		2081
325	58	V層	木器	用途不明B		24.0	2.7	0.9～1.3		板目材		2082
326		V層No.127	木器	用途不明B		(76.5)	2.6	2.0		割裂材		2078
327	57	V層No.47	木器	把手付容器		(24.8)	(5.4)	把手長 14.6	把手径 3.1	板目材		2017
328	57	V層No.133 No.136	木器	用途不明B		19.0	柄3.8	柄2.5		板目材		2040
329	57	V層	木器	用途不明B		(22.0)	5.0		柄長13.5	板目材		2045
330	57	トレンチ内	木器	用途不明B		(21.7)	(7.1)	柄径4.5	柄長11.1	板目材		2067

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	品目	部位	法量(cm) 全長	幅	厚さ	その他	木取り	備考	登録番号
331	57	ﾄﾚﾝﾁ内	木器	用途不明B		(29.5)	(12.5)	柄径4.0		板目材		2066
332	57	V層No.138	木器	用途不明B		(12.0)	(13.0)	把手長 6.0	把手径 3.0	板目材		2071
333	58	ﾄﾚﾝﾁ内	木器	用途不明B		(24.5)	(13.5)	(1.5)		板目材		2070
334	58	V層No.58	木器	用途不明B	口縁(?)	(20.5)	(5.7)	(3.2)		不明		2022
335	56	ﾄﾚﾝﾁ内	木器	用途不明B		(37.2)	(7.5)	(1.7)		板目材		2064

表9　出土遺物観察表　3区下段石製品・その他

遺物番号	図版番号	出土地点	種類	器種	器部	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量	石材	備考	登録番号
336	60	V層	ガラス	小玉	完形	直径0.35		0.25	0.05		淡青色	3009
337	60	V層	石器	石鏃	完形	2.3	1.2	0.25	0.62	安山岩		3006
338	60	V層	石器	石錐	完形	3.7	1.25	0.4	2.03	安山岩		3005
339	60	V層	石器	石包丁	完形	12.2	5.1	0.5	64.5	結晶片岩		3001
340	60	V層No.6	石器	石包丁	約1/2	(6.1)	(5.1)	0.5	(28.5)	結晶片岩		3002
341	60	V層No.7	石器	石錘	完形	8.2	6.0	径5.2	363	花崗岩		3003
342	60	V層	土製品	球	完形	直径2.7			19.3	——	色調灰褐 胎土 細砂粒含 焼成 ○	3007
343	60	V層No.168	土製品	玉	1/2	直径1.5		1.25	(1.29)	——	色調灰褐 胎土 細砂粒含 焼成 ○	3008
344	60	V層No.5	石器	用途不明	完形	6.5	6.4	2.1	115	不明		3004
345	60	表採	石器	叩石（？）	完形	10.1	7.8	3.6	335	アップライト（？）		3010

表10　来住廃寺遺跡　15次調査　出土軒瓦一覧表

登録番号	報告番号	出土地点	種類	型式	瓦頭残度	色調	胎土	焼成
1023	—	ＳＤ－２	軒平瓦	Ⅲ	１／３	淡灰色	ち密	硬
1008	—	ＳＤ－35　No.２	軒丸瓦	Ⅲ	鋸歯部片	淡灰白色	ち密	軟
1021	—	ＳＤ－38	軒平瓦	Ⅲ	１／５	灰色	ち密	硬
1026	—	ＳＤ－38	軒平瓦	Ⅳ	１／３	淡灰色	ち密	硬
1006	—	ＳＤ－39	軒丸瓦	Ⅱ	中房のみ	灰色	ち密	やや軟
1012	—	ＳＫ－16　No.１	軒丸瓦	Ⅵ	２／３	乳白色	ち密	不良
1018	—	ＳＫ－18　No.１	軒平瓦	Ⅲ	１／３	灰色	ち密	硬
1024	—	１区下中央ﾄﾚﾝﾁ内	軒平瓦	Ⅲ	１／４	淡灰色	ち密	やや軟
1030	100	１区下ＷＸ-48･49	軒平瓦	Ⅴ	２／５	灰色	やや密	硬
1015	—	３区中ＷＸ－36	軒丸瓦	Ⅵ	１／４	灰色	やや密	軟
1022	98	３区中ＹＡ－36	軒平瓦	Ⅲ	１／２	灰色	ち密	硬
1027	—	３区中ＷＸ-36･37	軒平瓦	Ⅳ	１／３	灰色	ち密	硬
1033	101	３区中Ｘ－34	軒平瓦	Ⅵ	完形	淡灰白色	やや密	不良
1004	—	３区下Ａ－36	軒丸瓦	Ⅱ	１／３	灰色	ち密	硬
1031	—	３区下Ａ－36	軒平瓦	Ⅴ	１／６	淡灰色	やや密	硬
1001	93	３区下　Ⅳ層　No.５	軒丸瓦	Ⅰ	１／３	灰色	ち密	硬
1007	95	３区下　Ⅳ層　No.15	軒丸瓦	Ⅲ	完形	淡灰白色	やや密	硬
1009	96	３区下　Ⅳ層　No.57	軒丸瓦	Ⅳ	１／３	暗灰色	やや密	硬
1010	97	３区下　Ⅳ層　No.55	軒丸瓦	Ⅵ	外区外縁欠損	灰色	やや密	軟
1028	—	３区下　Ⅳ層　No.36	軒平瓦	Ⅳ	１／５	灰色	ち密	硬
1025	99	３区下　Ⅳ層　No.43	軒平瓦	Ⅳ	３／５	淡灰色	ち密	硬
1013	—	３区下　Ⅳ層	軒丸瓦	Ⅵ	１／４	暗灰色	やや密	軟
1003	94	３区下　表採	軒丸瓦	Ⅱ	完形	灰色	やや密	硬
1034	第74図	３区下　表採	軒平瓦	Ⅵ	１／２	淡灰白色	やや密	硬
1016	第74図	４区中ＤＥ-24･25	軒平瓦	Ⅱｂ	１／４	灰色	ち密	軟
1017	—	４区中Ｄ－28・29	軒平瓦	Ⅲ	１／４	灰色	ち密	硬
1020	—	４区中Ｄ－33・31	軒平瓦	Ⅲ	１／４	灰色	ち密	硬
1035	—	４区中Ｄ－32・33	軒平瓦	Ⅵ	１／４	黒褐色	やや密	不良
1011	—	４区下Ｃ－32・33	軒丸瓦	Ⅵ	２／３	淡灰色	やや密	硬
1019	—	４区下Ｄ－28・29	軒平瓦	Ⅲ	１／２	乳白色	ち密	不良
1032	—	４区下Ｃ－32・33	軒平瓦	Ⅴ	１／８	灰色	ち密	硬
1014	—	表採	軒丸瓦	Ⅵ	１／４	灰色	やや密	軟
1002	—	Ｌ－４	軒丸瓦	Ⅰ	１／10	灰色	ち密	硬
1005	—	出土地不明	軒丸瓦	Ⅱ	１／８	灰色	ち密	硬

Ⅳ　考　　察

来住廃寺出土瓦について

丸　山　美　和

1．はじめに

来住廃寺は松山市教育委員会が、昭和52年より第２次発掘調査を開始し、現在では第20次発掘調査が行われている。しかし、第２・３次、第14次発掘調査[1]以外については詳細な報告は成されていない状況である。近年、来住廃寺を含む久米地域では来住遺跡・久米高畑遺跡等で、官衙関連と考えられる遺構が検出され、７・８世紀代の地方に於ける政治的要所として注目され始めている。

また、来住廃寺での回廊状遺構は年代的に寺院に付属するものではないことが明らかとなり、寺院建立以前に斎明天皇の行宮があったのではないかという学説が出されている。[2]

今回は主に来住廃寺第２～18次までの出土瓦（軒丸瓦67点・軒平瓦45点・丸瓦・平瓦・隅木蓋・熨斗瓦）を中心に、過去の報告を補足する形で、主にその型式・製作技法について述べてみることとする。

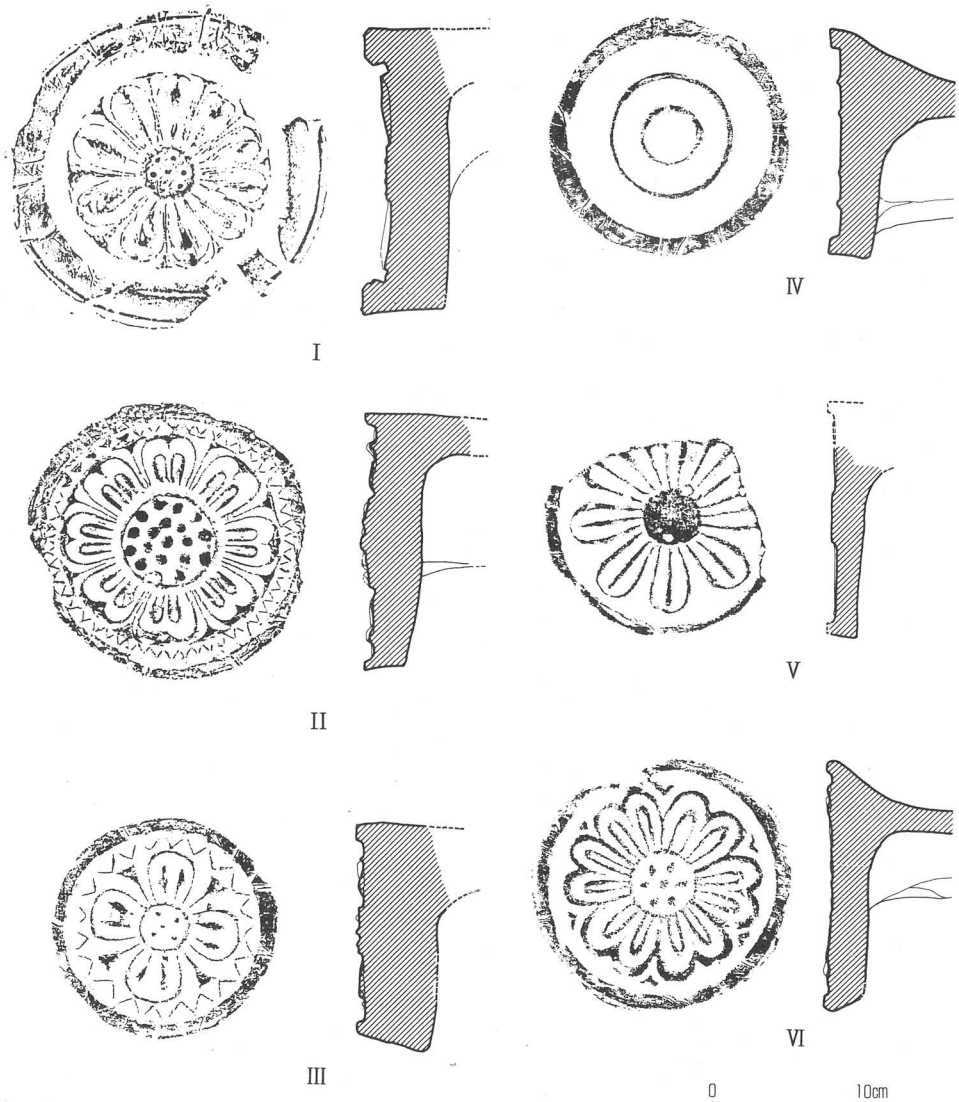
2．軒丸瓦

軒丸瓦はⅠ～Ⅵ型式に分類することができ、７世紀中葉～11世紀末にかけての時期に位置づけられる。

Ⅰ型式　来住廃寺創建瓦とされる単弁（素弁）10葉蓮華文軒丸瓦で、重弧文軒平瓦（後述の軒平瓦Ⅰａ・Ⅰｂ型式）と組み合う。瓦当文様についての特徴は、破片からは11弁とも考えられるほど、その蓮弁の幅は2.4～2.9㎝と差があり、均等に割り付けられたものではない。蓮弁中央に一条の凸線をもつが、笵が摩耗し不明瞭になるにつれ、凸線は次第にナデ消される傾向にある。中房蓮子は１＋６、外縁に圏線を一重めぐらす。

Ⅰ型式には丸瓦が接合された状態での出土例がなく、その接合が充分でなかった事が窺える（第72図―１）。まず製作当初のものについては、丸瓦筒部先端の加工は認められず、瓦当表面に直接接合され、内面（凹面側）にのみ少量の接合粘土が当てられる。後に接合部分にカキ目を施したものが現れ、接合方法に工夫が見られてくる（第72図―２）。瓦当と丸瓦部の接合位置については丸瓦の頂点と瓦当の位置関係を正確に判断できる個体が少ないため、一定の規則性をもっていたか否かについての充分な成果は得られなかった。

Ⅱ型式　複弁８葉蓮華文軒丸瓦で、７世紀末～８世紀初頭に位置づけられる。中房蓮子が



第70図　来住廃寺出土軒丸瓦

1＋7＋11、内区に蓮華文を配し、外区との境に界線をもたない。外区に線鋸歯文（49単位）を飾るが、そのうち5単位は凸鋸歯文である。凸鋸歯文が当初からのものか、或は笵の彫り直しによるものであるかは判断するに至っていない。中ノ子廃寺[3]で出土している忍冬唐草文軒平瓦が来住廃寺では出土していないこと、来住廃寺へ笵の供給が行われたと思われる湯ノ町廃寺[4]ではⅡ型式が重弧文軒平瓦と出土していることなどから、ここでは型式を特定するには至っていないが、重弧文軒平瓦と組み合うと考えられる。法隆寺出土瓦（型式37C）[5]より線鋸歯文が非常に細かく、界線がないなどの相違点はあるものの、法隆寺の

系譜を引くものといえる。

瓦当裏面は、中心にやや膨らみをもち、丸瓦部接合の際、ヘラ状工具により接合溝をつけたものである。丸瓦筒部先端の凸面側を面取りしたものを接合溝に立て、丸瓦支持ナデつけ後、内外（凹面、凸面側）に少量の接合粘土をあてる。Ⅰ型式と同様に丸瓦の頂点と瓦当の位置関係を正確に判断できる個体が少ないため、一定の規則をもっていたか否かについての充分な成果は得られなかった。

Ⅲ型式　複弁４葉蓮華文軒丸瓦で、８世紀中～後葉に位置づけられる。中ノ子廃寺、朝生田廃寺で同系統の瓦当文様をもつ軒丸瓦が出土している。[6] 中房蓮子が１＋４、内区に蓮弁の輪郭を線彫りし、子葉・間弁はかなり肉厚な蓮華文を飾る。外区との境に界線はなく、外区に線鋸歯文をおく。これと組み合う軒平瓦は均整唐草文軒平瓦（後述の軒平瓦Ⅴ型式）である。

瓦当の厚さは約３～５cmあり、かなり厚い。丸瓦筒部先端は凹面側を面取りし、凸面側もかるく面取りを施した楔型のものを瓦当裏面の接合溝に立て、内外に接合粘土をあてるのだが、内側の接合粘土は同時に瓦当裏面の補足粘土としてあてられ、瓦当を厚くし、丸瓦部との接合を確実なものにしている。しかし、このため内側（凹面側）の接合粘土がナデつけられた位置で丸瓦部が欠損しているものが多い。又、瓦当の笵傷が進行すると同時に、丸瓦部の取り付け位置が若干下がり、補足粘土も増す傾向にある。Ⅲ型式は丸瓦部と瓦当の取り付け位置が全く定まっていないことから、円い瓦笵であったことが考えられる。

Ⅳ型式　二重に圏線をめぐらせた重圏文軒丸瓦で、８世紀末に位置づけられる。千軒廃寺、衣山窯跡でも重圏文軒丸瓦が出土しているが、いずれの廃寺・窯跡からも来住廃寺と同様にこれらと組み合うであろう重廊文軒平瓦[7] は出土していない。

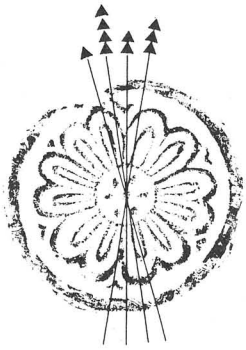
圏線はほぼ均等にめぐらせ、外縁は直立している。接合部は瓦当裏面に接合溝をつけ、丸瓦部を立て接合したものであるが、Ⅲ型式よりかなり取り付け位置がさがる。このことで、瓦当径より丸瓦の両端が若干はみ出ることから、外縁の左右が少し幅広となる。接合粘土は外側にあって、ヘラ状工具でナデ付けた後ヨコナデ調整を施す。内側は丸瓦支持ナデつけ後、ヘラ状工具で接合粘土をナデつける。その時、瓦当裏面にも薄く粘土を伸ばし、平坦にしている。

Ⅴ型式　単弁（素弁）８葉蓮華文軒丸瓦で、これまでに１点しか出土していない。中房蓮子の有無は全くわからず、蓮弁中央に一条の凸線を持ち、間弁はない。瓦当は他の軒丸瓦に比べかなり薄い。

Ⅵ型式　複弁６葉蓮華文軒丸瓦で、中房蓮子１＋６、中心の蓮子以外は楕円形を呈す。内区に蓮華文を飾るが、間弁は完全に独立している。全体に文様は肉薄で焼成の悪いものが多く、外縁端に一部笵端痕を残すものが多い。

Ⅵ型式は瓦当裏面に接合溝を設け、指頭圧痕をつけた丸瓦筒部先端を立てる。丸瓦部は瓦

当面に対しかなり薄い。内外（凹凸面側）にあてられた接合粘土、及び瓦当裏面はかなり丁寧にナデが施されている。特に、外側の接合粘土による成形方法は２種類みられる（第72図－４・第41図－97）が、瓦当文様から製作時期の差は認められない。Ⅵ型式の丸瓦部瓦当取り付け位置については、25°程度の誤差が認められるものの、取り付け位置がすべて同じであるという結果が出た（第71図）。上下左右が全く同じということは瓦笵に取り付け位置を示す何らかの記しがあったと思われる。[8]

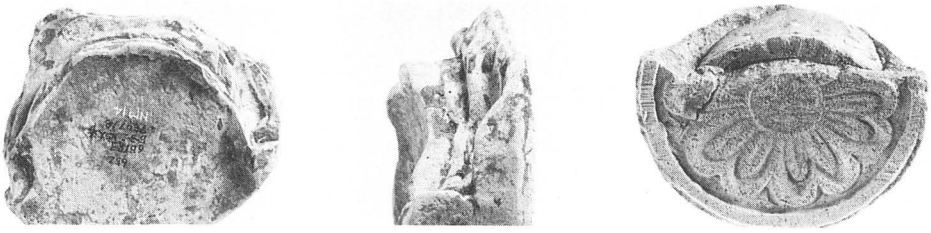


▲＝個体数と丸瓦頂点を示す。

第71図　軒丸瓦Ⅵ型式接合位置

１．Ⅰ型式　瓦当裏面　　２．Ⅰ型式　瓦当裏面カキ目　　３．Ⅱ型式　瓦当裏面

４．Ⅱ型式　接合部　　５．Ⅲ型式　瓦当裏面　　６．Ⅲ型式　接合部



７．Ⅴ型式　瓦当裏面　　８．Ⅴ型式　接合部　　９．Ⅵ型式　接合部

第72図　丸瓦部接合法

3．軒平瓦

軒平瓦はⅠ～Ⅵ型式に分類することでき、時期は軒丸瓦と同じく、７世紀中葉～11世紀末に位置づけられる。

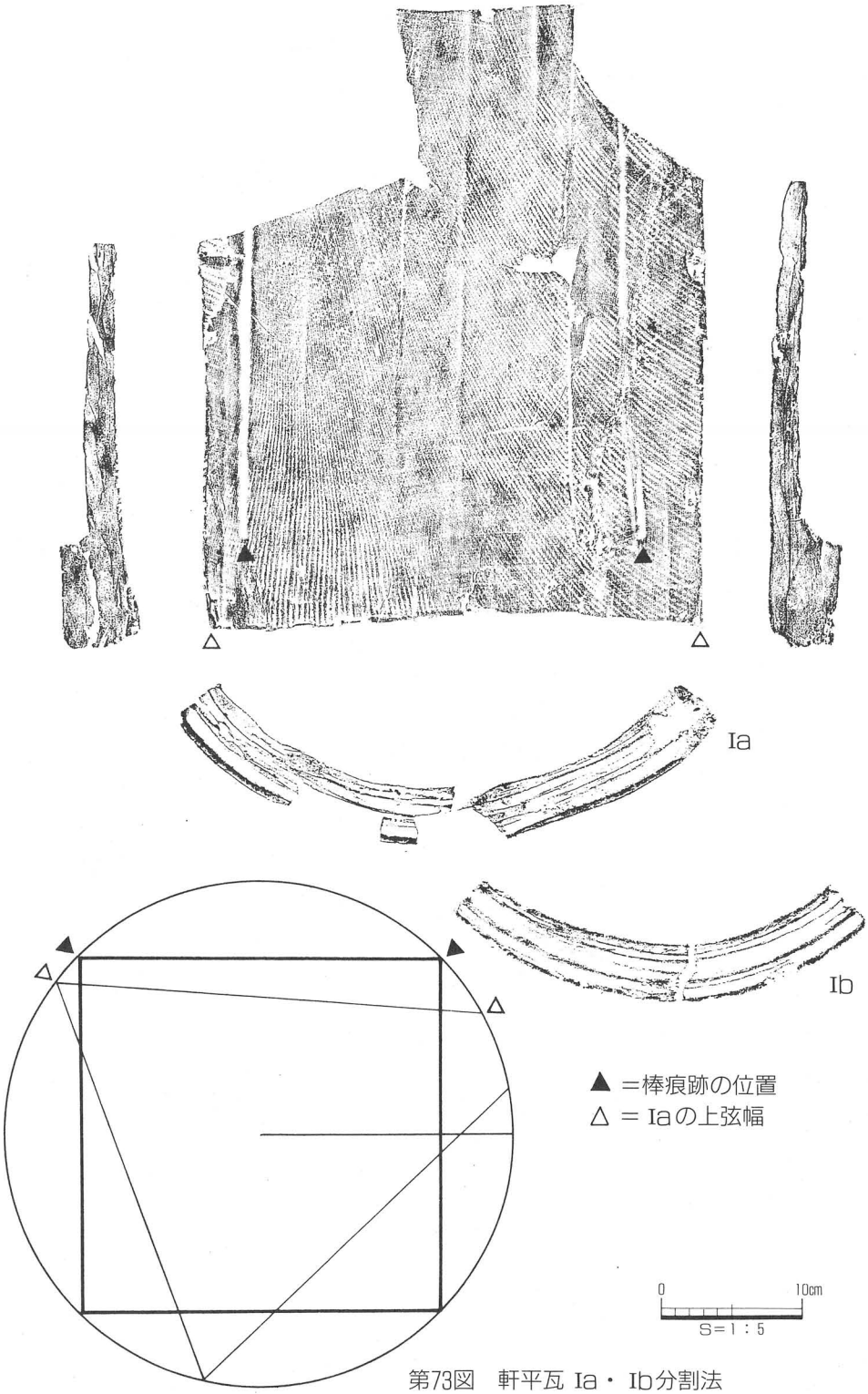
Ⅰ型式　重弧文軒平瓦（３重弧）で、Ⅰａ・Ⅰｂの２種が存在し、軒丸瓦Ⅰ型式と組み合う。Ⅰａについては現在１点しか出土していないが、その大きさを除けば、瓦当文様・作りともⅠｂと全く同じである。瓦当の施文については約1.3cm幅のヘラ状工具でヨコナデした簡単なものであるため、３重弧文軒平瓦としているが、非常に統一性に欠けるものであり、必ずしもすべてが３重弧をえがくものではない。

Ⅰａ・Ⅰｂは粘土板桶巻き作り（桶＝円筒形）で製作されている。ともに凹凸面に糸切り痕を残し、凸面側には叩きを施した痕跡がなく、ヨコ方向にナデイタで平滑にされている。顎部接合には強いヨコナデつけを施し、一部に糸切り痕を残す。又、段顎部はこの糸切り痕を利用して貼り付けていると思われるが、その密着度は薄い。叩きしめについては、段顎部を含め、凸面側未調整の一部分に糸切り痕が認められることから道具による叩きが施された可能性は薄く、手のひらにより叩き押えた程度のものではなかったかと思われる。逆にこのことから凹面側には枠板痕・布目痕よりかなり強い糸切り痕が残る結果になったと考えられる。

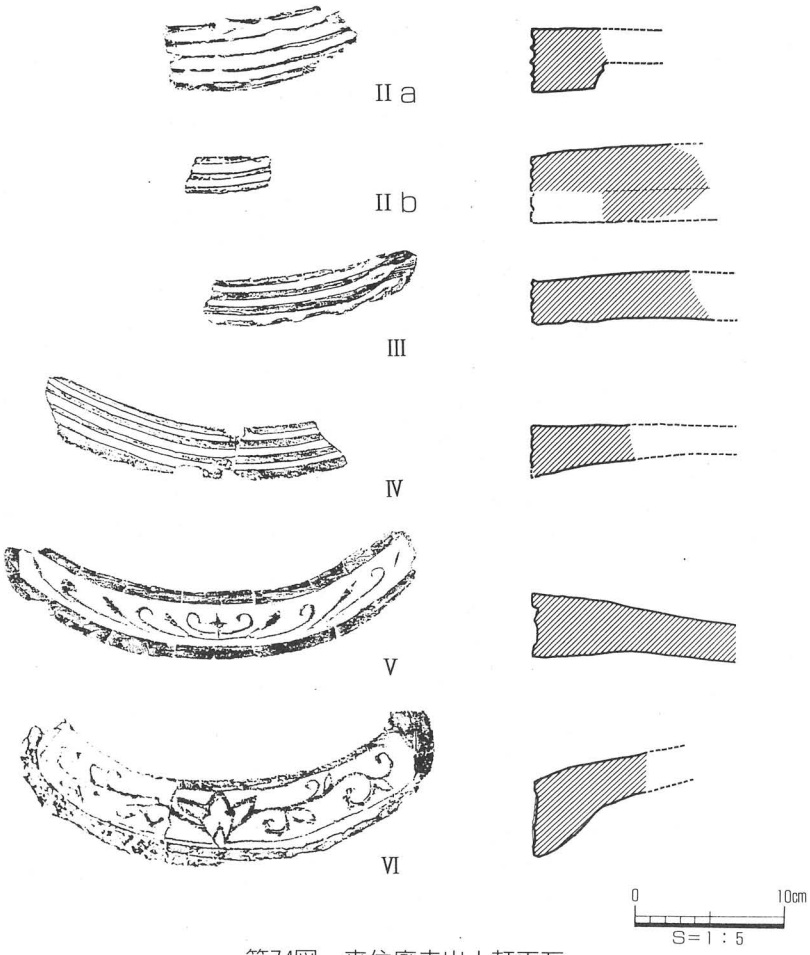
Ⅰａの凹面内側左右には分割界線（棒痕跡）が残存していた。棒痕跡は幅0.6cm、深さ0.3cm、断面はＵ字形を呈す。凹面右側の棒痕跡は枠板痕のほぼ中央、左側は枠板痕の左端近くに存在し、左右ともに瓦当面から凹面側８cm（凸面、段顎貼り付け部分と同じ幅）のところで止まる。狭端部は左右とも欠失しているため不明である。この分割界線をもとに使用されていたであろう桶の円周・分割界線が示す瓦の大きさ・Ⅰａが占める大きさをそれぞれ復元してみた（第73図）。これによると分割界線が示す瓦は桶巻きの４等分の大きさで、Ⅰｂに相当する。又、Ⅰａは桶巻きをほぼ３分割[11]することにより製作されたものであることが判明した。なぜこのように大きさをかえて製作したのかについては、さまざまな考え方が出来るであろう。しかし、Ⅰａは瓦当の幅以外に特別な相違点がみられないことから、ⅠａとⅠｂがそれぞれ使用されていた建物の規模に比例して製作された瓦と解釈するのも一つではないだろうか。

Ⅱ型式　重弧文軒平瓦（５重弧）で、これにもⅡａ・Ⅱｂの２種が存在する。共に出土例は１点のみであるため、その詳細は不明である。ⅡａはⅠ型式と異なり、段顎部の形態や、施文方法にも大きな違いがある。瓦当凹線部分は丸みをもち、凸線部分は鋭く突出する形態である。Ⅱｂについては残存部から５重弧文軒平瓦に復元でき、瓦当凹凸線部分は共に平坦である。貼り付け部分は割れ・摩滅がひどいが、残存する貼り付け部分が非常に長いことから、粘土板を２枚張り合わせて製作された軒平瓦である。

Ⅲ型式　重弧文軒平瓦（４重弧）で、顎は直線顎である。瓦当の施文方法はⅡｂとおなじ



第73図　軒平瓦 Ia・Ib分割法



第74図　来住廃寺出土軒平瓦

で、凹凸線部分は共に平坦である。凹面側は枠板痕・布目痕を残すものと、その痕跡をナデ消したものとがあり製作時期の差があると思われる。Ⅲ型式は全て瓦当より5cm前後しか残存していないため、凸面側がヘラ状工具によるナデ調整が施され、側面は凹凸面寄りを削ること以外不明である。但し、第1次発掘調査出土でⅢ型式と思われる瓦の凸面側に細縄叩きが施されている形跡が認められる。(12)

Ⅳ型式　重弧文軒平瓦（4重弧）で、顎は直線顎である。凹凸面ともナデ調整を施す。小片であれば、一見Ⅲ型式と区別がつきにくい。瓦当の施文方法はⅡa・Ⅲ型式と同じで、凹凸線部分は平坦であるが、最下端の凸線は瓦当中心部から両側端に近づくにつれて幅を増す。

Ⅴ型式　均整唐草文軒平瓦で、唐草は全て下から上に向かって派生し、反転しない。(13)組み合う軒丸瓦はⅢ型式である。Ⅴ型式には平瓦の先端を瓦当で包み込む曲線顎のもの

（A）と、平瓦を包み込まない直線顎のもの（B）とがある。笵傷の進行状態から製作当初のものが曲線顎、製作途中で直線顎に変化するものと分かった。凹面側には布目痕、凸面側には細縄叩きを有する点は共に同じである。但し、Aは包み込みのため、凹凸面先端にヘラ状工具による強いヨコナデ痕がはっきり残る。差し込まれた平瓦の凹面先端は面取りされている。共に外縁に笵端痕をもつ。

第75図　軒平瓦Ⅴ型式A
包み込み

Ⅵ型式　均整唐草文軒平瓦で、11世紀後葉～末に位置づけられる。唐草文は3回反転している。この時期には桶巻き作りから一枚作りに移行しており、凹面側は布目痕、凸面側は細縄叩きを施した後、顎部に粘土を入れ曲線顎と外縁両側端・外縁下部を成形している。このとき瓦当面の幅に比べ瓦笵が若干小さいため、外縁の両側端がかなり幅広く作られ、外縁全体に二次的な整形が認められる。

4．丸瓦

丸瓦・平瓦については、その殆どが破片であることから型式がいくつ存在するか等、正確に把握するには至っていない。ここでは現在までにその存在が分かっているものを挙げてみることとする。

丸瓦Ⅰ型；行基式丸瓦　凹面側に強い糸切り痕と布目痕が存在するが、凸面側には叩きの痕跡はない。軒丸瓦Ⅰ型式に接合されていた丸瓦と同じであることから、これらと組み合っていたと思われる。

丸瓦Ⅱ型；行基式丸瓦　他の丸瓦については粘土板からの成形であるが、Ⅱは粘土紐巻き上げによる成形で作られ、凹面側に布目痕、凸面側はヨコナデ調整が施されている。

丸瓦Ⅲ型；狭端部が存在していないため、行基式・玉縁式いずれであったか不明。凹面側は布目痕を有し、広端及び両側面の内側は面取りを施す。凸面側は細縄叩き後ナデ調整を施す。

丸瓦Ⅳ型；行基式丸瓦　やや薄手で、焼成はあまり良くない。凹面側は一部に糸切り痕と思われる痕跡と布目痕が残り、狭端近くには絞り込んだ布シワが残る。凸側は細縄叩き後、タテナデ消しを施す。

丸瓦Ⅴ型；玉縁式丸瓦　全体にかなり小型のもので、玉縁部分については欠失しており、詳しいことは分からない。凹面側には布の綴じ合せ目が1ヶ所入る。これは玉縁部分から筒部途中まで布に切り込みを入れ縫い合わせることにより、玉縁部分のすぼみに合わせるようにしたものである。

5．平瓦

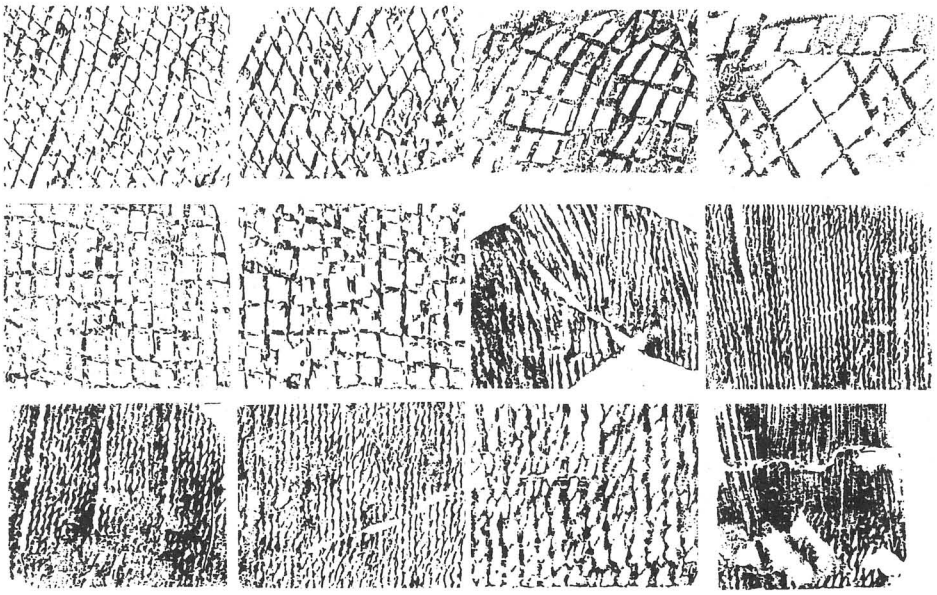
平瓦は凸面の叩き目から、斜格子・格子・平行条線・細縄・太縄に分類でき、現在そのうちで種類が確認出来ているのは、斜格子４種、格子２種、平行条線１種、細縄３種、太縄１種、であり、その他に完全に叩き目をナデ消したもの（ナデ消しA）１種、細縄をヘラ状工具でかなり強くナデ消したもの（ナデ消しB）１種がある。

斜格子・格子叩きを施した平瓦はすべて桶巻き作りで製作されており、一単位の刻目が大きくなるのに比例して、枠板痕の幅が狭くなる傾向にある。ナデ消しAは粘土紐巻き上げによる、桶巻き作りで製作されたもので枠板痕の幅は狭い。丸瓦Ⅱ型も粘土紐巻き上げによるものでこれらの関係についても今後注意していきたい。

縄叩き平瓦は桶巻き作りが存在する。細縄は叩き目より確認しいてるのは３種であるが、凹面の調整・技法等からそれ以上の種類があるものと思われる。太縄叩き平瓦は殆どが小片であるため、すべてとは言い切れないが、高い確率で隅切瓦としてのみ製作されたものであろう。隅切部分の長さはわずか５㎝というものも若干見られるが、平均10㎝前後の（平瓦の隅を端辺に対し75°に切っている）ものが多い。

6．隅木蓋瓦

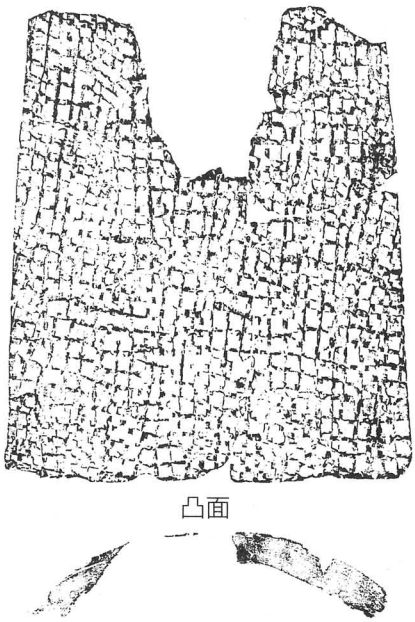
当初より隅木蓋瓦として製作されたものの出土例はないが、平瓦の狭端部を両面から打ち缺いて転用した平蓋式[14]のものが２点出土している。共に釘穴は穿たれておらず、凹面側には糸切り・枠板痕・布目を残し、凸面側にはそれぞれ別の格子叩きが施されている。



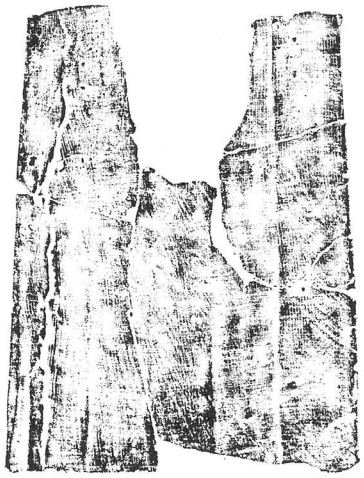
第76図　平瓦凸面叩き目（S＝1：4）

7．熨斗瓦

熨斗瓦については、3点出土しており、共に凸面側は同じ斜格子叩きが施されている。桶巻き作り（桶＝円錐形）で製作した平瓦を半裁したものである。正確な大きさ等については不明である。

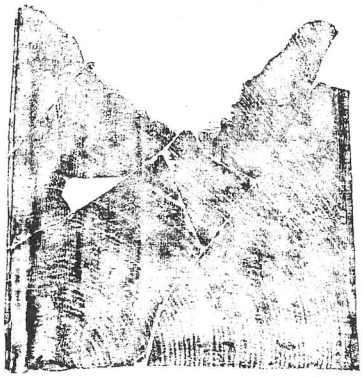


凸面



凹面

凸面



凹面

0　20cm
S＝1：6

第77図　隅木蓋瓦

8．回廊状遺構と出土瓦の分布について

来住廃寺第２次発掘調査で東面回廊（全長98.5m）が検出された当時、回廊は来住廃寺の主要伽藍であるとされていた。その後、第５、７次調査で北面回廊（全長99.6m）、西面回廊（全長103.5m）の存在が確認され、寺院の西側の一部を取り囲む遺構であることが判明したと同時に、回廊状遺構が来住廃寺に先行する７世紀中葉のものである[15]ことが明らかとなった。現在、回廊内及び寺域の調査が充分進んでいるとは言えないが、来住廃寺の西限であろうと思われる溝（ＳＤ－４）・数棟の掘立柱建物、回廊に伴う南門等が検出されている。回廊状遺構及び同時期の建物には、建て替えの痕跡がみられないことから短期間の使用であったことが推察出来る。

今回、過去の調査で出土した軒瓦を中心にその分布状態を調べてみた。まず寺域内では、軒丸瓦Ⅲ・軒平瓦Ⅴ型式がＳＤ－４付近から、軒丸瓦Ⅵ型式が回廊南東隅ＳＤ－９から比較的多く出土している。回廊状遺構内においては、寺域外の地点から軒丸瓦Ⅱ、軒平瓦Ⅲ以降の型式がほとんど出土していない事がわかる。これらからもＳＤ－４が寺域の西限を示す区画溝である可能性が高いことを窺わせる。遺構を平瓦の分布状態から見た場合、寺院に関する遺構周辺から出土している平瓦は、格子目叩きも多少混入しているが、縄目叩きがその大半を占め、逆に回廊と同一軸方向をなす遺構周辺で出土する平瓦は斜格子、格子目叩きが大半を占める。柱掘形内に敷かれていた平瓦にもこの傾向は現れており、塔の軸線に比較的平行しているＳＢ－５の様に、ＳＤ－33を埋め立てると同時に斜格子、格子目叩きを柱掘形内に敷いている建物がある。ＳＢ－１、ＳＢ－５以外については縄目叩きを使用していた。これらからも寺院主要施設の建立後、寺院に先行して存在していた施設の埋め立て及び、整地を行い、徐々に僧坊（ＳＢ－１）等の施設を寺院の西側に増設していったことが窺える。軒平瓦Ⅲ型式以降の叩き目が細縄叩きであることを型式分類で前述したように、平瓦の叩き目とその分布状況は寺院創建後に行なわれた施設拡張に関する時期差を示すものと言え、今後、正確な寺域、建物の前後関係の把握に努める必要がある。

次に回廊状遺構内ＳＸ－１から軒丸瓦Ⅰ型式、軒平瓦Ⅰａ・Ⅰｂ型式、熨斗瓦（斜格子目叩き）、平瓦、隅木蓋瓦（格子叩き目）が出土している。これらは来住廃寺創建当初に使用された瓦類であると思われ、ある時期に一括して投棄されたものと考えられる。しかし、ＳＸ－１に限らず来住廃寺で出土する比較的創建期に近い時期に使用されたと考えられる（斜格子・格子目叩き）平瓦には叩き目以外にもその種類はかなり雑多なものがあり、今後来住廃寺創建期に於ける瓦の供給ルートを解明していく必要性がある。

1.朝田廃寺出土
2.中ノ子廃寺出土

第78図　複弁４弁蓮華文軒平瓦

註

(1) 松山市教育委員会『松山市文化財調査報告書３　長隆寺跡調査報告書』　1974年
『松山市文化財調査報告書12　来住廃寺』　1979年
『松山市文化財調査報告書23　来住廃寺』　1991年

(2) 松原　弘宣「伊予国久米評の成立と回廊状遺構」『日本歴史』第 504号　1990年

(3) 愛媛県史編さん委員会　『愛媛県史　資料編　考古』　歴史時代５－11　1987年
中ノ子廃寺跡出土の複弁八弁蓮華文軒丸瓦は過去の調査で、奈良県生駒郡三郷町平隆寺出土の軒丸瓦と同笵と見られている。今回、中ノ子廃寺出土の忍冬唐草文軒平瓦の瓦当文様を完全に復元出来る資料が得られたことから、忍冬唐草文軒平瓦も平隆寺のものと同笵と見られることが判明した。しかし、平隆寺のものより瓦当幅を短くして作られている。（第79図）

(4) 愛媛県史編さん委員会　『愛媛県史　資料編　考古』　歴史時代５－８　1987年

(5) 法隆寺昭和資財帳編集委員会　『昭和資財帳15－法隆寺の至宝　瓦』　1992年

(6) 複弁四弁蓮華文軒丸瓦で、中房蓮子が１＋８蓮弁の反りの表現に相違が見られる。（第78図）

(7) 難波宮出土の重廓文軒平瓦は直線顎又は曲線に限られているが、来住廃寺出土軒平瓦から想定出来る資料はない。

(8) 奈良国立文化財研究所　『平城宮発掘調査報告Ⅸ』　1960年

(9) 佐原　真　「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌』第58巻２号　1972年

(10) 瀧本　正志　「平瓦桶巻き作りにおける一考察」『考古学雑誌』第62巻２号

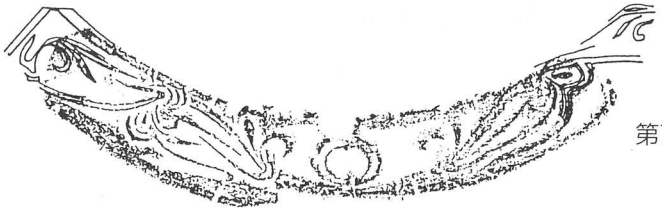
(11) 奈良国立文化財研究所　『川原寺発掘調査報告書』1960年

(12) 松山市教育委員会　『松山市文化財調査報告書３　長隆寺調査報告書』1974年　Ｐ．20　Fig13-2　第１次発掘調査についての遺物等は現在個人所蔵のため、今回の調査では確認出来なかった。

(13) 向日市教育委員会「南春日廃寺の瓦」『長岡京古瓦聚成』　1987年

(14) 稲垣　晋也「古代の隅木蓋瓦」『古文化論叢』　1983年

(15) 現在は東面回廊とされているが、第２次発掘調査当時は僧坊（ＳＢ－１）が回廊に先行する建物であり、回廊は西面回廊とされ、現在とは逆の方向を取り囲むとされていた。



第79図　中ノ子廃寺出土
忍唐唐草文軒平瓦
（Ｓ＝１：５）

軒丸瓦計測表

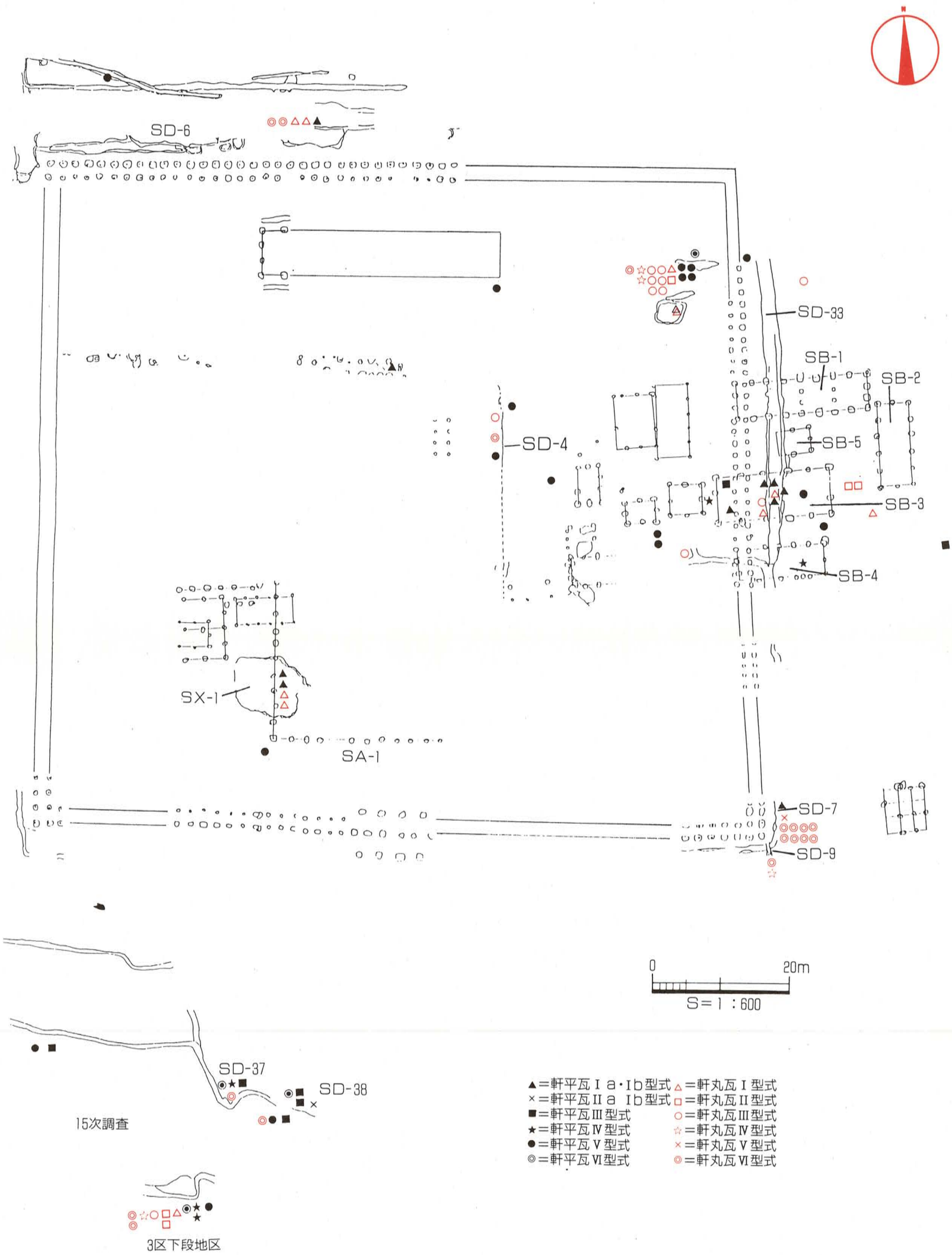
型式	直径	内区 中房径	内区 蓮子数	内区 弁区径	内区 弁幅	内区 弁数	外区広	外区 内縁 幅	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高	外区 外縁 文様	全長	玉縁長	点数
Ⅰ	194	36	1＋6	131	25	T10	25			25	14	K1			15
Ⅱ	176	63	1＋7＋11	136	36	F8	19	8	Lv44 Rv5	10	7				10
Ⅲ	141	35	1＋4	104	41	F4	21	11	Lv20	10	4				25
Ⅴ		36			30	T8									1
Ⅵ	168	50	1＋6	135	56	F6				10	3				22

型式	直径	内区 第一圏内径	内区 第二圏内径	内区 内区径	外区 外縁幅	外区 外縁高	全長	玉縁長	点数
Ⅳ	155	32	76	126	17	6			5

軒平瓦計測表

型式	瓦当面 上弦幅	瓦当面 弧深	瓦当面 下弧幅	瓦当面 厚さ	瓦当面 内区厚さ	瓦当面 内区文様	瓦当面 上外区厚さ	瓦当面 下外区厚さ	瓦当面 脇幅	瓦当面 文様の深さ	全長	顎の形態 直	顎の形態 曲	顎の形態 段	点数
Ⅰa	303	80	381	39		G			55	2	456			○	1
Ⅰb	260	54	310	39		G			40					○	9
Ⅱa				41		G				4				○	1
Ⅱb						G				2		○			1
Ⅲ				31		G			30	2		○			10
Ⅳ				～36 40		G				2		○			6
Ⅴ	282	56	277	43	24	KK	8	12	38	4			○		13
Ⅵ	268	53	265	57	44	KK	8	13	43	3			○		4

※　F＝複弁　　T＝単弁　　Lv＝凸線鋸歯文　　Rv＝凸鋸歯文
　　G＝重弧文　　KK＝均整唐草文



第80図　来住廃寺軒瓦分布図

V　自然科学分析

古環境研究所

1　植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は、植物体内で形成されたガラス質の細胞であり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。この微化石を遺跡土壌などから検出することによって、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定や、当時の古植生・古環境の推定を行うことができる（杉山，1987）

この調査は、植物珪酸体（プラント・オパール）分析を用いて、本遺跡における稲作跡の探査、および遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みたものである。

2．分析試料

調査対象は、３区下段地点の第１層（旧表土）から砂礫層直上の第５層までの各層である。このうち、第５層は弥生時代とされる黒色粘質土、第４層は古墳時代とされる有機質粘質土で材や種子などの植物遺体を含んでいる。第２層～第３層は砂質シルト層で礫を少量含んでいる。試料は、容量50　の採土管等を用いて、各層ごとに５～10cm間隔で採取した。

（第37図で示した各層に相当する。第１層→Ⅰ～Ⅲ層、第２～３層→Ⅳ層、第４層→Ⅴ層、第５層→Ⅵ層）

3．分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

(1)試料の絶乾（105℃・24時間），仮比重測定

(2)試料約１ｇを秤量，ガラスビーズ添加（直径約40μｍ，約0.02ｇ）

※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

(3)電気炉灰化法による脱有機物処理

(4)超音波による分散（300w・42KHz　・10分間以上）

(5)沈底法による微粒子（20μｍ以下）除去、乾燥

(6)封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成

(7)検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下

で行った。計数はガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ，ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実量は1.03），6.31，1.24である。（杉山・藤原，1987）。タケ亜科については数種の平均値を用いて葉身重を算出した。メダケ属（ネザサ節以外）は0.08，ネザサ節は0.24，クマザサ属（ミヤコザサ節以外）は0.22，マダケ属は0.23である。（杉山，1987）。

4．結果および考察

(1)稲作の可能性について

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層に植物珪酸体密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、稲作の可能性について検討を行った。

3区下段地点では、旧表土の第1層から弥生時代とされる第5層（黒色粘質土）までの各層について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネの植物珪酸体が検出された（図82）。このうち、第1層と第3層下位、および古墳時代とされる第4層では、植物珪酸体密度がおよそ10,000個/g以上と非常に高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、これらの層準で稲作が行われていた可能性は極めて高いと考えられる。第2層～第3層中位でも、密度が5,000個/g以上と高い値であることから、稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。弥生時代とされる第5層では、密度が1,000個/g未満と低い値であることから、同層で稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層などから混入の危険性も否定できない。

以上のように、旧表土の第1層から古墳時代とされる第4層までの各層では、いずれも稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、弥生時代とされる第5層でも稲作の可能性が認められた。

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもキビ族（ヒエやアワなどが含まれる）やムギ類、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

(2)古植生・古環境の推定

イネ以外の分類群では、タケ亜科Alaタイプ（ネザサ節など）などのタケ亜科が全体的に非

常に多く検出され、植物珪酸体総数に対するタケ亜科の割合は60～80％にも達している。また、ヨシ属やウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）、棒状珪酸体などもほぼ全層準で見られた。なお、古墳時代とされる第４層および弥生時代とされる第５層では、ブナ科のシイノキ属やコナラ属などの樹木起源の植物珪酸体も検出された（図82）。

植物珪酸体密度から算出された植物体量の推定値を見ると、イネ以外ではネザサ節およびヨシ属が卓越しており、ウシクサ族（ススキ属など）やクマザサ属、メダケ属などは少量である（図81）。

これらのことから、当地点は弥生時代以降はおおむねヨシ属が多く生育する湿地的な環境であったものと考えられ、そこで稲作が行われていたものと推定される。また、周辺の台地部などではネザサ節などのタケ亜科が多く生育しており、ススキ属なども見られたものと推定される。なお、弥生時代から古墳時代にかけては、遺跡周辺ではシイノキ属やコナラ属（おもにアカガシ亜属？）などの常緑広葉樹（照葉樹）が生育していたものと推定される。

５．まとめ

以上のように、本遺跡では弥生時代とされる第５層で稲作の可能性が認められたが、稲作が本格的に開始されたのは古墳時代とされる第４層以降と考えられる。また、その後も旧表土とされる第１層までおおむね継続して稲作が行われたものと推定される。

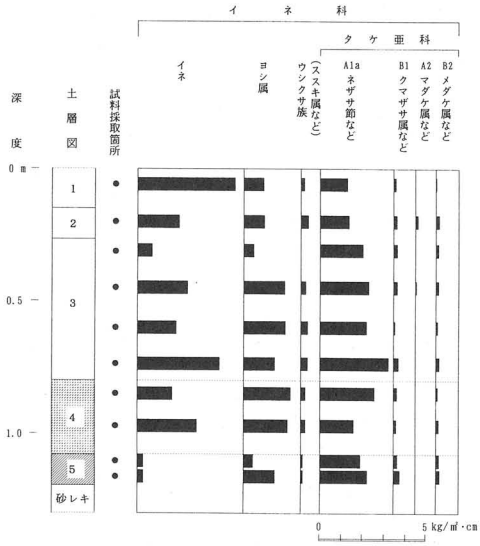
調査地点付近は、弥生時代以降はおおむねヨシ属が多く生育するような湿地的な環境で推移したものと考えられ、周辺の台地部などではネザサ節などのタケ亜科を主体とするイネ科植生が継続されたものと推定される。また、弥生時代から古墳時代にかけては、遺跡周辺にカシ類やシイ類などの照葉樹林が分布していたものと推定される。

参考文献

杉山真二．1987．タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号：70－83．

杉山真二．藤原宏志．1987．川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール　分析．赤山－古環境編－．川口市遺跡調査会報告，第10集，281-298

藤原宏志．1976．プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9：15-29



第81図　３区下段におけるおもな植物の推定生産量

表13　3区下段における植物珪酸体

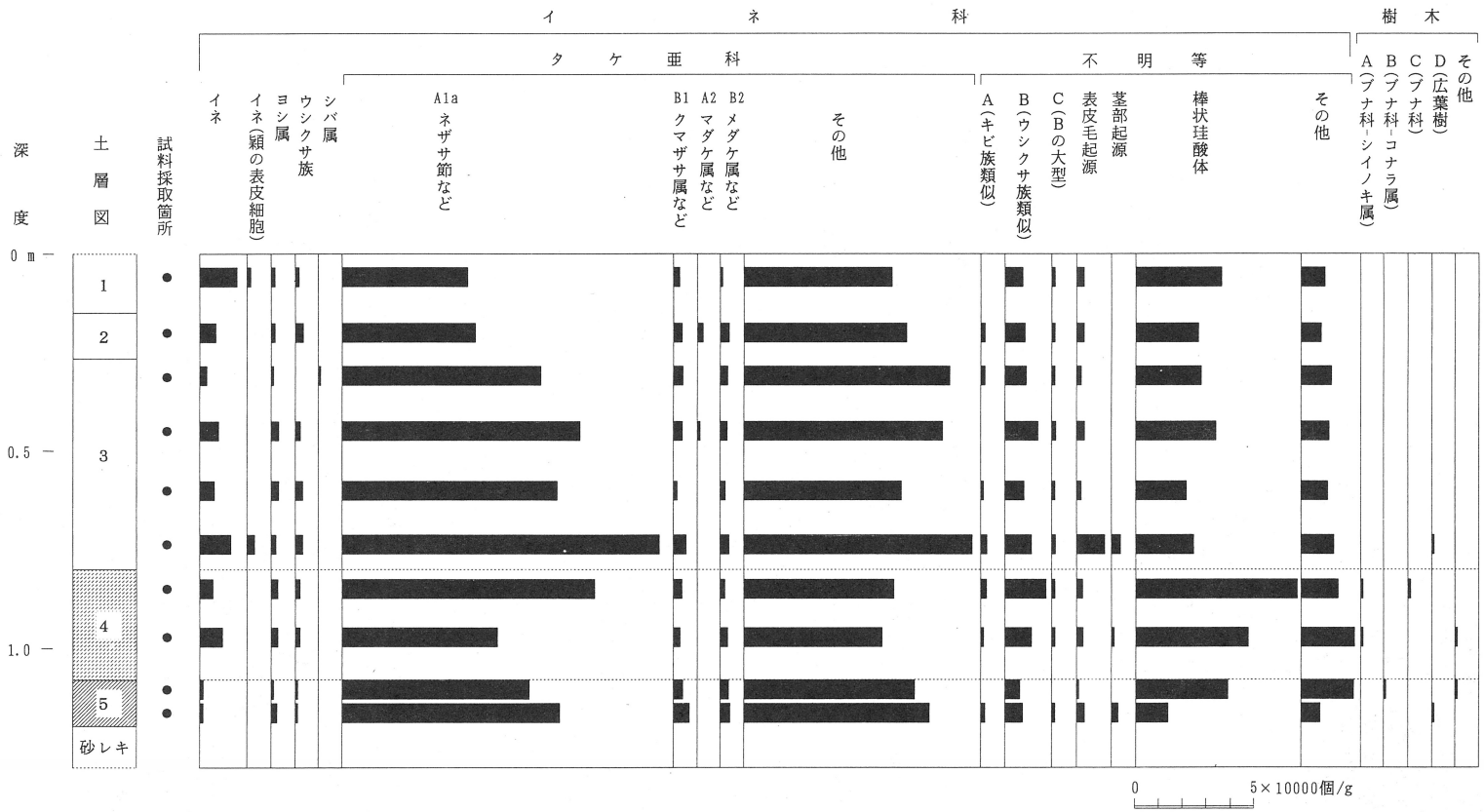
（単位：×100個/g）

分類群	1	2	3-1	3-2	3-3	3-4	4-1	4-2	5-1	5-2
イネ科										
イネ	155	66	22	80	57	131	53	96	7	8
イネ(穎の表皮細胞)	7					37				
サヤヌカグサ属								6		
ヨシ属	15	15	7	29	29	22	33	32	7	23
ウシクサ族(ｽｽｷ属など)	15	29		22	36	29	20	19	7	8
シバ属			7							
タケ亜科										
A1aﾀｲﾌﾟ(ネザサ節など)	538	560	838	951	906	1343	1066	660	798	923
B1ﾀｲﾌﾟ(クマザサ属など)	22	36	45	44	14	51	40	26	42	75
A2ﾀｲﾌﾟ(マダケ属など)		15		7						
B2ﾀｲﾌﾟ(メダケ属など)	7	44	30	29	21	44	20	26	28	45
その他	619	684	860	841	664	964	673	577	722	788
不明等										
Aﾀｲﾌﾟ(キビ族類似)		15	15		7	22	20	6		15
Bﾀｲﾌﾟ(ウシクサ族類似)	74	95	89	132	78	110	173	109	69	75
Cﾀｲﾌﾟ(Bﾀｲﾌﾟの大型)	7	7	7	15	7	15	7	6		8
表皮毛起源	44	44	22	37	21	124	33	32	7	30
茎部起源						29		6		23
棒状珪酸体	361	262	274	344	171	248	686	474	389	143
その他	103	80	134	117	107	139	153	224	222	83
樹木起源										
Aﾀｲﾌﾟ(ブナ科-ｼｲﾉｷ属)							7	6		
Bﾀｲﾌﾟ(ブナ科-ｺﾅﾗ属)									7	
Cﾀｲﾌﾟ(ブナ科)							7			
Dﾀｲﾌﾟ(広葉樹)						7				8
その他								6	7	
植物珪酸体総数	1969	1951	2351	2648	2119	3314	2992	2314	2311	2251

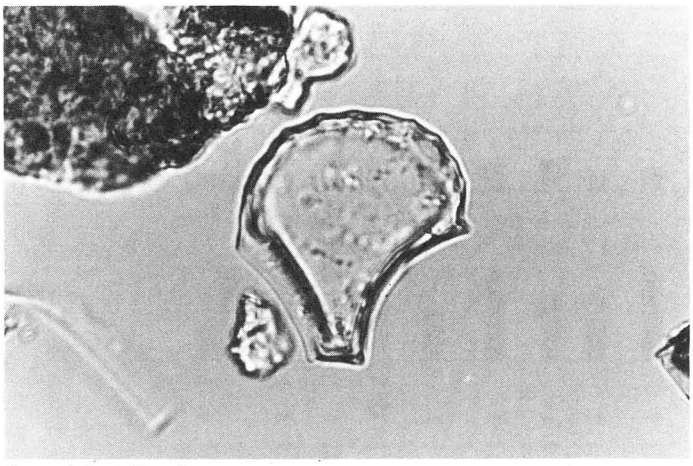
表14　3区下段におけるおもな植物の推定量

（単位：kg/m²·cm）

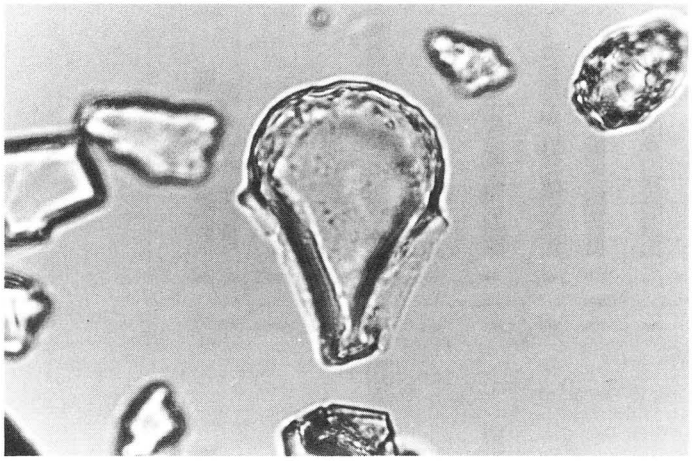
分類群	1	2	3-1	3-2	3-3	3-4	4-1	4-2	5-1	5-2
イネ科										
イネ	4.55	1.93	0.65	2.37	1.68	3.86	1.57	2.83	0.20	0.22
ヨシ属	0.93	0.92	0.47	1.85	1.80	1.38	2.10	2.02	0.44	1.42
ウシクサ族(ｽｽｷ属など)	0.18	0.36		0.27	0.44	0.36	0.25	0.24	0.09	0.09
タケ亜科										
A1aﾀｲﾌﾟ(ネザサ節など)	1.29	1.35	2.01	2.28	2.17	3.22	2.56	1.58	1.92	2.21
B1ﾀｲﾌﾟ(クマザサ属など)	0.05	0.08	0.10	0.10	0.03	0.11	0.09	0.06	0.09	0.17
A2ﾀｲﾌﾟ(マダケ属など)		0.03		0.02						
B2ﾀｲﾌﾟ(メダケ属など)	0.01	0.03	0.02	0.02	0.02	0.04	0.02	0.02	0.02	0.04



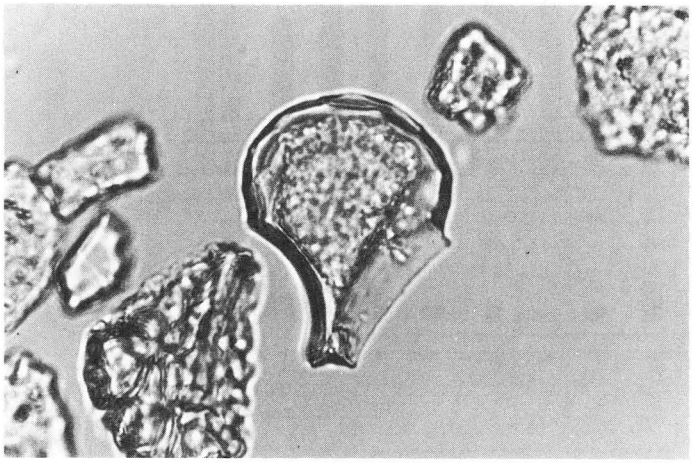
第82図　3区下段における植物珪酸体（プラント・オパール）分析結果



1　イネ　3－3



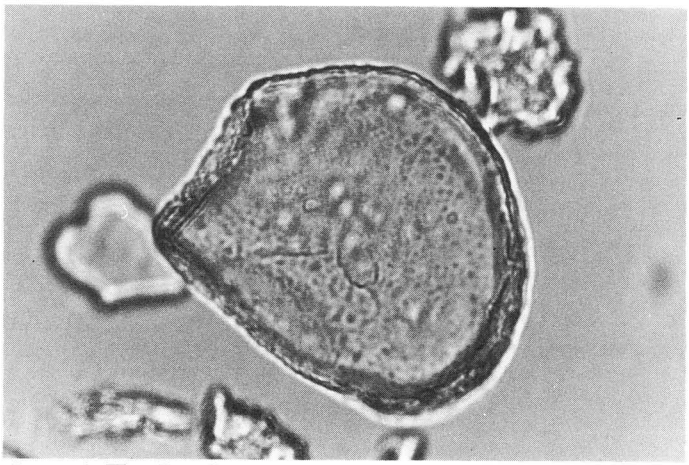
2　イネ　4－2



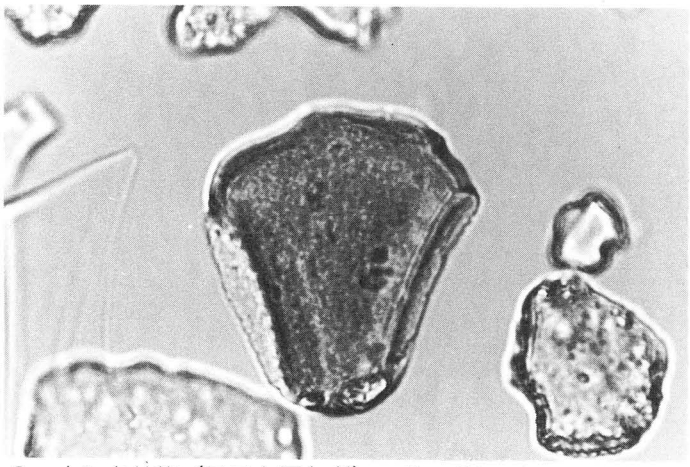
3　イネ　5－1

第83図　プラント・オパールの顕微鏡写真(1)

4　サヤヌカグサ属　4－2

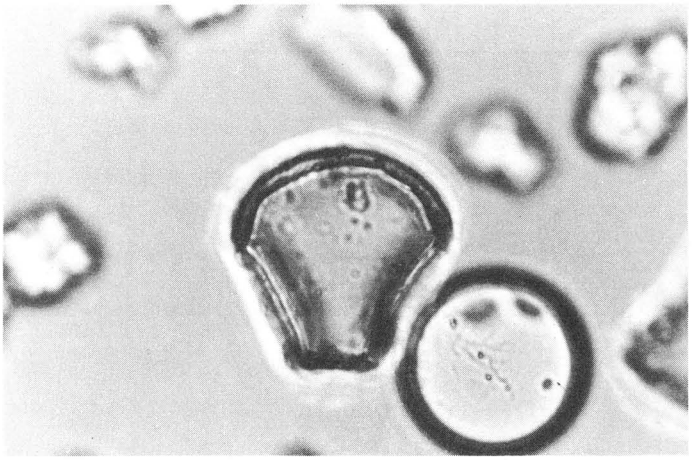


5　ヨシ属　5－2

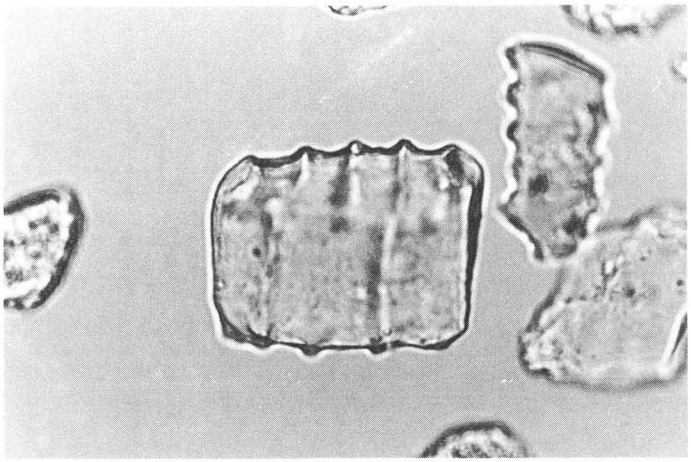


6　ウシクサ族（ススキ属など）　3－2

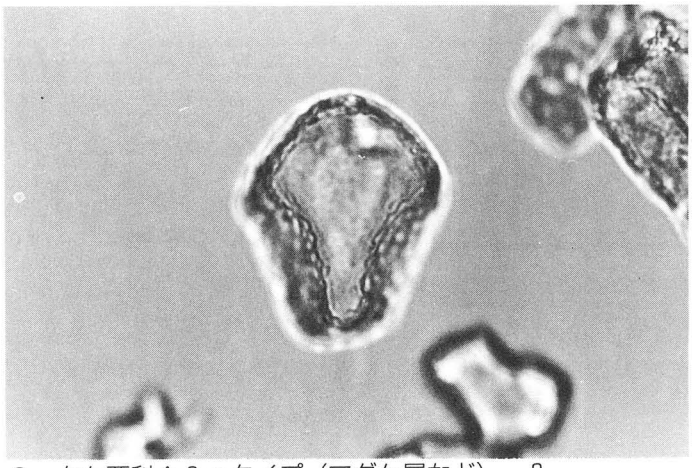
第84図　プラント・オパールの顕微鏡写真(2)



7　タケ亜科Ａ１ａタイプ（ネザサ節など）　４－１　　（倍率はすべて400倍）

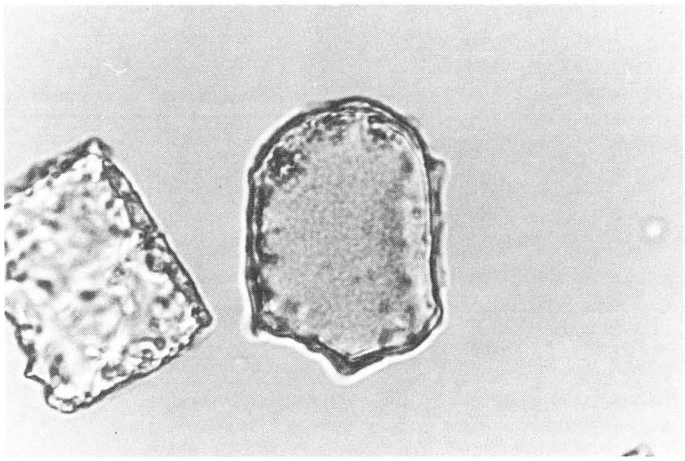


8　タケ亜科Ａ１ａタイプ（ネザサ節など）　４－２

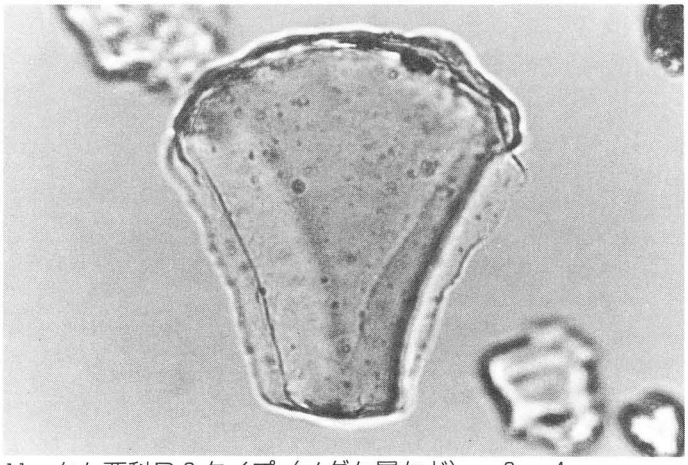


9　タケ亜科Ａ２ａタイプ（マダケ属など）　２

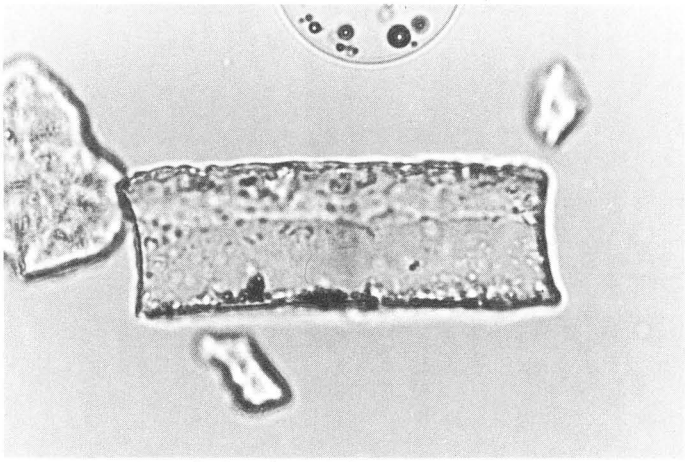
第85図　プラント・オパールの顕微鏡写真(3)



10　タケ亜科Ｂ１タイプ（クマザサ属）　５－２

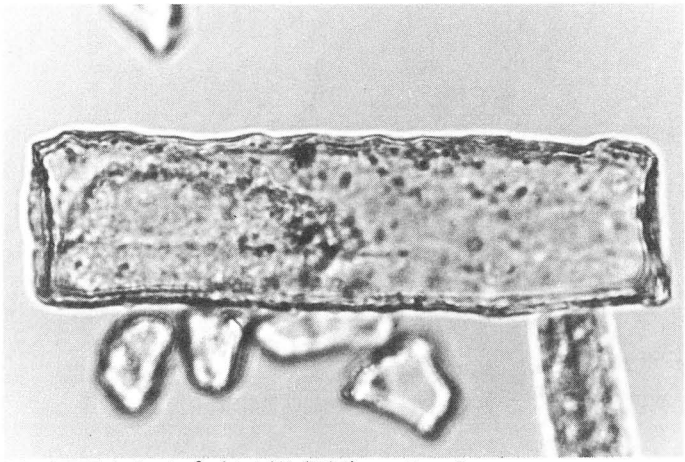


11　タケ亜科Ｂ２タイプ（メダケ属など）　３－４

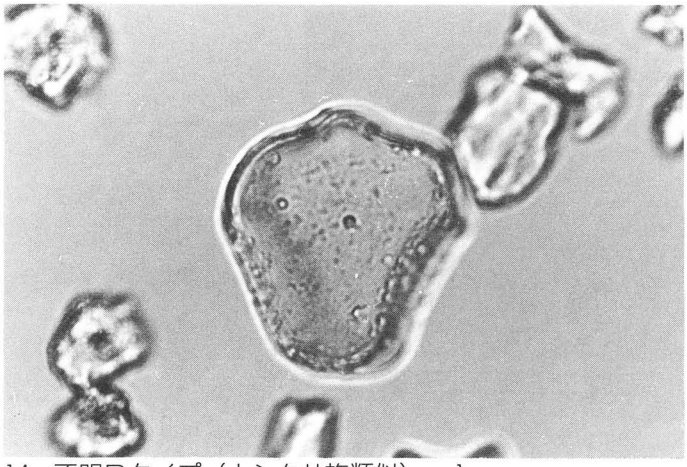


12　不明Ａタイプ（キビ族類似）　２

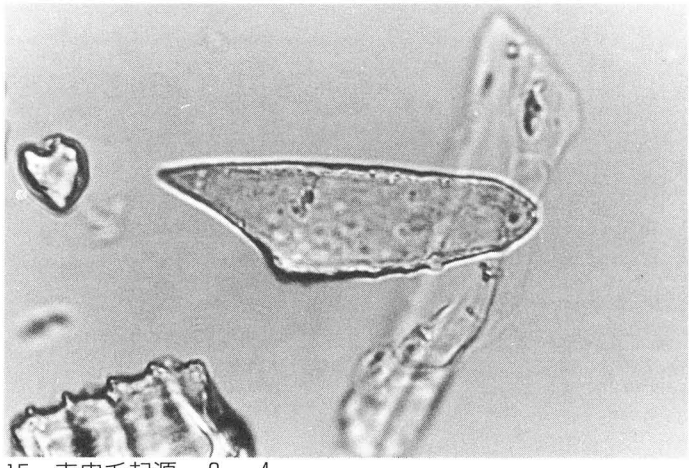
第86図　プラント・オパールの顕微鏡写真(4)



13　不明Aタイプ（キビ族類似）　5－2　　（倍率はすべて400倍）

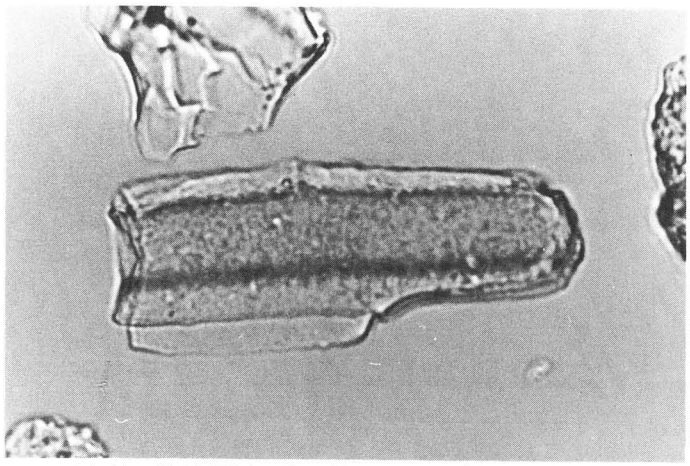


14　不明Bタイプ（ウシクサ族類似）　1

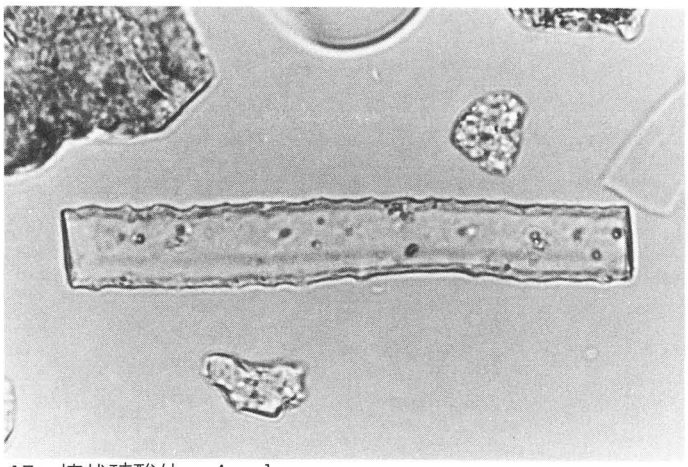


15　表皮毛起源　3－4

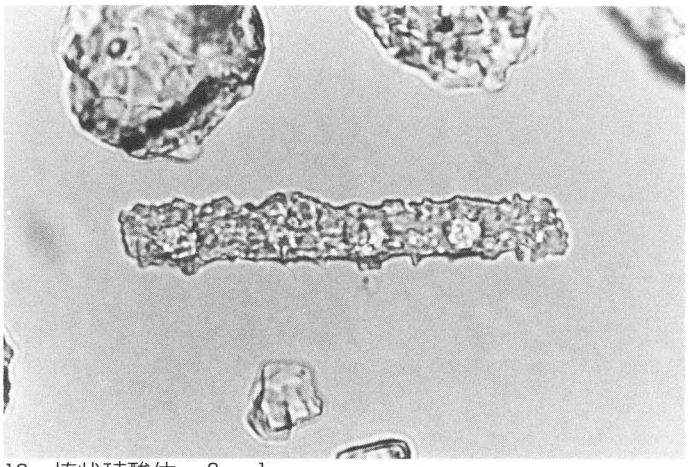
第87図　プラント・オパールの顕微鏡写真(5)



16　イネ科の茎部起源　5－2　　（倍率はすべて400倍）

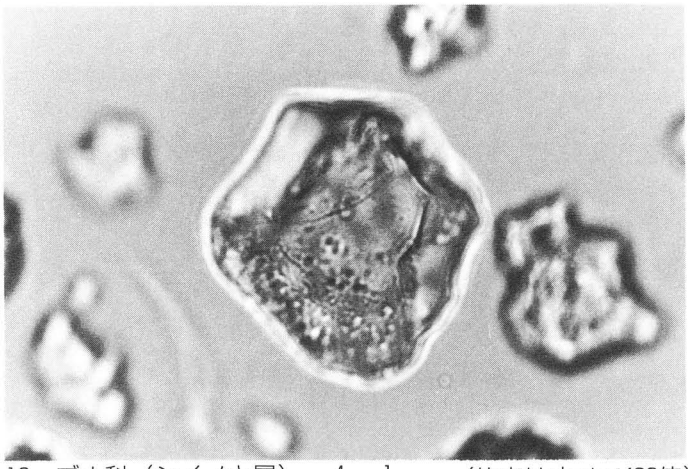


17　棒状珪酸体　4－1

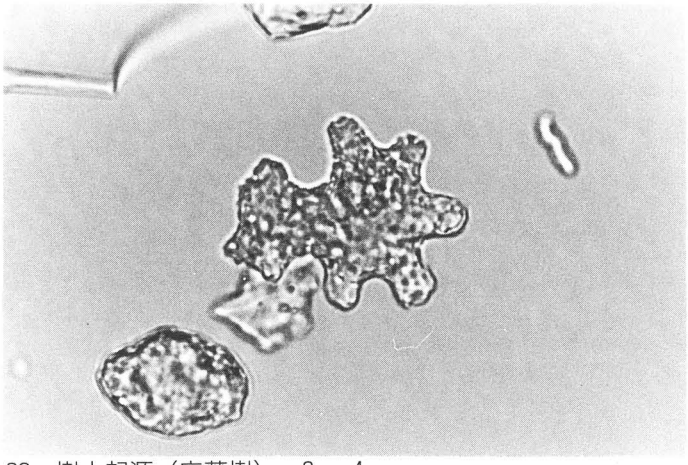


18　棒状珪酸体　3－1

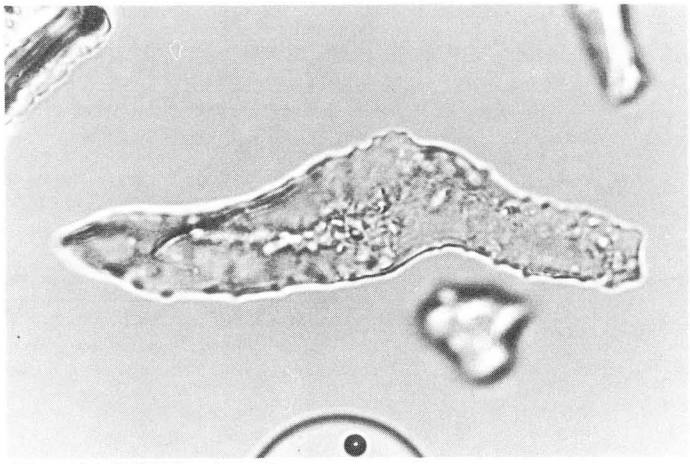
第88図　プラント・オパールの顕微鏡写真(6)



19　ブナ科（シイノキ属）　4－1　　（倍率はすべて400倍）



20　樹木起源（広葉樹）　3 －4



21　樹木起源？　4 －2

第89図　プラント・オパールの顕微鏡写真(7)

2．花粉分析

1．試料と方法

花粉分析は、試料１（第１層）、試料２（第２層）、試料3-1～4（第３層）、試料4-1～2（第４層）、試料5-1～2（第５層）の計10点について行った。試料は以下の方法で分析を行った。（第37図で示した各層に相当する。第１層→Ⅰ～Ⅲ層、第２～３層→Ⅳ層、第４層→Ⅴ層、第５層→Ⅵ層）

試料（１㎤）に、５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。水洗した後、0.5㎜の篩で植物遺体や礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。以上の物理・化学処理間および水洗は遠心機を用いた。残渣に石炭酸フクシンによって染色を行い、グリセリンゼリーで封入してプレパラートを作製した。

検鏡は基本的には、花粉総数が300個以上になるまで計数を行ったが、まれな分類群を検出するために各試料とも数千から一万個程度の観察を加えて行った。花粉遺体は、分類レベルによって、科、属、亜属、節および種に同定分類され、その際学名については属名までで表した。同定レベルが複数の分類群にまたがるものはハイフンで結んで示した。イネ科におけるイネ属の分類は、大きさ、外膜の厚さ、表面模様、孔の形態から行ったが、必ずしも明確に同定されないものが存在するためイネ属型とした。

なお、花粉組成図は花粉総数を基本数とした百分率で示した。

2．結果

分析の結果、樹木花粉24、樹木と草本を含むもの３、草本花粉23、シダ植物胞子３の計53の分類群が同定された。これらの結果は、表に一覧し、花粉組成図にして表した。また、主要な分類群は写真に示した。以下に花粉組成の変化を下位より記す。

試料5-1～2：樹木花粉と草本花粉がほぼ同じ割合を占める。樹木花粉では、アカガシ亜属、クリーシイ属－マテバシイ属、コナラ亜属の広葉樹がそれぞれ10～15％前後の出現率で優占し、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の針葉樹が伴われる。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が優占する。また、コガマ－ミクリ属が特徴的に出現する。

試料4-1～2：樹木花粉と草本花粉の割合は大きな変化はないが、アカガシ亜属、コナラ亜属は減少傾向を示す。試料4-1では、エノキ属－ムクノキが10％弱で出現する。草本花粉では、コガマ－ミクリ属が減少し、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科が増加する。

試料3-2～3：草本花粉が占める割合が急増し、樹木花粉は各分類群とも減少する。草本花

粉ではイネ科、イネ属型が激増し、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科に加えソバ属が出現する。

試料3-1～2：草本花粉が80％以上を占める。樹木花粉では各分類群が低率となるが、マツ属複維管亜属のみが大きく減少しない。

試料２：草本花粉において、イネ科とイネ属型以外の分類群が減少する。他は以前と変わらない。

試料１：樹木花粉の占める割合がやや増加し、クリ－シイ属－マテバシイ属、スギが少し増加する。

３．遺跡周辺の植生・環境・農耕の変遷

以上の結果から植生・環境・農耕の変遷を下位より解析復原する。

弥生時代とされる第５層においては、アカガシ亜属（カシ類）、クリ－シイ属－マテバシイ属（シイ類が主と思われる）を主体とする照葉樹林が比較的多く分布している。他に途中相林（二次林）とみられるコナラ亜属（ナラ類）が分布し、人為的な森林干渉が行われている。堆積地点はコガマ－ミクリ属やカヤツリグサ科が生育する水湿地であり、周囲はやや乾燥した改変地、人里、畑地を好むヨモギ属が多く生育している。イネ科とイネ属型はやや低率なため、周囲にはさほど広く水田が営まれていなかったと推定される。

古墳時代とされる第４層においては、アブラナ科、アカザ科－ヒユ科の畑作要素が増加するため、遺跡周辺でアブラナ科植物に代表される畑作が営まれる。森林はカシ類、ナラ類がやや減少するものの、第５層と大きく変化しない。

第３層においては、畑作にソバ栽培が加わる。第３層の下部ではカシ類やシイ類の照葉樹林が急激に減少し、水田、畑地が遺跡周辺で著しく増加したと推定される。マツ属複維管束亜属花粉は減少しないため、相対的に森林はニヨウマツ類のマツ林となる。

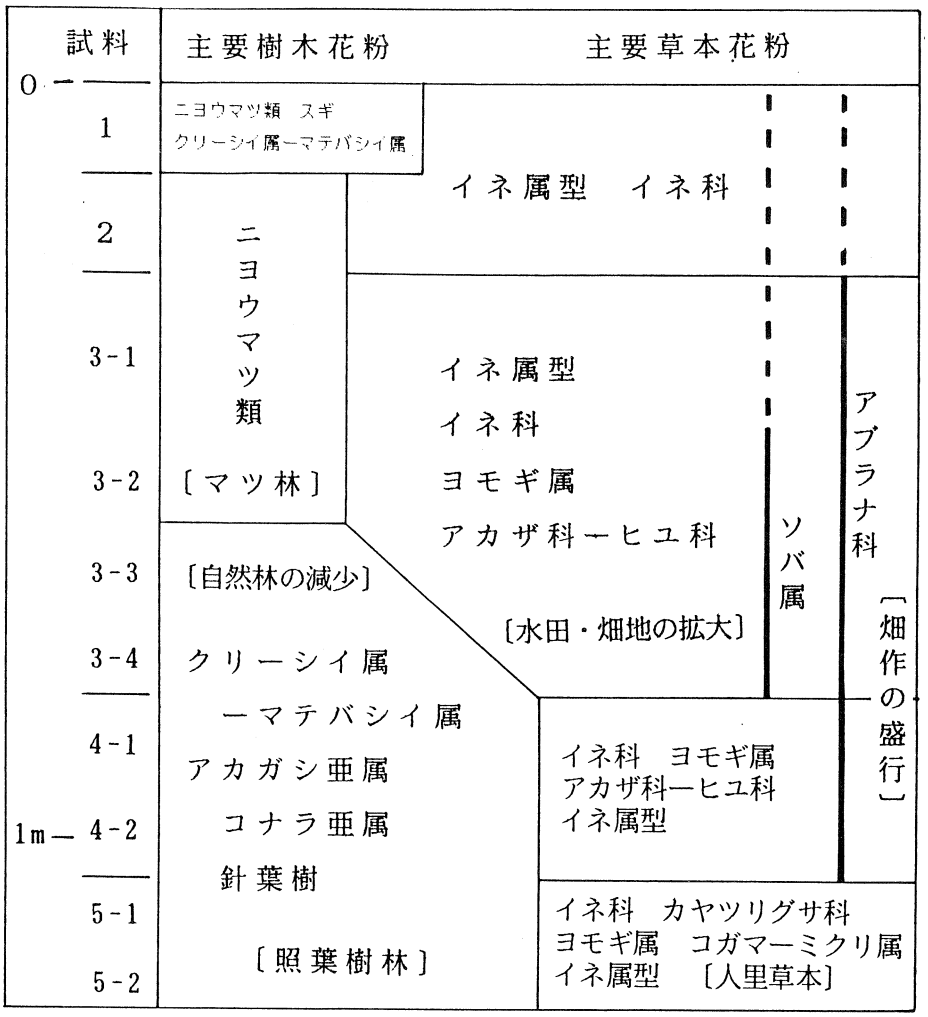
第２層においては、畑作要素が減少し、水田耕作の集約度が増加する。

旧表土の第１層において、森林植生の復原が少し行われ、シイ林が増加する。スギ林の増加は、人工造林によるものであろう。

４．まとめ

本遺跡の周辺は、弥生時代から古墳時代にかけてはカシ類やシイ類を主とする照葉樹林が比較的多く分布していたが、第３層において急激に減少している。古墳時代とされる第４層からアブラナ科やアカザ科－ヒユ科などの畑作が行われ、第３層になってソバ栽培が加わり、それに伴ってマツ林が成立する。

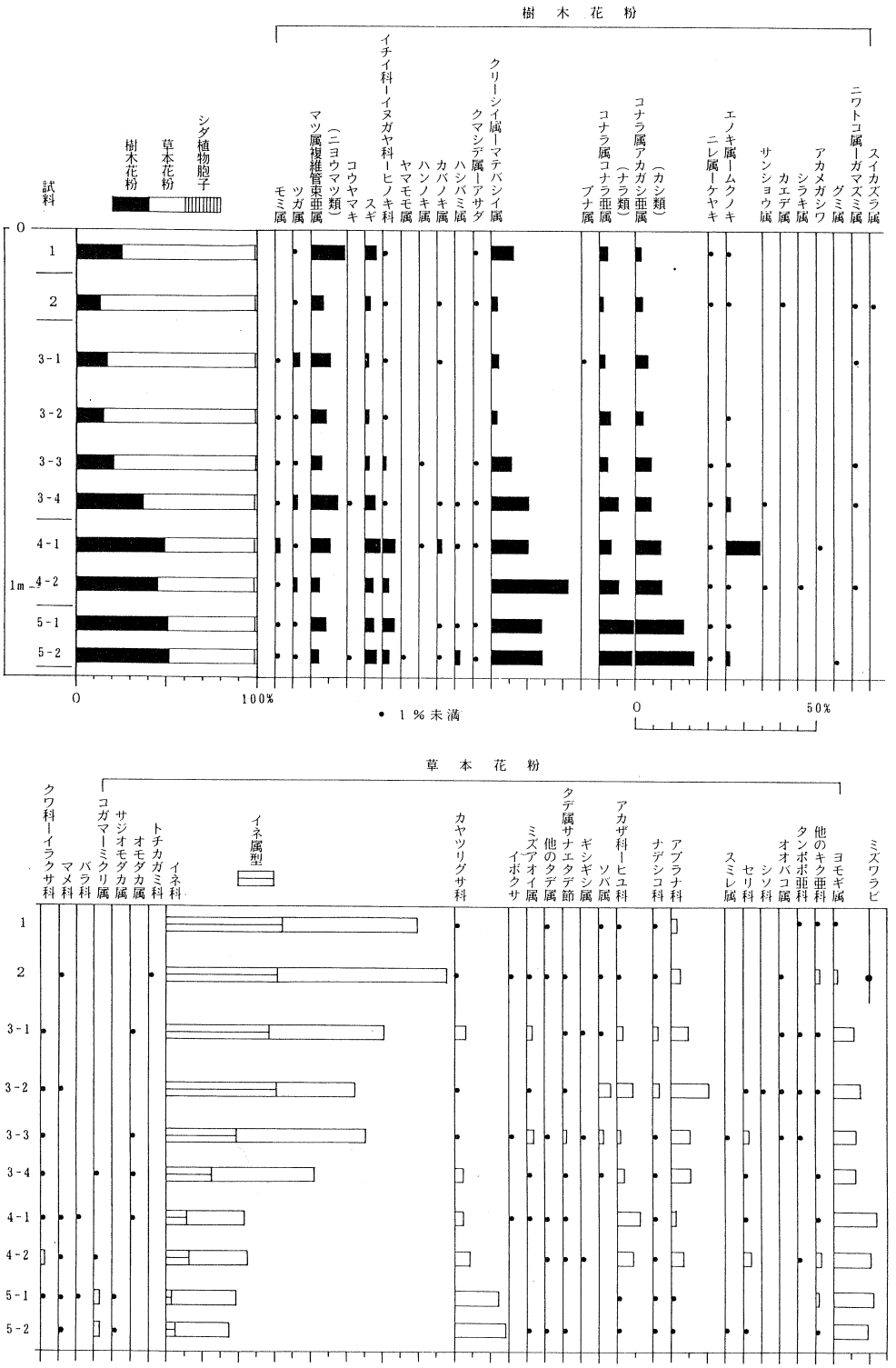
また、イネ属型花粉の出現率からみると第３層の上部以上は、水田作土の累積とみられる。アブラナ科、アカザ科－ヒユ科、ソバ属の畑作要素の検出から、古墳時代以降は、試料採取地点か近隣で集約性のある畑作が行われていたとみられる。



第90図　主要花粉および植生・農耕の変遷

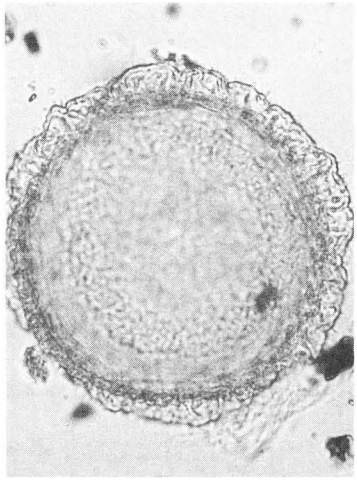
表15　来住廃寺遺跡15次調査の花粉遺体一覧

分類群		試料									
学名	和名	1	2	3-1	3-2	3-3	3-4	4-1	4-2	5-1	5-2
Arboreal pollen	樹木花粉										
Abies	モミ属	-	-	1	2	1	3	5	2	3	1
Tsuga	ツガ属	1	1	7	3	2	4	3	4	3	3
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）	38	12	21	17	12	28	22	8	16	9
Sciadopitys	コウヤマキ	-	-	-	-	-	1	-	-	-	2
Cryptomeria	スギ	13	6	4	4	4	11	17	9	11	13
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	1	1	1	1	4	1	13	6	12	7
Myrica	ヤマモモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Alnus	ハンノキ属	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-
Betula	カバノキ属	-	1	1	-	-	1	4	-	2	3
Corylus	ハシバミ属	-	-	-	-	-	1	1	-	1	6
Carpinus-Ostrya	クマシデ属ーアサダ	3	1	-	-	1	2	2	-	1	1
Castanea-Castanopsis-Pasania	クリーシイ属ーマテバシイ属	24	7	8	7	21	38	38	80	54	59
Fagus	ブナ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属（ナラ類）	9	4	7	13	9	19	13	21	36	37
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属（カシ類）	7	7	13	8	16	16	26	27	51	66
Ulmus-Zelkova	ニレ属ーケヤキ	1	1	-	-	1	2	3	1	1	1
Celtis-Aphananthe	エノキ属ームクノキ	3	1	-	1	3	5	36	2	1	1
Zanthoxylum	サンショウ属	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-
Acer	カエデ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Sapium	シラキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Mallotus	アカメガシワ	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Elaeagnus	グミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属ーガマズミ属	-	2	1	-	1	4	-	2	-	-
Lonicera	スイカズラ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Arboreal+Nonarboreal pollen	樹木+草本花粉										
Moraceae-Urticaceae	クワ科ーイラクサ科	-	-	1	2	2	3	1	6	2	-
Leguminosae	マメ科	-	1	-	1	-	-	1	2	3	1
Rosaceae	バラ科	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-
Nonarboreal pollen	草本花粉										
Typha-Sparganium	コガマーミクリ属	-	-	-	-	-	2	-	1	7	7
Alisma	サジオモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
Sagittaria	オモダカ属	-	-	2	-	1	1	3	-	-	-
Hydrocharitaceae	トチカガミ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
other Gramineae	イネ科	149	165	121	111	128	109	58	60	67	61
Oryza type	イネ属型	127	108	109	89	68	46	22	23	6	10
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3	2	12	2	2	9	10	15	47	59
Aneilema	イボクサ	-	1	-	-	2	-	2	-	-	-
Monochoria	ミズアオイ属	-	2	6	1	7	3	2	-	-	3
other Polygonum	タデ属	1	1	-	-	1	-	-	1	-	3
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	-	1	3	1	4	1	1	3	-	1
Rumex	ギシギシ属	-	-	1	-	1	-	-	1	-	-
Fagopyrum	ソバ属	2	1	2	13	5	1	-	-	-	-
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科ーヒユ科	1	2	7	18	4	8	25	17	2	2
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2	2	7	8	2	3	2	3	2	2
Cruciferae	アブラナ科	7	8	18	41	18	21	5	14	1	1
Viola	スミレ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
Umbelliferae	セリ科	-	-	-	3	6	1	3	8	-	1
Labiatae	シソ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Plantago	オオバコ属	-	1	1	2	2	-	-	-	-	-
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	-	2	1	1	-	-	2	-	-
other Asteroideae	キク亜科	1	4	3	3	-	1	3	7	4	2
Artemisia	ヨモギ属	7	4	23	28	23	23	45	39	44	40
Fern spore	シダ植物胞子										
Monolate type spore	単条溝胞子	1	1	3	1	1	3	3	5	1	3
Ceratopteris	ミズワラビ	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
other Trilate type spore	三条溝胞子	1	1	1	3	1	1	1	1	2	1
Arboreal pollen	樹木花粉	100	46	65	56	77	137	185	164	192	211
Arboreal+Nonarboreal pollen	樹木+草本花粉	-	1	1	3	2	3	3	8	6	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	301	303	317	322	276	229	181	194	181	194
Total pollen	花粉総数	401	350	383	381	355	369	369	366	379	406
Unknown pollen	未同定花粉	13	3	2	14	5	7	3	3	2	4
Fern spore	シダ植物胞子	2	3	4	4	2	4	4	6	3	4

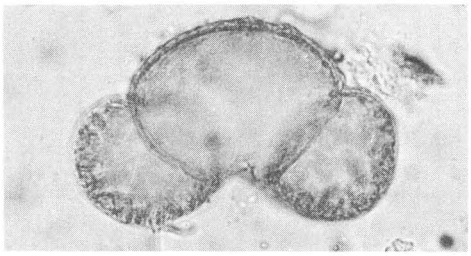


第91図　来住廃寺遺跡15次調査の花粉組成図

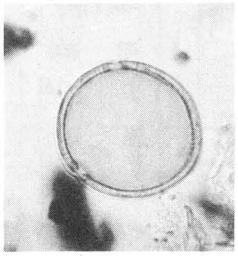
1．モミ属



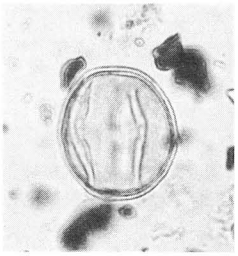
2．ツガ属



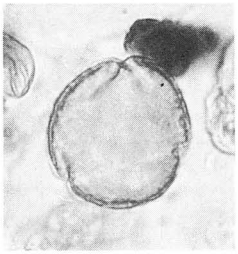
3．マツ属複維管束亜属



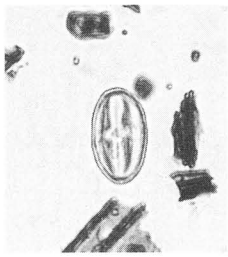
4．エノキ属ームクノキ



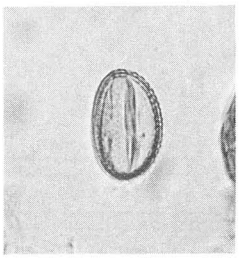
5．コナラ属アカガシ亜属



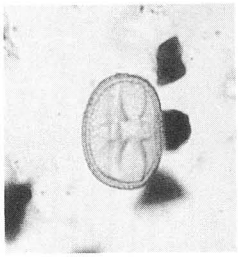
6．コナラ属コナラ亜属



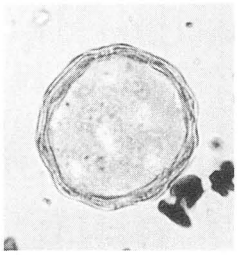
7．クリーシイ属
ーマテバシイ属



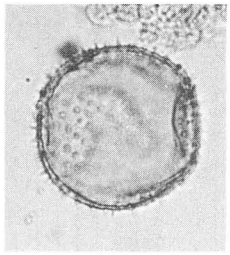
8．ニワトコ属
ーガマズミ属



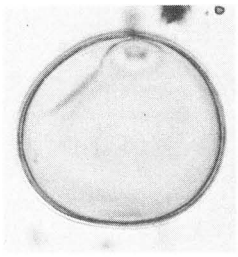
9．マメ科



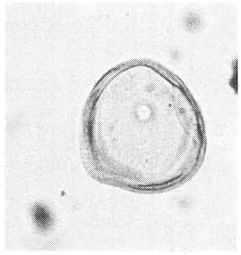
10．サジオモダカ属



11．トチカガミ科



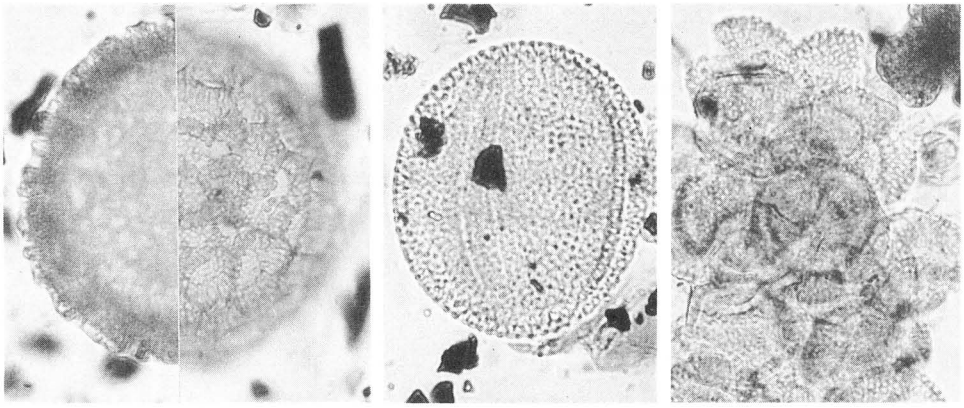
12．イネ属型



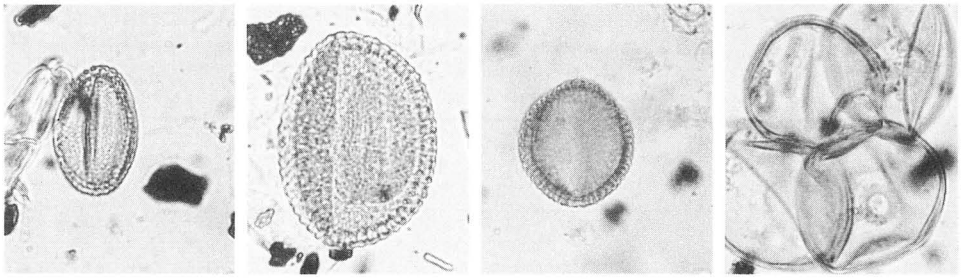
13．他のイネ科

：50 μ

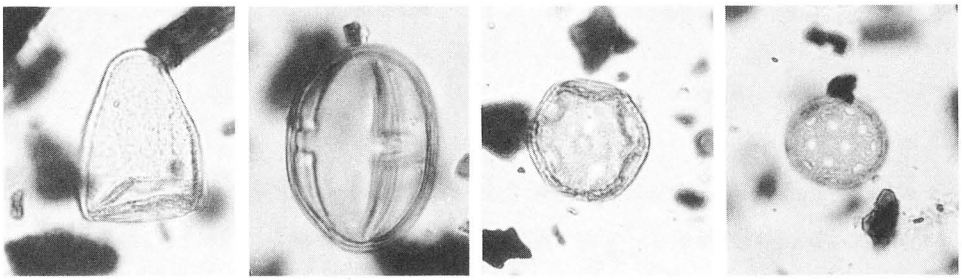
第92図　花粉遺体の顕微鏡写真Ⅰ



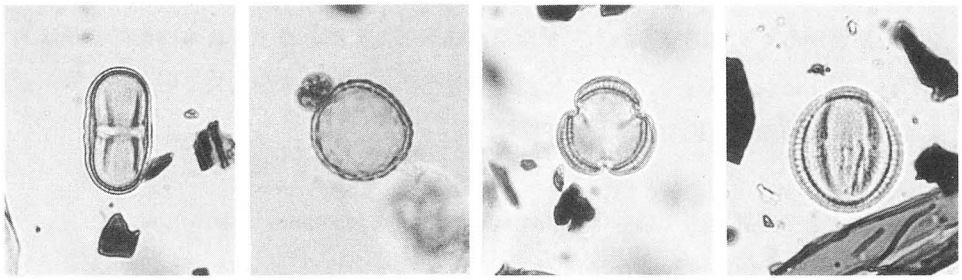
14. タデ属サナエタデ節　15. ソバ属　16. アブナラ科　塊



17. 他のタデ科　18. ソバ属　19. アブラナ科　20. 他のイネ科　塊



21. カヤツリグサ科　22. スミレ属　23. ナデシコ科　24. アカザ科ーヒユ科



25. セリ科　26. オオバコ属　27. ヨモギ属　28. ヨモギ属

: 50 μ

第93図　花粉遺体の顕微鏡写真II

3　樹種同定

1．試料と方法

No.1・No.2の2点について、樹種同定を行った。木材試料は、両刃カミソリを用いて、木材の横断面（木口面）、放射断面（柾目面）、接線断面（板目面）の基本的な3断面の切片を作製し、光学顕微鏡によって40～600倍で観察した。樹種同定は、これらの試料標本をその解剖学的特徴および現生樹林の木材標本との対比によって行った。

2．結果と記載

同定の結果は各同定レベルによって節名および種名によって表した。結果と各分類群の同定根拠となる特徴を以下に示す。

試　　料	樹　　種
No.1　(SP-562)	クリ
No.2　(SP-425)	コナラ亜属コナラ節

クリ　Castanea crenata Sieb.et Zucc.　ブナ科、図版Ｉａ～Ｉｃ

400μ弱の楕円形の道管が4・5列で配列する環孔材で、年輪界には1列に道管が明瞭にめぐり、他はやや疎な配列である（横断面）。道管の穿孔は単一で、放射組織は平状細胞のみからなる（放射断面）。放射組織は単列同性で平等に分布する（放射断面）。

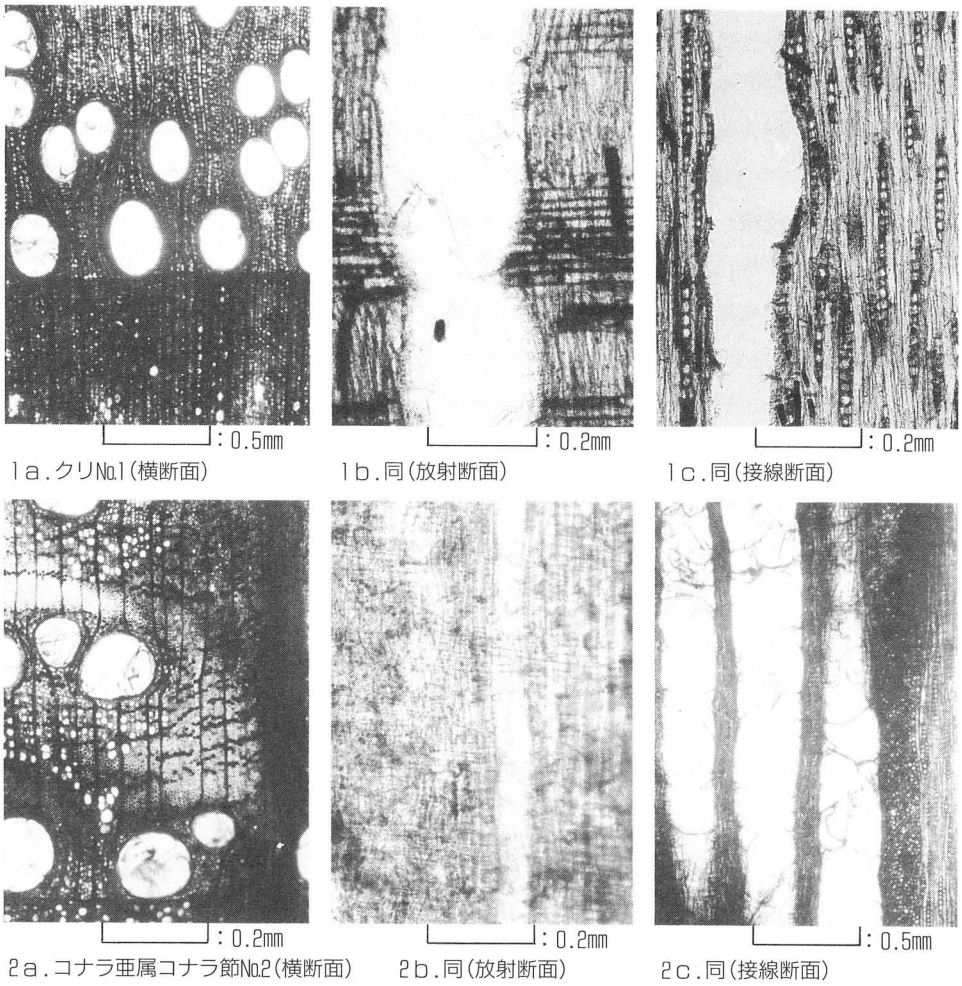
以上の形質からクリに同定される。北海道南部から九州に分布する日本特産の落葉高木で、樹高17m、径1m以上になる。材は、耐朽・保存性が高く特に水湿に良く耐え、建築・家具・土木・樽など用途は広汎である。

コナラ属コナラ亜属コナラ節　Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus　ブナ科、図版2a～2c.

環孔材で、やや大きな道管が1列の孔圏を形成し、孔圏外には多角形の小道管が扇状に配列する。軸方向柔細胞は、道管を包むものと接線状に配列するものとがある。放射組織は、

単列のものと広放射組織が存在する（横断面）。道管は単穿孔で、放射組織はおおむね平伏細胞からなる（放射断面）。放射組織は単列のものと広放射組織があり、典型的な複合放射組織である（接線断面）。

以上の形質よりコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定される。コナラ節にはカシワ・コナラ・ナラガシワ・ミズナラがあり、北海道から九州まで温帯を中心に分布する落葉高木。種類によっては、高さ30m、径1.5mに達する。材は強く堅く、家具・建築・器具・樽に利用される。



1a.クリNo.1（横断面）　1b.同（放射断面）　1c.同（接線断面）

2a.コナラ亜属コナラ節No.2（横断面）　2b.同（放射断面）　2c.同（接線断面）

第94図　来住廃寺遺構15次調査出土の顕微鏡写真

4　種子分析

来住廃寺15次調査出土の種実について

桃崎祐輔（筑波大学歴史人類学研究科）

1．はじめに

来住廃寺遺跡は、小野川流域湿地に張り出す微高地上に立地し、第15次調査ではその落ち際にあたる3区下段が調査の対象となった。この3区下段は滞水包含層となっているため木製品をはじめとする有機質遺物の遺存が良好であり、種実遺体も相当量が得られている。そこで本文では、種実遺体の品種同定および分析の結果について報告することとしたい。

なお3区下段の種実遺体の出土層位の記載については、海抜34.20mを境にそれより下層を「Ⅴ層」、それより上層を「Ⅳ層」とした。Ⅴ層は6世紀後半～7世紀初頭の須恵器を伴うことから古墳時代後期、Ⅳ層は8～9世紀の須恵器を上限に12世紀初頭～中葉の遺物を下限とすることから平安時代末までに形成されたものと考えられる。種実の整理に際してはラベルに記載された水準高に従って資料の帰属する層位を決定したが、取り上げ水準高の振幅が海抜34.20mを挟んで上下両方に跨るものも多かったのでこれらは「Ⅳ・Ⅴ層混在」として取り扱った。また出土層位の特定が出来ないものは「層位不明」とした。

2．種実の種類

出土した種実のうち、同定できたものを以下に示す。モモを除く内訳は表の通りである。

Ⅴ　層		
バラ科	モ　　モ	Prunus Persica Batsch.（果核）
	アンズ？	Prunus armenica L. var. Ansu Maxim（果核）
	サクラ属	Prunus sp（果核・樹皮）
ウリ科	ヒョウタン	Lagenaria leucantha Rusuby var. Gourda Makino.（果皮・種子）
	メロン類	Cucumis Melo L.（種子）
イネ科	ジュズダマ	Coix Lachryma－ Jobi L.（偽果）
センダン科	センダン	Melia Azedarach L. var. japonica　Makino.（果核）
ブナ科	シ　　イ	Castanopsis sp.（果皮・殻斗）
Ⅳ　層		
バラ科	モ　　モ	Prunus persica Batsch（果核）

このほか同定出来なかった資料も数点有った。これらは木器などとともに発掘の過程で取り上げられた非定量的資料で大形で比較的容易に視認できるものに偏向しており、雑草種子など微細なものは含まれておらず、遺跡周辺の自然環境を復原する上ではあまり参考にならないが、栽培植物を多く含んでおり、当時の食物や遺跡地周辺の人為植生を推定する資料となる。以下では特にその大半を占める桃核の分析を中心に叙述を進めることとしたい。

3．桃核の分析

(1) 出土桃核の観察結果

第15次調査では合計1028個の桃核が採集された。最小核（Ⅴ層）は17.2×15.6×12.9㎜、最大核（Ⅳ・Ⅴ層混在）は35.0×26.2×18.6㎜を測る。日本列島の出土桃核はほぼ核長13㎜～40㎜の範囲に収まるので、第15次調査出土の桃核もその範疇にある事が窺える。

それらの資料の核長別等級・保存状態は表20に示した通りである。

次に桃核の核頂部の尖度を「尖大」「尖中」「尖小」「微尖」「円」および「不明」の６段階に区分したものを表17に、見掛けの膨らみの程度を「膨大」「膨中」「膨小」「扁平」および「不明」の５段階に区分したものを表18に示した。更にすべての桃核の核長・核幅・核厚を計測し、うち三項目すべてを欠損なく計測できた738個を統計操作の対象とした。その計測値および長幅比・長厚比の平均を層位ごとにまとめたのが表19である。

桃核全体の計測値平均は24.50×19.88×15.32㎜で、Ⅳ層平均が26.36×20.24×15.22㎜、Ⅴ層平均が23.83×19.71×15.41㎜、長幅比はⅣ層が0.768、Ⅴ層では0.827、長厚比はⅣ層が0.577、Ⅴ層が0.647で、上層ほど桃核が大きく細身で扁平となり、下層ほど桃核が小型で丸みを帯び膨らみが顕著となる単純な傾向を読み取ることができた。即ちⅣ層の平安時代の桃核がやや大型で核の先端が細長く尖り、断面が扁平であるのに対し、Ⅴ層の古墳時代の桃核は小型円形で、先端はあまり尖らず丸く、核の膨らみが大きいという傾向を示している。

以上Ⅴ層とⅣ層の桃核には様々な点で差異を認めることが出来たが、これは各々の層ごとに桃の品種構成が異なっていることに起因していると考えられる。

(2) 桃の品種について

小清水卓二（1963ほか）氏は日本列島出土のモモPrunus persica (Linn) Batsuch.の果核を、var. vulgaris Maxim.（栽培モモ）、var. subspontanea Makino（ノモモ）、var. antiqua Koshimizu（コダイモモ）、var. nucipersica Dipp.？（スバイモモ？、所謂ネクタリン）の４品種に分類した。前３種の核長・核幅・核厚の平均計測値、及び特徴は、栽培モモは29×21×16㎜程度で大型、長く扁平状を呈する。ノモモは21×19×15㎜程度、中型でやや丸みを帯びる。小清水氏の命名になるコダイモモは、18.9×19×12.9㎜程度、小型球状を呈するとしている。丹信實（1964）氏は核長19㎜未満の小型核で球状でなく卵型を呈するものにコダイヒメモモと命名し、日本在来野生種であると述べているが、小型のコダイモモと明確に区別されるものではないし、また野生種とする見解も根拠に乏しい。

粉川昭平（1986ほか）氏は細長い形状で長さが中程度の核が中世以降に多いことを指摘している。これは上述のどの種とも異なっており、ここでは仮に「中世型」と呼んでおきたい。

上記の種名は出土桃核に対して命名されたものであり、肝腎の果質がどのようなものであったかは憶測の域を出ないが、筆者は栽培モモがやや大型の白桃で、ノモモやコダイモモが小振りの黄桃を主体とし、若干白桃の小果を交えていたのではないかと考えている。また

コダイヒメモモのような非常に小型の核であれば果実の大きさは梅果程度と考えられ、果実の利用は想定しにくく、花木などの可能性を検討する必要があろう。

「中世型」は、明治初年の上海・天津水蜜桃の導入によって駆逐された日本在来栽培種と類似しており、特に岡山県井原市岩野付近で栽培されていた岩野桃の核に似ている。

しかし核の観察にもとづく分類には批判もある。直良信夫（1956）氏は、小清水分類は典型的なものでは当てはまるが、各々の品種の中間形態を示すものは漸次変化して明確な区分線を画す事は出来ないと述べ、また奈良県布留遺跡の種実報告を行った太田三喜（1982）氏は、コダイモモとされる核長1.9cm前後の一群は漸次大きくなって2.0cm以上のノモモと混在するので、別亜種とするのは妥当ではなく、ノモモの未成熟果ではないかと述べている。

このような核の変異が起こる要因については、渡辺誠・粉川昭平（1982）氏らが佐賀県菜畑・菜畑八反間遺跡の桃核分析を通じ、縄文晩期から弥生初頭の桃核が比較的大型であり、古相を示していない事を挙げ、当初優良種が導入されたにもかかわらず、栄養繁殖が行われなかったため品種の劣化を招いた結果ではないかと指摘している。

来住廃寺遺跡の資料中には、上述した種類に該当するものは一通り認められた。

Ⅴ層出土核の計測値平均はノモモのやや大型のものに近く、実際の核も総じて平面形が円形に近く、核頂部が丸く、核幅が広くて膨らみが大きく丸みのあるものが多い。これらはノモモを主体にコダイモモを混じえている。栽培モモ・中世型に相当するものは少ない。

Ⅳ層出土核の計測値平均は栽培モモに接近しており、また「中世型」に相当するものも多い。「中世型」の出現時期については現状ではよくわかっていないが、Ⅳ層の包含遺物が12世紀中葉を下限とするため、遅くとも平安時代末には普及していたと考えてよいだろう。

なお非常によく似た形質の桃核が同一層準・地点から集中出土する例があり、それらは同じ樹から落下したと思われ、付近に桃の植樹・栽培が行われていた可能性が考えられる。

(3) 半欠と破片、穿孔核について

完形核のほかには機械的な損壊を受けた「破損」、表面が磨耗した「磨滅」、核に穴が穿たれた「穿孔」、核の縫合線から半截した「半欠」、破砕片である「破片」などがある。

このうち穿孔を有するものは、アカネズミなどの齧歯類が内部の桃仁を食べるために噛って穴をあけた痕跡であることが実験で確かめられており、人為的なものではないが、吉岡金市（1967）氏によれば中国地方では猟師が桃や梅の穿孔核をキジ笛に用いる例があるという。

半欠・破片は桃核全体で約18%を占めており、そうした破片が回収されにくいことを考慮すれば本来は更に高い比率を占めていたと推定される。これは自然破損にしては多過ぎるので、桃核中の仁の採集を目的として人為的に核の破砕が行われた可能性が考えられる。

桃仁はケンフェロールなどの成分を含み、古代では最も一般的に用いられた漢方薬のひとつであった。『延喜式』巻三十六の典薬寮諸國進年料雑薬の条によれば、全国の33カ国が桃仁の貢進を行っており、四国でも四カ国すべてが桃仁の貢進を義務付けられていた。内訳は阿

波二斗、讃岐一斗五升、伊豫一斗、土佐四升となっており、愛媛県下でも平安時代には桃仁の生産が行われていたことが窺える。

(4) 来住廃寺遺跡出土桃核の位置付け

愛媛県下では縄文時代前期の大見遺跡、突帯文土器期の大淵遺跡、弥生時代の祝谷アイリ遺跡・祝谷土居窪遺跡・八堂山遺跡・南宮ノ戸遺跡、古墳時代の宮前川遺跡・古照遺跡・正光寺2号墳、古代の大見遺跡河道、中世の古照遺跡などから桃核の出土が知られており、このうち古照遺跡では13～14世紀の河道から桃核数百点が出土しているが、他は1～100点程度で、1000個を超える桃核が出土したのは来住廃寺遺跡が初めてである。

Ⅴ層の桃核は6世紀末～7世紀初頭の資料である。愛媛県内の同時期の資料には新居浜市正光寺2号墳の横穴式石室より桃核・センダン核を出土している例がある。

なお奈良県桜井市の上ノ宮遺跡は6世紀末～7世紀の居館址と考えられているが、石組遺構から多量の桃核が出土しており、この時期庭園に桃樹を植えることが一般的に行われていたようである。来住廃寺遺跡でも寺院創建以前の建物群が検出されており、その周囲に桃樹が植えられている状景が想起されよう。

Ⅳ層が平安時代末の堆積したものとすれば、「中世型」桃核の出現を考える上で一つの指標となりえる。12世紀代の『鳥獣戯画』では供物に桃が含まれ、また『信貴山縁起絵巻』には垣内に桃を植えている様子が描かれており、小規模な栽培の様子が窺える。

種実の整理に際しては松山市教育委員会各位の格別の御配慮にあずかり、この場に分析と報告の機会を頂いた。末尾ながら記して御礼申し上げたい。

本文引用参考文献

小清水卓二　1963　「古代日本の住居跡から出土する桃核について」『近畿古文化論攷』
橿原考古学研究所、吉川弘文館　pp.561～568.

丹　信實　1964　「紫雲出山貝層の自然遺物」『紫雲出』　詫間町文化財保護委員会　真陽社　pp.1～15.

直良信夫　1956　『日本古代農業発達史』　さ・え・ら書房　pp.289～290.他

太田三喜　1982　『考古学研究中間報告4－出土果実および種子の同定Ⅰ』　埋蔵文化財天理教調査団

渡辺誠・粉川昭平　1982　「菜畑遺跡の大型種子」『菜畑遺跡』　唐津市教育委員会　pp.467～473.

粉川昭平　1986　「菜畑遺跡の植物遺体について」
『矢部遺跡－国道24号線橿原バイパス建設に伴う遺跡調査報告（Ⅱ）』
橿原考古学研究所　pp.271～272.

吉岡金市　1967　『果樹の接木交雑による新種・新品種育成の理論と実際　第一巻』
新科学文献刊行会　PP.337～359.

表16　来住廃寺15次調査出土種実一覧（モモ核を除く）

調査	日付	地区	グリッド	層位	種類	個数	
15次	911209	3区	—	Ⅳ層・Ⅴ層混在	骨もしくは貝殻	3	
	911210	下段	6グリッド他	Ⅴ層	サクラ樹皮	1	
	911213				サクラ属小核	1	ヤマザクラ類？
	911224				サクラ属小核	2	ユスラウメ？
					アンズ核？	1	13.3×11.2× 8.4㎜
					（小形スモモ？）		
					センダン核	1	
					ヒョウタン種子	7	
					メロン類種子	4	マクワウリと思われる
					ジュズダマ偽果	6	
					シイ？果皮片	1	
					シイ殻斗	1	
					不明円形種子	5	
					不明種子	2	
					不明小種子	1	

表17　来住廃寺15次調査出土桃核　尖度別一覧表

出土層位	個体数	全体比	尖大	尖中	尖小	微尖	円	不明
Ⅳ　層	209	20.33%	44 (21.05%)	57 (27.27%)	55 (26.32%)	31 (14.83%)	8 (3.83%)	14 (6.70%)
Ⅳ・Ⅴ層混在	142	13.81%	15 (10.56%)	17 (11.97%)	48 (33.80%)	27 (19.01%)	25 (17.61%)	10 (7.04%)
Ⅴ　層	635	61.77%	24 (3.78%)	28 (4.41%)	138 (21.73%)	211 (33.23%)	169 (26.61%)	65 (10.24%)
層位不明	42	4.09%	6 (14.29%)	9 (21.43%)	7 (16.67%)	12 (28.57%)	8 (19.04%)	0 (0.00%)
来住15次合計	1028	100.00%	89 (8.66%)	111 (10.80%)	248 (24.12%)	281 (27.33%)	210 (20.43%)	89 (8.66%)

表18　来住廃寺15次調査出土桃核　膨張度別一覧表

出土層位	個体数	全体比	膨大	膨中	膨小	扁平	不明
Ⅳ　層	209	20.33%	50 (23.92%)	114 (54.55%)	41 (19.61%)	3 (1.43%)	1 (0.47%)
Ⅳ・Ⅴ層混在	142	13.81%	47 (34.51%)	65 (45.77%)	20 (14.08%)	6 (4.23%)	2 (1.41%)
Ⅴ　層	635	61.77%	302 (47.56%)	251 (39.53%)	56 (8.82%)	11 (1.73%)	15 (2.36%)
層位不明	42	4.09%	18 (42.86%)	16 (38.10%)	6 (14.28%)	2 (4.76%)	0 (0.00%)
来住15次合計	1028	100.00%	419 (40.76%)	446 (43.38%)	123 (11.96%)	22 (2.14%)	18 (1.75%)

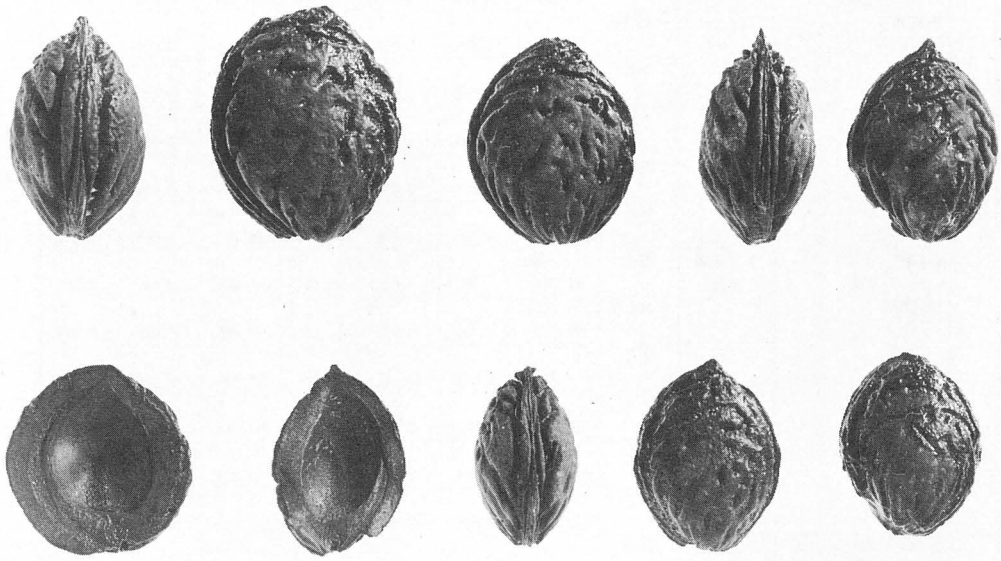
表19　来住廃寺15次調査出土桃核　層別計測平均値一覧表

各層合計	個体数	全体比	核長平均	幅長平均	核厚平均	長幅比	長厚比
Ⅳ　層	154	20.87%	26.357㎜	20.244㎜	15.217㎜	0.7680463	0.5773343
Ⅳ・Ⅴ層混在	88	11.92%	25.326㎜	20.348㎜	15.258㎜	0.803428	0.6024588
Ⅴ　層	470	63.69%	23.833㎜	19.713㎜	15.414㎜	0.8271272	0.6467463
層位不明	26	3.52%	23.174㎜	19.342㎜	14.688㎜	0.8348966	0.6340167
来住15次合計	738	100.00%	24.500㎜	19.886㎜	15.328㎜	0.8116595	0.6256391

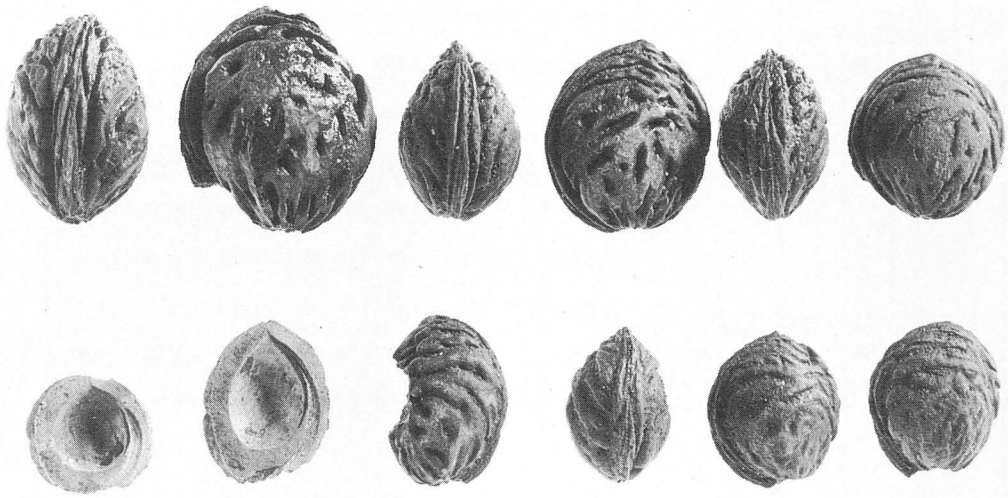
表20　来住寺15次調査出土桃核　層別保存状態・核長一覧

調査	日付	地区	グリッド	層位	保存状態	個数	35mm以上40mm未満	30mm以上35mm未満	25mm以上30mm未満	20mm以上25mm未満	15mm以上20mm未満	不明
15次	911111～911206	3区下段	—	Ⅳ層	完形	149 (72.29%)	0 (0.00%)	9 (6.04%)	99 (66.44%)	41 (27.52%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)
					欠損磨滅	29 (13.88%)	0 (0.00%)	1 (3.45%)	16 (55.17%)	9 (31.03%)	0 (0.00%)	3 (10.34%)
					穿孔	2 (0.97%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	2 (100.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)
					半欠	27 (12.42%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	10 (37.04%)	10 (37.04%)	0 (0.00%)	7 (25.93%)
					破片	2 (0.97%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	2 (100.00%)
					合計	209 (100.00%)	0 (0.00%)	10 (4.78%)	127 (60.77%)	60 (28.71%)	0 (0.00%)	12 (5.74%)
	911202～911210	3区下段	—	Ⅳ・Ⅴ層混在	完形	81 (57.04%)	1 (1.23%)	7 (8.64%)	43 (53.09%)	29 (35.80%)	1 (1.23%)	0 (0.00%)
					欠損磨滅	19 (45.24%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	8 (42.11%)	11 (57.89%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)
					穿孔	7 (4.93%)	0 (0.00%)	1 (14.29%)	0 (0.00%)	4 (57.14%)	0 (0.00%)	2 (28.57%)
					半欠	31 (21.83%)	0 (0.00%)	1 (3.23%)	9 (29.03%)	17 (54.84%)	1 (3.23%)	3 (9.68%)
					破片	4 (2.82%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	4 (100.00%)
					合計	142 100.00%)	1 (0.00%)	9 (29.03%)	60 (42.25%)	61 (42.96%)	2 (0.14%)	9 (6.34%)
	911202～911225	3区下段	—	Ⅴ層	完形	403 (63.46%)	0 (0.00%)	9 (2.23%)	127 (31.51%)	250 (62.03%)	17 (4.22%)	0 (0.00%)
					欠損磨滅	89 (14.02%)	0 (0.00%)	1 (1.12%)	11 (12.36%)	61 (68.54%)	9 (10.11%)	7 (7.87%)
					穿孔	31 (4.88%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	5 (16.13%)	19 (61.29%)	3 (9.61%)	4 (12.90%)
					半欠	100 (15.75%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	18 (18.00%)	60 (60.00%)	7 (7.00%)	15 (15.00%)
					破片	12 (1.89%)	0 (0.00%)	1 (8.33%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	11 (91.67%)
					合計	635 (100.00%)	0 (0.00%)	11 (1.73%)	161 (25.35%)	390 (61.42%)	36 (5.67%)	37 (5.83%)
	911121～920110	3区下段	—	不明	完形	24 (57.14%)	0 (0.00%)	1 (4.17%)	8 (33.33%)	15 (62.50%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)
					欠損磨滅	5 (11.90%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	5 (100.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)
					穿孔	2 (4.76%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	1 (50.00%)	1 (50.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)
					半欠	11 (26.19%)	0 (0.00%)	1 (9.09%)	2 (18.18%)	6 (54.54%)	2 (18.18%)	0 (0.00%)
					破片	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)
					合計	42 (100.00%)	0 (0.00%)	2 (4.76%)	11 (26.19%)	27 (64.29%)	2 (4.76%)	0 (0.00%)
	911111～920110	3区下段	—	15次合計	完形	657 (63.91%)	1 (0.15%)	26 (3.96%)	277 (42.16%)	335 (50.99%)	18 (2.74%)	0 (0.00%)
					欠損磨滅	142 (13.81%)	0 (0.00%)	2 (1.41%)	35 (24.65%)	86 (60.56%)	9 (6.34%)	10 (7.04%)
					穿孔	42 (4.09%)	0 (0.00%)	1 (2.38%)	8 (19.05%)	24 (57.14%)	3 (7.14%)	6 (14.28%)
					半欠	169 (16.44%)	0 (0.00%)	2 (1.18%)	39 (23.08%)	93 (55.03%)	10 (5.29%)	25 (14.79%)
					破片	18 (1.75%)	0 (0.00%)	1 (5.56%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	17 (94.44%)
					合計	1028 (100.00%)	1 (0.097%)	32 (3.11%)	359 (34.92%)	538 (52.33%)	40 (3.89%)	58 (5.64%)

第95図　3区下段出土種実（縮尺1／1）



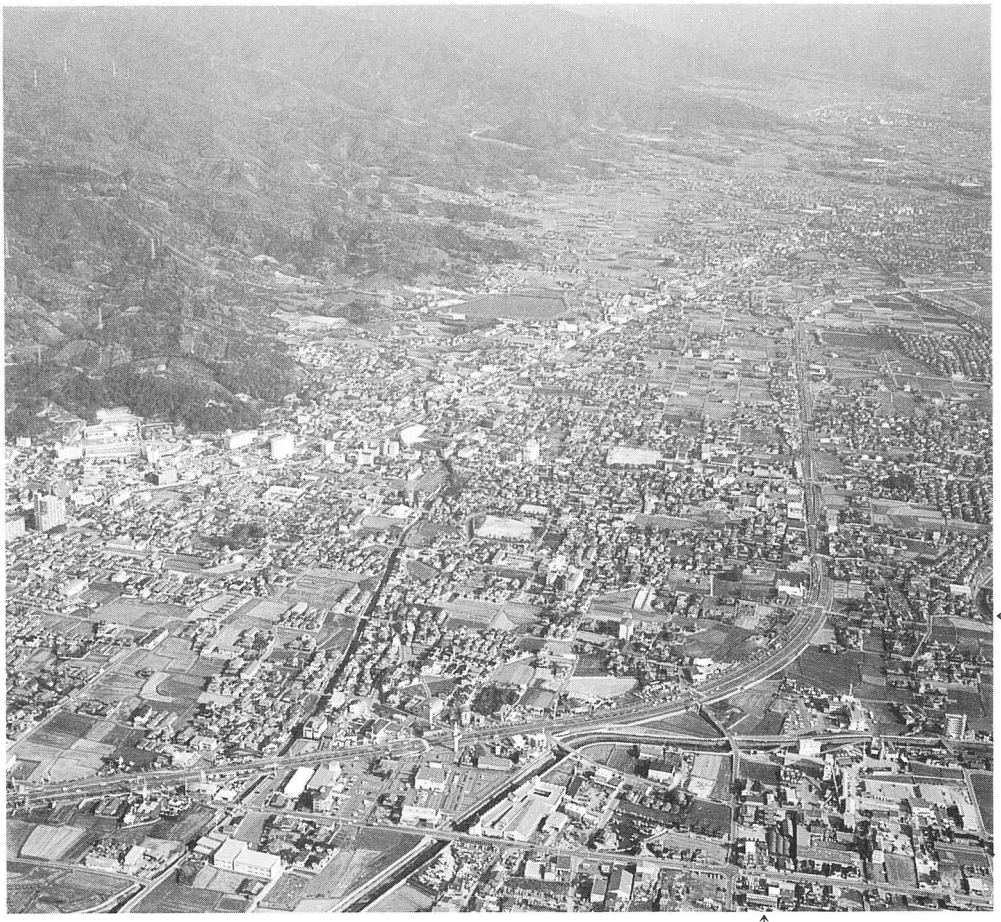
3区下段Ⅳ層出土桃核



3区下段Ⅴ層出土桃核

図　　版

図版一



来住台地航空写真

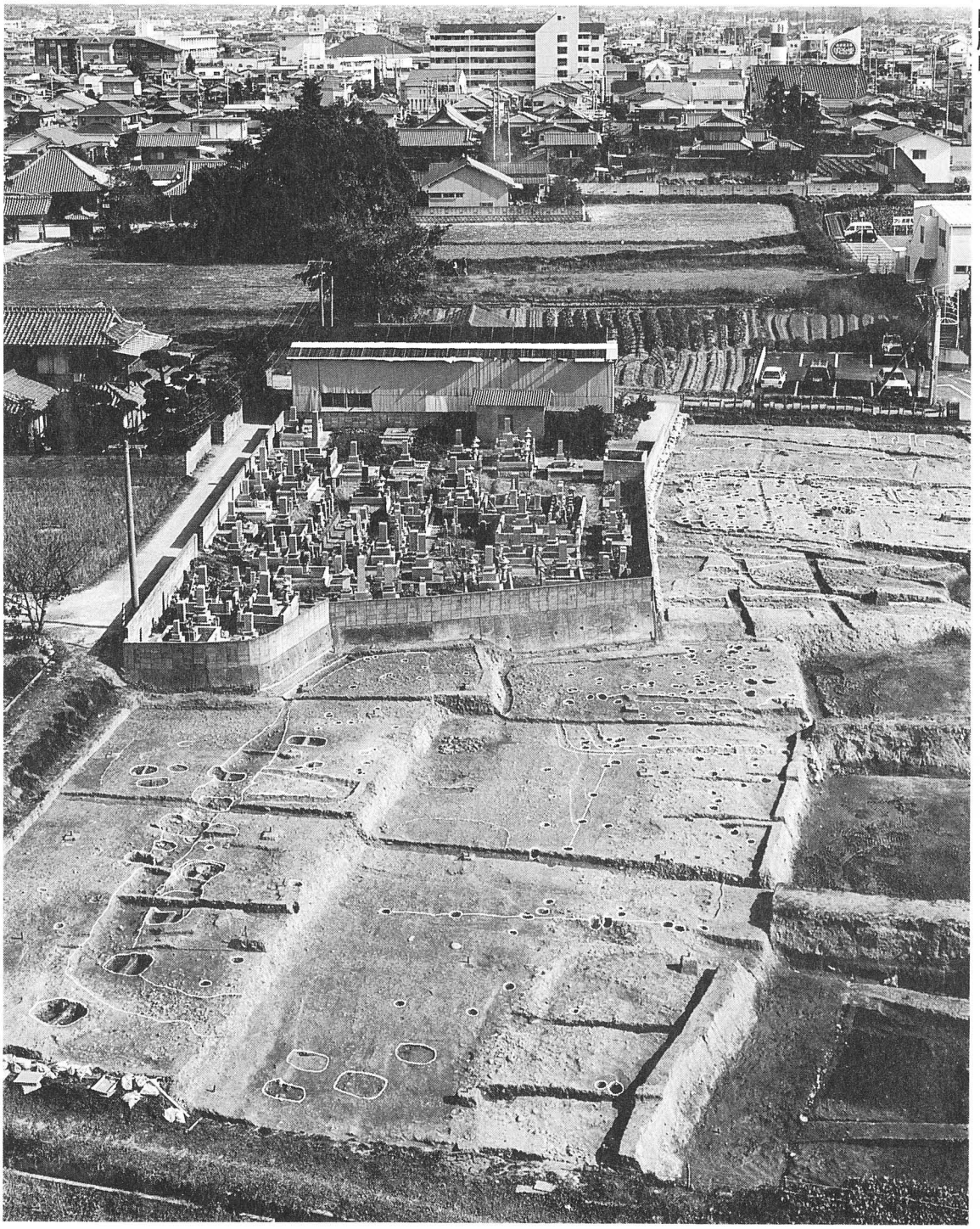
1．調査前近景

2．表土剝ぎ取り状況

図版三

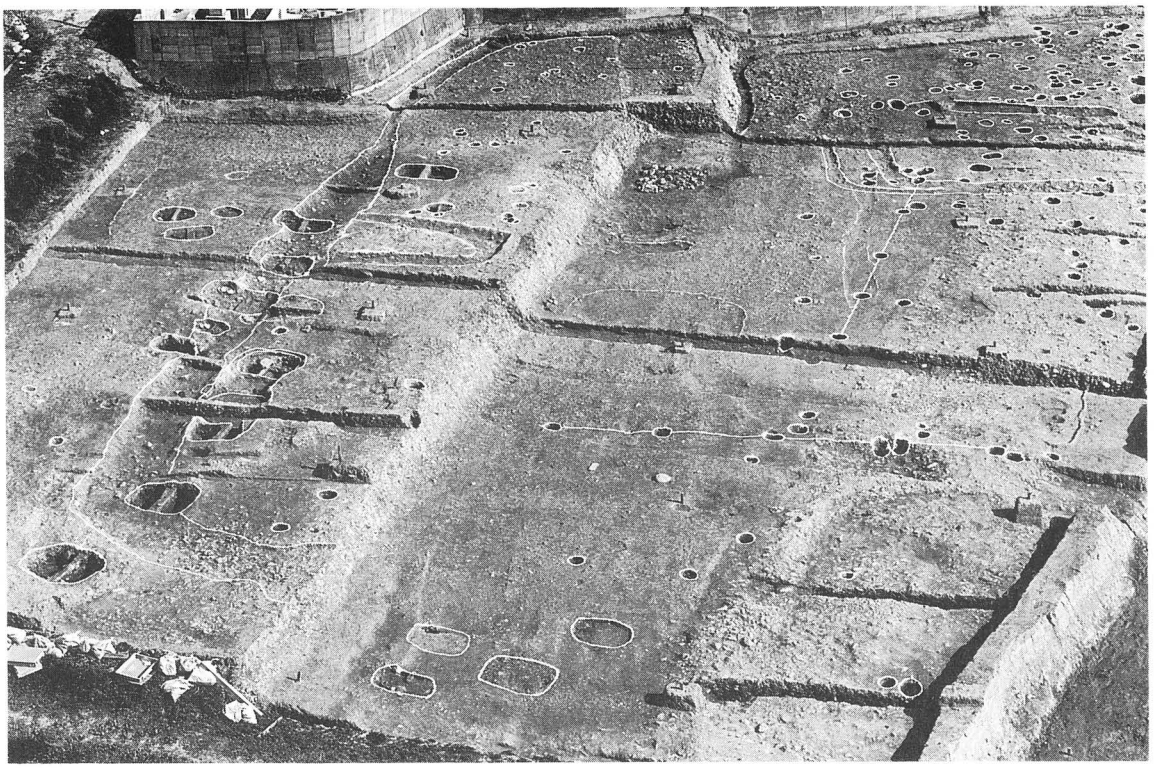
1．西壁土層上段

2．西壁土層中段

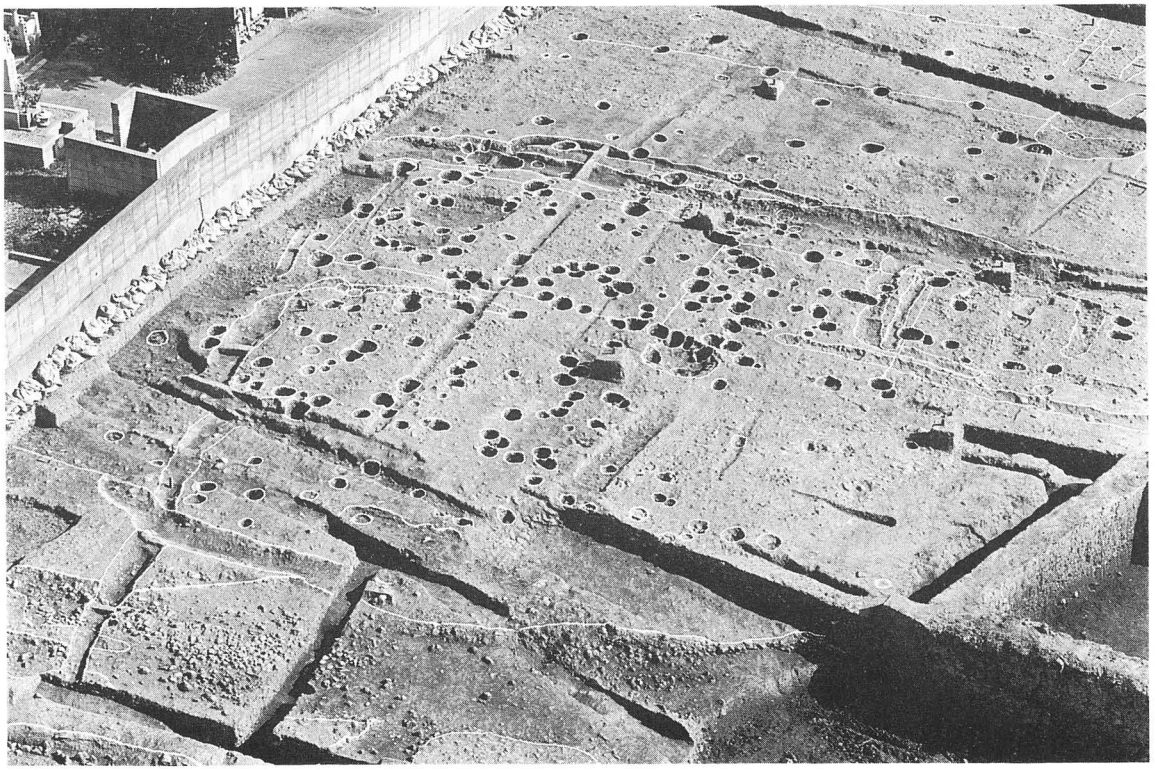


調査区全景

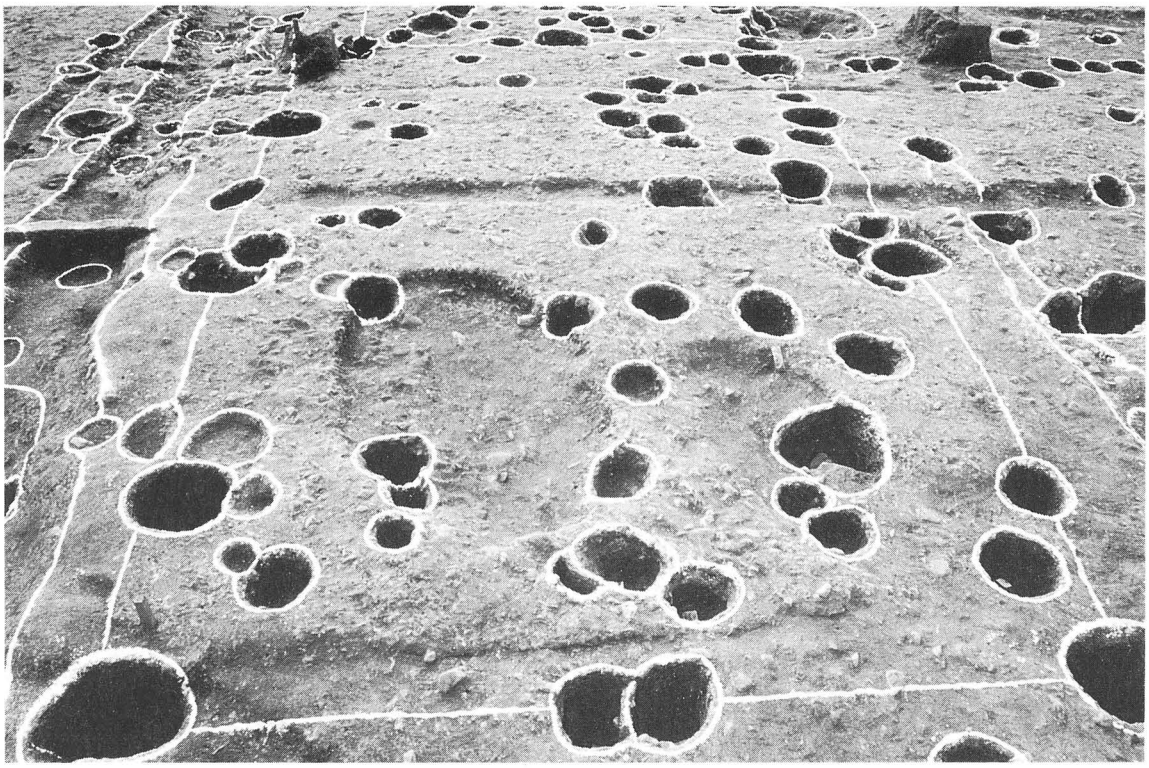
図版五



1．調査区西部



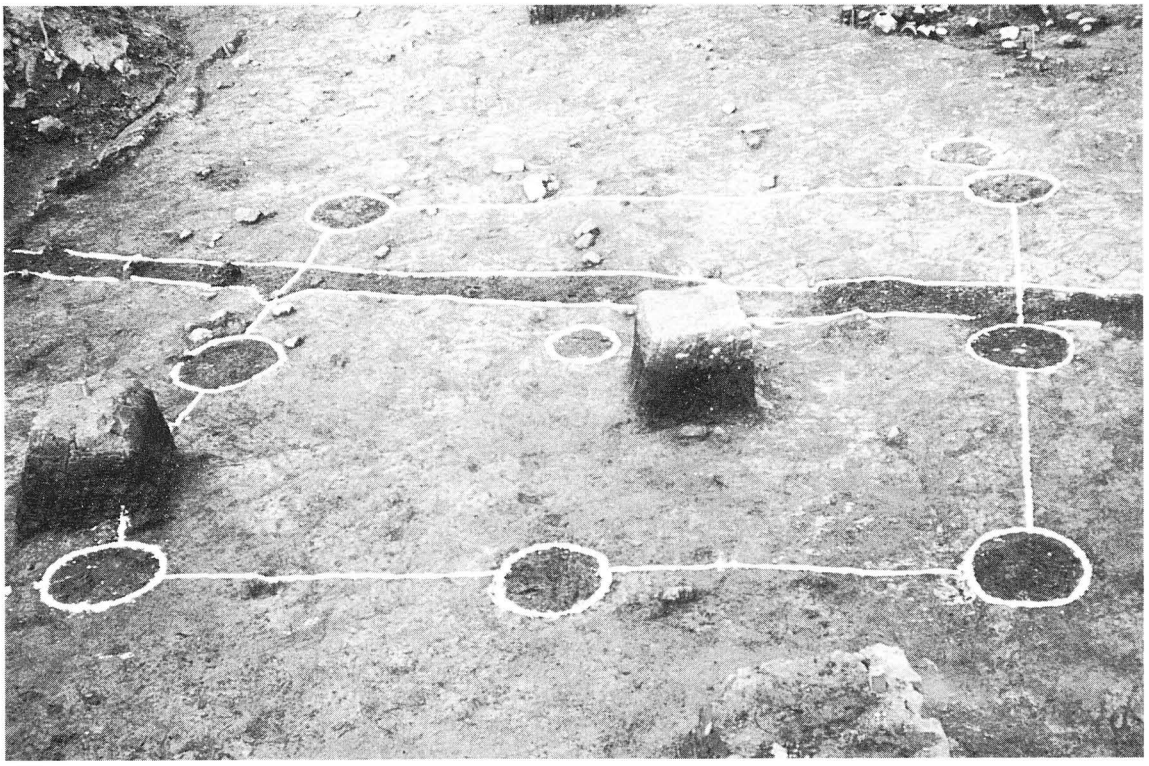
2．調査区東部



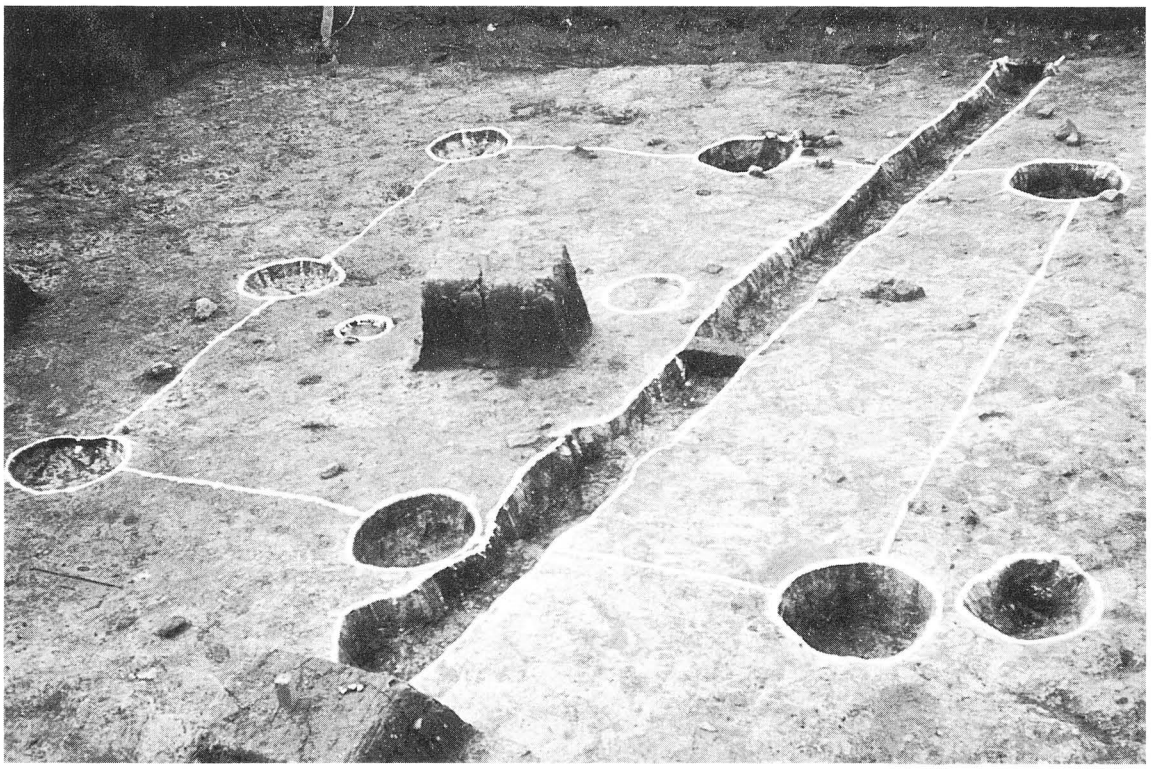
1．ＳＢ－１（北より）

2．ＳＢ－２（南より）

図版七

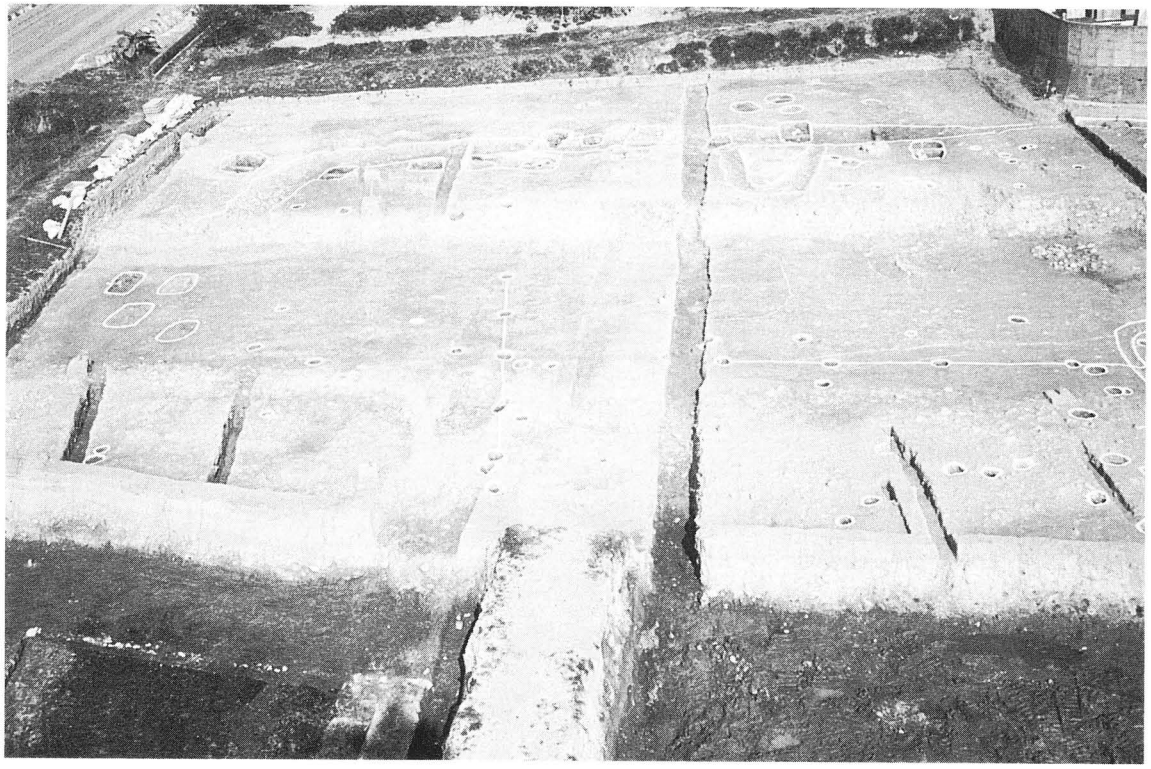


1．ＳＢ－３（南より）



2．ＳＢ－３（東より）

1．ＳＡ－２（北より）

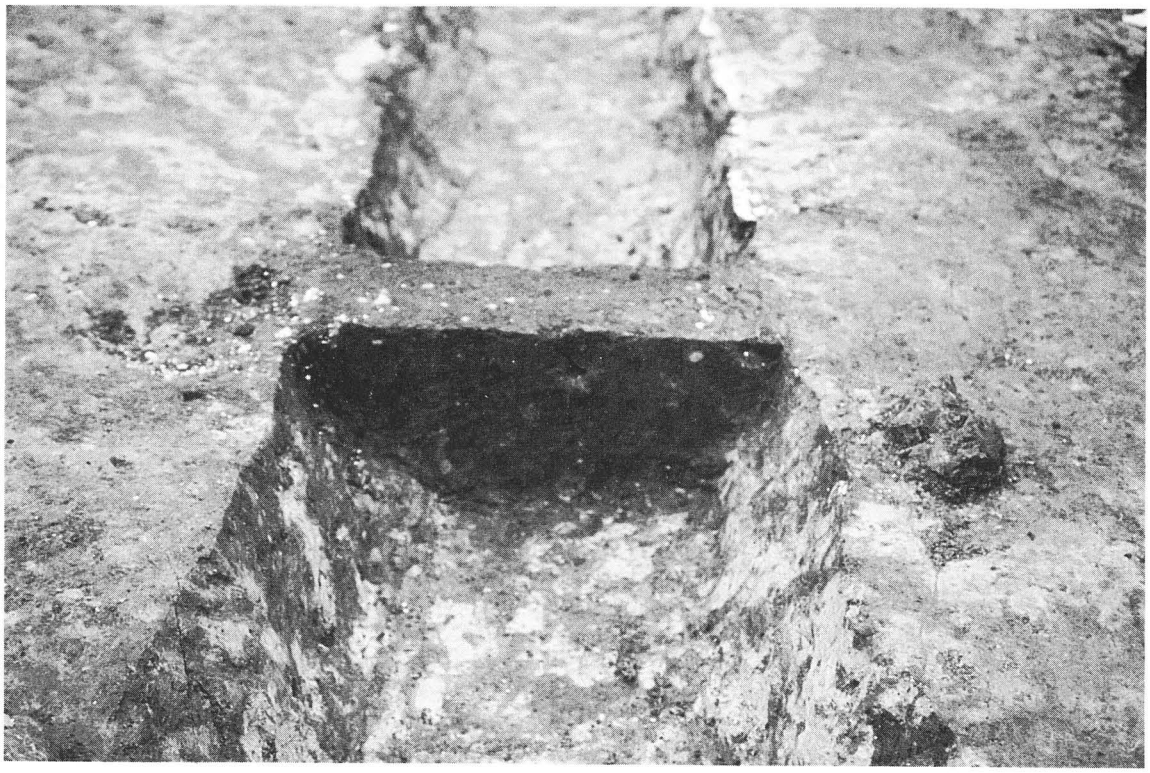


2．ＳＡ－３・４遠景（南より）

図版九

1．ＳＤ－10（北東より）

2．ＳＤ－35遺物検出状況（南東より）



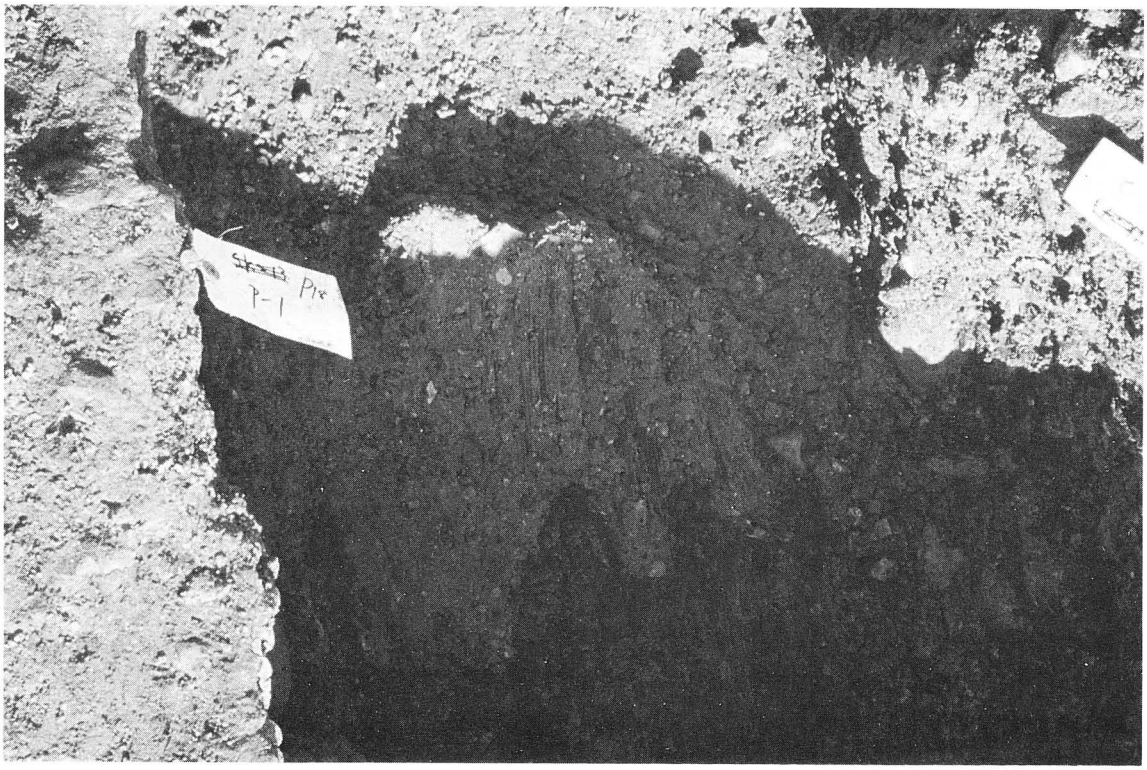
1．ＳＤ－40ベルト土層（西より）

2．ＳＤ－40遺物検出状況

1．ＳＴ－１遺物出土状況

2．ＳＴ－３遺物出土状況

1．ＳＴ－５人骨出土状況

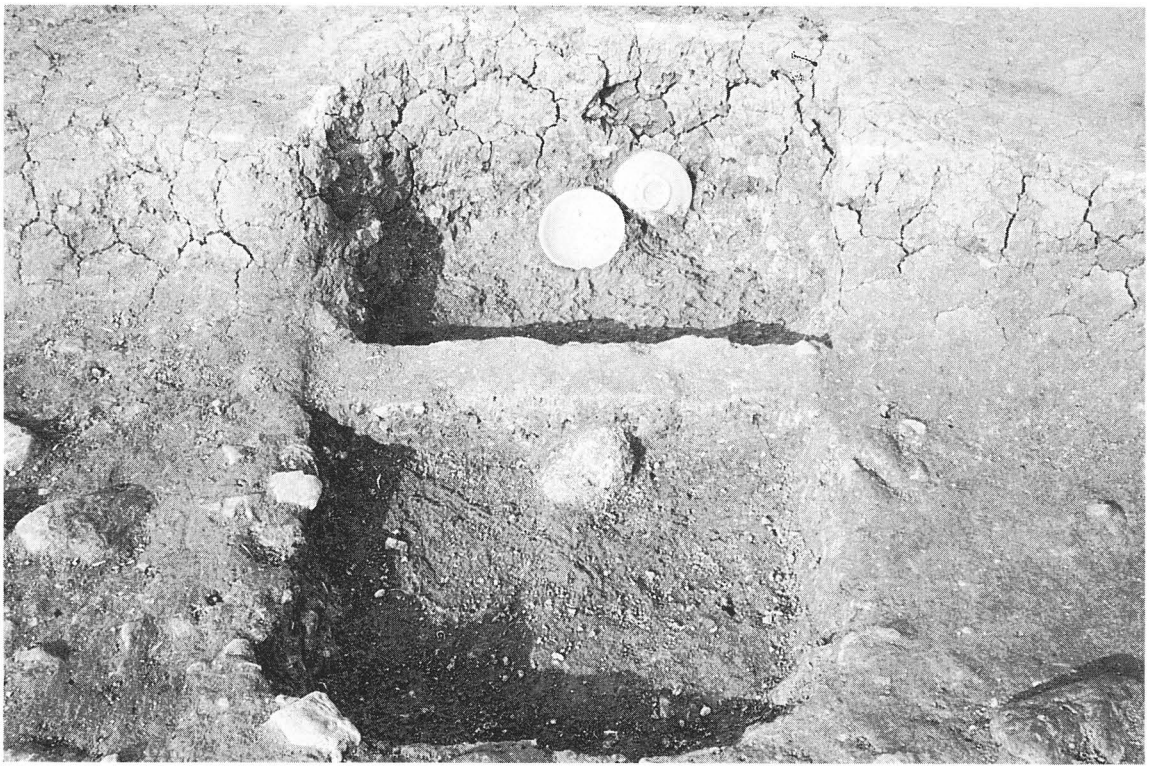


2．ＳＴ－６桶材出土状況

1．ＳＴ－11漆器出土状況

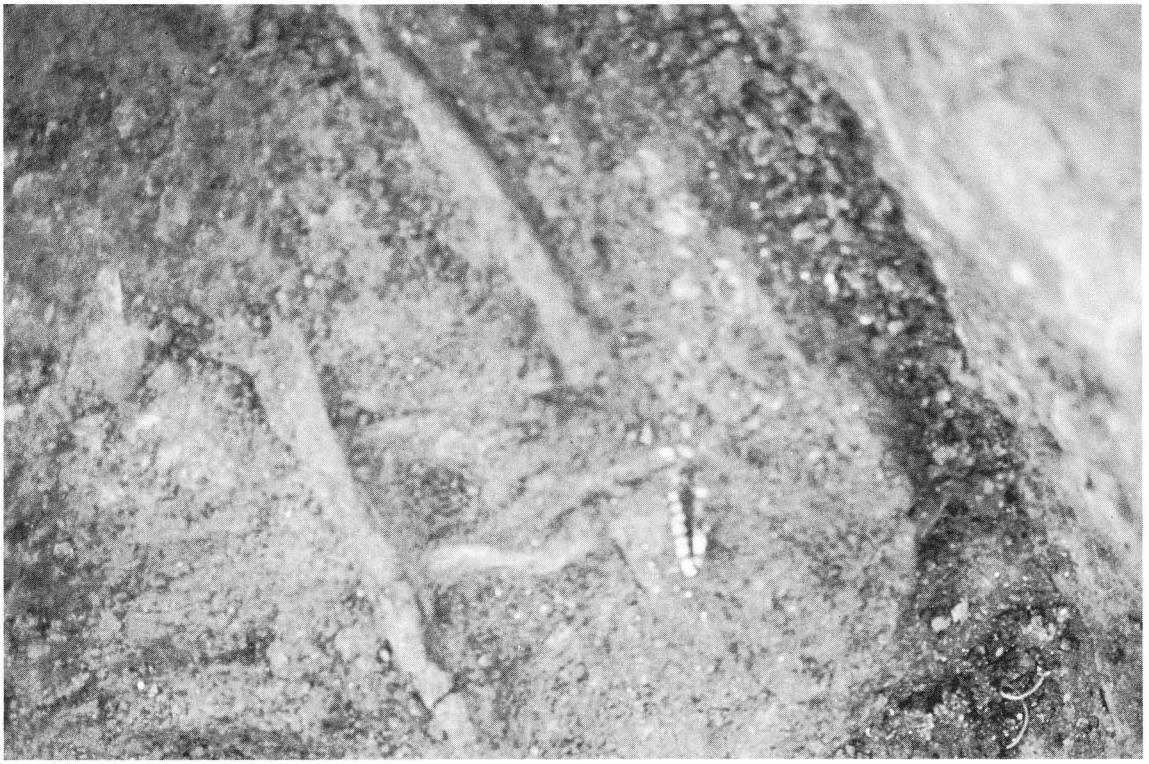
2．ＳＴ－12遺物出土状況

1．ＳＴ－13遺物出土状況



2．ＳＴ－14遺物出土状況

1．ＳＴ－15遺物出土状況



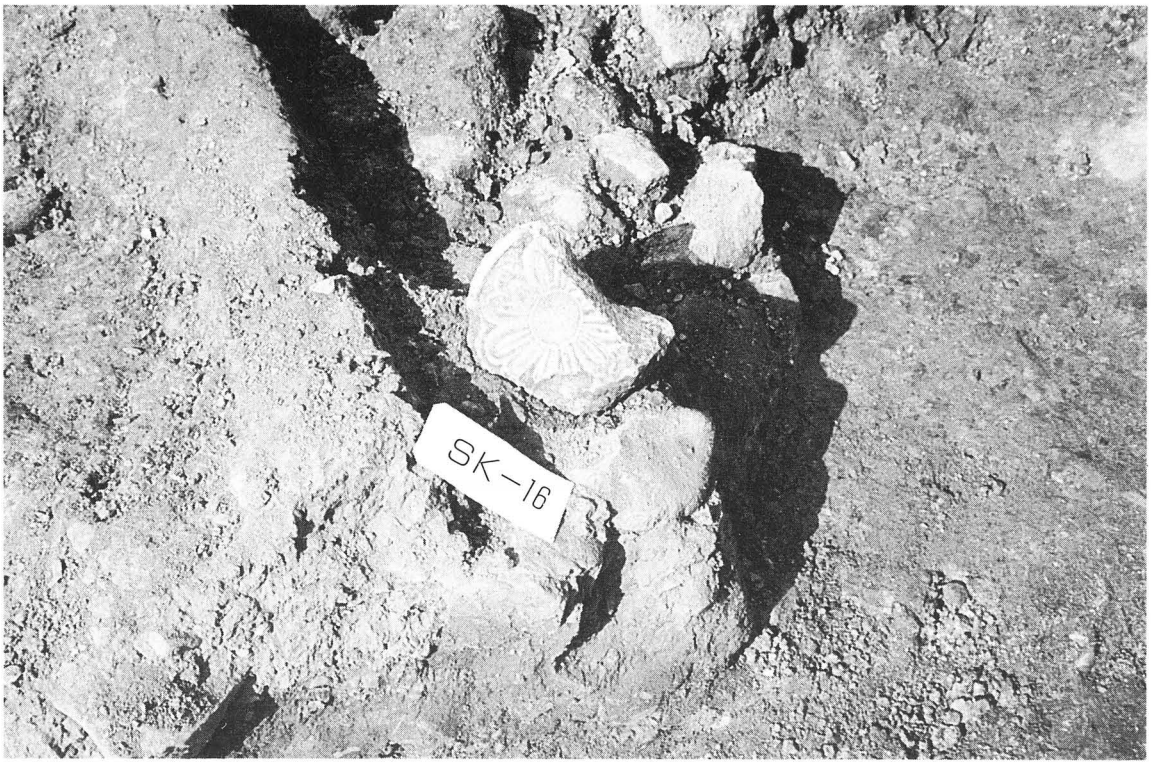
2．ＳＴ－15人骨出土状況

1．ＳＴ－16遺物出土状況

2．ＳＴ－17遺物出土状況

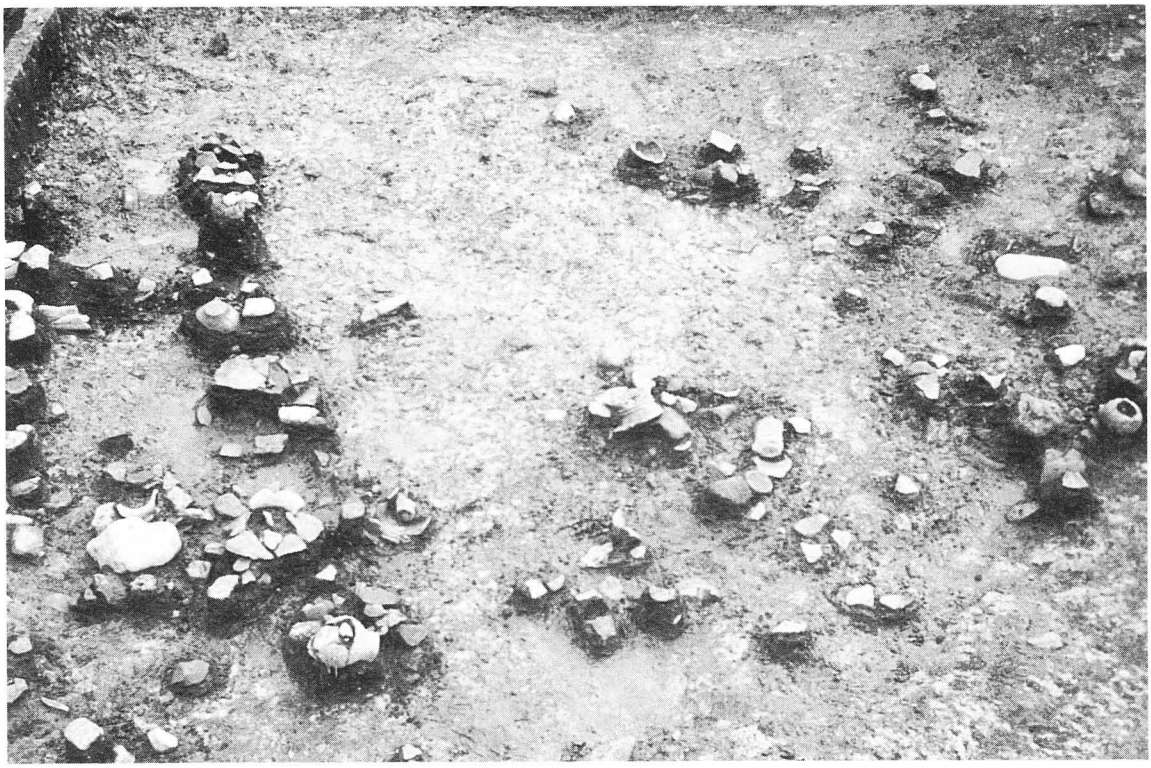
1．ＳＴ－18遺物出土状況

2．ＳＴ－19遺物出土状況



1．ＳＫ－16出土軒丸瓦

2．ＳＫ－21出土軒平瓦

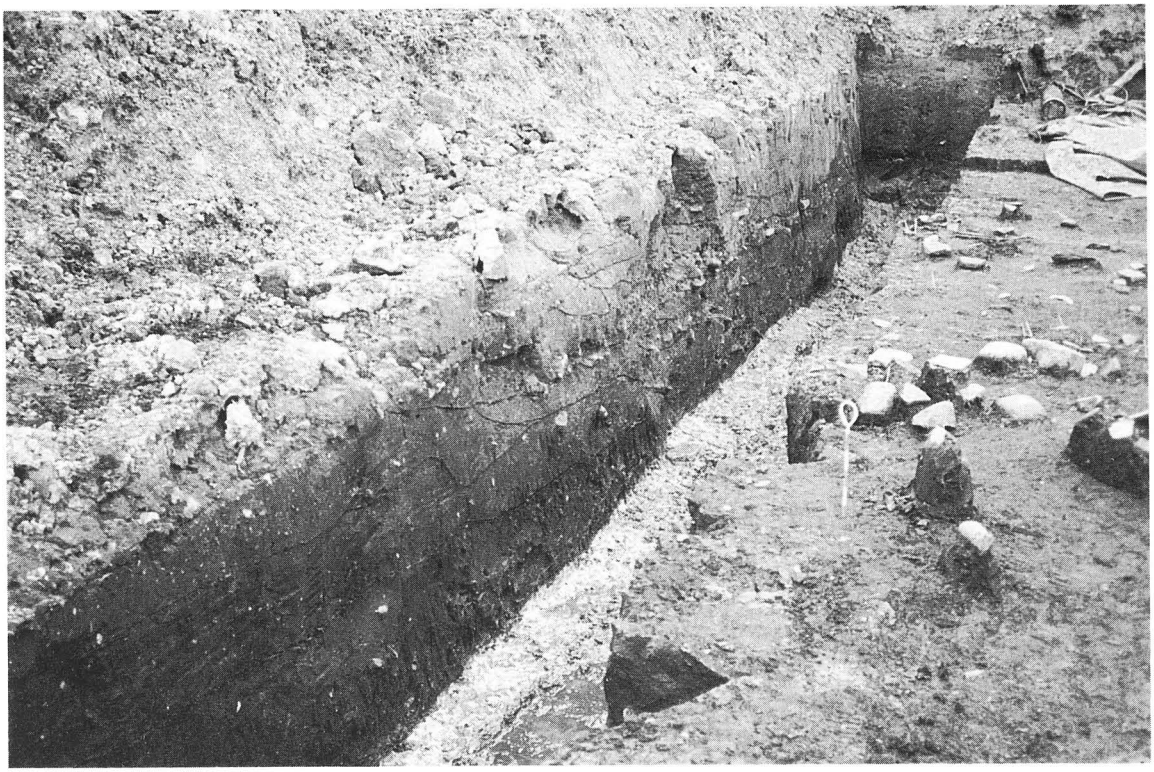


1．1区下段土器溜り遺物出土状況

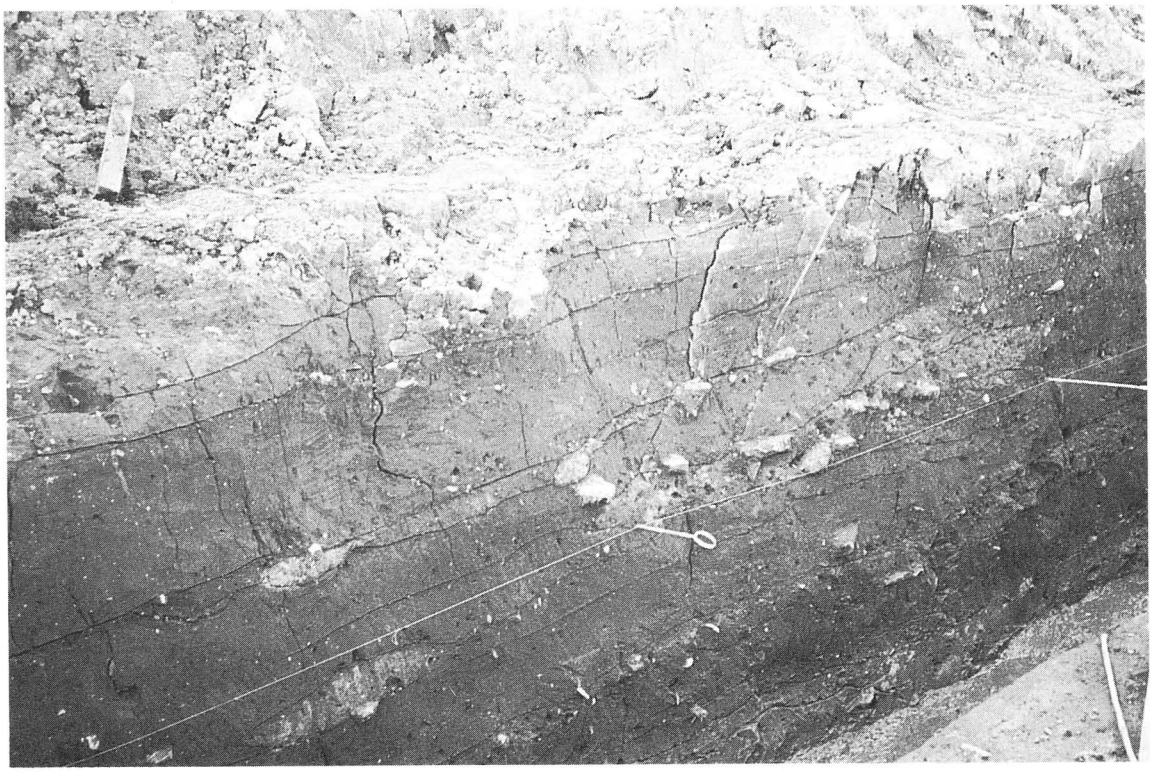
2．1区下段土器溜り出土壺

1．1区下段土器溜り出土無頸壺

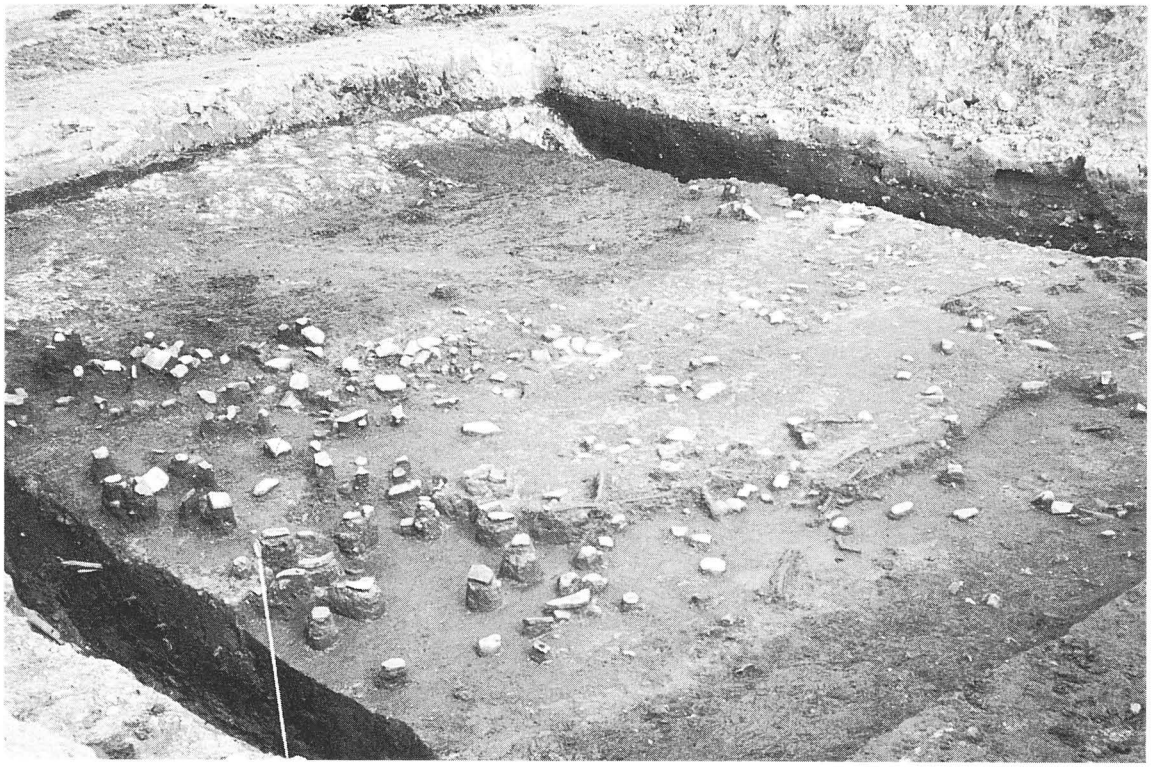
2．1区下段土器溜り出土壺



1．3区下段東壁土層（北より）



2．3区下段西壁土層

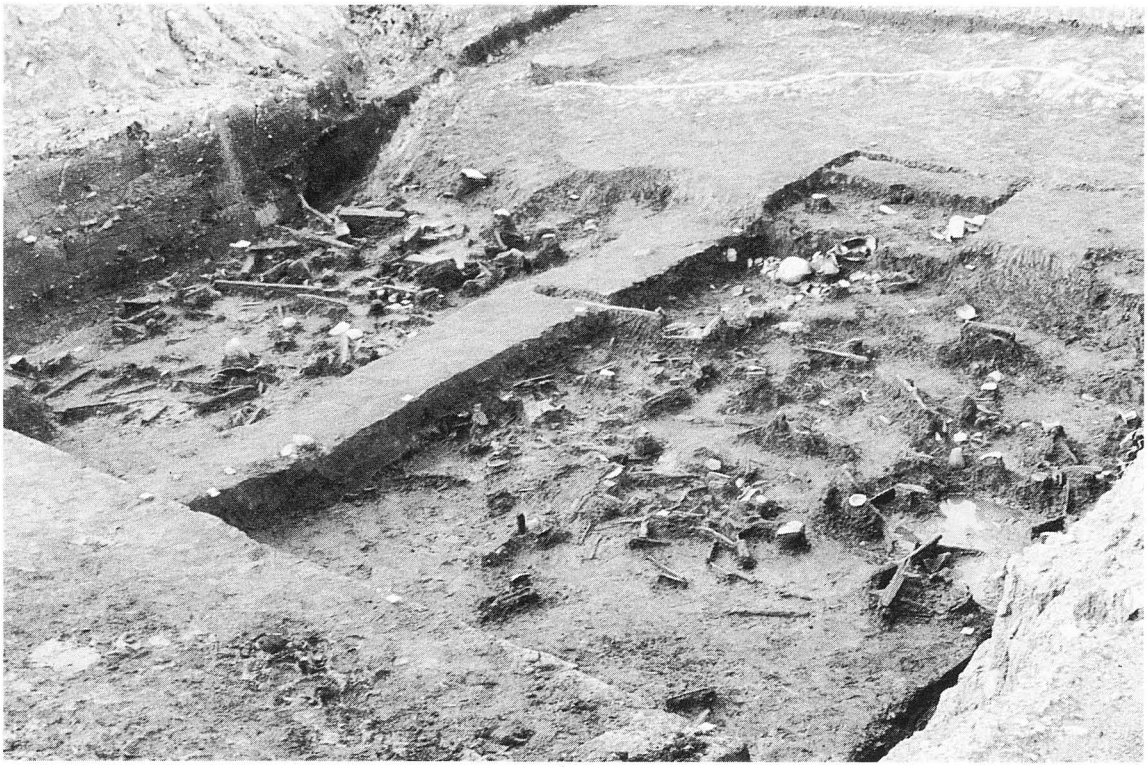


1．3区下段第Ⅳ層遺物出土状況

2．3区下段第Ⅳ層出土瓦(1)

1．3区下段第Ⅳ層出土瓦(2)

2．3区下段第Ⅳ層出土土師器



1．3区下段第Ⅴ層遺物出土状況

2．3区下段第Ⅴ層出土木製品(1)